北條早雲 二

早乙女貢

北條早雲

北條早雲 二　早乙女貢

文藝春秋

文藝春秋
¥950
0093－361660－7384

早乙女貢

北條早雲 二

北條早雲 二

早乙女貢

北條早雲 二 早乙女貢

文藝春秋

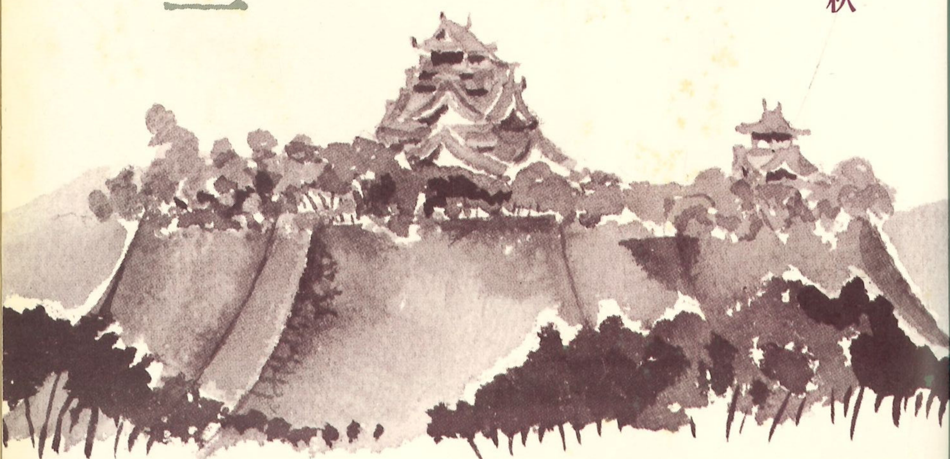
文藝春秋

文藝春秋

吉鈿藏書

早乙女貢

北條早雲 二



北條早雲　二

装幀　粟屋　充

承前

伊勢新九郎長氏、とその男は名乗った。文明八年、いわゆる応仁ノ乱の劫火が燃え熾って、秩序が失われ強盗殺戮が日常の時代である。伊勢の二見ヶ浦に新九郎があらわれたときは一介の旅牢人であった。

素姓は詳かにしない。祖先は伊勢平氏葛原親王という。生国は備中国で青年のころ京へ上り、室町御所に仕えた。この伊勢に来たのは、将軍義政の弟の義視に扈従してのことであったが、義視が帰京したあとも、この地にとどまっていた。すでに壮年の新九郎が、大志をのべるには、義視は小人物すぎたからである。

伊勢神宮の神領内で、神鹿を殺して食べた旅牢人たち三人が私刑にあうという事件が起り、新九郎は行きがかり上、かれらを助けることになる。神領だけに、神人の権威は強大である。領民つまり氏子に対しては生殺与奪の権があった。新九郎は憤りをおぼえる。神人宇部の暴虐から巫女小笛を救出したりしたことから、神人たちを敵にまわすことになる。

そんな新九郎に小笛の伯母お丹は気を惹かれるが、商才に長けたお丹は、薬種屋を営み裏で高利貸

をやるという二重の荒稼ぎで色と欲に逞しい女だった。新九郎は小笛の故郷という渡鹿野の島へ送ってゆく。一方、神宮で帳付けをやっていた荒川又次郎は、巧弁で算勘の道に明るい。かれの野心は堺に出て交易で巨利を掴むことだった。陰険で吝嗇な禰宜宇部の裏をかいて大金を持ち逃げし、女を連れて海路、堺へ向うが、薪水の補給で渡鹿野へ寄港する。

前記の三人の牢人者、大道寺太郎、荒木兵庫、山中才四郎らに加えて、この荒川又次郎、さらに隻眼ながら腕の立つ在竹兵衛などが、運命の糸に操られるようにして新九郎のもとへ集ってくる。奇妙な宿縁を感じ、かれらは新九郎を中心にして血盟する。終生、一心同体の行動を誓い合った。

当時、東海の雄今川家は、乱世にも関らずゆるぎない大国として士民とも放埒安逸に流れ、巨木の根本が腐りはじめているのにも気がつかない。六人は駿河を目ざしたが、遠州灘で大風に遭遇し、船は沈没し、新九郎は一人、遠州今切の浜へ流れついた。その漁村でおりょうという女を知る。

おりょうは著名な甲冑師明珍の娘だったが、事情があって、この漁村でひっそりと暮していた。遠州の豪族横地一門とおりょうのことで争いになる。駿河へ向う途中、曳馬城（浜松）で小堀備中守の奸策によって、おりょうは姿を消す。その曳馬城に人質になっていた駿河の寿々女という少女を忍者伊賀ノ太郎の助力で救出した新九郎は、宇津谷峠を越えるが、泉ケ谷で一庵と名乗る不思議な老人とその一党に迎えられる。かれらは寿々女を〝姫〟と呼んだ。さらに、潜入していた女の導きで、藁科川の小島の地下蔵で面体を隠した武士と逢う。今川弥三郎春忠という、今川家の一族だが野望を抱いた狷介な人物であった。駿府を目前にして、複雑な内訌をひそめた今川家の内情に新九郎は、男の働き場として意慾をそそられたのであった。

闘鶏

夜明けになってから、一眠りしたので、伊勢新九郎が安倍川を渡って駿府――駿河の府中――いまの静岡市に入ってきたのは昼を少しまわったころであった。

（――なるほど、ここが府中か、さすがに駿河一……いや東海一の都邑だの）

聞きしにまさる繁華ぶりに眼を瞠った。

京にいた新九郎である、都邑を知らぬわけではない。が、京を離れて数年になるし、東へ向ってから、これほどの聚落を見たことがない。

後世と違って、駿府城は今川屋形と呼ばれていて、宏壮な敷地と、平山城としての突兀とした丘の上に矢倉を構えていた。

むろん、徳川時代のような豪壮華麗な白亜の天守ではない。あくまでも、望楼であって、展望と実戦の際の矢攻め、石投げ、などに役立てる程度のものであった。戦さの際の籠城と、日ごろの生活の御殿とは別箇のものだったのである。それに、もう長い間、この今川屋形は、外敵の侵略を許していない。

そんなことが、内紛をもたらすことにもなったのだが、それくらいだから、自然、安易に流れる気持が、戦さのための城の性格をおろそかにして御殿の方だけが、年ごとに華美になってゆくばかりであった。

それでも、櫛比した屋並みのかなたに、濃緑の城山を見、寺の伽藍や神社の屋根があちこちに見え侍たちの屋敷が城を守るようにして、並んでいるのや、職人たちの家々が、表の暖簾に陽ざしをさけて、景気のよい鍛冶の槌音や、生業を活発に行っているさまには、やはり瞠目させられたのである。

（聞きしに勝る繁栄だ。だが、繁栄に晏如たるところ、衰微の徴候があるな）

そんなことを思いながら歩いてゆくと、とある寺の築地の道へ出た。

築地の根方に彼岸花が、残暑にもめげず、毒々しい赤色をひろげて点々と生えている。ふと、秋が近いことを感じさせられた。

陽ざしを門庇にさけて、一人の少年が、つくねんと坐っていた。

だけではない。少年は一羽の鶏を抱えていた。鶏は新九

郎が歩いてくるのを見て、きっと首をもたげ、睨みつけた。
「ほう、軍鶏だな」
新九郎は微笑した。暑い。少年の傍に立って、汗を拭った。
少年は新九郎が近づいてくるときから黒い瞳を据えて、凝っと見まもっていたが、突然、こう言った。
「おじさん、鶏はほしくないかい？」
眼のくりくりした、悧発そうな顔である。抱いていた軍鶏を、ついと差し上げた。
「おまえのか」
「うん」
「売りたいのか？」
少年は強くかぶりを振った。
「売るんじゃないよ」
「というと」
「売ったら……可哀想だもの」
「……」
「おじさんにあげる。こいつを可愛がってくれるなら」
少年は何かおどおどしている。新九郎を警戒しているのではなく、誰かに見られることを慮っているふうであった。
「――軍鶏は好きだが……」
と、新九郎は迷った。
俗に喧嘩鶏ともいう。あるいは蹴合い鶏とも。普通の鶏と違って博奕をやる。戦わせるので軍鶏の謂いで、軍鶏という名がついたのだ。
軍鶏の蹴合いは、京でも、よく行われていたが、貴族の間では、下司なものとして、敢て嫌った。嫌うことで、双六や蹴鞠や見合わせなどという遊びを、高尚なものと思いこみたいのであろう。特権階級の思い上りは、こうした乱世でも同じことだった。
新九郎は身分の低いときでもかなり位を得てからも、時時闘鶏を楽しんだ。同じ家禽でも、闘志をむき出して、敵と殺し合いをする凄まじさには、この乱世を生きる〝力〟を感じるのだ。
「好きならいいだろ」
少年は言い、軍鶏を差し出した。
「待て待て、好きは好きだがな、可愛がってやることが出来ないのだ」
「おじさんなら、赤主も喜ぶよ」
「赤主というのか」
「ね、お願い」
押しつけられて、思わず抱いてしまった。
宿無しの新九郎だ。それに目的がある。軍鶏を抱えてうろうろしていることは出来ない。
「おい待てよ、これは……」
「ね、いいだろ、赤主だって、ほら、おじさんを好きだよ」

好きかどうか。軍鶏は新九郎の腕に抱えられると、その逞しく鋭い爪で、かっと摑んで、けけけッと啼いた。
「ほら、ね」
少年には軍鶏の言葉がわかるのか。
「喜んでいるだろ、いまのは赤主が笑ったんだよ」
「おい、いい加減なことを申すな。軍鶏が笑うなんて……」
返そうとしたとき、少年は、かなたを見て、あっ、と言った。
新九郎のからだを、門内へ押しやるようにし、
「頼んだよ」
ぱっと走りだしたのだ。素早い。鳥の飛び立つような早さだった。
「おい、待て……」
新九郎が呼び止めようとしたとき、
「あそこだ、あの餓鬼をつかまえろ」「やあ、逃げるぞ、向うへまわれ」
わらわらと多勢の男が走ってきた。
男たちは五、六人だった。中には、棍棒ようのものを持っている男もいた。
「やい、待て、待ちやがれ」「ぶち殺すぞう、黒丸、待てえ」
少年に目を奪われているから、新九郎が立っているのは、見えないらしい。埃りを蹴立てて、風のように走りすぎた。
少年が、おどおどしていたのはこの連中に追われる身だったからであろう。
（あの少年、たしか黒丸と呼ばれていたな）
新九郎は、やや啞然として見送っていたが、ふっと軍鶏を見た。
「やれやれ、とんだお荷物を引き受けたぞ」
軍鶏はそんな新九郎の気持も知らぬげに、光る眼を向けた。
黒丸の言葉だけでなく、〝赤主〟と呼ばれた軍鶏はたしかに新九郎に親しみを感じたように、腕にとまって安心しているのだ。
なまじ、警戒をむけられたら、じゃけんに扱い易いのだが、まるで、新しい飼主に下駄を預けたと言わんばかりに、身をまかせられると、新九郎も冷たく出来なくなる。
「――さて弱ったぞ……」
この軍鶏をどうするか。
身の危険が迫っても、さして動じない新九郎だが、こういう場合、咄嗟にいい智慧が浮ばない。
（ままよ、なんとかなるだろう）
だが、つくねんと考えていてもしかたがない。
新九郎は軍鶏を抱えて歩きだした。

城下といっても、後世のように商家が軒を並べているわけではない。商(あきな)いの店を持って客の来るのを待つような商業形態は、もっと後のことで、この時代は商人のほうで、品物を持ち歩く。ふれ売りする。あるいは辻に立って売る。京の立売、中立売などの地名の起りもそれである。

客を呼ぶ声がかまびすしい。いまでも、辺地の朝市や、社寺の縁日の出店などにその形態が残っているが、もともと、商いというものはあのかたちだった。市場もそれである。

「さあ、いい衣(きぬ)があるよ、綾絹が安いよ」「餅を買うてお行き、赤児の頬ぺたのように、柔らかい餅だ。十も食べると十年長生きするという餅だ、食わにゃ損だよ」「帯だ帯だよ、京の帯だ、しゃなりしゃなりと、いい帯しめなきゃ、腰があけっぴろげだ、しまりの悪い腰つきは、よい殿御に逃げられるぞな、さあ、買った買った」

そんな野卑な喚きの中を、新九郎は歩いてゆく。

埃りが舞いあがり、喧騒は耳をつんざくばかりだ。せいぜい客の耳目をとらえようとして、品物をふりまわしたり、その帯の端が、軍鶏の顔をなでる。軍鶏が怒ったように鳴いた。

京を離れて以来、はじめて、都会に来たという感じであった。

現在の静岡市――駿河の府中であるところから、駿府と呼び習わされていたが、この都塵も、久しぶりだけに、新九郎には、古巣へもどったような懐しさが感じられる。

喧騒が、耳にうるさくないのは、そのせいであろう。喧騒の中に長くいると静寂をもとめたくなり、静寂がすぎると何やら物足りなくなり、騒ぎが欲しくなる。人間は勝手なものだ。

この駿府の街は、西と北を山に囲まれ、南は大洋を控えて、東方には、小山が望楼の如くに聳えて、乱世の都邑の条件をそなえていた。事実、東方の小山には、それぞれ砦が築かれ、望楼と前衛の役目をなしていた。愛宕山、谷津山、八幡山などであり、現在の日本平なども、海上と陸の見張りに重宝されていたのである。

さて、呼売りの行商人たちで賑わっている辻に来た新九郎は、その混雑の中で、凝(こ)ったような視線を感じた。

視線は、新九郎にではなく軍鶏にそそがれていた。

(はてな、あのときのやつか)

黒丸を追っていった男たちか。

あの様子では、この赤主を狙ってのことであろう。

まだ事情はわからないながら、どうやら、この赤主は、そこらにいる軍鶏ではないようであった。

「もうし……」

埃りの中で、いい匂いがした。老女が一人近づいてきた。

「そこのお方え」

「わしか?」

新九郎は振りむいた。

老女の向うに、被衣(かつぎ)した女がいた。贅沢な小袖を着て、柳の木陰に佇んでいる。灼きつくような視線は、そこから来ていたのである。

「わしか、わしに用か」

「はい、ちとお願いがござりまして」

「かような人中で、願いとはうなずけぬ。いずれの者だ」

新九郎の眼は、ちらちらと被衣の女性にむけられている。

「御身分のある御方でございますが、左様なことより、その軍鶏のこと」

「――これが何とした」

「如何でございましょう、その軍鶏、お譲り願えませぬか」

「なんと?」

新九郎は、また被衣の女性を見た。

離れているし、女は故意に面体を隠そうとしているので、はっきりとはわからないが、二十歳すぎらしい、豊満な感じである。

「あの女が、この軍鶏が欲しいというのか」

「はい」

「欲しけりゃ、なぜ、自身で来ぬぞ」

「……」

「自身で来いといえ」

手ひどく、突っぱねた。女が、なまじ美しく見え、おっとりとかまえているのが、小癪な感じだった。

「人にものを頼むのに、供を使うという法があるか」

「まあ、そのような……」

「まず、これへ来て、頭を下げて頼め」

「……」

「さすれば、考えてやらぬでもない」

べつに、新九郎、意地悪するつもりはない、ただ、突然、声をかけられて、本人自身は、木陰で悠然としているのが、面白くなかった。

それに、被衣のうちをのぞきたい気持もある。

(軍鶏をほしいなどと)

これが男の要求というならわかる。

女人だということ、それも身分あるらしい、豪華な小袖をまとい、涼しげに水色被衣をかかげた女だということが、新九郎を反撥させたのだ。

「さあ、立ち戻って、左様に伝えよ」

老女は、まごまごしている。

新九郎は顎をしゃくった。

「さ、左様なことを……」

「おれが申したと伝えればよい。それだけでよい。つま

りは、これが返事だ」
「ぶ、無礼な」
「ほう、無礼か」
「御身分ある御方に無礼でございますぞ」
　老女は、細い枯木のようなからだをぶるぶる、わななかせている。
「そうかな」と、とぼけ声で、「さっきから聞いていると、身分身分と申しているが、一体、どのような身分なのだ」
「……」
「それを聞かずして、こちらを恐れ入らせようとは、ちと横着だな、そうではないか」
「こりゃ、そなたは、宿無しであろうが、なんという不遜なことを言いやる」老女は威たけ高になった。「ここは駿河の府中でござりますぞ、かような繁昌のみやこに来て、浮浪の牢人者ふぜいが、なんたる雑言を」
　老女が怒れば怒るほど、新九郎は冷静になってくる。くびすじに血脈がうねり、額に青すじが立つのを、にやにやしながら眺めていたが、
「牢人者ふぜいゆえに、かように申しているのだ。天下の牢人者は何人にも、頭を下げぬ。たとえ征夷大将軍であろうとも、だ。……」
「……」
「況やあの女は、おれにとっては、ただの女」
「ぶ、無礼な！」
「女じゃゆえ、女と申している。ちゃんと乳房もあれば、脚のつけねには、男とちがうものがあるのであろ」
「けがらわし！」
「ははは、そうトガるな、この赤主に似てきたぞ」
　新九郎は笑いを吹き上げて、被衣の女を見た。
　被衣の女は、この対話にも無言であったが、かなり感情の激しい素振りを見せた。この時代の女としては珍しい。
　新九郎が軍鶏を売り渋ると見るや、踵をかえそうとした。が、老女の方は、食い下ってきている。
「――左様、このほうから頼んでいるのでございます。無礼は咎めますまい。如何じゃ、御方さまのことは別として、お考え直し下さるまいか」
「駄目だな」と、新九郎はそっけない。「見知らぬ者に、軍鶏を渡すわけにはいかん」
「タダとは申しておりませぬぞえ」
　老女は錦の袋を取り出した。また砂金か、と思ったが、これは、ぼこぼこしている様子が、丁銀らしい。
　普通銀貨を入れるには革袋を用いる。重いし布でもすぐにすり切れる。錦の袋は革の巾着にかぶせてあるのである。これ一つを見ても、この駿府という城下の都会性が窺える。
「幾らなら、お譲り願えましょうや、申しなされ」
「はははは、おれは売らぬと申している。此方から金額などつけられるものか」
「されば、わたくしの方から申しましょう、銀五十匁でいかがでございます」
「五十匁！」
　さすがに、新九郎は声に出している。そこまで申し出るとは思わなかったのである。
　その新九郎の驚愕を、老女はそれみたことか、という顔で見上げて、
「いかがでございます、銀五十匁ならば、不足はございますまい」
「……」
「この府中は諸品が高い。田舎に比べて目の玉の飛びでるほどに高い、それでも銀子五十匁あれば、米が十石買えまする、おまえさまが、坐して喰うても、三年は食えましょうほどに」
「なるほどな」
「お売りなされませ」
「いやだ」
「え！」老女は呆れた。まるで、気狂いを見るような顔になった。「これほどまでに申しても」
「あいにくと、この軍鶏、売り物ではないでな」
「でも……」
　老女はためいきをつき、被衣の女をふりかえった。女は、あきらめたように、柳の下に荷をおろしている甘酒屋から一杯もとめて、飲んでいる。
　身分ある者にしては、いささかはしたないようであるが、当時としては、奇異なふるまいではない。
「しかし、そなたも執こいな」
　新九郎のほうも、うんざりしている。呆れるのは、こっちだと思った。
「一体、なぜ、この軍鶏が、そんなに、ほしいのだ」
「それは！　その軍鶏が逸物だからでございますよ」
「なぜわかる」
「ほほほほ、この府中で、赤主を知らぬ者はない」
（なるほど）
　と、新九郎はうなずいた。
（それほど著名な軍鶏なのか、それで五十匁もの銀子を払うというのか）
　つまり、赤主と知っての誘いだったのだ。そう聞くと、尚更、手放せない。
　高価な軍鶏だからというのではなく、黒丸少年の願いが容易ならぬものに思われてきたからである。
　ただ少年がペットとして愛情を抱いているものとはじめは思っていた。あの大人たちとの関係はよくわからぬながら、純真な少年の気持は、大人の社会の常識に反することは、よくあることだ。

が、それほど知られた軍鶏だとすると、意味が違ってくる。あの連中が血相変えて少年を追っていたのも、赤主をもとめてのことではないか。

新九郎は呟いた。

「妙なことになったな……」

老女はまだ、追いすがろうとしていたが、これをよせつけぬように、幅広い背を向けて、新九郎は歩きだしている。

（それほどの軍鶏か、こやつ）

見所のあるやつとは思ったが、銀五十匁だしても購いたいほどの逸物とは知らなかった。

辻から少しゆくと、漸く雑沓から抜け出ることが出来た。カーンカーンと鍛冶の音が聞えている。

刀鍛冶が軒をつらねていた。片側には弓師の店があり、かと思うと扇子作りの女ばかりの小見世があったりした。

いずれも、商店ではない。職人の工事場にすぎない。むろん、客は、そこの上り框に腰をおろし、あるいは板ノ間に坐りこんで、注文をつけたり、出来上った品物を受けとったりするのである。

刀鍛冶の単調だが、景気のいい音は、新九郎の足を止めずにはいない。刀には、何よりも興味がある。新九郎が見世先へ立ち寄ろうとしたとき、小路から出てきた若い女が、

「もし、お武家さま」

と、近寄ってきた。

「……」

またか、と新九郎は、軍鶏を抱いた腕をうしろにひくようにして、女を見た。

はじめての街で、次から次と見も知らぬ女に声をかけられては、新九郎も用心深くなる。

「何か用か」

「あの、おまえさまに逢いたいという人が」

「おれに……」被衣の女の姿が浮んだ。「女人であろう」

「いいえ」かぶりを振ったのが意外だった。「男ですわ」

女はひらと手を口にあてて、低い笑いを洩らした。

「男……」

「女人でなくて、がっかりなさいまして？」

「いや、そういうわけではないが」

「黒丸という子、御存知でしょ」

女は名乗らない。が、黒丸が呼んでいるというのだ。新九郎は、女にともなわれて、弓師の家の露地を入っていった。

夾竹桃の花が埃りをかぶっていた。もう盛りを過ぎた季節だった。残暑は昼間は暑いが、日が落ちると初秋の気が感じられるころだ。

夾竹桃は露地裏にも、咲いていた。

そこに黒丸がいた。いや、黒丸は夾竹桃に縛りつけられていたのである。両腕をうしろに縛られている。

一般に夾竹桃は三メートル前後のものだが、この樹は普通の倍近くもある老樹で、幹も枝も太く、少年の足を宙に浮すだけの逞しさがある。

黒丸は足をばたばたさせて、逃れようとしているが、いたずらに枝がしなうだけであった。十数本も枝をまとめて、縛ってあるのだから、黒丸がいくら元気でも、いましめから脱けられない。

「ちくしょう、解いておくれ、解いてくれよう」

顔中、口にして喚いている。

新九郎を見ると、黒丸は、あっと、喜びの声をあげた。

「おじさん！　助けてくれえ」

「おお、黒丸、なんとした」

「こいつらが、おいらをこんな目に合わせてよ。なんにもしねえのにさあ、助けておくれよう」

「ふむ、誰がしたことだ」

新九郎は、じろりと見まわした。

そこに、五、六人の男たちがいた。

人相風体から見ても、まともな連中ではない。商人でもなければ、農民でもない。手職のある様子ではなかった。

（あぶれ者だな……）

無頼の連中だ。すぐにわかった。

軍鶏が二羽いる。闘鶏に銭を賭けていたようである。だけではない。新九郎のくることを予期していたらしい。うすら笑いと緊張のまじった眼が見上げた。

（そうか、黒丸をオトリにしておれを引きこんだのか）

女を見た。新九郎を連れて来た女は、もう役目が済んだとばかり、うしろをむいて、饅頭を食べている。

「妙な塩梅だな」と、新九郎は平静を装って男たちへ近づいた。「このざまは、一体、どういうことだ」

「……」

「黒丸は、まだ子供ではないか。かような折檻は酷であろう」

「――そうかね」

一人がぬっと立ち上った。曳きずるような長い打ち刀を横たえている。

「そうとわかれば、話は早い。黒丸は許してやろうさ、その代り」と、新九郎の腕の軍鶏を見た。「赤主をこっちへもらおう」

「なるほど、そのための黒丸がオトリか」

「もらおう。それとも、おぬしが黒丸の代りに吊られるかね」

ほかの連中も、しわしわと、声のない笑いを揺れさせた。

そうか、この軍鶏の赤主を奪うための罠だったのか。

だが、不思議だったのは、この男たちが、さっき黒丸を血相変えて追っていた連中ではなかったことである。長い時間ではなかったが、新九郎には記憶がある。

あの連中ではない。とすると、この赤主を欲しがる奴らというのは、ほかにも多勢いるわけだ。さっきの被衣の女といい、赤主をめぐる狂躁的な渦を感じた。

（たかが一羽の軍鶏に……）

目の色を変えるというのは、どういうことであろう。

「この赤主がほしいというのだな」

「左様々々、察しがいい」その赤茶けた髪の男は、長い刀に反りを打たせていった。「すりゃ、この餓鬼も許してやる」

「いけないよ、おじさん」黒丸が足をばたばたさせて、声をふりしぼった。「赤主をやっちゃいけない、殺されるだよ」

「黙れ、この餓鬼は」

立ち上った男が、槍の石突をかえして、黒丸の腹のあたりを殴った。黒丸のからだは大きく揺れた。

「それみろ、生意気言うと、二つにして、軍鶏の餌にしてしまうぞ」

「やめろ」

新九郎は怒りを圧えて、その石突をぐいと摑んだ。

これくらいの無頼者を叩き伏せるのは容易であるが、事情がよくわかるまでは、うかつな殺傷沙汰は慎まねばならなかった。

しかし、こんな手合いは、筋の通らぬ話が多い。

赤主を欲しがるのだって、どういう理由からなのか。

理由はあるにしても、〝正当〟か〝不当〟かの判別をさせないのだ。そういう理屈は通らない。

要するに、「よこせ」というのである。

強盗と同じだ。それが罷り通っている。強いことが正気の無法時代である。

駿河のくにの府中——今川氏の城方であるし、こういうところにこそ、弱者も生きられる〝法律〟があると思っていたのだが、こういう連中が、無理を通しているところを見ると、必ずしも治安はよくない。

もっとも、表通りでないだけ、まだ遠慮がある。

「せっかくだがな……」連中を見まわして、新九郎は言った。「この赤主は、おれのものだ」

「なに！」

刀をすっぱ抜いた奴がいる。反応は早かった。

「やるか？　力づくで赤主を奪うつもりなら、やめておけ。おれはうぬらの五人や十人、屁とも思わぬ」

「ぶった斬れ」

ざわ、と揺れた。二、三人が、争うように、抜き放った。

「よせよせ、けがのないうちに、刀を退け、そのほうが、うぬらの身のためだ」

大言壮語だけでないことは、その悠然とした様子からも窺えた。上背があるし、腕も太い。これだけの人数に囲ま

れて、落着いているのだ。

瞳を見れば、たいてい心の動揺がわかるが、新九郎は白刃を鼻先に突きつけられて動じない。もしも、短慮な奴が斬りこんだら、逆にその男は血を噴いて倒れるに違いなかった。

「へへっ、けがをするのはどっちかね」

最初の男が、すぱりと刀に空を切らせたかと思うと、あっさり鞘に収めた。大角鍔が音を立てた。

「人間さまが、けがをするのはつまらねえ」

「………」

「おい、みんな安刀売りじゃあるめいし、ぴらぴらさせるんじゃねい」

その一声が利いて、かれらはしぶしぶ刀をもとへもどした。

新九郎が意外に感じたのは、無頼の連中が、この一声で左右されることであった。一見、投げやりな、だらけた連中と見えながら、顎一つで生きも死にもする、と見えたことである。

「この軍鶏は、くれてやるわけにはいかん」と、新九郎は、あらためて言った。「ほしければ、力でとるのだな」

「力で？」

「そうだ、その鶏と蹴合わせたらどうだ」

急に男たちは、顔を寄せあった。ひそひそと話しはじめたが、大角鍔の男が、頷いて、軍鶏を抱き寄せた。

「それでもいい、やい、独眼竜、まず、うぬからやれ」

なるほど、その軍鶏は片目がつぶれている。

新九郎も軍鶏の蹴合いには、いささか心得がある。京では随分やったものだ。

当時の闘鶏のことを詳細に述べた〈蹴合草紙〉という本がある。

お公卿さんが書いたものだが、これには、天地人、三番蹴合わせというのから、作法が始まっている。これは、いわば、スタートの三様である。

天は、双方六歩の距離をとって、お互いの軍鶏をおのれの頭上に乗せ、呼吸を合わせて、それ、と、放つ。

軍鶏は啼いて、宙を翔け敵に飛びかかる。

地は、お互いにうずくまって、放つのだし、人とは、人が普通に立って、抱えたところから放つ。

これらを見ると、いかにも、鶏が羽を持つ意味がわかってくるのだが、もっとも通常の闘鶏に用いられるのは、この〝地〟の方法であった。

新九郎は赤主を抱いて片膝をついた。

「行くぞ！」

赤主は緊張を見せていた。〝敵〟に対しての闘志を剝きだしにし、眼を嚇ッと光らせている。

「よいぞ、負くるな」

軍鶏は、闘うために作られた鶏だという。
だが、肉も美味い。古くは、軍鶏は蹴合いをさせ、勝った方が、負けた軍鶏の所有権者となり、つまり、肉を喰うために、蹴合いをさせるところから始まったという。
おおらかな古代にあっては賭けは遊戯であり、また衣食住に直結していたのだ。
直接、軍鶏の肉を欲するためではなくなってから、代替物のやりとりに代ってきた。
したがって、軍鶏たちは、人間には懐っこいが、他の軍鶏には闘志を剝きだす。まるで、前世からの宿敵のように睨みあう。
事実、千年にもわたって、闘いつづけてきた軍鶏にとっては、血の中に、同種族を敵とする憎悪怨恨が、流れているかのようであった。
赤主が、けけけッと威嚇の声をあげ、脚が宙を蹴った。冠鶏が、きりっと立った。
赤主のそれが胡桃冠であるにひきかえ、独眼竜は小型の三枚冠。隻眼が異様な光を帯びた。
軍鶏師は、天地人いずれにてあれ、コーナーボックスにある軍鶏の腹部の動きで、その攻撃の呼吸を識る。
軍鶏の蹴合いで、もっとも大事なのは、最初の一撃だ。この一撃によって、敵の士気を鈍らしめ、恐怖を与えることが勝利につながる。

新九郎は、いましも、赤主のひくひくと動く温かい腹部を両掌に感じながら、阿吽の呼吸をはかっていた。
「喰わせろ！」
と、放たれたのは、独眼竜の方が先である。
瞬後、新九郎の手からも赤主が飛び立った。
独眼竜は左眼がつぶれている。それだけに、キャリアがあるといえる。むろん、蹴合いでやられたのであろう。
新九郎は、嘗て、京で、片眼蹴合いを見たことがある。
隻眼同士の軍鶏の凄絶な試合であった。
お公卿さんというのは、日ごろ歌だの管弦だのと悠長なことをやっているだけに、こういう血まみれの試合など、嫌いのように見えるが、案外、残酷なことが好きなのだ。口を大きくあけたり、多くを饒舌ったりすることは、タブーになっている日常だけにこういうとき、残忍な愉悦に浸る。
両方とも右眼がつぶれていた。その試合は奇妙な攻撃に終始した。
お互いに、敵の残りの眼を狙ったのである。それを知っているだけに新九郎の赤主に命じた試合方法も、また変っていた。
独眼竜はおのれの左側への防禦本能は、異常なほど鋭敏になっている。
つまり、敵の左脚への注意力が敏いのだ。

これが両方とも不具なら、残りの眼だけを狙えばいいが、相手が両眼あれば、まずハンデのある方が、〝受け〟の構えになるか無謀なほどの先制攻撃をかけるか、どちらかである。独眼竜の飼主は、その後者をとった。
これに対して、新九郎は赤主を放つとき、左手の小指で、強く腹部を圧した。
〈左脚で殺れ〉
という合図であった。
赤主は心得た。敵が飛び立つのが一瞬早かったから、赤主は、新九郎の手を放れるや、さっと、舞い上った。敵に向ってではなく、出来るかぎり、高く垂直に近く飛び上ったのだ。
通常、間合い六歩にして、双方が攻撃した場合、中央でぶつかるものだ。が、赤主は垂直に上ったために独眼竜は、一瞬、目標を失った。一たん、地におりるや、降ってくる赤主に向った。が、すでに、先制攻撃の機は逸している。刀で斬り合うときなら、下からの掬い斬りという方法もある。
しかし、軍鶏の脚はそのように器用に出来ていない。せいぜい蹴るか、搔きむしるかである。
降りてくる赤主と舞い上る独眼竜と、この両者が渾然と交ったとき、ぱっと羽毛が飛び散った。かん高い啼声と、激しい動きの中で、体軀に比例して、凄まじく大きい脚の指爪は、必殺の意志でもって、敵の虚を衝いた。

いうまでもなく、新九郎の左手の小指が示した、
〈右眼を奪え〉
という合図は、赤主の攻撃目標となっていた。
軍鶏ほど敵に向って猛々しく、味方、ことに主に向って従順な鳥はいない。
鷹などは永年飼い慣らされていても、突然、兇暴な野性に還って飼主を襲うことがある。感情の変化のはげしい動物だが、軍鶏はそのようなことはない。愛情のそそぎ甲斐がある。
人間の心がよくわかる。新九郎と黒丸の温かい気持が通じるのか、よく、その指示を聞くのだ。
右眼。
左眼のつぶれている独眼竜にとって、右眼こそは、いのちのすべてといってよかった。
赤主の左脚は、そこを狙った。からみあった一瞬に、爪はざくっと、右眼をえぐりとっていたのである。けけッと啼いた独眼竜の悲鳴とともに鮮血がほとばしった。
男たちは、わっと総立ちになった。
「殺られた！」
一人が、悲痛に呻いた。血が大地に飛び散り、その上に羽毛がはらはらと舞いおりた。
鮮血が飛び散ったのを見て、女は悲鳴をあげた。無頼のなかまと深いつながりがあるらしい女にしては存外、気が

弱い。
「やったぜ」黒丸がうしろ手に縛られてぶら下ったまま、
「赤主、えらいぞ」と、叫んだ。
赤主は独眼竜の右眼をえぐりとった左脚をばたばたさせて、凱歌をあげている。
あまりにも呆気ないともいえる、その一瞬の緊迫と感動は、一瞬だったがゆえに素晴らしかったともいえる。
「ちえっ、なんてえこった」大角鍔の男は、はげしい舌打ちを聞かせて、やぶれた独眼竜を抱きあげた。「だらしがねえ、たった一つの眼玉まで無くしちまうなんて」
「それが勝負だ」と、新九郎は赤主の血まみれた爪を拭いてやりながら言った。「赤主は勝った」
「……」
「黒丸を貰おうか」
大角鍔は返事の代りにまた忙しく舌打ちして、哀れな独眼竜を見た。もはや独眼竜の名前も失って、ただの鶏肉になるしかない存在だった。
「約束を守らぬと、うぬも、その負け鶏と同じにしてやるぞ」
新九郎の威嚇は、効いたようである。
これだけの人数でいながら、一人も斬りかかろうとする意地はなく、二、三人が黒丸の縄をほどきにかかった。
「——助かったよ、おじさん。赤主はやっぱり強いや」
「さあ、去のう、いつまでも、こんなところにいることはない」
「へへっ、ざまァ見ろやい」
黒丸はぺろりと赤い舌をだして新九郎のあとに跟いて歩きだした。露地でもう一度ふりかえった。
男たちは、まだ呆然としていた。こうあっさりと独眼竜が負けるとは思わなかったのであろう。
「——黒丸といったな」
「ああ、おじさんは伊勢新九郎長氏、いい名前だね」
「どうして知っている」
これには驚かされた。
「だって、おふじが言っていたよ」
「おふじ？　あの女か」
「へんなやつ。あいつ、陣内のあれで……」
言いさして、黒丸は口をつぐんだ。子供の言うことではないと気がついたのだろう。
どうなることかと思っていたのが、救いだされて、嬉しくてたまらないのか、すぐにはしゃぎたくなるのだ。
どうもこの駿河の府中に足を一歩踏み入れてからも、妙なことばかりで、新九郎はいつまでも少年と軍鶏赤主に関りあってはおれない。
「では赤主をもどすぞ、精々可愛がってやれ」
「あ、待って、新九郎おじさん、赤主はおじさんのものだ

よ」
「いや、おまえのものだ」
新九郎は軍鶏をおしもどした。
「ちがうよ、おじさんにあげたのだから、赤主はおじさんのものじゃないか」
たしかに受けとった。が、これは、あのときの呼吸で押しつけられたのだ。返事も聞かずに、黒丸は走りだしたのだから、返すひまがない。
「これこれ、おれは用があるからなのだ」と、新九郎は、恐い顔をしてみせた。「軍鶏を貰ってもしかたがない」
「だけど、おじさんに一ぺんあげたんだ、一ぺん人にあげたものをまた返してもらうなんて、男らしくないや」
少年のくせに、黒丸もなかなか譲らない。
「いや、おれも貰うとは言っていないぞ」
これくらい強く言わないと、とても、少年は退きさがらない。そう強く出られると、黒丸はしょんぼりしてしまった。
それを見ると、ちょっと不愍になったが、
「おれが閑があれば、赤主を育てたいがな、要用があるんだ。せっかくだが、貰うわけにはいかぬ」
「——だけど、おじさん、赤主は新九郎おじさんのおかげで勝ったんだよ」
「それは……赤主が強いからではないか」
「おじさんのおかげさ、赤主がそう言っているのだもの」
まさか。新九郎は苦笑した。赤主の気持は、しかし、黒丸にはよくわかるにちがいない。
ともあれ、これは振り切るしかない。
「じゃァ、赤主にそう言ってやれ、おれが屋敷をかまえ、世話をしてやれるようになったら、いつでも来い、と」
少年でもこういう筋の通った話なら理解できる。
新九郎は背を見せて歩きだした。あとをついてこないところを見ると、あきらめたらしい。
（やれやれ、とんだ軍鶏さわぎに巻きこまれたぞ）
闘鶏は好きなだけに、うっかりすると、何もかも投げ捨てて、溺れたくなる。
あの軍鶏の闘志と、蹴合いの昂奮や、この強さの伯仲したものの試合の持つ賭博性には惹かれるのだ。
（なるほど、あの赤主をみんながほしがるのはわかる気がするな、あいつ一羽いれば、かなりな稼ぎが出来るだろう）
あの黒丸を追っていた連中も、いまの陣内とおふじなどはいうまでもないし、品よげに見えた被衣の女にしても、その狙いは同じなのではないか。
新九郎は無花果の樹の下に莚が敷かれ、心太を売っているのを見て近づいていった。
心太など、久しく食べたことがない。やはり駿府は都会

なのだ。京で食べた味が思いだされたのである。
　心太はいうまでもなく、心太草によって製されるものだが、この時代よりもずっと前から一般的な夏の食物になっていた。
　ふしぎなことには、この心太ばかりは、いまもむかしも製法に変りがない。細い針金の格子のついた長箱をふいご押しに押し出す。
　もっとも地方によっては、針金が手に入らぬか高価だったのか、竹のヒゴを用いたり、菖蒲を用いたりしたところもあったようである。
「さあ、冷たい心太だよ、一押し鐚一文だよ」
　ころころに肥った女が往来の者を呼んでいる。
　水の入った小桶に心太を入れ、布をかぶせて、さらにふり桶に水を張り、布の端をすっぽりと浸している。
　これは一種の冷蔵庫である。水を吸い上げた布は、暑気で蒸発し、周辺の熱を奪うから、中は冷たくなる。心太はいつも冷えているというわけだ。庶民の智恵であろう。
「――ひとつ、くれい」
　新九郎は莚にどっかりと腰をおろした。
「あい、冷たい心太を一つ、美味いよ、お倉の心太といえば、この府中ばかりじゃない、駿河中に知られているのさ」
「ほう、そいつは美味かろう、だが、あまり前宣伝が長すぎては、せっかく美味くても、味がおちるぞ」
「あいよ、鐚一文」
「前払いか」
「この府中ではみんなそうさ」
　どうも都会になるほど、人情風俗が乾いてくるようである。
　酢醤油をかけて、するすると心太を食べていると、うしろに、何やらもぞもぞ動くものがある。
「あっ……」ふりかえって、驚いた。
　なんと軍鶏の赤主ではないか。いつの間にか、うしろに来てうずくまっているのだ。
「やあ、こいつ……」
　あたりを見まわしたのは、黒丸の姿を探したのだ。
　いくら人懐っこい軍鶏でも、犬や猫ではあるまいし人混みの中から、新九郎を探し出して、あとに従いてくるということはあるまい。黒丸が抱えてきて、そっと置いていったにちがいない。
　それに気がつかず、心太を食っていたのか。
（いかんな、もしも背後から斬りかけられたら、それっきりだ）
　酒を飲んでいたり、女と抱きあっているときなら、まだしも、心太を食うところを不意打ち喰ったとあっては、羞しくて閻魔ノ庁でも説明できないではないか。

　もっとも黒丸や赤主に殺意がなかったから、危険本能に感応しなかったのかもしれない。
「困ったやつだ」
と、見まわしていると、
「――卒爾ながら」
　声をかけてきた者がある。
　男の声である。
　振りかえると、若い武士がいた。やはり、心太を食べていたのである。
　莚の上に胡坐して、無花果の樹によりかかっていたのが、新九郎を見て声をかけてきた。
　前髪の武士、というより少年の域を出ない紅顔が、女に見まほしく優しげであった。見るからに柔らかそうな色小袖を着、萌葱のこれも派手な陣羽織を着用している。その上、刀は赤うるしの蛭巻でなんとも派手すぎるいでたちだった。
　一見して、新九郎は、
（この男、誰ぞの寵童だな）
と感じた。
　いわゆる男色による色小姓、稚小姓にふさわしい。
　そう思って見ると、髪なぞも濡れ濡れと、油手入れがゆきとどいているらしく、きわだって美しいのだ。この暑いさなかに、灼けもしないのは天成の美貌なのか、うす化粧していたかとすら思われる美貌であった。
　鎌髭の中年の草履とりが、少し離れたところにうずくまっている。
「旅の御方か」若者は言った。「城下では、はじめてお目にかかったようですが」
　慇懃である。こういう男は、年少にして尊大なところが多く、えてして冷血で酷薄だ。寵を一身にあつめているところからくる思い上りがある。
　本来、新九郎は生理的にも好きになれないのだが、この男は、物腰も柔らかく、礼儀正しい。
「左様、府中ははじめてまいった」と、新九郎は椀から目をあげ、するすると、最後の心太を吸いこんだ。「いい街だな。好きになりかけている」
「はあ、東海一、と人は申しますな。諸国を歩かれた方には、その評価が正しいかどうか、おわかりだと思うが」
「いや、全く。京の次に、繁華だ。もっとも京は戦乱で荒れているゆえ、いまや日本一でござろう」
「左様でしょうか、何せ、井の中の蛙で、われらには、とんと見当がつきませぬが、中国すじの周防の山口とか、和泉の堺と申すところも繁昌だと仄聞しています」
　知らないどころではない。なかなかよく知っている。相手が少年でも、これはうっかりできない、と新九郎は箸を置いた。

「それにしても、この心太はうまいですな」
「……」
「かような、うまいものがあるのは、やはり繁栄の証でござろうな。衣食たりて礼節を知る。飢えた者には、味をとやこう言うひまがないゆえ、しぜん、舌が粗雑になる。はははは、御免」
新九郎は立ち上った。軍鶏の赤主が、啼いた。
「あいや、暫く」
新九郎が立ち去ろうとしたのを、派手小袖の若衆は、あわてて呼び止めた。
「これより何れへ？」
「いや、別段のアテはない」
「……」
「御城下を見物してまわろうと思いましてな。実を申すと、さっき御城下に入ったばかりだ」
「あ、それなら、それがしが御案内いたそう、城下のことなら、目をつむっても歩けます」
「いや、それは……」
こんな、女に見まほしい美少年と城下を連れ立っては、人目に立つ。
あまり人目に立っては困るのだ。それに、こういう誰か身分ある者の寵童は、差しさわりが多い。
新九郎には男色の気がないが、悪く誤解されるおそれがある。恋の怨みは食物の恨みにまさるというが、男同士の、いわゆる衆道の怨みは、男女のそれ以上だという。
「有難いが……遠慮しておこう」
「なぜでござる、遠慮なさることはありません」
おれは男色はきらい、つまり、お前のような柔弱な男らしからぬ男はきらいだ、と面とむかっては言えない。
「その、おれは生得、一人歩きが好きでな。はははは、見知らぬ城下を、一人で見てまわるのは、楽しいものさ」
「なるほど……」あっさりと頷いたが、「それもよろしかろうが、しかし、うっかりすると、大変なことになります」
「……」
「かように申しては失礼だが、他国者の、諜者の潜入には、用心しておる。いかなる目にあわれるかわかりませぬぞ」
白面の優しい顔のくせに、ねっとりとしたもの言いで、新九郎に忠告する。
「ほう、この国のうちは、左様に乱れているのか」
「乱れているわけではござらん、今川家は東海一の大名でござる。国内も裕福ゆえ、これを狙う者がいるのは、当然のこと」
「ふむ」
「それがしが、一緒なら安心というわけで」
「忝けないが、しかし……」

と、なおも断わろうとすると、
「あ、申しおくれました。名乗りもせで、かような申し出でをしても、御安堵なさらぬは当然ですな。てまえは、当家の……」
「あ、待たれよ」
新九郎、あわてて押し止めた。
武士の礼儀だ、相手に名乗られて、こちらが黙っているわけにはいかない。当然、名乗らなければならないのだ。
新九郎には目的がある。あまり、名前を知られても困るのだ。なるべく隠密に事情をさぐらなければならないのだ。こんな派手な男と歩いて、噂が立っては困る。
すると、若衆は、ちらりと赤主のほうを見た。
軍鶏の赤主がそれほどこの駿府で著名ならば、若衆が話題にしようとしないのが不思議だった。
ちらちら見ているだけで、興味を起しているふうはない。
新九郎が赤主を抱いて立ち去ろうとするのを若衆は呼び止めたが、新九郎は聞えぬふりで歩いてゆく。
若衆はあとを追った。
「代はあとだ」
と、心太売りに言い捨てるのが聞えた。
新九郎が食べるときは、前払いだと言われたのだから、随分、待遇が違うものだ。やはり旅の者と見られたから、信用されないのだろう。
それにしても、若衆は顔が利くらしい。
「──まあ待って下され」若衆は追いすがってきた。「案内仕るというのに」
「結構」と、素っ気なく振り切って、「案内はお断わりする」
「しかし」と、執こい。「誰よりも、この府中を存じておるほどに」
「さ、それが迷惑。知らんほうが興味深いこともある」
「……」
「女と同じさ、何もかもわかってしまった女は、面白くない」
「はははは、うまいことを言われるな。如何であろう、屋形へ参られぬか」
「──おぬしの、か」
「いや、それがしの主人のところだ」
「主人？」
「左様……それがしは」
と、また名乗りかけたので、新九郎は遮った。
「聞きたくないな」
「ま、左様に仰せられずと」
袖を攫まんばかりだ。これには新九郎も弱った。
町なかである。それも人目に立つ辻だ。うす化粧した色小姓にまとわりつかれている。
それも、何やら哀願して、ついてくるのだから、無責任

な第三者の目から見ると、情痴のもつれかと思われるにちがいない。
人目に立っては困る。場合が場合である。新九郎はあきらめた。ともかくこの場を離れることだ。
この若衆の様子では執こい。ちょっとやそっとでは離れない。粘っこい。衆道などに浸っていると、男も女性化するというが、この若衆も、蛇のような執拗さがある。
しかたがない。
「行く、やむをえん、行こう」
「え、来て下さるか」
「どこだ、その屋形は」
「忝けない。主人もいかい喜びましょうほどに」
抱きつかんばかりだ。新九郎は辟易しながら、
「わかった。一緒に参るゆえ、そうべたべたしないでくれ。それでなくても暑いではないか」
新九郎の気持に応えるように軍鶏が一声、するどく啼いた。
新九郎が案内されたところは、この駿府の東方にこんもりと盛りあがった谷津山の東南の麓にある御殿だった。
谷津山というのは、百メートルほどの標高だから、大した高さではないが、平野に突兀として盛り上っているので、眺めがいい。
東北から南西に細長く、幅と長さが、丁度、沓のようなかたちなので、沓谷の名称もある。
その山から切り離されたようなかたちで、少し離れた南方に、小山がある。
後世、八幡神社が祭られて、八幡山と呼び習わされているが、この二つの山が、駿府の東方の守り山となっている。
現在は市域が広がり、すでに市街地にとりこまれていて、むしろ市中を劃する観がないではないが、当時にあっては今川館の城下はこの西方一円で、これらの山々は、北方の賤機山や西方、安倍川の向うに連なる高草山連山と対して、駿府を守る自然の要害をなしていた。
したがって、むろん、これらの山々には、出砦が築かれていた。
当時の今川館が、城郭としては近世城郭とはまるきり違った御殿造りであったのも、この要害のおかげであった。
東西どこの国でも都市の発展は、中世にあっては城下か港町か宿場か、この三つの要素のもとに、存在、発展しているのが、産業革命以前の形態である。
駿府が乱世の城下町として発展したのも、当時の城は多く山城で、いざとなると城下町は保護されない。城主一族や家臣たちは日ごろ平地で生活しても、合戦となると、山上の城へ入ってしまう。
せっかく諸国から人が蝟集し町の形がととのいはじめて

も、焼き払われてしまうことが多い。敵に焼かれるのならまだしも、多くは、味方が焼く。籠城の場合、敵の拠点となってしまうからである。
そのために城下町の殆どは、その都市化発展を、乱世の劫火が熄んでからにまたねばならなかったのだ。
その点、この駿府――静岡市は今川館が、山城ではなく、平城で城館と称われた屋形造りに城の要素を含んだものだっただけに、安心して、諸国から人が集まった。
今日の静岡の発展の因がここにある。
のちの話になるが、新九郎が、北條早雲となって、相州小田原城とその城下町を経営したとき、本邦では珍しい〝城の中の町〟造りをしたのも、駿府の地理的要素に触発されたものが多いと、筆者は考えている。
谷津山や八幡山、賤機山から日本平の久能山のある屏風谷の風貌なども、たしかに、山そのものが城壁といっても過言ではない。
この谷津山沓谷の東南の麓に、その御殿はあった。
緑の山を背にして、小高いあたりから、段々に切り下げて華麗宏壮な屋形が出来ている。
二間幅の濠が三方を囲繞し、築地塀には、矢狭間がある。
この屋形の裏から、山上の砦へ道が通じているし、尾根から尾根へと走り道もつけてあり、この愛宕山を含んだ谷津山全体がひとつの平山城をなしている。
若衆が入ってゆくと、門番が丁寧にお辞儀をした。
「お戻りなされましたら、泉殿の方へお出で下さるようにとのことでございます」
「泉殿か」
鷹揚にうなずいて、若衆は中門のほうへ歩きだした。
「一寸、待ってくれ」赤主を抱えた新九郎は、立ち止った。
「どうも、おれは場ちがいなようだ。一体、ここは誰の屋形だ、たしか領主どのの屋形ではないはずだ」
「左様」
「領主治部大輔どのの屋形は、街なかに高楼が見えたが、あれであろう」
「左様」
「すると……」
「当家は小鹿どの、と呼ばれています」
「………」
「御当代は、新五郎範満様」
そうか、と新九郎は心に頷いた。
そうだったのか。治部大輔義忠の様子を狙っていると、噂されている範満の屋形か。
(――妙なことになったな)
新九郎がこの城下へ来たのも、それを探る意味があったのだ。まるで、向うからわざわざ、引きこんでくれたようなものだった。

義忠の従弟になる範満はまだ若いが、野心家であり、義忠の子が幼いのを幸いとして、権勢をひろげてきている。義忠は凡庸でそこまで気がついていないらしい。

そうした今川家の家系の複雑さは聞いていたが、その範満のところに、入りこむことになろうとは、思いがけない偶然だった。

「新五郎範満……はじめて聞く名だが」と、新九郎はとぼけて見せた。「御当代とはどういう関係だ」

「御一族でね、信望厚き御方だ」

「ほう、それは知らざった」

「いや、旅の者なら、知らぬのも当然、てまえがお引き合わせして進ぜる。そのために、お連れしたのだ」

「何のために」

単なる気まぐれか？

新九郎には、若衆の誘いの意味がわからなかったのである。

新五郎範満ならば、頷けるふしがある。新九郎の風貌は、諸国流浪の窶れた旅牢人とは違って、精力的で頼母しげなところがある。

範満の野心の一助になると思ったのではないか。しかし、そういう解釈は甘かったようである。

「ほう、新五郎範満どのと聞いては、このままでは逢いかねるな」新九郎は、首を振った。「旅の埃りまみれでは、おれの面目に関わる」

旅牢人のくせに何をほざくか、というような顔になって、

「なに、左様なことに、こだわらぬ御方だ」

と、若衆は言ったが、新九郎は肯じない。

「いやいや、こちらでこだわるのだ。武士の体面がな。武士たる者、身づくろいを忘れてはならぬ」

「しかし……」

「どこぞ、手足を洗うところはないか」

「無いこともないが……」

しかたなさそうに、若衆は案内に立った。

「こちらへ参られよ」

番所の前を右側へ廻り、中仕切りの壁について裏手へ行く。脇門のほうだ。こちら側に遠侍と厩舎が並んでいる。見事な馬が十数頭いて、下人たちが手桶の水で洗ってやっている。

「ほう、大したものだ」

馬の好きな新九郎は、思わず立ち止り、見まわした。そして、もっとも見事な一頭の肥馬の傍へ寄ると、

「ちょっと失礼する」

轡をつかんで、手を口中にさし入れた。馬は歯で年齢を見分ける。

「三歳駒だ、うむ……」

「馬がお好きか」若衆には新九郎の動作が意外だったように、

「目が高いな。その月毛は殿がもっともお気に入りでな、秋月と名づけておられる」

「秋月か、よい名だ、いかにも、この馬にふさわしい」

鼻面をなでていると、赤主のほうは、勝手にそこらを歩きまわって、餌をついばんでいる。

若衆はその方が気になっているように、新九郎の目をぬすんでちらちら見ているのだった。

厩舎のつづきに風呂屋があり、土間がつづいている。大きな井戸が見えた。井戸の傍に梧桐がひょろりと立っている。爽やかな青葉のかげに白紫の花が咲いている。

暑気のはげしいなかで、桐の花は、人の心をほっとさせる。新九郎は小袖や袴を脱いで下帯一すじになった。

車井戸の水を汲みあげて、新九郎はまず顔を洗い、からだを拭いた。小袖や袴をはたいて埃りを落す。

「――ああ、さっぱりしたぞ」

新九郎が拭いている間、若衆は軍鶏の赤主をつかまえようとしていた。

赤主はなぜか、とっとっと、逃げまわっていた。人懐っこい赤主がなぜ若衆を避けているのか。

そのときは新九郎にわからなかった。それよりも、塀の端に女の姿が見えた。明るい小袖の色がちらっと、見えたのである。

女はこちらを見た――と思った。

そして、すっとひっこんだ。

新九郎の気づき方が遅かったから、ちらりと小袖が見えただけだった。

（若い女か？）

若い女に見えた。

だいたい、男の眼というものはそう出来ている。

期待があるからであろう。それに、女性の化粧や着付けも洋の東西を問わず、若作りを心がけている。

「いまの女性は？」

と、新九郎は、若衆に聞いた。

若衆は赤主にふりまわされて、みっともなく、膝をついたところだった。

「変な声を出さないでくれ」

若衆の白皙の顔が、妙に歪んだ。なまじ美しい顔だけに、そのときの若衆の表情は妖しいものだった。

「あの女のことだ」

と、新九郎は言った。

「どの女だって？」

赤主はとことこと逃げて、新九郎の傍へやってきている。

まるで若衆の傍なら嫌だが、新九郎なら信頼に足るといわんばかりである。

いまいましそうに、若衆は唾を吐いた。

「女なんて、女なんて、臭いだけだ」
と、唇をひん曲げて言った。
「この屋形には、女と名のつく者は十八人います」
「ほう、女ぎらいか」
「……」
「婆アから小便臭い小女までね。それがどうかしたのですか」
「いや、もういい」
小袖を着ると、新九郎は髪のおくれ毛をかきあげ、手で圧えつけるようにした。こういう若衆は常に櫛を持っているものだが、借りる気にならなかったのだ。
「さあいいぞ、その主人どののところにまいろう」
そう言いながらも、女のことが気になっている。
ちらっと見てひっこんだのが、何やら意味あり気だったのである。
新九郎が手をのばすと、あれほど若衆を嫌った赤主が、喜んでのってきた。
「ちえっ、人をこけにして」
若衆は横をむいて、いまいましげに呟いた。
「ははは、なに、こけにしたわけではあるまい。赤主は人見知りするだけさ」
「……」
「おぬしを好かぬらしい」
「牝か、そやつ」
「どうかの」
「牝はどいつも、それがしをきらうらしい」若衆は膝の埃りをはたきながら、「ま、しかたがない。とかく、美しいものは、憎まれ易いものだ。ことに女にしてみれば、それがしのような女よりも美しいといわれている男は憎いのであろう……」
うぬぼれの強さも、ここまでくると、尋常ではない。
新九郎は肚裡でおかしさをこらえて、
「わかった、そりゃ迷惑なことであろうな。赤主も牝かもしれん」
多勢の騒ぐ声がしていた。
門の内である。その声を聞くと若衆は細い顎をしゃくって、「お好きでね」と、新九郎に笑いかけた。
「……」
「話が合うと思うが」
なんのことかわからない。
「卒爾なことのないように、気をつけて下され」
「さあ、どうかな」こういう男は虫が好かないから新九郎はあえて、頭をかしげる。「おれは、いささかツムジ曲りでな」
「……」
「人間の好き嫌いがはげしい。女も男もだ」

「ではあろうが」
「好かぬやつを見ると、ぶん殴りたくなる。一番嫌なのは卑劣な奴だ、腹に一物あるくせに、にやにやしてくるやつだ」
お前のことを言っているのだと眼を真っ直ぐに見つめるが、若衆のほうは鈍感なのか感じないような顔をして、笄で髪をととのえている。
「巧言令色の徒だな。どうせ女は、猫のようなもので、しかたがないこともあるが、男のくせに、嘘吐きで、卑怯な手合いは」
「殿は御立派だ」
「ならばよいが」
「さ、こちらだ」
網代戸から入った。そこが奥庭になっていた。白砂と白石が巧みに配合されて敷かれたところで、軍鶏が動いていた。
(またか)
と、少々、うんざりした気持で新九郎は赤主を見た。
一瞬、赤主の表情が変ったように見えた。
腕に軽く抱えていたのが、全身に緊張が走ったのだ。それは、眠っていた闘志を触発され、野性へ戻ったことを意味していた。
「おい、静かにせい」あばれ出そうとするのを圧えて、
「闘いに来たのではないからな」
と、人間に言うように、言いきかせた。
「すぐに戻る。黒丸のところへ戻ろうな。おとなしくしておれ」
その間に、若衆は、ちょろちょろと、石階に近よった。
寝殿造りの屋形である。主らしい威張った男が、簀ノ子と呼ばれる広縁へ出ていて、円座の上で片膝立て、大盃を傾けながら、軍鶏の蹴合いを眺めているのだ。
まだ若い。若さを補うような鼻下の髭も黒々として、手入れがよくなされ、なかなかの男ぶりであった。この男が範満か。生活の垢が、まるっきりない。尊大で傲慢で、人を見下すような眼つきと、おのれのほしいものは、手を伸ばさずにはおれぬ性質に見えた。
「連れて参じました」
若衆が言ったに一瞥もせず、
「そこだ、やれ、やれ!」
と、軍鶏をけしかけている。意外だったのは、これは、試合でなく練習だったことだ。一方は脚の先に皮袋を穿かされているのである。
軍鶏が沓をはいている。新九郎は一目見たとき、そう思った。その軍鶏は皮で足をくるまれていた。珍しいことではない。練習の最中に傷つくことを恐れているのだ。皮の内側は真綿を詰め、爪の威力を殺してある。

しかし、それは一方だけである。もう一羽の方は、ちゃんと爪をむきだしにしているのだ。これは不公平な闘いだった。

「やれ！　東雲（しののめ）よ、蹴殺せ」

範満らしい男は、そちらをけしかけている。

「それっ、やれ！」

東雲は傲然たる貌（かお）で、皮沓のほうへ飛びかかっていった。

皮沓を穿かされた方はたまらない。攻撃しようと思っても、威力はないのだ。はげしい力で東雲を蹴っても、相手はこたえない。

せいぜい、はね飛ばされるだけだが、東雲のするどい爪が当ると顔も胸も、頸も眼も、しゅっしゅっと血を噴く。

（これは……一方的な殺戮ではないか）

新九郎は眉をひそめた。

両者がぱっと飛びかかり、激突するたびに、羽毛が舞い飛ぶ。

悲鳴は、皮沓のほうである。するどい爪に顔をかきむしられ、胸のあたりもひき裂かれて、凄惨そのものだった。白砂の上に飛び散った鮮血は、強烈な太陽を浴びて、またたくまに黒褐色に変じてゆく。

「それ、笹目が逃げるぞ、東雲よ、もっとやれ、蹴るのじゃ、蹴殺してしまえ」

範満は酔っていた。酒のせいではない。殺戮の修羅に酔っていた。

鮮血と悲鳴と、躍動と——白砂の効果もある。酒は、その昂奮を助けているだけであった。

眼をぎらぎらさせて、この殺戮の感動を味わっている範満には、若衆が伴ってきた新九郎のことなど眼中にないようであった。

「殺せ、殺すのじゃ、東雲よ、よいか、その血の味をおぼえていよ、よいな、よいな」

範満はたっぷりと愉しんだように、哄笑を吹きあげると、

「東雲之助、ずいぶんと、こやつ腕をあげたようじゃ」

と、言った。

「見よ、もはや笹目は息絶えたわ」

「いかにも」と、若衆は、その意をむかえるように微笑して、「わが名を与えただけのことはありまする」

「そうじゃ可愛がってやれ」

範満は我が意を得た、というふうに頷いて、下人に東雲を抱えて来させると、ざぶりと提子（ひさげ）の酒をぶちまけた。

ぶるぶるっと顫えて、東雲は、ぱっと羽をあびせた。

「東雲之助よ、血を拭いてやるのじゃ」

顎をしゃくった。

東雲は東雲之助の腕に抱かれた。布を出すのではなかった。若衆は軍鶏の血をべろべろ舐めはじめたのである。

可愛がるというのも、限度がある。

人間と軍鶏である。それも、女に見まほしい美貌の若衆がすることなのだ。

新九郎、あまりものに驚かぬ男だが、これには、些か、呆れた。

東雲之助というのが、この若衆の名で、軍鶏が東雲。同じ〝しののめ〟というからには、それだけの愛情をそそいでいるからなのであろう。その愛情とは、しかし、若衆が軍鶏にそそいでいるのではなく、範満の感情のようであった。

その辺のことは別にしても、およそ異様な情景だった。

酒を浴びせられた軍鶏を抱きかかえた東雲之助は、べろべろと、血を舐めはじめた。

その血の殆どは、敵の笹目のものである。したがって、その行為は、直接的に、〝拭う〟という意味しかないはずだったが、東雲之助の舌が、軍鶏の顔から胸から背中から、べろべろと這いまわると、東雲は、さもうれしげに、咽喉をふるわせて、るるると啼く。

こんなことをすれば、若衆の舌は荒れるにちがいないのだが、東雲之助は一所懸命だ。

範満の命令は絶対なのであろう。おのれは酒杯を傾けながら、範満は、それを満足そうに眺めている。

主人——といっても、範満もまだ若いはずであった。

その顔の、皮膚の張りや、動作を見ても、声を聞いても、眼の光を見ても、若さがあふれている。鼻下の瀟洒な髭はあくまでもその若さに威厳をそえるためのものらしい。

その間に、下人たちは、笹目の死骸を片付け、血に汚れた白砂と砂利を掬いとり、どこからか、あらたに籠で運んできた砂利を撒き白砂で浄めた。

いつものことらしく、その手配もてきぱきとなされている。

東雲之助が、勝利者の軍鶏をすっかりきれいに舐めおわるころには、庭前の白砂は、陽光にひかりかがやく、清浄なものに戻っていた。

新九郎には、何といっていいかわからない。こういうありさまは、かれの感覚にとって、少なくとも〝異常〟の範囲に入るものであった。

なまじ、さんさんたる夏の陽の下であるだけに、白昼夢でも見ているような、奇妙な気持だったのである。

範満は、まるで、その新九郎の心情を見抜いたように、

「動物というやつは、可愛がってやれば、なんでもするものだ」と、独白のように言った。「人間でも同じだがな、それが血によって結ばれているときは、もっとも強い」

「……………」

「血だ、動物は血によって生きている。血が血をもとめ、修羅を呼ぶ。そうではないか、伊勢ノ新九郎」

突然、名を呼ばれて、新九郎ははっとした。

範満の言葉は、はじめ、独白のように聞えていたのである。
「血だ、血を忘れては、世の中におくれをとる。そうではないかな新九郎とやら」
「うむ、それは……」
「おれよりも、ずっと年配に見うけるゆえ、世の中を多く見て来たであろう」
「……」
「だが、おれは一年を三年に生きた」
「……」
「おぬしよりは、ずいぶんと年長というわけになる」
声のない笑いを見せて、
「新九郎、よく来た」あらためて言った。
新九郎は、ろくに挨拶もしていないのである。
挨拶なぞ、抜きだ、というのであろうか。そういう豪放さは、しかし、範満の場合、性格というより、敢て、そう振舞おうとしているように見える。
新九郎に合点がいかない点は、
（どうして、おれの名を……）
若衆の東雲之助は、かれの名を告げるひまもなかったはずだし、開口一番、
（連れて参じました）
と、言ったのも、不審だった。

まるで、新九郎は、この範満にマークされて、追いまわされ、発見され、連行されたような感じだ。
この駿府へ入ってきて、そんな〝目〟は感じなかった。
新九郎が名前を洩らしたのはあの被衣の女の命令を受けた老女にだけである。
とすると——
（あの女か！）
さっきちらりと見たのは、あの女ではないか。その推理は正しかったようである。
範満はふっと気を変えるように言った。
「おぬしの軍鶏、おれにくれぬか」
「……」
「赤主と称ったな、得難い名鳥だ」
「……」
「欲しい。くれい」
こうはっきりと、歯に衣きせず言われると、かえって断わりようがなくなる。
「軍鶏がお目あてとは知らざった」と、新九郎は応えた。
「軍鶏はそれがしのものではない」
「……」
「ただ預かっているだけゆえ、他人にやるの売るのというわけにはゆかぬ」
「おれの望みでもか」

と、範満は語気を強めた。
威嚇というつもりはなかったろうが、嬌慢な男にとっては、新九郎の拒否は、やはり許し難いものだったろう。
「実を申すとな新九郎、その赤主はおれのものなのだぞ」
奥の手を出したという感じだった。
「赤主は本来おれのものだ」
と、範満はくりかえした。それは自分に納得させるような口吻に聞えた。
「信じかねる顔つきだな」大きく口をあけて哄笑すると、
「話してくれよう、あがれ」
と、へやへ戻った。
新九郎はほどほどにして出てゆくつもりになっていたが、赤主が黒丸のものでないとなると、考えなければならぬ。
軍鶏を抱えたまま、あがろうとすると、東雲之助が、
「赤主をこちらへ」と、手をさし出して、「それがしがお預かりしましょう」
「いや、せっかくだが、こいつ、おれでないと温和しくしていないでな」
「……」
上手に断わられて、唖然としている東雲之助を尻目に、新九郎は範満と対して坐った。
「まず、喰らえ」
範満は女に顎をしゃくって、酒を注がせた。

豪華な調度である。板戸にも板壁にも草花や鳥などが描かれているほかに唐物の花瓶に花が生けてある。
まだ、この時代、投げ入れの自由なかたちは、普及していない。あくまでも仏前の供花に発した立花である。花瓶は白磁が多い。範満の好みなのであろう。
「朝鮮窯でござるな」
と、新九郎は堅手白磁を眺めた。
「ほう、わかるか。白ばかりよ、おりゃ高麗青磁は好かぬ」
「左様でござるか、それがしは青磁に象嵌の巧みなものは、それなりに面白いと思うが」
「おれは好かん、白磁は、それ、女の肌に通じておる」にやりと、片頬を笑わせて、「飲まぬか、伊丹の諸白じゃ」
金にあかせて銘酒を取り寄せているのであろうか。
飾られた山水図も一目で名手の筆になるものと知れた。
範満は豪放に見せかけているが、かなり繊細な神経と、美感を持っているらしい。
「お伺いしたいな、この赤主が、本来、貴殿のものであるということ」
「おお、左様であった。小いそ、手文庫をもて」
小いそと呼ばれた女は、黒塗りの二階棚から、螺鈿の文筥をとりおろしてきた。
結ばれた組紐をほどいて、そっと差し出す。

範満が、そこから一封の書状をつかみ出すと、無造作に、新九郎の膝にほうった。
「ほれよ、それを披見すりゃわかる」
借用証文だ。素早く目を通すと、借銀の質物として軍鶏赤主を差出す可約定仕り候、期日返済成らざるに於ては御処分如何様とも……云々となっている。
その名を読み下したとき、新九郎は、はっとして、一人の女のおもかげを甦らせている。
新九郎が思いだしたのは、甲冑師明珍の娘、おりょうであった。
その証文の名は、明珍高義となっている。はしなくも、高義の名を見て、新九郎は、おりょうを思いだしたのである。
おりょうのその後はどうなったのか。この駿府へ来ているはずだったが、どこにいるのか。その生死さえも定かでないのだ。
「明珍高義……この男が赤主の持ち主だったのか」
新九郎には、驚きだった。因縁を感じた。こういうかたちで、明珍の名とかかわりあいが来ようとは、思いがけなかったのである。
「存じておるのか」と、範満の方も少し驚いたようであった。「ほう、存じているとすれば、話は早い」
「いや、明珍は知らぬ。縁者を知っているのだ」
「……」
「女人だが……ま、それはよい。明珍高義が赤主の持ち主だとすれば、つまり、借銀のかたに、貴殿のものになったというわけか」
「その通り」範満は酒を呷り、手巾で口を拭き、髭をととのえた。「そういうわけだ。借銀を返さぬゆえ、赤主はおれのものになるはずであった」
「……」
「ところが、変事が起きた。黒丸と申す餓鬼が、持って逃げた」
「――明珍の子か」
「子ではない。いわば弟子というところか。以前は浮浪児であったという話だ。軒先で腹をすかして倒れていたのを、明珍が哀れんで、飯を食わせてやったとか聞いた。四、五年前からな、以来、水汲みなどさせていたのであろう」
「……」
「そやつが、赤主をさらって逃げたのだ。明珍にしてみれば、飼犬に手を咬まれたというわけか」
はたしてそうだろうか。むしろ黒丸の行為は、ほっとさせたのではないか。赤主があれだけ黒丸に懐いていたところを見ると、明珍家でもみんなして可愛がっていたに違いない。
「わかったか、新九郎」範満は、とどめを刺すように言っ

た。「したがって、その赤主はおれのものだ」
と、顎をしゃくった。
「なるほど、この借銀証では、そうなっておりますな」
「で、あろう。わかればよい」
範満は、東雲之助に何か命じようとした。
「いや、まだ、ちとわからぬところがある」新九郎も、容易には承服しない。「この借銀証文だが」
「偽書だと申すか」
「いや、そうは言わぬが、明珍高義の筆かどうか、おれにはわかりかねるのだ」
いうならば屁理屈だった。赤主を手放さないための口実ではないか。
(偽書ではあるまいが)
範満の言葉を頭から信用できない。豪放らしく見せているが、明快さの底に緻密な計算がある。
(何か、裏がある、あるはずだ)
明珍の甲冑師が、借銀をするというのも不審だった。
甲冑師などというのは、地味な仕事だ。兜を鍛え、小札(こざね)を鍛え、胴鎧も近ごろは樋側銅と呼ばれる、鉄をうすくして、丸みをつけたものが出はじめている。
威(おどし)の組紐を染めたり正平革を用いて兜の吹返しを貼ったり、こまかい仕事には、大変な技術が要求されるだけに、人柄も質実になる。
借銀して、それが返済できなくなるなどというようなことは考えられない。
(探ってみる必要があるな)
新九郎は感じた。
「それがしは、頭が頑迷にできているゆえ、納得するまでは、動かぬ」
「ふむ」
「明珍に逢いたい」
「逢うて何とする」範満はぎろりと眼を剝いた。「借銀の仔細を聞くか、ははは、聞かねば納得せぬか。よかろう、聞いてこい、おれは止めぬよ」
「……」
「東雲之助、案内して仕わせ、明珍の家へ」
新九郎が、範満の言葉をうかと信用できないと思ったのには、あの女のこともある。
対の屋に女の姿が見えた。被衣の女である。
新九郎は、はっきりと、あの女であることをみとめて、はじめて、範満の意図がわかった。
さっき、ちらりと姿を見たのも、その女に違いない。上にあげて、範満が説得にかかった以上、もう自分の役目は終ったと思ったのか、平気で姿を見せたのだ。
(――そうすると、あの女と東雲之助は、おれをここへ連れてくるための……)

眼目は赤主なのだ。赤主を買いとろうとしたのが不成功に終ったとみるや、東雲之助が軍鶏のことはそしらぬふりで、新九郎に誘いかける。

あの心太売りのところで、いかにも悠然とした様子も、すべて、かれの手から赤主を奪うための詭計だったのだ。

こちらへくるまで、東雲之助が、一言も赤主のことに言及しなかったのも意識的すぎた。

この東雲之助といい、あの女といい、ことがここまで運んだ以上自分たちの役目は終ったとばかりしゃあしゃあとした顔をしているのも、小面憎い。

新九郎が辞去しようとすると、

「赤主は置いてゆけ、ちゃっと預かっておく」

と、範満は、執こく浴びせかけた。

明珍一族

範満という男はなんという執拗な性質であろうか。それだけ固執するというのも赤主に価値があるのであろう。

新九郎は範満の手をふりきるのに、一苦労している。一たん渡してしまえば、二度と戻るまい。ことの真実を知るまでは、赤主は手放せない。

黒丸の無邪気な瞳を思うとどうしても明珍高義に事情を聞かねばならぬ。

（おりょうのこともある）

その後どうなったか、安否を知りたかった。

明珍高義の仕事場は、今川屋形に近い六道ノ辻から少し入った小路の入口にあった。

かなり広い敷地である。往来から鎧を作っているところが見える。職人は十数人見えた。

「この辺で暫くお待ちなされ」東雲之助は、その見世棚の近くまでくると、新九郎をおしとめて、「様子を見てまいる」

「様子だと？　そのような必要はない。このまま参ればよい」

「いや、それが、なにしろ、あやつ、変人なんでね」

「……」

「逢う場合には、一応、用心したほうがよろしい」

東雲之助の態度は、まるで狂人扱いである。おりょうの父親が、しかしそんな狂的なところがあろうとは、考えられないことだった。

だが、新九郎は、まるきり知らない。おりょうからも父親の性格など聞いていない。

新九郎を待たせて、東雲之助は見世先をのぞいている。職人と二言三言、言葉を交したと思うとすぐに戻ってきた。

「不在らしい」

「居ない？」

「左様、急に他出したということだ」

急に——その言葉が、記憶に残った。

明珍高義がいないとなると、職人たちに聞いてもしかたのないことだった。

「せっかく案内してもらったが、不在ならしかたがない、暫く待ってみよう」

「待つ？　待っても帰るまい」

「帰らぬと？」新九郎は眉をひそめた。「どうしてわかる」

「いや、べつに、ただ、ちょっとそう感じただけだ。他意はない」東雲之助は、うすく笑った。「さあ、戻らっしゃい。殿がお待ちかねなのだ」

「いや、暫くここにいよう」

「しかし……」

「構わないでいい、ここまで案内してくれた礼は言おう」

新九郎は歩きだした。東雲之助は追いすがったが、もう新九郎は振りかえりもしなかった。

（さて、どこで時間をつぶすかだ）

新九郎は赤主を抱えなおして、

「風呂にでも入るか、赤主よ。大分、埃りっぽくなったからな」

そのうしろ姿を、女のようなうすく朱い唇を噛みしめて、東雲之助は憎しみをこめて凝っと見つめていた。

風呂屋はここへ来るまでに、二軒ほど見えた。京の街にも風呂屋があった。いつころから、浴場が営業として成り立つようになったのかはっきりしない。

はじめは大きな寺などで、施湯として行ったものだ。蒸し風呂が多い。普通の風呂はすい風呂と呼ばれていて、一般に風呂といえば、蒸し風呂をさしたものである。

新九郎が入っていったのは、

〝桔梗風呂〟

と呼ばれている家だった。

桔梗の紋が大きく染めぬいてある柿いろ暖簾をわけて入ってゆくと、小袖の女が二、三人、黄ろい声をあげて立ち上った。

「お出でなさいませ」「さ、こちらへ」いずれも十三、四。蕾のほころびた年ごろの女たちである。まだ少女の面影がある。が、小袖をゆったりと着てちらちら見える乳房のふくらみには、もう女が匂っている。

「お一人さま?」

「そうだ」

「鐚三文でございます」

京ではたしか二文だったと思う。地方に来たほうが高い。客が少ないせいなのか。この駿府は、物価が高い。都市の殷賑さに比例しているのであろうか。

「京では二文だったぞ」

というと、

「あら、京よりも、美い女が揃っておりましょ」

艶然と風呂屋女は笑った。

なるほど、自らそう言うだけあって、眉目の涼しげな、品のいい顔が多い。そうした女たちをよりすぐっているのであろうか。

遊女屋もあるに違いないが、俗に肌の切り売りは人三化七でも出来るというほどで、遊女にはぴんからきりまである。値段しだいでどんな女でも、商売になるが、風呂屋女は、おもてむき、〃垢かき女〃だから、あまり容姿が悪いと客が来なくなる。

男でも風呂屋の三助というと、いなせな若者を揃えたほどだ。ただ温まるだけではなく、垢をかいて、清潔にするための入浴だから、男でも女でも清潔感がないと、客がつかない。

「どの子がよろしいかえ」

でっぷり肥った中年の女が顔を出した。この風呂の持ち主なのであろう。

「どの、と申しても、はじめてでわからぬ。気質のいい子がいいな」

女は、うなずいて、ふりかえると、

「小萩を」

と、言った。

あとから気がついたのだが、ここの女は、みんな、秋草の名がついている。本名ではあるまい。げんじ名であろう。

その小萩と呼ばれたのは、色の白い、まだ蕾としか思われない娘だった。

「小萩というのか」

「あい」

「もう長いのか、ここは」

「あい」

女は口数少なく、にこにこ微笑するだけだった。

蒸し風呂に入ると、毛穴がひろがって垢が浮き上る。さっきは、ただ水で拭いただけだから、垢までは抜けきれなかったのだ。湯気のこもった暗いなかで、垢が蒸れるのに耐えているのは、馴れないと息苦しい。

ずっと後のことになるが、慶長見聞集によると、天正のころの銭湯が江戸にはやりだしたころのありさまを、

——その頃は風呂不たんれん（鍛練）の人あまたありて、あつあつ（熱）の湯の雫や、息が詰りて物もいはれず、烟にて目もあかれぬなどと云て小風呂の口に立ふさがり、ぬるき風呂を好みしが……

などと説いてある。

蒸し風呂に入るには、それなりの〃鍛練〃が必要だったわけだ。もっとも馴れということであろうが、それだけに、普通のすい風呂に入ったのとは違う爽快さがある。

新九郎は真っ赤にうだったからだで洗い場に出てきた。

この当時の町風呂は、ごく粗野なものである。蒸し風呂ばかりは湯気が洩れては商売にならないからがっちり作ってあるが、ほかはきわめて開放的なものだ。

流すところは、板の間つづきの広く外に張り出した縁台簀ノ子になっている。つまり、青竹の縁台と思えばよい。

竹の節のところがきっちりと合っても、竹の幹と幹の間に隙間があるから、垢水は下へこぼれる。

この水は風呂屋の塀外を囲繞して流れている溝へそそぐ。

「さあ、かいてくれ、随分と垢がたまっているだろう」

新九郎は幅広い背を女にむけた。

垢をかく。

こする、とは言わない。だが、掻く、という表現も、実はふさわしくない。

垢とりには、爪をつかわない。湯女たちは、爪をきれいに切り揃えている。爪をたてると、皮膚に赤い線がつく。これは垢かきとしては拙なるものだ。

指の腹でかく。きゅっきゅっとこするのだ。垢を縒るのである。全身、くまなく垢を縒りだす。これには、やはり技術がいる。

こうして垢をかいたあとは、糸瓜で仕上げをして、湯で拭き上げる。髪を洗うときは、まず油で梳いて熱湯をかける。あらい櫛でくりかえしくりかえし梳くだけで、洗わない者も多い。

「お髪は如何いたしましょう」

「そうだな……」

もう大分髪は洗っていないな、と思いながら、ふと見ると、簀ノ子の端に、あの顔があった。

その顔がにっと笑った。歯が白い。

「なんだ、黒丸ではないか」

「赤主は大丈夫かい」

きょときょととして脱衣場のほうを見ている。その板の間

には、新九郎の衣類と刀が一包みになっている。後世いうところの風呂敷で包まれている。客のために用意された大きな布である。まだこの布を〝風呂敷〟とは呼ばない。
その包みの上に、赤主は作りもののように乗っていた。
「やあ、赤主、こっちへ来う」
黒丸が合図をすると、軍鶏は嬉しそうにばさばさっと、翼を鳴らせてとことこ近づいてきた。
「そうか、赤主のことを心配して追ってきたのか」
「おいら、わかるんだ、赤主がどこにいたってね」
「……」
「匂いがするのさ、赤主の匂いなら、川向うにいたってわかるんだ」
「ふむ、いい鼻をしているな」
新九郎は、やれやれ、と思った。これで赤主をかえしてしまえば重荷がとれる。
髪を洗ってもらい、さっぱりすると、新九郎はそのことをきりだした。
「やい黒丸、なぜ赤主をそっとおれのところに押しつけた？」
「押しつけたって？」
「心太を食っているときだ」
「ああ、赤主が行きたいと言ったんだよ」
「嘘を吐け」新九郎は笑いだした。「ああ、さっぱりした。おい、お前も入ったらどうだ」
「銭が無いもの」
「おれが出してやる」
「ほんとうはね、蒸し風呂は嫌いさ、川で水浴びしているからいいよ」
「垢が取れまい。蒸さねば垢が取れんぞ。よく蒸して、この女にかいてもらえば、黒丸が白丸になる」
「ちえっ、黒丸は黒丸だよう」
湯女といっても、この時代は、風呂場は別棟になっているから、うしろのほうに別に小屋がある。
小萩は新九郎を目で誘った。
「——休んでおゆきなさんせ」
「休みたいな」小萩の姿態が、新九郎には眩しいほど魅惑的に見えたが、「だが、そうもしておれん、要用がある」
「では、そのあとで」
「そうだな、そなたを抱きたい」
新九郎は率直に言った。
「冷たい瓜でも食べておゆきなさいませな」
女は、新九郎を自分の小屋に連れてゆきたい様子だった。
「いや、そなたのところにゆけば、瓜ではなく、そなたを食べたくなるからなあ」
「まあ、そのときは、それで、ねえ、よろしいでしょ」
「おいらも瓜を食べたいな」

黒丸が言った。
瓜が食べたくなったのは本当であろう、が、黒丸の真意は別のところにあったようである。
「そうか、では、そうするか」
新九郎は頷いた。黒丸にもっと聞きたいことがある。
「まあ、うれしい。こうお出でなされませ」
小萩はいそいそと、先に立って、裏の小屋へ案内した。
町の風呂屋と湯女とは、古いころから、切っても切り離せぬもので、太平記などにも、
——湯や風呂の女童部(めわらべ)ももてあつかひければ……
とある。
湯気を浴びて、垢をかいてもらい、髪を洗ったりして、さっぱりしたあとで、湯女と戯れるのだ。町風呂は、風呂だけではなく、この湯女つきで、繁昌する。小萩は、湯女たちの中で、もっとも若く、清潔な感じがある。
「さあ、たんと召し上れ」
瓜は客のために井戸に吊して冷やしてあった。
二つ割りにして種をかき出し、皿に乗せて、そっと差し出す手つきも、色を売る女とは思えないしとやかさがある。
「やあ、美味そうだ」
黒丸は汚ない手でつかんで、むしゃむしゃ食いはじめる。
「ここに住んでいるのか」
「あい」新九郎が、あまり部屋の中をじろじろ見まわすので、小萩は恥しそうに、「さあ、食べて下さんせ、お酒もございますが」
「いや、昼酒はよそう」
そんなに気楽な身分ではないのだ。
小屋の中は、子供には見せられないような嬌めいた雰囲気だった。
枕屏風には、妙な絵が貼ってある。巻物から切りとったような春画が数枚。色彩を丁寧に塗ったのもあるし、筆で殴り書きしたようなものもある。
小萩は黒丸の目を憚(はばか)って、何気なく、衣桁の帷子(かたびら)をとって、ふわりとかけた。
部屋の隅には夜具が積んである。うすいものである。鏡や化粧筥、乱れ箱など、女の色っぽい道具類も、少年には刺戟が強すぎる。
が、黒丸はそんなことに気がつかないような顔で、舌を鳴らして瓜を食っている。気がつきすぎているのかもしれない。
「黒丸、ちょっと聞きたいことがあるのだ」
「うん」
「おまえと、赤主のことだ。いや、おまえが奉公していた家のことだ」
「明珍だよ」
「明珍はわかっている。どうして、赤主を持ち出したのだ」

「殺されるからだよ」
「赤主を明珍は借銀の質にしたのであろうが」
「うん、だけど……」
　明珍、と聞いたとき、小萩の顔色が変っていた。
「あの……」
　と、新九郎の言葉を遮ろうとした。
　明珍の名を憚るような小萩の態度が、意外だった。
「どうした？」
　新九郎は眉をひそめた。
「あの……」そわそわしているのだ。小萩は、肩をすくめ、目で隣室をさした。「来ています」
「え！」
「お隣に」
　誰が来ているというのか。黒丸もきょとんとして、瓜を口から離した。
　小萩はくすっと笑って、
「明珍さま……」
「なんと、明珍高義どのが」
「はい、もう、ずっと」小萩は声をひそめて言った。「もう、ひと月ほども」
　これには呆れた。
　遊女屋の流連（いつづけ）ということは聞いたことがあるが、風呂屋ではじめてだ。温泉なら、別だ。山の出湯での長湯治というのはある。もっとも、蒸し風呂もある意味で湯治になるから、その意味では流連も不思議ではないが、
「――何だか妙だの」
「どうして？」
「かようなところに長逗留しては垢ぬけするかもしれんが、精も根（こん）もつき果てよう」
「まあ」
「尻の毛まで抜かれるという話があるが、睾丸まで抜きとられるやもしれん」
「ひどい」ぷいっと、小萩は顔を背向けたが、すぐ、からだをくねらして笑いながら、「殿がたは、それが本望ではございませぬかえ」
　若いくせに、年増ぶったことをいう。やはり、湯女か。可愛い目鼻だちだと、つい錯覚してしまうが、垢をかき、肌の切り売りをする湯女なのだ。
「好きな女ならな」と、新九郎は頷いて、「ところで、明珍高義が隣室にずるずるべったりとは、やはり、その、女に惚れてのことであろうな」
「知りません」
「おい、知らぬことはあるまい。そなたのなかまではないか」
「どっちが惚れたか知りません」
「しかし……」

「湯女でも、お客に惚れることはあります」小萩の声は、妙に真摯になっていた。「世間では、色をひさぐ女だと、馬鹿にしますけれど、湯女にも真実がございます」
　凝っと新九郎を見つめる目が熱っぽい。この女が、こういうことを言いだすとは思いがけなかった。
「かえって、世間さまよりは……いやな男の思いのままになる身ですから、かえって、このお方は、と見込んだ殿方には、身銭切っても尽くすことがあります」
　そうかもしれぬ。落ちるだけ落ちたら、人間かえって、真実の光をもとめるものだ。からだが売り物である以上、心で、まことを貫くのであろうか。
「なるほどな、で、隣の女というのは？」
「夕顔さん」
「夕顔か、いい名だな」新九郎は汗を拭いた。団扇をとりあげて、「いい女か」
「あら、どうかしら、美い女ならお目の前にいますのに」
「そうだな、では蟇（がま）のたぐいか」女の口を軽くさせようとして、新九郎は適当に巫山戯（ふざけ）ながら、「明珍高義がここに流連しているとなると、黒丸もゆっくり瓜を食べてはおれないな」
「食べるのなら早いよ」
　黒丸はまた新しい瓜に手をのばした。
　明珍家といえば、聞えた甲冑師の家がらである。こういう湯女の肌に溺れて流連するようではろくな甲冑も出来まい。
（おりょうの父御（ててご）が……なんということだ）
　あの借銀証文も、範満の偽作かと思ったが、そのような様子ではどうやら本物に思えてくる。範満の自信に満ちた顔が思いだされた。信じていただけに、いまいましい気持である。
「黒丸、おまえの話を聞こう、明珍の主人どのは、どういう人柄だ。女好きのだらしない奴か」
「知らない」
「おまえがずっと奉公していたところだぞ」
「うん」
　黒丸は食べるのに余念がない。
　ほんとうに知らないのだろうか。意外に黒丸は口が固いのではないか。かりそめにも拾いあげてくれた主人を悪くいう気にはならないのだろう。
「小萩、どうだ、隣の様子を見て来てくれ」
「様子って？」
「つまり、だ、その、いま何をしているか、だ」
「あら、ほほほほほ」
「流連というからには、日がな夜がな抱き合っているわけではあるまい」
「どうかしら、夕顔さんは……そりゃあ好きなんだから」

小萩は笑いながら部屋を出ていった。
その部屋も同じ広さで、同じような調度だった。二人はそのとき横になっていた。夜具を敷き延べて、寝転がって酒を飲んでいた。二人とも裸ではなかったが、しどけない恰好である。
「入ってもいい？」
小萩はそう言ったときには、入っていた。
「おいおい、邪魔をしに来たのかいの」
初老の男が、ものうい眼をあげた。五十年配である。角張った顔だが、善良さが眼にあらわれている。
「ねえ、明珍さまにお話があるんだって」
「あらたまって暑苦しいことを言うな、何の話だの」
「あら、あたしじゃない、隣のお客さん」
「おまえの客かえ」
「あい」
小萩はまた嬉しそうに、にっこりして頷いた。
おりょうを知っていることは、隠しておいたほうがいい。
新九郎は隣室へ入って行くと、明珍高義にただ名乗っただけだった。
「天下に名高い甲冑師と聞いたゆえ、参上したが、お邪魔ではなかったかな」
「邪魔ですわいな」けろりとして言うのだ。「そりゃ、邪魔にきまっているがのう、息抜きということもござるゆえな」高義は、夕顔をふりかえって、「わしのほうは、まだ我慢ができるが、こいつは、それがな、難しい」
「……」
「いらいらしてくるから、すぐわかる。河童が陸に上ると、頭の皿が干上るまでのいのちでな」
夕顔を河童にたとえているのだから、ひどい話だが、夕顔の方はにこにこして、団扇の風を送っているのだ。
この団扇は、後世にいう軍配団扇である。軍配が先にあったのではない。このかたちが、団扇としても一般的だったのである。軍配に用いられてから、材質も違うようになった。
一般に使用していたときは、うす紙を竹のひごの骨に張ったり、蒲の穂を用いたり、いろいろ工夫されていた。
「河童は、皿に水をかけてやると生き還るというが、こいつも、同じでしてな、抱いてやると、またにこにこする」
まるで夫婦のように、しっくりいっているのだ。これでは流連するのも無理はない。
「ああそうそう、かようなことを他人にお聞かせするのは、よくないことでありましたな」
「いや、おもしろい」
「かようなことは、惚気とか申して、聞くほうは、ずいぶんと馬鹿らしいこと。言うてはならんことでござった」
言ってしまってから、くどくどと弁解している。まるで、

こちらを馬鹿にしているのではないかと思われるが、そうではないらしい。職人の単純で、素朴さを持ち合わしているのだろう。
「いやいや、仲が良いというのはいいことだ。おれも、そのように惚れてくれる女がほしいところだ」
「あれえ、あたしが惚れているのに」
小萩がしなだれかかった。
黒丸の前では、少しもそういうところがなかったのに、この部屋に入ってくると、淫らな風にまきこまれてしまうのか。
「明珍どのの甲冑は、槍も通さぬ矢も通さぬ、武辺なれば誰でも欲しいと思うゆえ、さだめし、仕事は多忙であろうと思うていたが」
「その通り」
「よく、当所に流連できますな」
「ああ、弟子どもが腕がよいでな」
「しかし」と、新九郎は核心にふれた。「赤主まで手放すのは惜しい」
赤主、と聞くと、明珍の様子がふっと変った。
「どこで左様なことを」
「誰でも存じていること。府中の者なれば、みな知っていような」
「……」
「おれのような今日、府中に来たばかりの旅人が知っているのだ」
と、新九郎は言った。
急に、高義の顔色が変っていた。いままでの楽天的な表情や声音が、急に凋んで、沈んだものになった。
「恥しい」
と、肩をすぼめた。
「夕顔、手拭いを冷たい水でしぼって来てくれ」
「あい」
女が傍にいては都合が悪いのか。夕顔が手拭いを持って立つと、気を利かして、小萩も立ち上った。
二人が出てゆくのを、目で追いながら、高義は、「恥しい」と、また言った。「いい年齢をしてな」
「……」
「其処許のように牢人ではあっても、いや、これは失礼、牢人衆とお見受けしたが」
「失礼なことはない、主も家来もない。いまでは浪々の身の伊勢新九郎長氏、むしろ牢人であることに誇りを持っておるわ」
「ほう、それは羨ましい」
「牢人の身は、明日が日食えぬこともある。が、何より自由だ」
「……」

「自由とは、つまり、空想をする自由があるということさ、おれのかがやかしい明日をな」新九郎は遠くを見る眼になって、「明日を思うことは楽しい、おれがおれ自身をどのように運ぶか……妙な言いかただが、おれの明日は、今日のおれの生かし方如何にかかっている、そうであろう」
「なるほど」
「そのために、今日を生きる。その楽しさだ、牢人の楽しさは」
「羨ましい」
と、高義は、また深い息をついた。
酒を飲み女に戯れているときは、活き活きとしていたのが、酒がさめ、孤独になると、年齢の皺がにじみ出るというか、老齢を感じさせる者がある。
高義がそれだった。その表情の翳りが、初老の男の老いを深めたようであった。
「明日のある人は羨ましい、殊にお武家はなあ、わしら職人はそうはいかぬで、手先が劣え、勘が狂うともうおしまいじゃ」これは意外な告白だった。「わしは、先ごろから、手先がふるえるようになってな……」
「……」
新九郎は、思わず、高義の手を見た。顫えているようにも見えなかったが、
「酒を飲んでいるときはよい。が、さめると、駄目じゃ。それゆえ、また飲む、飲めば仕事はできぬ、その悪い繰り返しでなあ」
「――天下の明珍高義どのが？」
新九郎は信じ難いように瞠目した。
「天下の明珍高義か」うつろな笑いを洩らして、高義は、濁った眼をしばたたいた。「その名声よ、たしかに、わしの名は天下に高かった」
「……」
「なまじ高いゆえに、名声を保たねばならぬ。名に恥じぬ仕事をせねばならぬ。父祖の名をけがしてはならぬ。そう努めれば努めるほど、わしは……」
手を見た。その指先に、僅かだが顫えがあった。
「この手を治そうと思い、気をとり直そうとして、飲む酒がな、いのちとりになった。深酒は頭を痺れさせ、勘を狂わせる。わしの仕事は……」
高義の声は泣いているかのようであった。
かれが告白したのは、〝矢尻だめし〟での敗北だという。
「わしは倅を失うた……」
血を吐くような言葉だった。
「息子を？」
「倅と、赤主をな、いや、わしの誇りと名声の、すべてを失うたのじゃ……」
高義の話は、こうであった。

矢尻だめしとは、鎧の強さを試すもので、古来よく行われている。完成した鎧を、十間、二十間、三十間と離れて射るのである。
そのために、竹や丸太で柱を建て、それに鎧を着せかける。人体と同じ高さで、ちゃんと兜をかぶせ、鎧を着せる。
矢尻はその時によって違っているが、古くは大かぶらを用いたが、近世には雁股がよく使われる。
その鎧は、範満の注文で、金に糸目をつけぬ精緻華麗なものを、ということであった。高義は技巧のすべてを傾注して作りあげた鎧を、倅の次郎高元に着せた。
いかに自信がある者でも、こういうことは、めったにしない。一つ間違えば一命が失われるのだ。
高義もそのつもりはなかった。が、範満が皮肉な調子で言ったのである。
「名人の自慢するほどのものなれば、人を入れよ」
範満にしてみれば、自分が着る以上、その保証がほしかったのであろう。
それを拒めば、自ら、作品に自信のなさを物語ることになる。
高義は倅をして立たしめた。弟子に危険なことを命じるわけにはいかなかったのだ。鎧には自信があっても、射手のほうが射損うということもある。
兜を目深にかぶり、鉄面をつけていても、どこに矢は飛んでくるかもわからない。猪首に兜をかむっていて、内廂を射られて死ぬこともある。
次郎高元はしかし、父を信頼していた。またかれも制作には力を貸している。
三十間、二十間、と無事に、鎧は矢をはねかえした。が、十間に距離をちぢめたとき、見馴れぬ男が出てきた。
その男は見るからに、膂力のありそうな、六尺豊かの体軀で、腕は根瘤の如く、胸板は岩をたたんだような頑丈さで、そこに胸毛がとぐろを巻いていた。
そうした体軀が自慢なのであろう。上半身、裸になり弓矢をひっさげてあらわれたのである。
重籐の弓は見るからに、強弓であることを示し、さらに矢を見た者は、一様に、眉をひそめた。
(わたくりではないか)
わたくりというのは、トガリ矢にちょっと似ている。
鋭尖な矢の根であるが、先がとがっているだけではなく、両肩が突起しているので、一たん突き刺さると、容易に抜けない。胸や腹に突き刺さると、臓腑を繰り出すようになっている。残忍な矢だ。一名、腸繰りとも呼ばれるのはそのためである。
「大揚伝五左衛門貞宗、矢だめしを承る」
大音声で呼ばわった。
高義をはじめ明珍一族の介添えたちは、瞠目し、不安の

色を漲らせた。
「あのような男、はじめて見る顔だぞ」「御家来衆のなかには居らなんだが、一体、どこからお連れなされてか」「尋常の膂力とも思われぬ。これは、ひょっとすると……」あとの言葉は口にできなかった。
高義の胸は不安で鳴りはじめていた。
「十間でござるな」
伝五左衛門は吠えるように言い、次郎高元から正確に計られた十間のしるしのところに立った。
「チト、痛々しいが、ま、しかたはござるまい」
ろくに狙いもしなかった。
天地玄黄、満月にひき絞ったと思うと、カッと切って放した。空(くう)が鳴った。矢羽の風を切る音は、速度を物語るものである。
黒三羽のわたくり矢は唸りを生じて飛ぶや、高元の胸へ吸いこまれ、ぶすっと無気味な音がした。
どうっと、高元がうしろへ倒れたのである。
「や、やられた」明珍らは総立ちになった。
高義は見た。その凄まじいわたくり矢が、ぶっつりと、鎧の胸を貫いて刺さったのを。
倒れた高元は、二度と立ち上ることはできなかった。
手足をぶるぶる顫わせていたが、高義が駆けつけると、
「ち、父上……」鉄面のなかの目が、怯えたように弱々しく、その眼に涙が盛り上るのが見えた。
「ゆるせ、伜よ、ゆるせ」
高義はかき抱いた。
「父上、彼奴(きやつ)を……」
その言葉は誰をさしたのか、それなり次郎高元は、がっくりとなった。
「血まみれた具足、おれの肌にはつけられまいのう」
範満が冷たくせせら笑った声が高義の耳にこびりついているという。

「——なるほどな」と、新九郎は頷いた。「よくわかった。範満どのもひどいことをする。だが、この勝負、表立っては、苦情をいう筋合いではないのう」
「はい、それは重々、わかっておるほどに」
話しているうちに、たった一人の伜を非業に死なせた哀しみがこみあげてきたのであろう、高義は目を握り拳でぐいとこすった。
「それゆえ、どうにもならんのですわい」
「……」
「はっきりと、横道な仕打ちなれば、今川の御屋形にも訴えでることもできまするがな、それが出来ぬゆえ、いやいや、悪いのは、このなまくら腕ゆえ……」
「腕が落ちたのか」

「はい、口惜しゅうございますが……」
「その伝五左とか申すやつ、人並みはずれた強弓つかいであろうが」
「左様でござる。なれど、申せば愚痴で」
「……」
「たとえ、鬼神にてあれ、十間で胸を貫かれては、甲冑師たるもの、なんの顔容(かんばせ)あって、往来を歩けましょう」
高義は、そんなおのれがいかにも情けないという風であった。
「だが、ちと面妖だの」と、新九郎は首をかしげて、「おぬしの伜が、犠牲となった、おぬしの名声に、傷がついた……すべては、おぬしが損をしてことは済んだはずだ。今日まで尾を引くことはあるまい。それとも」
「……」
「赤主を質物にせねばならぬほど借銀したのは、なぜだ」
「いえ、それは逆なので」
「なんと」
「その甲冑を作るについての借銀でございます」
わからない。が、高義は嘘を吐いているようには見えぬ。
「異なことを聞くのう」
「いえ、不思議はございません、あの御注文の品を作るためにお借りしたので」
「……」
「そうやって出来た品が、矢に貫かれて死んだとなれば、あの胴巻(腹鎧)は一文にもなりませぬ」
「それはわかるが、しかし、注文によって作ったものなれば、前金を受けとったであろう、前金は手付金、いわば道具代銀だ。たとえ、出来工合が気に入らぬとても、返金などは申せぬ性質のものだ」
「ところが、今川家では違いまする。もともと、わたくしは今川家にはお世話になっておりまするゆえ、前金など頂けませぬ」
「うむ」
高義が今川の恩を受けていることは、おりょうからも聞いている。
「されば、前銀は、つまり借銀ということになりまする」
「で、あの証文を書いたのか」
「はい」
そうしてみると、問題は質物に赤主を入れたことだ。
たった一羽の軍鶏にそれだけの価値があるのであろうか。いかに、府中一の強さとはいえたかが軍鶏だ。その軍鶏が欲しいばかりに、範満が策を弄したといえないこともない。
「借銀の質(かた)には、赤主をと」
「範満が望んだのか」
「はい。実は、わたくしは、とてものことに手放せぬ、質物には別のものをと申し出たのでございますが、お聞き入

れなく」
あの調子で強いたのであろう。
「ふむ、それほど、赤主には価値があるのか」
「それは、もう……」
やっと、高義の頬が弛んだ。自分が手塩にかけ、育てあげた名品を認められることは、何よりも嬉しいらしい。
「何せ軍鶏というても、育てあげるには、やはりそれ、秘法がござるでな、誰でもが容易に軍鶏を作りあげるわけにはゆかぬ。食物から、蹴合いのコツ、恐れを知らぬ逞しい心と、鉄をも砕く脚の強さ、これらが揃わねば、天下一には……」
「そうやって、せっかく仕上げた赤主をむざむざと、奪われそうになったというのか」
「はい」
「それで、黒丸に持たせて、逃がしたということか」
「え!? そのようなことは」
「知らぬ?」
「いや、弟子どもにその由は聞きましたが、わしは知らぬ。黒丸が可愛がっていたゆえ」嘘を吐いているようではなかった。「ところで、お前さま、あ、新九郎と仰せられたな、何として左様なことを御存じで」
「範満の屋形に招かれてな」
「……」
「話は聞いた。が、いささか不審ゆえ、おぬしの家に行ったのだ、ところが不在だという。されば、後刻参るつもりで、ここで汗を流したというわけだ」
「なるほど」
「かようなところで逢うとは奇遇だ、丁度よかったな。家の方では、おぬしも、話はし難かったであろう」
「それにしても、黒丸のことなどを何として」
「隣に来ている」
新九郎は、顎をしゃくった。
丁度、そこへ女たちが戻ってきた。
「黒丸と赤主をここへ呼んでくれい」
「あい、もう瓜は食べてしまったかしら」小萩はくすりと笑って、「坊、こっちへ」
と、言いながら、入っていった。
黒丸は瓜を食い散らすと、大の字になって寝ていた。赤主がその食べかすを突ついている。
「あれえ、なんだねえ、ここは子供が寝るところじゃない、起きなよ」
小萩は耳をぐいと引っ張った。
黒丸が赤主を抱いて入ってくると、高義は喜悦をいっぱいにあらわして、
「おや、やつらに捕えられなんだかい」
と、ほたほたして、赤主を抱きとった。

「お師匠さま、おいらが連れて逃げたんだ」黒丸が低い鼻をうごめかす。「お屋形に連れてかれると、殺されると、お師匠さま言ったろ」
「そうじゃそうじゃ」
「可哀想だからね、赤主は、おらの弟みたいなもんだよ」
範満が、赤主を所望しているのは、べつに殺すつもりではあるまい。軍鶏として蹴合いをさせるためであろう。
名刀や名馬を入手するのと同じ気持で、府中一の喧嘩軍鶏がほしかったにちがいない。
範満の内心が、何を望んでいるか、推測の域を出ないが、今川の当代の地位を狙っているとすると赤主を手に入れることは、それだけ、勢力が増すにちがいない。
たかが軍鶏一羽。とは思っても、軍鶏に上下あげて昂奮しているとすると、世間の評価はそういうことになる。理屈ではない。後世の目から見て常軌を逸していても、その時代、その時点で、それが常態なら、しかたがない。
(殺される……高義もそう思っているのか?)
これは意外だった。
高義が本心、そう思っているだろうか。黒丸にそう言ったとすると、本心ではなく、赤主を隠すためではないか。
少年の黒丸は、高義の言葉を信じただけであろうが、
(高義め、案外、術をつかいおる)
と、思った。
「さて、今後のことだ」と、新九郎は坐りなおして、「如何すべきかな、範満はあの様子では、まだ執こく申してこようし……」
あの女や若衆の東雲之助に奸策を授けて、赤主を奪わせようとしたことなどを考えあわせてみると、これはどうも容易ではない。
赤主を手に入れるまで、うるさくあの手この手を使ってくるだろう。
「どうだ、高義、いっそ、思いきったらどうだ」
「思いきると申しますと」
「赤主をくれてやるわけにはいかんのか」
「いやだよ」
と、黒丸が飛びついた。
「さ、左様じゃ、とてものことに。あのような人非人に」
「理屈からいえば、約束ゆえ、手放さねばならんな」
「いやだよ、放すもんか」
黒丸は赤主を抱きしめた。
「理屈なら、といっているのだ。世の中は、理屈通りにはいかんさ。で、そこに、考えがある……」
黒丸の目が光っている。まるで、小さな弟を奪われるのを必死にかばうように、赤主を抱きしめた。
「はははは、心配するな、おれは理屈を申したまでだ」

「だって……」
「たとえ、一時渡しても……」新九郎は言いかけて、「まあいい、何とか考えてみよう」
「もとはと申せば、わしが愚かであったのが原因じゃゆえ……赤主を奪われてもしかたがないが」
と、高義はぼそぼそと愚痴をいうばかりになっている。
この男が、おりょうの父親でなければ、新九郎はそれほど親しみも感じない。おりょうとの関係が、新九郎に親しみをおぼえさせていたのだ。
同情もあった。そうでなければ甲冑師として腕のおとろえた老人に心を寄せる理由はない。
「黒丸が可哀想だ」
あれだけ赤主に愛情をそそいでいるのに、とりあげられては、哀れだ。
「黒丸、どうだ、この府中から出る気はあるか」
「うん……どこへ行くの」
「赤主を連れて出てゆくがいい、そうすれば、範満もあきらめるだろう」
「うん、赤主が殺されるくらいなら」黒丸は赤主を抱えて立ち上ると、「洗ってくるよ、水浴びが大好きなんだ」
湯屋のうしろにはねつるべがある。
大きいはねつるべだ。重しがついているから、最初は力がいるが、水を汲むと、あとは、手をゆるめると、するするとあがる。
けけけッ、赤主がふいに鳴いた。
「あ、何をするんだ」
数人の男がいつの間にか、近寄っていた。あの博奕をしていた連中ではないか。
「やい、赤主は頂くぜ」
鳴きながら、逃げだした赤主を二、三人で追いまわす。大きな籠をかぶせようとして、一人が、両手でかかげて追っている。
「ちくしょう、何をするんだよ」
黒丸は、つるべを放して、飛びだしたが、
「やい、小僧、すっこんでいろ」
横から、ぱっと足を出され、もろにつんのめった。が、立ち上ると、つかんだ砂を男の顔に叩きつける。
「わっ、ぺっぺっ、この餓鬼め、何をさらす」
「ぶち殺すぞ」
別の男がとびかかってきた。黒丸はえりがみを摑まれた。
「畜生！　放してくれェ」
黒丸は手足をばたばたさせて暴れたが、大きな男たちの前では、まるで小犬のもがきでしかない。
「捕った」
と、叫びが聞えた。赤主に籠をかぶせたのだ。
「よし、頂いた。さ、行こうぜ」

「あれ、誰か泣いている」
と、耳をかたむけたのは夕顔だった。
泣き声というより、喚きだ。助けてくれえ、と言っているようであった。
「赤ん坊ではないぞ」
「でも、子供の声のようだけど」と、小萩も縁側へ出て、
「あ、あの子じゃないかしら」
「黒丸が？」咄嗟に、赤主のことが思いだされた。「しまった！　赤主をやられたぞ」
新九郎は刀を摑むと、裸足のまま飛びだした。
裏の空地から低い土塀を越えて逃げる男の姿が見えた。
「や、待てい！」
はたして赤主が奪われたかどうか、確認したわけではない。が、直感した。あの悲鳴と、理不尽な連中と。
土塀を乗り越えようとしているのだから、どうせろくな奴ではない。おそらく、さっきの悲鳴と無関係ではない。
新九郎は駈けよりざまに、抜刀した。
「わあっ！」
白刃の光に目が眩んだように相手は塀の向うに転げ落ちた。よほど驚いたのだろう。
新九郎がなおも追跡するべく白刃を咥えて、塀に手をかけ、ひらりと飛び上ったとき、
「新九郎さま、大変、来て下さいな、黒丸さんが」
小萩が、けたたましく呼んだ。その声がなかったら、飛びおりて、そのあとを追ったろう。
向う側へ落ちた奴は、なかまに助けられて、びっこをひきひき小路を逃げてゆく。
「くそっ、もう少しで……」
しかたがない。黒丸がどうかしたらしいのだ。
新九郎は白刃をおさめて、騒ぎのほうへもどった。
はねつるべの井戸のまわりで、夕顔や小萩が騒いでいる。男衆や手すきの湯女たちも、集まってくる。
「早く、助けなければ」
「どうした？」
「黒丸さんが、ほら、井戸の中に」
井戸の中をのぞくと、下から黒丸の声がした。
「助けてくれよう、あげてくれよう」
もう泣き声ではなかったが、黒丸は、どこかを打ったらしい。
はねつるべの片端が、ぴんと上へあがっている。狡猾な連中は、赤主をさらうと、黒丸を井戸へ投げこみ、その上、はねつるべの重しを切り捨てて逃げたのだ。
「ひどいことをする」
新九郎は、縄をひきあげてやった。
泳ぐことはうまい黒丸だが、さかさまに井戸へ叩きこまれたのだから、からだ中、傷だらけになっている。溺れ死

にしなかったのがめっけものくらいだ。
「大丈夫か、黒丸」
「うん、生きてるよ」
ずぶ濡れになった黒丸は、河童のようだ。にたりと白い歯を見せた。
「赤主をとられてしまったな」
「知ってるんだ、あいつの家」
「知っていると!?」
「知っている」
肘や、耳や、肩や、あちこちにすり傷したり、青アザが出来ていたが、元気な黒丸だった。
「あん畜生、しかえしをしてやらなきゃあ」
「それより、赤主だ。盗んでいったやつは何というやつだ」
「泥亀だよ」
「どろがめ？　なんだそれは」
「名前さ、泥亀というんだ」
そんな名前があるのか。どうせ渾名であろうが。
「あ、泥亀なら、あたしも知っていますよ」と、夕顔が口をはさんだ。「このあたりの鼻つまみなんです、弱い者をおどして、女には悪戯をするし、そりゃァ嫌なやつ。この小萩さんだって、随分ひどい目に……」
小萩は顔を振った。そのことを口にされたくないふうだった。
「いいえ、あたしのことなど、どうでもいいけど」
「その泥亀の住居を知っているのか」
「誰でも知っているよ。雷裏さ」
「かみなり裏？」
一々、言うことが妙なことばかりだ。
この駿府に来てから、次から次と目まぐるしく事態が変化した。町の様子も、のみこめないうちに、急激な変化だった。
（どろがめにかみなりうらか）
けげんな顔に黒丸は白い歯を見せて、
「かみなりノ社裏に住んでいるのさ」
「かみなりノ社とはなんだ」
「雷神でございます」と、高義が注釈した。「下石町にございます雷神の社にて、九十六町の産神でしてな。この社裏一帯には」
言いさして、あとは、口を噤んだ。
「そこにいるのか」
「泥亀の女がいるよ」
「泥亀の家ではないのか」
「そのようなものさ、あいつ、あっちこっちに、女がいるんだ。その女の家をあっちこっち……その一つさ」
黒丸はませた口をきく。どうやら、泥亀が一番熱をあげているという女の家というのが、そのかみなり裏らしい。

「とにかく、そこへ行ってみよう、早いほうがいい」
「おらも行く」打ち身やすり傷に膏薬をスリこんでもらった黒丸は、「お師匠、おらが新九郎さまと一緒に行ってとりかえしてくる」
「いや、お前のような子供がいっては、どうされるか。ここは、新九郎どのに、おまかせするほうが」
「大丈夫だよ、あの臼はよく知っているからさ」
また妙なことを言う。
「臼とは何だ」
「へへっ、いいからさ、行こ」
黒丸は、もう走り出していた。元気な少年だ。新九郎もあとについた。

下石町という町名は、現在なくなっている。上石町は残り、静岡市の中心部にある。
雷神ノ社うら、というのは、そこだけが、奇妙な一帯となっていた。
今川家の侍屋敷が、すぐ近くにあるにもかかわらず、ここだけが、ごちゃごちゃと小屋が立ち並び、人一人がやっと通れるだけの小路が縦横に小屋の間を縫い、そこを牛や馬が、窮屈そうに通った。
牛小屋があるかと思えば、馬がからだをこすりあうようにして嘶いていたり、馬糞の臭いのする傍で銭打ちという博奕をやっていたり、昨夜酔っぱらって地べたに寝こんでいたやつが、陽が高くなったので、ひき起してみると死んでいたり――というふうな一角であった。
神社の〝神領〟として社地になっている以上、今川家としても、これの取り払いに鉄槌を下すことがためらわれた。
ここは、今川侍たちの間では、〝牛小屋〟と呼ばれ、〝牛飼町〟とか或いは馬借宿と呼ぶ者もあった。
当時、牛や馬は、戦さにはむろん、侍の日常生活にも欠かせぬものであり、上士たちはそれぞれに、牛や馬を屋敷の中に飼っている。
が、中以下になると、常時これらは所有していない。殿の命令をうけたり、出陣となったりして、御手当金で調達したりしなければならぬ。
そうした際や、一日借りなどにも便利なのであった。牛追いや馬の口取り、松明持ちなど、臨時雇いが、いつもごろごろしている。
いうなれば、ここは、一種のスラム街でありながら、一面に於ては、無法地帯としての自由があり、そこには上下の階級や身分の差はなかった。
もしあるとすれば、それは、かれらの（男と女を問わず）〝力〟がものを言った。乱世そのものが、正義とは力そのものであるように。

その意味では、武家社会とは別天地でありながら、やはり、力を正義とする以上、これは乱世の縮図でもあった。
この一角の自由な空気をのぞんで、いろんな人々が入りこみ、流れてきた。出て行く者もいたが、定着する者もいた。
それらの人々が、多目的なままに、ここをねぐらにしていたのだ。流浪者も多かったが、山伏や、白拍子や、歩き巫女や、鉦たたき、弦召、放下師、猿引き、陰陽師、猿楽の者など、雑多だった。
新九郎は、この混沌のなかに来て、目を瞠った。
「ここか……ここで探すのか、その泥亀を」
「すぐそこさ。だけど、ここで刀を抜いたら駄目だよ」黒丸は注意した。「ここの連中は気が荒いからね、生きて出られない……あっ!!」
黒丸が、声をあげたとき、新九郎もその男を同時にみとめていた。
「彼奴！」と、口走った。
混雑のなかに、ちらっと見えたのだ。
「――あいつだ、ほら……」
「知っている。彼奴、どうして、ここに」
およそ、その男にはふさわしくない街なのだ。
雑人街というか雑居洞というか混雑と無秩序の、この汚れた街に、その男の姿は、あまりにも、異色すぎた。
なんと、あの若衆の東雲之助なのである。
いつも濡れ濡れと、油の手入れのゆきとどいた角前髪と、白い額、朱い唇、小袖も袖無しも、袴も大小も、それから白足袋――すべて、けばけばしく華麗なのだ。嫌味なくらい、派手な装いである。
中身も、うすっぺらな美男子である上に、装いまでが、年よりもずいぶんと若作りだから、誰の目にも、あまり快いものではない。それだけに、目立つ。
「――かようなところで逢おうとは」と、新九郎は首をかしげて、「面妖だな……」
「何処に行くんだろ」と、黒丸も言った。「尾行てみようよ」
「うむ。だが、それよりも、赤主だ」
「ああ、泥亀の女の家なら、すぐさ」
雷神ノ社うら。御社の玉垣の外に溝が流れている。
それをはさんで、女の住居があった。この細民街では、ましな家だった。屋根はこけら葺きで、重石を乗せてあるところは普通の町家造りだが二階があるらしい。二階といっても、現代の感覚では天井裏というほうが近い。中二階造りである。それでも、このあたりでは、妙に立派に見える。
「ほら、あそこに、大きな榎があるだろ、あの傍の家さ、二階家の、あれが、泥亀の女の家だよ」
「なんという女だ」

「貝」
「なんだって」
「貝」
「貝か、妙な名だな」
「妙だけど、美い女だよ」
黒丸は、早熟た口を利く。
「顔かたちがいかに美くても、心が溝のように汚れていては、人間の値打がない」
「そうだね」素直にうなずいたが、「でも、綺麗なものは綺麗だから」
「こやつ、饅頭でも貰ったことがあるのか」
「干柿をいつかくれたよ」
「――ふむ、干柿で赤主を釣ろうとしたのだな。とかく綺麗な花にはトゲがある、毒がある……」
「あれ、あいつ、あそこの家へ入ってゆくよ」
「――はてな、いよいよ面妖なことになったぞ」
白皙の美男小姓東雲之助が、泥亀の家に入って行くのだ。
こういう街にいるだけでもおかしいのに、こちらが目ざす家へ入ってゆくところを見ると、偶然とはいい難い。
「こいつは面白くなってきたな」
あの範満が、そこまで手をまわしているのか。
策謀家の感じはするが、どこかおおらかなところも範満にはある。育ちの良さが、ある意味では、範満の迫力を、脆弱にしている。
「それにしても、東雲之助と泥亀とが、つながりがあるとは」
範満ほどの男が、町の顔役である泥亀ごとき者を使嗾するのであろうか。
「黒丸、様子を見よう」
新九郎は隣の家に行った。
隣家は牛小屋だった。のどかに牛が鳴いている。こういうところは、開放的だから、出入りを咎める者はない。
そこら中に牛の糞がある。下人が竹箒でかき集めている傍を抜けて、裏へまわった。そこも臭気が甚だしい。が、黒丸は平気だった。
「こっちだよ」
と裏塀によじのぼるところを探した。
それとは知る由もない東雲之助は、泥亀の家へ入ってゆくと、横柄に顎をしゃくって言った。
「亀三はいるか」
「へえ、お出でさ」
若い男が、取次いだ。
数人の男が、板の間にいた。刀を研いでいる者、酒を飲んでいる者。病人と見えたのは、傷の手当てをしていたのである。
東雲之助は、その連中を、冷ややかな眼で見て、部屋の

中へ入っていった。
　奥のその部屋だけ、畳が敷いてあった。この細民街では、畳が敷いてあるだけでも贅沢なのだ。
「おお、いるな」
　東雲之助は、赤主を見て言った。
　赤主は、脚に太い縄をつけられて、あばれている。
「なかなか言うことを聞かねえのさ」
と、五十がらみの、横ひろがりの顔をした男は、飯を食いながら言った。泥亀である。
「性の悪い女と同じでな、二、三日、腹っ減らしさせりゃ、素直になるわさ」
　じろりと、泥亀は、女を見た。
「あら、いやだねえ、あたしのことじゃないだろ」
「どうかな」
「いやだよ、お前さま」
「さあ、注がねえか」
　泥亀は促した。
　大きな丼で、飯を食っているが、かきこみかたが、まるで湯漬けでも食べているようであった。女は銚子をとりあげて、飯の上からそそいだ。これは酒であった。泥亀がざぶざぶと食っていたのは酒漬け飯である。
　東雲之助は酒漬け飯をかきこんでいる泥亀を蔑むように見やって、ゆっくりと腰をおろした。
「――よくやった」と、偉そうな顔をした。「大口を叩いていたが、まあ本心こう鮮やかにやるとは思わなんだぞ」
「ふ……」
　泥亀はそっぽをむいたまま、また飯をかきこんだ。丼の底まで舐めるようにし漸く箸を置くと、ふーっと、酒臭い息を吐いた。
「わァしのすることに、やり損いがあるもンじゃねいで」
「だが……」
「弓師の露地裏のことか、あれは、こいつが」と、泥亀は一人の男に顎をしゃくって、「へまだからだ」
　大角鍔の男は、頭をかいて、
「親方、そいつは……」
「黙ってろ、へまは、へまだ」
「へえ、そりゃァね、どうも、頭からそう言われちゃ、立つ瀬もねえ」
「立つも坐るもあるものか」と、泥亀は、視線を流して、女を見た。「お貝までいて、なんてェことだ、え」
　塀の上からのぞいている新九郎は、はじめ瞥見したとき、
「あの女ではないか」
と、呟いた。
　黒丸が逢いたいからなどと巧言かまえて露地裏にさそった女ではないか。

「黒丸、どうやらわかってきたぞ、あのときから、赤主を狙っていたのだな、あやつら」
「聞えるよ」黒丸は首をすくめた。
　塀のうち側には、ここにも夾竹桃が沢山生えていた。そのおかげで新九郎たちの顔は見えない。
　泥亀はそれとは気がつかず、
「二、三日こうやっていりゃァ軍鶏のやつは、わァしに馴れらァな」
「それまで、飯を食わせずに、おくのかえ」
「ときどき、酒をぶっかけてやんな、それだけでいい」
「軍鶏は酒好きなやつが強いそうだからねえ」
「へへへ、わァしと同じじゃ」
　泥亀は顎をなでた。
　まるっきり東雲之助を無視しているのである。
　その端麗な顔がいらいらしてきた。とうとう我慢の緒を切ったように、
「ところで泥亀……」
「わァしの名は土呂なんで」
「うむ、そりゃわかっている。ただ世間で左様に……」
「土呂亀三郎、ちゃんとした名前があるので」
「わかった、亀三、赤主を捕えてもらった礼だ」
　東雲之助は革巾着を投げだした。どさりと銀貨の音がした。
　しかし、これにも泥亀はにべなく、一瞥をくれただけだった。
「なんだか少ねえようですねえ」
　泥亀は革巾着のふくらみと、銀貨の音で、中身を察したように言った。
「す、少ない？　そんなことがあるものか、約束通りだ」
「へえ、そうでござんしょ、そうでござんしょ」泥亀はせせら笑うように言った。「約束通りでございましょうよ」
「だから、赤主を」
「約束なんてものは、変るものでね」
「なに！」
「事情が変れば、変ってくるもんでございます」
「きさま！」
「おっと、埃りが立ちまさ。お屋敷と違って、ここは、御覧の通りの粗末な小屋なので」
「赤主を貰おう」
「三倍」
「なに！」
「三倍と、申しましたよ。その銀子の三倍」
「そ、そんな……」
「高くはありませんぜ、こっちも費用がかかっている」泥亀は板の間の方を振りむいて、「辰の野郎が、死にかけているのでね」

「そんなことは」
「おれの知らんことだと仰有る。そいつあねえでしょう、だから、言ったじゃござんせんかい、事情は変ったってね」
「しかし、三倍とは、高すぎる」
ぶるぶる東雲之助はふるえていた。刀をつかんでいたが、抜くだけの勇気はなかった。
多勢の子分たちは、脇差を抜いて、爪を切ったり、足の坐りダコを削ったりしている。むろん、わざと、示威しているのだ。
「高すぎるなら、買わねえことさ」泥亀の言葉はいやに静かなだけに、むしろ無気味なのだ。「わァしも、無理に買ってくれたァいいませんぜ」
「約束を、しかし……」
「お前さまだってそうだろ、はなは、お小姓でお屋敷にあがって、そのうちに、気が変ってきた。尻の御奉公なら、それだけしていりゃいいのさ」
「無礼！」
「そうじゃがせんか、お屋敷の殿さまが赤主を買うってのならわかるがね」
「……」
「お前さまが買うってのは、キナ臭せえやな」
「そ、それは、わたしの手から殿へ」
「だからさ、そいつがキナ臭せえというのさ、この安い銀で、お前さんは十倍もの儲けをする」
「そんなことはない。ただ、家来としての奉公……」
「いい加減になせえ、どうも口先ばかりだねぇ、綺麗な言葉を並べて、腹ン中はどろどろだ。へぇ、泥亀と世間さまは呼んでいるようだが、よっぽど、わァしの方が腹ン中は綺麗だね、口と腹が同じだからね。さ、はっきりしておくんなさい。三倍出すのが嫌なら、帰って貰おう、そこでジタバタされたら、根太(ねだ)が下って、小屋が傾くのでね」
東雲之助が、何を考えていたかわからない。
ずばりと泥亀が指摘したように範満を出しぬいて赤主をおのれのものにしてしまう気だったのか。それとも、範満に高く売りつけるつもりか。
家来だし泥亀が睨んだように、枕席に侍って、出世した身だとすると、金儲けではない。にしても、範満が赤主執心というところをうまく利用する気でいたのは、たしかだった。
憤然として、東雲之助が出てゆくと、泥亀はせせら笑って、
「お浄(きよ)めだ」と、言った。「お浄めをしてやれや」
「へ、塩を撒くんで？」
「たっぷりとな」
子分たちは、塩壺から一つかみだしてきて、戸口にぱっ

ぱっと撒いた。
「――面白くなったぞ」のぞいていた新九郎は、黒丸を促して、雷神の境内に入った。「あの様子では、東雲之助はひっこまぬな」
「うん、あいつ、執こいんだ」
「今夜あたり……そうだ、いいことを思いついた。黒丸、軍鶏を一羽、手に入らぬか」
なるべく赤主に似た軍鶏がいい、というのである。
「ああ、弱いやつなら、安く買えるよ」
「夜までにな、手に入れてこい」
巾着から小粒銀を出してやると、
「あいつらに一泡吹かしてやれる」
「赤主はどうなるの」
「むろん、赤主をとりかえすのさ」
どんな考えか、新九郎はまたにやりとした。
その夜になって、新九郎は、はじめてのような顔で、この家を訪れている。
「泥亀の家はここか」
「おまえさんは……」
と、顔を出した子分が、愕(ぎょ)ッとなった。
「あ、新九郎！」
仰天して大声をあげた。その声を聞きつけて、どかどかっと、数人が出てきた。
「やあ、こいつ、ここまでつけてきやがった」「追いかえしてしまえ」「かえらないようなら、ぶち殺したれ」「そうだ、奴はたった一人だぞ」「雷神うらにきたのが運のつきだ」
口々に喚いて、刀をひねくりまわしている。
新九郎は、恐れ気もなく、連中を見まわして、
「そう騒ぐことはない」
「なんだと！」
「あわてるな。泥亀に用があってきたのだ。うぬらのような蛆(うじ)やケラ虫などに用はない」
「こいつが、う、蛆だと!?」
「泥亀にとりつげ」
悠然たる新九郎である。
その声が聞えたのであろう、
「泥亀なんてぇ人間はいねぇ」奥から、その泥亀の声がした。「土呂亀三郎ならいるがね、どなたさんですかえ」
「なるほど、泥ではなくて、土呂か、はははは、それを世間で訛ったのか」さも、はじめて聞いたように、新九郎は、驚(ぎょう)き顔で言った。「それなら、改めて、土呂亀三郎どのに御意得たい」
そう正面切って言われると、子分たちも、騒いでいられない。
大角鍔の刀をさげたあの哥兄(あにい)分の男が、「親方がお目に

かかるそうで」笑いもせずに言った。
燭台が数本ともされた部屋の中には猿がいた。猿廻しを呼びつけて、芸をさせていたのだ。
部屋の中に盃を六つ並べて酒をそそぎ、その一つには胡椒を入れてある。
「丁度いいところへ来なすった」と、泥亀はじろりと新九郎を見て言った。「猿に胡椒をね、のませたのさ」
「何をしているのだ」
「へへへ、なにね、ちょいと舐めただけで吐きだしたがね。そいで盃の順序を置きかえたのさ……え。むろん、猿にゃ見せてねえ。で、この六つの盃の中の一つが、胡椒酒、というわけだ」
「それで猿がそいつに手を出すかどうかというわけだな」
新九郎はどっかと坐った。相手が相手だから、調子を合わせながら、じろりと見まわした。
赤主の姿は見えない。
その眼つきを、ちらりと見て、泥亀は、
「多武、赤主が逃げねえように、気をつけろ」と、怒鳴った。
新九郎に聞かせたのである。
「へえ、ちゃっと、見張ってま」
裏で声がした。大きな竹籠が庭先に伏せられている。その中に赤主が入れられているらしい。多武と呼ばれた男は、莚の上に坐って、徹夜で見張るつもりらしい。
新九郎はそれだけ見ると、素知らぬ顔で、目をそらした。
「面白いな」と言った。「猿がどうやるか」
「いまな、やらせる。この猿は悧口だそうだから、胡椒入りの盃には手を出すめえ」そして、また言った。「馬鹿なやつは、手を出すさ。胡椒酒で死ぬことはねえが、この亀三郎さまにさからったら、どうなるか」
「それほどの馬鹿はいないだろう」
「どうかね……さあ、喜久次、やってみせろ」
猿廻しに顎をしゃくった。
「へえ、ホレ、菊市、のめや、酒のめや」
猿廻しは猿を小突いた。
猿の菊市はひょこひょこと、盃へ近づいた。盃は六箇並んでいるのである。ためらいもなく、その一つに手をのばした。
猿の菊市は盃に近よると、ひょいと、一つを取り上げた。するすると、酒を飲んだ。
「ほっ、知っているわ」
泥亀は、膝を打った。
一つではない。飲み干すとまた別の方へ手を出す。それも飲んだ。
（三つ目……）
菊市は、その前を素通りした。

そして、次の盃をとりあげた。
「ほう、こやつ……」泥亀は呆れたように、言った。「ちゃッと、わかっておるわ」
猿は、その次、その次と飲み干していった。よほどの酒好き猿であろう。五つの盃がたちまちからになった。
「喜久次、よく猿を仕込んだぜ」
と、泥亀は言った。
「へえへえ、飯のタネなので」
「ついでに、この旅の人も仕込んでやれや」
泥亀は素早く、子分たちに目くばせした。ざわっと、立ち上る。気早に抜刀した奴がいる。
新九郎の大きな肩は、しかし動かない。
「――泥亀」と、まっすぐに見つめて言った。「客人に、酒でも振舞ったらどうだ、かみなり裏の長者なら、それらしく、大きく振舞うものだ」
これは、たしかに泥亀の痛いところをついたようである。
「えへへ、そうかね、振舞うかね……それもいいわな。余六、その胡椒酒をくれてやれ」
余六と呼ばれたのは、あの大角鍔の刀を持った男である。
左手にひっさげたまま、盃をむずと摑んで、新九郎の前へやってきた。
あの露地裏での仇討ちが出来ると思ったのか。
「喰うかね」
ぬっと突き出した。
新九郎は黙って、受けとった。と思うと、ぱっと、左手が足を払っている。
鮮やかだった。不意をつかれ、くるぶしの下を掬われた。コツである。さほど力を入れなかったのに、大きなからだが、滑ったように、響きを立てて倒れた。
「うわっ、何をさらす」
したたか頭をうった。それでも起き上ろうとする余六の胸をぐいと、膝がしらが圧えて、
「どうだ、喰うかね」
同じことを言い、新九郎は盃を口もとにもってくると、歯をこじあけてそそいだ。
「う、ぷっ、ぺペッ」
顔をふるやつに、ざぶりとかけたからたまらない。胡椒酒は、口から鼻から、滑りこんだ。
大きな男が、殺されるような悲鳴をあげて、ばたばたしているのを尻目に新九郎は、厨子棚の前へ走り寄るや胡椒壺をとった。さっきから目をつけていたのである。
「あ、それは」
と、狼狽して立ちあがる泥亀の顔へ、ぱっと胡椒を浴びせていた。
厨子棚など、この家にはふさわしくない。なぜ泥亀がそれを据えていたのか。

御厨子など拝(あが)める人柄ではない。二階棚などと同じく、調度としてのていさいと、物をおくのに都合がよいからであろう。
　この時代、豊かでない庶民の生活は、調度にまで気を配る余裕はない。武家方に牛や馬を貸したりした代銀のかたに、強引にふんだくったのかもしれない。
　新九郎が、胡椒壺をこの黒塗り厨子棚からとると、泥亀にふりかけて、騒ぎをひき起したのは目的があったからだ。騒いで、子分たちの注目をひくためだったのである。
「こいつ、こいつ、うわったまらぬ、水じゃ、水……」
　泥亀が顔をおさえて、もがくえりがみをつかんで、
「泥亀が胡椒亀か。それッ」
　ずるずるっと曳きずって、外へ走りだす。
「親方が殺される」「畜生、外道(げどう)め、ぶった斬れ」
　どっとみんな、刀や槍や鎌や、のちの天秤棒のような朸(おうこ)などをつかんで、駆け寄ってくる。
　新九郎は戸口まできてぱっと、泥亀を突き放した。
「それ、かえしてやる」
　それで充分だったのである。新九郎は、せまい道をどんどん走って逃げた。
「追え、あいつを、畜生!」
　泥亀は目があけられず、喚いている。半分ほどが追走しようとしたとき、
「あれ、軍鶏が」
と、お貝の切り裂くような声がした。
　みんな、はっとした。見張りの多武までが、抜刀して、新九郎を追っていたのだ。
「いけねえ!」「軍鶏だ、逃すな」
　どうして籠から出たのか。咄嗟には、誰もそこまで判断する余裕がなかった。新九郎に気を奪われていた間に軍鶏が逃げだしたのだ。
「おさえろ!」「赤主が逃げたぞ、赤主が」
　軍鶏はせまい空地を逃げまわっていた。お貝が裾をみだして、追いまわしている。
「おっ、そっちだ」「くそ、やい、羽をむしってしまうぞ」
「ほれ、縁の下だ」その騒ぎを、雷神ノ社との境の溝の中で、黒丸は赤主を抱いて見守っていた。
(ばかやろ、赤主はここだよ)
　名もない軍鶏を手に入れてすり替えたのだ。籠から赤主を盗み出して、別の軍鶏を放つ。夜だし、暗いところでは、赤主の特徴もわからない。
　泥亀の子分たちが、大騒ぎしてその軍鶏をとらえ籠におしこめて、ほっと、息を吐いたころ、赤主を抱いた黒丸の姿はこの街から消えていた。

　騒ぎがおさまって、一刻ばかり後——この泥亀の家に忍

びこんだ男がいる。
　いや、忍びこんだというのはあたるまい。その影が裏口まで来たとき、中から、戸を開けた者がいる。
　影は猫の鳴き声をした。
「……」
　猫の鳴き声に応えたのはひそやかに土を踏む足音だった。
　戸が少し開き、
「しののめ様?」
　女のあたりを憚(はばか)った低い声が聞いた。
「そうだ」
　答える声も小さい。
　戸が開くと、その影は素早くすべりこんだ。
　その姿に、ぱっと、女は抱きついた。
「抱いて、ぎゅっと抱いて」
　せつなくあえいでいる。
「うむ、だが……」
　ためらいながら〃しののめ様〃は強く抱いてやり、頬ずりした。しののめ様とは、東雲之助であった。前髪の匂うような若衆と、女の影は一つになり、唇をもとめあって、音が立った。あわてて、二人は、からだを固くした。女は——お貝だった。
「聞える……」
「寝ているよ、亀三は」
　お貝は冷たく言った。
「ちょっと執こかったけど……顔をいくら洗っても、眼がしみるんだって。胡椒をぶっかけられたのだから、しかたがないよね」
「噂は聞いた。牛飼いどもが嗤っていたぞ。ところで」
「もっと、もう一度」
　お貝は、せがんで、のびあがった。ぽってりした唇が、生臭く、男をもとめている。この唇が、泥亀にどんな奉仕をしたのか。と、それを思うと、東雲之助は、端正なややうすい一文字眉をしかめた。
「急ぐ」と、顔を背向け、女体を押しやるようにして、
「赤主は」
「あれ、もう?」
「そうだ、見つかってはならない。これは秘密だぞ」
「あいナ」
「さ、早く」
　しかたがない。お貝は、東雲之助の手をひいて籠のところに近よった。
「あいつは……」
　籠の傍には、多武が居眠りしている。
「大丈夫だよ、起きやしない」
「しかし」
「大丈夫だったら、あたしが、眠らせたのだから」

「なに！　あいつと……したのか」
　さすがに、東雲之助はむさいものを見るような眼になった。
「ふふふ、しやしない」
「だが……」
「ばかねえ、そんなお貝じゃないよ。眠らせる方法はいくらでもあるじゃないか、さっ眼をさまさないうちに」
　籠の中から軍鶏をつかみだしたが、むろん、赤主と思いこんでいたのである。
　すべては暗闇が支配した。
（うまくいったな）
　新九郎が〈桔梗風呂〉から範満屋形に、
〝赤主を奪われて候〞
の知らせを出したのは、あの宵の騒動から戻って半刻のちのことだった。
　烈火の如く憤る範満の形相が想像出来た。
（嘘言をかまえているのであろう）
と、反問する様子もわかる。
が、これは桔梗風呂の男衆や湯女たちから、フリの客まで、目撃した者は多い。
「――それに、泥亀の子分どもを吐かせれば、すぐにわかることだからな」
　蒸し風呂は七つ（午後四時）終(しま)いで、湯気を抜く。あとは湯女と酒、ということになる。
　あの部屋で、新九郎は小萩を抱いた。
「お約束よ」小萩は放さなかった。
「今日は、おまえさまのために、ずっと、綺麗なからだでいたのだから」
と、口説いた。
　新九郎のような頼母しげな客はめったにいないのであろう。
　小萩は、新九郎に抱かれると、小鳥のような声をあげて、しがみついてきた。
　黒髪を乱し、肌もあらわに狂うかと思われるほど、しとどに濡れた。こういうしょうばいをしている女が、こんなに燃えるとは、新九郎は意外だった。小萩は、すぐに果てた。燃えるのも早く、汗を噴き、涙をうかべ咽喉をかすれさせて、声をあげた。
　せまい部屋だし、壁もうすいのだ。新九郎は、その声をおさえようと思い、唇をあわせると、女は叫びをあげながら、舌をもとめ、おのれの舌を、さし入れてき、音高く唾液を吸った。
　あられもない言葉を吐き、髪は千々に乱れ、まるで錯乱したのではないかと思われるほどだった。
　そうして、その歓喜がすぎると、陶酔のうちに、しかし、

用意の湯盥で、新九郎を拭いきよめる。
　それは、しょうばいに狎れての行為ではあったろうが、その始末は丁寧で、微に入り、懇切をきわめ、ほんとうに愛情を抱いた女の仕草にほかならなかった。
「ねえ、新九郎さま」なおも、ぬるい湯で洗いながら、「小萩はうれしい」
「……」
「ねえ、もう一度」
　つかんだ手が、ゆるく、快い刺戟を加えながら動いた。丁寧に洗った新九郎の肉体には輝きがある。燭の灯りのもとに、新九郎は、まるで、はじめてのおのれと対面するような気持でそこに見入った。
　女の手は、柔らかく勁(つよ)く巧みに、情感を刺戟して、新九郎のおとこを逞しくしてゆくのである。
（――男だな、おれは）いまさらのように感じるのだ。
（天下有数の大大名、今川館はそこにある。おれが男として立つかどうか……このおれのいのちは、一人の女のためにあるのではない！）
　新九郎は、小萩の手を静かにほどいた。
「またのことにしようぞ、間もなく客がくる」
　案の定、範満の配下がやってきたのは、それから間もなくのことだった。手を洗い、身なりを整えるのを、まるで待っていたように、訪れている。
　範満の怒りを身振り手真似で大仰に伝えたが、話を聞くと、しおしおと戻っていった。新九郎はこう突っぱねている。
「泥亀が盗ませたのだ。そいつははっきりしている。捜すのならそっちを捜すが早いだろうな」
　むろん、範満は嚇っとなって、呼びつけた。夜の色が残っているうちに範満の屋形に泥亀は罷(まか)り出ている。
「うぬか、おれの赤主をどこへ隠しおった」
「へえ、へえ、赤主は、お屋形さまのものとは知らなかったので」しゃあしゃあと泥亀は言った。「わァしは知らなかったのでねえ、子分どもが軍鶏をかっさらってきただけで」
「桔梗風呂からであろう」
「へえ、へえ、その軍鶏が、赤主とはねえ」
　とぼけおる、と、範満は青筋を立てた。
「持ってこい。これから、すぐにだ」
「へえ、仰せに従いたいのでござりますが、それが……」
「どうした」
「いなくなっちまったので」
「なに!?」
「逃げたので」
「こやつ！　たばかるか」範満は激昂して立ち上り、「太

刀！」
と、怒鳴った。
児小姓が、つと捧げた太刀を抜きやすいように差し出す。
「あ、ま、待って下され、そ、そりゃ甚え、わァしは、嘘を吐いていねえ、ほんとのほんとだ、逃げたんだ」
「その泥首が胴から離れたら、本音を吹くか」
「ほ、ほんとでさあ、逃げたんで、ま、全く。それが面妖なことに、へえ、籠ァちゃんとふさがっているのに、軍鶏だけが無え。地に潜ったか、川流れしたか」
「左様なとぼけぶりで、誤魔化せると思うてか、この範満を甘く見おったな」
「とんでもねえ、わァしにしてみりゃ、治部大輔さまよりも、こちらのお屋形さまのほうが大事な御方で」
「どこまで口甘うたぶらかすつもりか」
とは言ったものの、範満は悪い気がしていない。
鋭鋒が鈍くなっている。素早く看てとって、泥亀は、えへへと上眼づかいに、愛想笑いをした。怒っても甘いもんだと、多寡をくくった笑いだったかもしれない。
「盗まれたのなら、とりかえせ、うぬの子分どもに命じて、是が非でも捜してこい」

狐と狸

その少し前、東雲之助は、東へ向って馬を走らせていた。腕には軍鶏の赤主を抱えている。暁闇をついて走る馬の息が白い。
東雲之助が馬をとめたのは狐ヶ崎であった。
現在は県立公園になっている日本平、静岡市と清水市の間に横たわる二百メートルほどの丘陵で、岬をなしている。東西六キロ弱、南北四キロ強の頂上高原が〝平〟なる名称を生んだのであろう。この丘陵の北端山麓が狐ヶ崎と呼ばれていた。
ここは駿河の東の関門でもあり、今川館では、番所を置いている。
東海道をはさんで、文珠岳連峰の南裾がせり出してきているから、鳥坂、楠のあたりを扼せば、東方からの侵入は食いとめられる。
これを前衛とすれば、沓谷から、谷津山、八幡山にかけてのラインは後備えとして、二段の構えで、今川館を安泰に置くものであった。
東雲之助は狐ヶ崎へくると、番所のてまえを右へ入った。だらだら坂の樹木が蔽いかぶさった道をのぼってゆくと、小さな家居が見えてきた。萱葺きの小庵。冠木門があって、周囲は柴垣をめぐらしてある。
東雲之助は、ひらりと馬をおりた。手綱を冠木門に投げるようにからめてから、中へ入ってゆく。
「起きているか、禅尼」
あたりを憚って声をかけた。
もう空は、紫紺に明るくなっているが、東側に竹林があるので、ここはうす暗い。
「おれだ、東雲之助」
「あい、こりゃ早いことで」
庵主さまが顔を出した。
その濡れ縁に腰をおろすと、「これだ」と、軍鶏をさしだした。脚に紐がついている。
「これがあの……」
「預かっていてくれ、人目に立たぬようにな」
「はいはい、このような、いぶせきところに、誰が来ますものかな、安心して任せなされや」
庵主さまは、まだ四十過ぎと見えた。法衣を着て、頭巾をかぶっているが、暁闇の中で、色の白い顔が妙に若やいで見えた。
「頼むぞ、これは籠代、餌代だ」
なにがしかの鳥目を包んで、尼の手に渡す。
その手を尼はつと握って、
「これサ、このまま帰りやるのか」
「うむ……ぬけ出してきたのだからな、あまり長居は出来ぬ」
「いつもそのような、薄情なことをのう」
「薄情ではない、何せ、御用繁多なのだ」
「ではあろうが、この身のせつなさもたまには、考えて下されや」
尼は東雲之助の手をおのれの襟からさし入れて、意外にふっくらした胸の隆みをつかませた。
「よせ、いまは……」
「ほほほほ、この肌を忘れはせぬじゃろ、な、な」
尼の年齢には、東雲之助はふさわしくない。が、男女の仲には、年齢などは関係ないのであろう。色白の、若やいだ顔には、媚があらわれて、
「のう、東雲どの」東雲之助の手を、おのれの胸におしつけて、尼は身もだえした。「たとえ、お前さまが、この身を忘れても、わたしは忘れませぬぞ」
「……」
「のう、近ごろは、とんと可愛がってもくれぬが、もはや、

忘れたのではないかと」
「左様なことはない」あわてて東雲之助は打ち消した。「忘れるものか、さればこそ、かように」
「ほほほ、勝手なときにおじゃる。頼みごとのときだけ」
と、尼は、軍鶏を見た。
脚を縛られた軍鶏は、濡れ縁で、騒ぐこともかなわず、諦めたように、凝っとしている。東雲之助がこの軍鶏を赤主と思い込んでいるのは、暗闇のせいだった。その夜の色も、しだいにうすれてきている。
「そのような嫌味を申すものではない」
「でも、少しも、この胸のうちを汲んでは下さらぬ」尼はなおも、東雲之助の手をおのれの胸におしつけたまま、娘のように身もだえした。「この肌の下には、おんなの血が燃えているのに」
「……」
「のう、せっかく来て、このまま帰るなど、薄情な」
「うむ、おれも、いたいのだが、何せ、こっそりと脱け出してきたのだからな、御屋形をしくじるとそれこそ、府中にいられぬ」
「ほほほほ、いっそ、そうなったがよい」
「……」
「そうすれば、お前さまは、この尼が、なんとしてでも食べさせて進ぜようほどに」
「何を申す。女に食わせて貰うおれではない。おれの目標は大きいのだ。これから先がある」
「それが、憎い。偉くなるほどにこの身のことなど忘れて、ソレ、若い女のほうに気を移す。ええい尼の身が口惜しい」尼は身をふるわした。中年の女の欲情が、炎のように、燃えたつかと思われた。「お前さまを、御屋形に近づけてやったは誰じゃ、え？」
「……」
「今日の出世の糸口を作ってやったは誰じゃ、え。この身ではないか。その恩をすっかり忘れてであろ」
「――忘れはせぬ……」
「ならば、恩返し、せめて月に一度くらいは、抱いてくれてもよいではないかえ」
ますます手を強く押しつけ、そのまま、部屋にひきずりこみかねない勢いだった。
（やれやれ、執こいな）東雲之助は、舌打ちしたい気持で、
「では、少しだけ」
と、草履を脱いだ。
軍鶏の赤主は新九郎の奇略で巧みにとり返し、黒丸が郊外に隠したのである。
赤主の代りに、似通った名もない軍鶏を放ったのを、泥亀の身内も、お貝も、そして東雲之助も、それとは気がつかない。

焦りもあったし、暗さもあった。お貝が東雲之助にひそかに渡したのも、暗闇の中であり、東雲之助が抱きかかえて狐ヶ崎の尼僧の庵へ運んだのも、急いでのことだった。
こうした隠密裡の行動が、その名もない軍鶏を赤主と思いこませた結果になってしまったのである。
狐ヶ崎の僧庵。
ひっそりと山陰の樹々に囲まれた蓬庵のたたずまいは、世捨て人の、仏を守り暮す終の棲家かと見えるのだが、たしかに、そこの庵主さまは法体だし尼僧には違いないが、とても、俗欲を捨てて、仏の供養三昧にあけくれる人物ではなかった。
東雲之助の若い肉体への想いを捨てきれずに、無理強いして、清浄なるべき庵の中へひきずりこんでいる。
夜の色がうすめられたなかで、東雲之助は、尼を押し倒した。
そうしなければ、法衣の下で熟れきった女体は、おさまりようがなかったのだ。執こい女の、面倒なからみには、からだで慰めてやるしかない。
東雲之助は女体をひらいた。すでに尼僧は濡れていた。若者の手をつかんで、おのれの乳房に押しつけているうちに、燃えてきていた。
東雲之助は、それを識ると、
（このばばアめ、なんと好き者だわの）
と、思いつつ、すでに、おのれも、情意が盛り上っていたのである。
暁方のまぐわいは、深夜のそれにまさるという。宵のそれよりも強烈だという。からだの充足が要求するともいえる。
尼僧にとっては、この時ならぬ訪問者は、彼女にとっての慰めの使者でもあった。
清々しい朝の冷気が、明り障子の隙間から忍び入ってくる。
「……」
尼は、せつない喘ぎを洩らしていたが、やがて、あたり憚らぬ声を奔らせた。
東雲之助が、動きをやめると、
「あれ、なぜ、そこで止めますのじゃ」
「人に聞かれたら、何とする」
「ええい、もう、もう、かまわぬわえ……たとえ人に聞かりょうとて」
「地獄に堕ちてもか」
「ええ、地獄であろうと、この歓びには代えられませぬわ。さ、もっと可愛がっておくれな」
「うむ……だが、占いの方は、手はずをたのむぞ」
おのれに自信のある者ほど、運命を信じない。占いなど

は一笑に附す。今川新五郎範満がそうだった。かれほど、おのれを高く買っている者はあるまい。おのれの勇気、智慧、風采、年齢、そして、今川の傍系とはいえ血統の正しさ——それらをひっくるめて今川家を継承するにふさわしいと信じこんでいる。

　範満は、現今川当主治部大輔義忠の従弟にあたる。祖母は管領たる上杉の娘である。父は範頼。すでに父の代に、今川の家督争いがあった。

　次兄房五郎範忠を斥けて、今川を継ごうとした。

　もっとも、これには父の範政の溺愛と、母の嬌慢さが作用していた。なぜなら、範頼は年少でまだ千代秋丸と名乗らされているころのことだったからである。

　この争いが紛糾して、今川家がガタガタになったので、足利幕府が乗り出して、おさめた。長幼ノ序にしたがって、範忠を後継者に推したのである。

　範頼は小鹿を名乗り、死ぬまで、忿懣を持っていた。

　たとえ幼少のころのことではあっても、人間はもの心つくころ、そのように思いこまされたら、どうしても、そう思いこむ。柔らかい頭にきざまれた印象は一生遺る。

（おれは今川を継ぐべき身だったのだ）

　範頼のその怨みは、伜範満に伝わった。

「お前の父は、今川の当主になるはずだった」

　ということは、範満が、長じて今川を継ぐべきところだったという、怨みになって、伝わる。

　人間の哀しさは、こうして血のつながりの再確認をしたがるものだ。

　世の母親が息子を、一流大学にやりたい気持の中には、多分にそれがある。息子の出世もさりながら、左団扇への欲望とおのれを同化することによる安心感。怨念と憎悪くらい、その一体感をあおるものはない。

　サラリーマンの妻が、会社で疲れて帰ってくる夫に、近所の悪口を言うのも、実は言葉ほど、恨んでいるわけではないのだが、より強く自分を支持してくれることを望んでいるからにほかならない。そういうかたちでしか、〝愛〟と〝信頼〟を確認できないところには、女の弱さと哀れさがある。サラリーマン意識は近代社会の現象で、本邦では、明治以降のことだが、母の子に対する気持には、変りはない。

　ことに、範頼の母には、おのれが正室であり、向うが側室だという対抗意識が、拍車をかけたのだ。

「正室のわらわの子が、弟なればとて側室の子の下風につくとは」

　その怨みが、千代秋丸こと、範頼の人生を作りあげた。

　範満はしたがって幼少から、

（今川家を継ぐのは、本来おれなのだ）

　と、思って育った。

　その念願は、かれに言わせればそれが正義であり、そのためには、他を省りみない。目的のためには、どこまでも冷酷になれる性格を自ら作り上げたといえる。それは時に、おのれに対してさえ、酷薄だった。

　父の範頼と異なっていた点は、ただ、血が濃いうすいの問題ではなく、

「能力でも、おれが勝っている」

　と、自他ともに認めるというところまで、持ってゆこうとしたことである。これは一つの発奮の原動力となることで、その限りにおいては、悪いことではない。

　学問でも、体力でも、すべての点で、

「東海の守護」

　たるにふさわしい人物であることが、

「今川家の主」

　であるとする明確な意識と目的である。

　かれは、おのれを鍛えるに吝かではなかった。

　いかなる点でも、

（義忠に負けられぬ）

　として、励んだ。義忠よりも若い。その若さは、

（義忠亡きあとに）

　と、次代を狙う気持に拍車をかけた。

　義忠の方でも、むろん、そうした範満の気持と、その周囲のいわゆる小鹿派の様子がわかるから、

（獅子身中の虫め）と、白い眼で見ていた。（何よりも、御当代さまに、御血すじが早いに越したことはない）

　と、焦っていた。

　ところが、義忠には、なかなか子が出来なかった。母の出自の点で、義忠は範頼に劣るから、正室を吟味した。そのせいもある。もっとも、この場合には、母の血は問題ではない。なんでもいいから、早く男児が生れればいいのだ。

　ところが、思うようにならない。男児が生れたのは遅い。この時——竜王丸は、未だ八歳だった。妾腹である。

（せめて十五歳、大人にならなければ）

　と、義忠の周辺では時の経つのを早かれと祈っているし、範満の方では、

（あの餓鬼が成長せぬうちに）

　と、思っている。

　この両者の思惑が、表面は外敵への警戒や、京の騒乱での出兵や、そうした外患には、一体となって当る態勢を示しながらも、内では、お互いに、虎視たんたんとして、狙いあっている。

　冷戦なるがゆえに、かえって陰湿で、始末が悪いのだ。

　こうした冷たく、隠微な争いの中に、一人の女性が登場する。

　一人の奇怪な存在——それは、出るべくして出たといえる。

今川家内部の怨念を秘めた家督争いが生んだ怨霊といえるかもしれない。
女性である。それも奇妙な美しさを持っていた。年齢は十七歳とも言い、あるいは三十七歳とも言う。むろん本人が称したのではない。本人は、年齢や出自については一切、語らぬ。
年齢を聞かれると、
「忘れました」
と言い、出自についても知らぬと言う。
「文珠岳の頂辺で雷鳥と遊んでいました」
それが唯一の幼年時の記憶だという。
年齢が定かでないことは、その肌の美しさにある。人間でも動物でも年齢は容姿で大体察しがつくものだが、この女の〝若さ〟は何に由来するのか。
十七といえば、そうも見える。落着きから見ると、三十七ももっともらしい。大ぶりの目鼻だちが、整っている上に、肌の柔らかさ、艶めかしさ、笑うが如く怒るがごとく、その表情の豊かさが、陽の当る角度によってさまざまに変化する。
その表情の複雑さは、あるいは性格からくるものか。つかみどころのない女性であった。
見る目しだいで、
(天女)
と見えようし、
(妖婦)
とも見える。
その年齢が判じ難いように、性格もまたつかみ難い。
この女性、称するに、
「天殊(てんじゅ)」
文珠(殊)岳に忽然とあらわれた菩薩というのであろうか。文殊菩薩の化身と思わせたいのか。
心ある者は、この女性の出現に眉をひそめたが、彼女は、占いをよくした。
ただ、仏教を背景にしているだけではない。人間の迷いを解明し、運命を予言する。
世の中が乱れていると、陰陽師やこうした手合いが出てくるものだ。この女性は、ろうたけた美しさだけに、一段と信憑性が高まるのである。
「文殊八字法」
と、称する真言修法の一で、病気を治し、開運をもたらす。
この女性ははじめ、城下はずれの小屋で修法を行っていたが、評判になるにつれて、信者が増え、スポンサーもついて来て、城下の目抜きに堂々と華麗な文殊堂をかまえ、信者の詣でる者ひきもきらないという。
「あのような妖婦、信じることが出来るか」

範満はこう否定していた。
範満は広言して憚らぬ。
「占いなど信じるやつは、弱いやつだ」
おのれに自信があれば、予言を信じることもない。弱さは、予言によって、そのように運命を曳きずられる恐れがある。
範満は、自負のもとに成長してきた。だが、どうやら、その自信のほども崩れたように、
「天殊とやらを呼べ」
と、言いだしたのである。
「あのような妖婦」
と、蔑み罵っていた範満にしては、大いなる変化だ。
それを齎(もたら)したのは、範満の寵妾の小いそだった。
「あの方の占いは、まやかしではありませぬ」寝物語に、小いそは範満へ言った。「あたくし、何度も占って貰いましたもの」
「ふん」
「それも、いつも間違いなく当っているのでございます」
「……」
「たとえば、あたくしの母が十年前に歿ったこと」
「そのくらい」と、範満は舌打ちした。「誰ぞに聞いたのであろう」
「でも、明日は雨が降ると申されました、その日は青天気だったのに」
「……」
「ほんとうに雨になって」
「いつのことだ」
「四日前」
「四日前……あの日は、早朝、おれは馬を責めた」
「ええ……」
「じゃからおぼえている。西の空は晴れていたが、東の空に、雲があった」範満はそう言い、うたうように言った。
「——積土之雲形」
「え?」
「朝(あした)ニ東方ヲ視(み)ルニ積土之雲形アレバ便(すなは)チ瀉(した)ル……」
範満は笑った。
「わかるか。これくらい、おれでも知っている。雲見ノ法じゃ。百天百相すなわち、笠を要せず、とな」
小いそには、範満が何と言っているのかわからない。女は、その痴呆げに見える顔が可愛い。範満は、頬をはさんで、唇を吸った。
「こういうことじゃ、早旦に東方を見るに蒼黒の雲気有りてその形、土を積むが如きは、その日あるいは翌日風雲大いに行わるるなり、とな」
小いその眼は濡れたように、うっとりとなったが、でも、と、また言った。

「あたしのお乳の下に黒子があることまで、当てましたのえ」
「それくらい、おれでも知っている」
と、範満は、小いその乳房を掬うようにし、のぞきこんだ。
文殊菩薩の化身と称する妖艶な女陰陽師など、体質的にも範満は信用したくなかったにちがいない。
寵妾の小いそが、その占いを力説するほど、反撥したいものが、この自負に満ちた男の胸に突きあげてくる。
「だいたい、生れもわからぬ、年齢すらも判然せぬような、流れ者に、占いを頼むなど、もってのほかのことだ」と、言い張った。「おれは、その種の奴は生得、好かぬ」
吐きだすように言って、範満は、
(あいつもだ)
と、新九郎のことを思いだしながら、
「女でも男でもだ」
「……」
「人間というやつはな、阻むものがないと暴走しやすいものだ。親兄弟の縁があり、氏素姓がはっきりしていれば、悪事もできぬ」
小いそは、何か反撥したいものを感じたが黙っていた。
天殊さまを、悪しざまに言っては、罰があたるかもしれない、と思っていた。
「もう天殊などという妖婦のことは申すな」
と、範満は、そのあと、丹念に小いその肌を舐めまわし、髭でくすぐり、小いそがはしたない声をあげると、はじめて指を下に這わせるのだった。
その範満が、
「天殊を呼べ」と、言ったのは、泥亀にあれだけ強く命じたにもかかわらず、赤主が発見されないからだった。
しかたのないやつだと舌打ちするだけでは済まない。
(赤主をなんとしてでも手に入れねば……)
範満が、そこまで執着するのは趣味性のゆえではない。あくまでも、今川の当主義忠への対抗心からであった。
(何事にあれ、負けられぬ)
実力の世である。
血統が申し分ないとなると、あとは世人の評価は、実力如何による。この場合、世人とは、一般の領民ではない。由緒ある今川家を構成している一族、重臣たちだ。
何しろ、東海地方の名家、今川家は複雑な家系だが、室町将軍家、すなわち足利氏の血が入っている。したがって、関東管領とも密接なつながりがあり、その名流ゆえに、今川一族は、宿老であり、重臣である者が多い。
範満がただちにクーデターをこころみるには、邪魔が多すぎる。

とはいえ、この乱れた世の中では、如何に、
〝今川の社稷〟
を全うするかが本命だから当主にふさわしい実力があれば、宿老、重臣たちも、かれを推すに吝かではない。
そのために、あらゆる点で、義忠に勝たねばならなかった。たかが闘鶏くらい、と思うかもしれないが、雄々しい軍鶏は、すなわち、武人の象徴でもあるのだ。
(あのことを言わないでよかった……)
と、小いそが思ったのは、今川館の北川どののことだった。治部大輔義忠の寵妾である。その腹に出来たのが、竜王丸である。
つまり、小鹿新五郎範満にしてみれば、もっとも憎い敵だ。
(竜王丸さえいなければ)
義忠の後継者は、自分になる。その竜王丸を生んだ北川どのはもっとも憎い。
ところが、その北川どのも、女陰陽師「天殊」を信頼しているのである。どういう霊験があったのか、天殊の占いが的中したのであろう。すっかり信じきっている。
小いそは、そのことを口にしないでよかった、と思った。
(北川どのも)
と、知れば、意地でも範満は天殊を呼べなどとは言いださない。
(それでは赤主が見つかりっこない)
あの天殊さまが、こう眼を閉じて、祈念なされると、たちどころに、謎が解ける。病気や狐憑きを払うのでも、ときに〝笹湯浄め〟もするのだが、患者はけろりと治るのだ。
すっかり信じきっている小いそは、範満が信者になってくれたら、随分と天殊さまに供物もあげられる。それだけ自分に果報があるのに、と、思いこんでいたのである。
範満の目的のために奨めたのではなく、範満の硬骨が、天殊の霊気に打たれて凋れ、帰依することを願ってのことであった。
「──もしも」と、範満は言った。「赤主の居所が判るとなれば、似非ものでないと認めてくれよう」
「ええ、きっと、わかるでございましょう」
「わかれば、これに越したことはない」
今川家がおのれのものになるならば、狐でも狸でも利用したい心境なのだ。もし、わからなくても、もともと。小いそが失望するだけのことだ。
範満は翌日、家臣の根岸刑部をして天殊を呼ばしめた。
刑部が文殊堂に来たとき、外には板輿が止って、数人の陸尺と供侍が、うずくまっている。
「お屋形の……」と、従者が素早く見て囁いた。「北川どのが見えているようでございますな」

「む……まずいな」
刑部は馬を止めた。
町角である。夾竹桃が土塀からあふれ出している。刑部はそのかげでためらったが、
「いつ帰るか、待っていては、御用が果せぬ。まいろう」
と、馬を進めた。馬の口取りに、徒士の従者は三人。刑部は、門前で馬をおりた。従者が先に進んで、中へ入った。
「沓谷の御屋形から参じましたぞ」
従者は声高く叫んだ。
沓谷の屋形――
その一言で充分だった。
わらわらと、人が出て来た。男が三、四人。これは白い水干を着ていて、揉烏帽子を頂いている。
ついでに書いておくが、このころの烏帽子の感覚は、現代の帽子の変形ではない。山伏の兜巾にも見られるように、あるいは、近代の女性の帽子と同じように、一種の肩書きでもあり、アクセサリーでもある。帽子と違うというのは、笠とはっきり区別されていたからだ。
陽ざしや雨雪を除けるのは笠であり、烏帽子は月代した頭へかぶせる。あるいは、軽く乗せた。
烏帽子の説明をしていると長くなるが、権威の象徴である場合と、実用に供される場合がある。もともと実用からの変化なのだが、たとえば、

もみえぼしに三つの品あり、一つは梨子打烏帽子、二つには引立烏帽子、三つには折烏帽子なり。いずれも甲の下にかぶる烏帽子なり……

と、〈軍用記〉に述べてある。
軍陣の際の、つまり兜下の烏帽子は柔らかく作ってある。近代の軍隊でも、鉄兜の下にいわゆる戦闘帽をかぶったことは記憶に新しい。
やかましいことをいえば、折烏帽子の折りかたまで、身分で違う。大将分の者は兜をかぶるに際して、左へ折ることになっているので、下級の者の折烏帽子は普段でも右折れになっている。
烏帽子談義が長くなったが、いましも、沓谷の屋形から使者が見えたと聞いて、出迎えた者たちは刑部を見ると、その場に膝をついた。
「天殊菩薩に逢いたい」
刑部は肩肘張って言った。
その大きな声は、堂内に聞えたのである。
文殊堂につづいて寝殿造りの家居がある。奇妙なのは文殊菩薩を売り物にしていながら、神仏混淆の奇妙な殿居を設けていることだ。
その目的からすれば、何でも衆目を驚かせればいいのであろう。
仏閣に非ず、神殿に非ず、またそのいずれでもあった。

むろん、この、
「天殊」
という妖婦の出現は、府中内外の社寺でも非難を浴びせ、排斥につとめていた。が、何よりも日増しに信者が増えるのだからしかたはない。
由緒ある社寺が、今川氏の保護と信仰にあぐらをかいて、民衆のための神仏たりえなかったからであろう。
「邪教！」
という誹りは、常に、その権威が発する保身の喚きでしかない。
その邪教の本尊たる〝天殊菩薩〟は、そのとき、北川どのと対してにこやかに談笑していた。

「如何いたしましょうか」
恐る恐る、取次ぎの者が閾のところから、お伺いをたてた。
「待たせておくがよい」天殊さまはそう言い、にこやかな微笑みで、北川どのを見た。「あとから来たお人は、待つのがことわりでしょう」
「でも、小鹿どのの」と、北川どののほうが案じ顔になって、「御使者とあらば、粗略にもなりますまい。わたくしのほうはこれにて」
「何やら、追いかえすような」
「いいえ、お逢いしたので心が安まりました」
北川どのも微笑をかえした。まだ二十代の半ばである。当主義忠が寵愛しているだけあって、輝くばかりの美貌だ。顔だけでなく、姿も男心をそそるものがある。それでいて、もの腰は楚々として淑やかなのである。
「では、いずれ」
北川どのは裾を曳いて、出ていった。
それを送ろうともしない天殊である。静かに香を練っている。
香炉、泔坏台、札筒、香木切具、香箸、聞香炉など、香道具が、まわりにあり、天殊は優雅な手つきで香を削ったり、練ったりしているのだ。
香料を幾つか合わせ、蜜で練ったものを薫物とするのは、藤原時代から行われるようになったのだが、無骨者の刑部には、聞香などはまるきり、興味がない。
（生来、鼻が悪いのかもしれぬ）
と、刑部は思っている。待てというのをふりきって、入ってきたのだ。かれは、香を練っている天殊を見ると、嚙みつくように、声をかけた。
「天殊とは、そちか」
刑部はずかずかと通ると、大きく胡坐をかいた。
「天殊はわたくしでございます」
相手の態度が不遜だから、天殊も手を休めない。顔をあげもせぬ。

「屋形へまいれ」
「……」
「われらの殿が、占うて貰いたいものがある」
「……」
「こりゃ、聞えぬか」
刑部は、かっとなって怒鳴りつけた。
「聞えました」
「なぜ返事をせぬ」
「無作法な者には、無作法で応じるしかない」
涼やかな声なのである。そのろうたけた面には、淡い微笑すら湛えている。
「こやつ……うぬ、小癪なことを、ただの占い師が」
飛びかかって、首をねじり切りたい思いにかられた。刑部の巨きな手なら、容易にねじ切れるだろう。
が、その澄みきった落着いた態度が、乱暴をはたらかせないものがある。
「き、聞えたならば、すぐに参上せい」
「いいえ」
「な、なんと、こやつ否むか」
「伺いたくは存じまするが、今日は折悪しく、悪日にござりますれば」
「あ、悪日や凶日もあるものか、こやつ、愚弄いたすか」
「悪日と申しましても、大悪にござります」と、天殊は動じない。「陰陽道にて、一年八ヶ日、一季二日を悪日と判じられております。すなわち、春八竜、夏七鳥、秋九虎、冬六蛇……」
「なんだそれは」
「春の八竜とは、甲子、乙亥。夏の七鳥とは、庚子、丁亥など、定まっております。今日は、あいにくと、その丁亥でございますゆえ」
「竜か蛇か知らんが、そのようなことなど、どうでもよい。凶を吉に転ずるのが、うぬらの生業ではないか」
「陰陽道にては、すべて、ものごとの理に従うを以って、道の初めとしております」
「……」
「天に天理あり、地に地策あり、人に命運あり、流れに従い、おのれの開運に努むるをこそ、陰陽道を生かすことになりましょう」
理路整然といわれては、刑部はかえす言葉がない。
「たとえば、この香道に於ても、左様でございましょう」
天殊は子らを訓すように、手の香道具を見せながら、「六種練香と古来申します」
「……」
「御存知にてもありましょうが、古来、黒方、侍従・梅花・荷葉・菊花・落葉の六種を用い、これを六種のたねと称しましたるが、この調法は、三十六法、合わせの分量を如何

に致しましょうとも、三十六香が基本となること……」
「待て待て、そのような、香の話を聞きにきたのではないわい。殿の仰せにて、そちの占いを」
「さ、それゆえにこそ、申しております。今日は悪日」
涼しげな顔が、小憎らしい。
こちらは弁舌が立たぬから、尚更、腹立たしいのだ。
「ええい、まだわからぬか」
「ほほほほ、わからぬのは、お前さま。兵法にても、占いを古来大事に致しまするえ」
「……」
「六壬占いを御存知か」
「し、知らぬ！」
「兵戦の吉凶を占う方法にてありまするものを」
「……」
「年、月、日、時及び行年、方位の干支と天の十二将、十二神とを合わするに四課、三伝に五行の生剋を考究するに、勝敗自ずから分明となりまする」
「ええい、なんだかんだと、よく舌がまわりおる。舌を嚙まぬようにせい」刑部は立ち上った。「では、明日、参れ、よいな」
「参上いたしまする」
「大口叩いただけの実をあげねばどういうことになるか、首を洗って来い」
荒々しく、肩を振って刑部は立ち去った。
「失せ物は畜生だ」と、範満は言った。「いずくに在るか、占いでわかるか」
「わかりまする」天殊はにこっとして、「御安堵を」
「ほう、よほどの自信があるのう」範満は、一寸、意表をつかれて、「そのような広言吐いて、あとで取り返しがつくまいぞ」
「文殊菩薩のお告げがございますれば」
「なるほど、文殊の天殊か」
「いいえ、わたくしは、ただの女陰陽師にござります」
「まあ、どっちでもよい、とにかく、赤主を見つけ出せ」
「赤主……」一寸、考えてから、「そのものの名でございますか」
「そうだ。軍鶏だ」
「……」
「軍鶏の名だ。赤主と申す。さあ、どこに在る」
「ほほほほ、そのように、急かれても、お告げはありませぬ」
「では、どれくらい待てばよい」
「両三日」
「三日だと、遅い！」
「では、居所はわかりますまい」

天殊は立とうとした。

「こやつ、まあ、もどりさえすればよい。許す、三日、くれてやろう」

いまいましいが、いつか範満は天殊のペースにはまっていた。

「一つお願いがございます」

「鳥目か。よいとも、過分にとらせる」

「いま一つ」

「多いな、条件が。何だ」

「そのものの名を紙片にお書き下され」

「ふむ。それはたやすいが、何とする」

「祭壇にて焼きまする。神意を仰ぎ文殊の智を借りるには、鹿茸(ろくじょう)を以って六塵を除き、しかして、失せ物の在り方をもとめまする」

「六塵とは何じゃ」

「心性を汚す六種のもの、色、声、香、味、触、法の六賊にございます」

「なるほど、人間的なるもの、俗を除くの意か」

範満の教養は、これくらいは理解する。

「仰せの通りでございます。神鹿の角を焼くに、その失せ物の名を認めたものを投ずれば、即ち灰となりて、文珠岳上空に舞い、神示を受けるのでございます」

「ははあ、なるほどな」

信じ難いが、この天殊の話を聞いていると、いかにも、ありそうなことに聞えてくるからふしぎだった。

「なんでもいい、とにかく、見つけてくれ」範満は東雲之助に顎をしゃくった。「赤主と書いてやれ」

「お手ずから」と、天殊は言った。「おもとめになる御方の手に非ずば」

「効かぬか」

と、言いながら、面白そうに、範満は筆を握った。

文殊八字法というのがある。

文殊菩薩を本尊とし、天変・日月蝕、疾病等の難を避くるために修するものである。

八字法というのは、文殊の真言に一字、五字、八字の別あるより、この名が生じている。

これらは、いわゆる〃密教〃から来たもので、その道では大変な効験を齎すものとされている。妖婦天殊が、その文殊堂に於て、この秘法を修したことは、誰も知らない。

これは人目を避けて行われるもので、もしも窺う不埒者あれば、たちどころに、効験は消えるという。

天殊が数刻を籠っての秘法は、堂外で待機した刑部に知らされた。

「わかりました」

やや疲れの見える顔に微笑を浮べて、天殊は、一葉の紙片をさしだした。

「どこだ」

「わかりませぬ」

「なに！」

「お教えの由はこの紙に認(したた)めてあります」

「そなたが書いたのではないか」

「いいえ」と、澄ました顔で、「わたくしではない」

「ふん、では、筆がひとりでに動いたというのか」

「いいえ、はい」

「なんだ、どっちだ」刑部は髭をふるわせて、「いい加減なことばかり申すと、その分には捨ておかぬぞ」

「筆を持っていたのは、この手でございます」

「それ見ろ」

「したが、わたくしの手は、文殊菩薩の御教えどおりに動いたまでのこと」

「…………」

「何を書いたやら、何と書いたやら、一向に存じませぬ」

そんなにいわれると、そのお筆先に、いかにも文殊菩薩が乗り移ったかのようで、有難く感じられてくる。

刑部は、その短冊形に折りたたんだ書状を持って、馬に飛び乗った。

沓谷の屋形に戻ってくると、ただちに範満が披見する。

「なんじゃと、久能寺に！」

範満は一驚した。

そこに、ただ一行。

——久能寺帆柱岩。

とあるだけだった。

(まさか)

と、思ったが、お告げとあれば行ってみるにしくはない。

「刑部、即刻、久能寺へゆけ」

「は」

「久能寺の帆柱岩、とある。探してこい」

久能寺は、現在の日本平、有渡山南部の孤立せる小丘、久能山にある。南は駿河湾に望み、眺望広闊な山である。

この時代、まだ東照宮も久能城もない。補陀落山久能寺が界隈の信仰をあつめていた。

刑部は足軽や小者らを率いて、馬を飛ばした。

久能寺は其の後度々兵燹(へいせん)に逢ったり改築されたりして、帆柱岩というのは、どうなったか、現在は伝わっていないが、当時は、もっとも見晴しのいいところに立っていたらしい。

刑部は、馬を石段下にとめると一人で昇っていった。

(お一人で)

と、天殊が念を押したのである。

なぜ一人でなければならぬ、と反問すると、

「文殊の真言は他言ならぬのでございます」

神も仏も、一般人には、その内奥が少しもわからないか

ら、ただ悪いといわれたことは、悪いとしなければならぬ。
刑部が一人でのぼってゆくと、帆柱岩はすぐに目についた。
「はて、帆柱岩とだけでは……」
夕暮れの境内に、何やらうごめいている。
刑部は、あっと思った。軍鶏にちがいない。つかつかと近寄った。
軍鶏は片脚に紐がつけられていて、傍の立木に縛られていたのである。
「いたいた」
刑部は単純に喜んだ。軍鶏を抱きあげた。とたんに、おやっと、太い眉をしかめた。
「これは……」
見おぼえのある赤主とは違うようであった。
なおもよく見ようとしたとき、突然、背後に、風をきる礫のような音がした。
瞬間、ぐさっと、するどい刃物が、刑部の背に突き刺さっていた。
「あっ！」
刑部の両手は、軍鶏を抱えていたのである。
思わず、両手に力がこもった。
刃物は、狙いあやまたず、心ノ臓を背後から貫いていた。
刑部は、ううう、と呻きをもらし、軍鶏を持ったまま、海老なりに、からだをまげて、がっくりと膝をついた。
夕暮れの久能寺境内は、ほかに人影も見あたらない。暫く、静寂が来た。刑部の動きが、全くやんでから、林の中から、一人の男が出てきた。
これは、頭巾をかぶっている。袋のような頭巾をかぶった男だった。
傍へ寄ってくると、刑部の背に足をかけて、ぐいと刀をひき抜いた。血糊を丁寧に拭い、腰におさめてから、軍鶏を、死体の手からもぎとった。
これは、たしかに、赤主ではない。東雲之助がお貝から受けとり、尼僧に渡した、名もない軍鶏だったのである。
頭巾の侍は、そのまま、本堂のうしろへ歩き去った。
いつまで経っても、刑部が戻ってこないので、足軽らが、禁をおかしてあがってきたのは、尚、暫く経ってからである。
この有様に仰天した。
刑部の手には、しかし、軍鶏の毛があきらかにむしりとられていたのである。
「お一人で、と申し上げましたのに」刑部の不慮の死を聞くと、天殊は美しい眉をひそめて、いたましそうに言った。
「お気の毒なことをいたしました。お一人にて参られたならば、左様なこともございませなんだであろうに」
「石段を上られたのは、お一人でございましたが」

「一人というのは一人です」冷たく言い放って、「それにしても、探しものは」
「赤主でございますか、いました。ちゃんと、軍鶏の羽がむしりとられて」
「おお、それならば」天殊はにこりとして、「文殊菩薩のお告げは当っていたのでございますね」
それなら、あとのことは責任がない。
「——馬鹿者どもが」事情を聞いて、範満は烈火の如く怒った。「そのまま、連れてきたのか。大たわけが、なぜ、すぐさま境内を捜さぬ」
「はあ、それより刑部どのが、ひょっとすると」
「生き還ると思うてか、大たわけが、第一おめおめと背中から刺されて、抜き合わせもせざったのか」
そやつが（赤主を盗んだ！）と、思った。
みんなが騒いで、刑部の死体をおろすのに手間どっているうちに悠々と去ったのであろう。
（くそ！　なんとして、そのような奴が先まわりしていたのか）
どうして、あの境内に、赤主がつながれていたのか、その辺のことはかいもくわからない。
ただ、〝お告げ〟と、天殊は言うだけである。
「くそ！　それならば、いま赤主が誰の手にわたったか、調べよ」
が、これに対して天殊の返事はにべもないものだった。
「同じものを二度と捜せませぬ」
「ど、どうしてじゃ」
「どうしてでも。それが、御神示の不可思議なるところ」
こうはっきりと断わられては、もはや、かえらぬことながら、刑部の軽率が、うらめしい。
範満は地団駄踏んで、あきらめるよりしかたはなかった。
刑部の死で、大騒ぎしているころ、あの狐ヶ崎の尼庵では、東雲之助が、頭巾を脱いでいた。
「——済んだ」と、言って、「赤主と間違ったのは、おれの失策だ。お貝のやつ、わざとしたとも思えぬが、だが、ひやひやものだった」
「では赤主とやらは」
「わからん、おかしい。泥亀が盗んで、たしかにあの家にあったはずだが。にせものと知るのが早かったら、もっと手のうちようがあったが……ま、どうやら、天殊の文殊八字法も、疑われずに済むだろう。それにしても、赤主はどこにいるのか」
たくらみを糊塗するために刑部を殺したことなど、蚊を打ったほどにも感じていない東雲之助であった。
十六夜月が、やけに明るい川であった。
現在の静岡市の西郊を流れている安倍川、その支流の藁

科川との合流点から、少し上ったところに小島がある。
〝小枯ノ森〟と呼ばれている。
新九郎は、川を泳いでゆく。
着衣はひとまとめにして、草の中に隠してきた。背中に刀を背負っているだけで下帯姿である。
日でりには、川水は少なくなり、渡渉できることもあるが、ちょっと雨が降ると、川水はふくれあがる。
新九郎は泳ぎきると、小島にあがった。
(寿々女は無事でいるかな)
弥三郎春忠は、今川家の冷戦を鎮めるために、寿々女を人質にとり、義忠、範満そして、範慶の残党たちの分裂をおさめる、という。
名分は通っているが、
(うさんくさいな……)
と、新九郎は思っていた。
どうやら、これは、第三勢力と見ていいのではないか。
いや、第四勢力ということになるか。
三者の紛争を鎮めることで自分が浮び上ろうとする。
今川家ほど、大国の主になると同じ戦国大名でも内紛が、簡単なものではない。争いを幸いとして、間隙をつき漁夫の利をさらおうとする者が出てくるのだ。
(どっちへ転んでも、おれの知ったことではないが……)
と、新九郎は考えている。(寿々女だけが可哀想だ)
何も知らぬ少女が、政治で、あっちへやられたり、こっちへ囚われたり、まるで人形のように扱われているのだ。
〝今川家の社稷の安泰〟
という大義名分が、寿々女の人格を無視している。現太守義忠の血につながる者として、利用されているにすぎないのだ。
(どっちへ転んでも、寿々女を渦中には置いておけない)
新九郎は、駿府の情勢をさぐりにいったのだが、ともかく、寿々女を救け出してから、と思った。
その上で、やりようがある。いたいけな少女の身を考えると、自由な行動が出来ない。
(寿々女には丁度いい遊び相手が生れているのだから)
新九郎は小枯ノ森へひそかにあがると、あたりに注意しながら、あの小さな社へ進んだ。
この川中の小島は、たかだか百メートル四方くらいのものだが川上の方は断崖になっていて、昇り降りが難しい。はげしい川の流れで洗われ浸蝕されているのであろう。
反対側、下流の方は、なだらかで、容易に上れるのだ。高いところで二十メートルほどのものだ。びっしりと木々が生い茂っている。
その中ほどの窪地の小社では、あの老婆が、梟の目で見張っているはずだった。
(さて、どうして、潜りこむか)

新九郎は凝っと木立のかげから様子を窺った。
(斬り込むか)
必ずしも無謀ではないが、かれらを敵にまわすのは、いまの時点では得策ではない。
今川家へ乗り込むにしても、冷戦の家中というのは、情勢しだいで手を握る。日ごろは主権争いに狂奔していても、イザ外敵となると一時的にも確執を水に流して、手を握る。血は水よりも濃し、というが、常に外敵を意識せざるを得ない時代では、こういうことは不思議なほどだった。
水銀の玉は、手でつぶせばわかれるが、転がり寄ると、ぴったりと融合し、一丸となる。
かれらにとっては常に、
〝今川家あっての……〟
の意識が強いにちがいない。
したがって、新九郎は、あくまでも、
〝野心のない男〟
でなければならず、
〝害の少ない風来坊〟
という立場を装っていなければならないのだ。
一つの組にとって、はっきりと敵対の意志を表明するには、時機が早い。
新九郎の姿を見せずにことを処することが、この際重要だった。
(一石二鳥、ということもある)
これまで考えもしなかったことだが、
(やつらを掛け合わせるか?)
軍鶏のように。
〝赤主〟さわぎがヒントになったのかもしれない。
闘鶏ばかりではない、闘牛にせよ、そういう闘いは、当事者たちは、悲壮なまでの誇りと、闘争心で命を賭すのだが、かけあわせるほうの人間様は傷つかない。
勝っても負けても、軍鶏は傷つき、血を流す。あるいは、死ぬ。が、人間様は、銭を賭けたり、ほかの物を賭けて、楽しんでいる。
損をする場合も、スリルの楽しみにちがいない。おのれが傷つかないスリルというものを楽しむのは、人間様だけである。
(おれも一丁、その人間様の方に立つか)
姿を見せずに、寿々女を救い出したなら、かれらは何と考えるか。
反対派の行為と見よう。冷戦はますます熾烈になる。争いのあるところ、常に、第三者は、甘い汁を吸う機会にめぐまれる。
新九郎は、小社の中の老女の動きを凝っと見守っていたが、
(何といって呼ぶか)

あの見張りをおびき出すことで中に入りこめる。
そう思ったとき、社の中に、ぽっと灯が点った。人影が動いている。誰か床板をあげて出てきたのだ。
（はて、あれは……）
新九郎は、目を凝らした。
月明りとはいえ、樹々が深く、月の光は、梢洩れて、斑を描いているだけだ。森の中の社にちろちろ動く灯かげは、森閑と静まったなかだけに、いっそう無気味に感じられるのだ。
床板をあげて出て来た影は、男だった。
「さ、出てござれ」
そんな声まで聞えた。
新九郎はその人影を見て、
（あいつ、三介ではないか）
田賀谷三介――義忠の弟にあたる弥三郎春忠の郎党である。
次に出て来たのが同輩の片淵平内かと思ったが、これは、影が小さい。
（寿々女だ）
新九郎は、思わず、樹の陰から乗りだした。
（寿々女をどこへ連れてゆこうというのか）
田賀谷三介は、寿々女を促して社から出てきた。提灯がないが、月明りがあるからであろう。
二人は外へ出ると、ぶらぶらと歩き出した。ものを言わないのは、この散策が、日課になっているからかもしれない。
（しめたぞ）
新九郎は、樹陰で北叟笑んだ。
（あいつ一人なら）
こちらの姿を見られることなく始末できる。
二人は、黙々と歩いてゆく。
新九郎が、ふいにあらわれたときの三介の驚きといったらなかった。どうせ斬るのなら、うしろから斬っても同じだが、闇討ちは、気持にそぐわない。
「あっ！」
仰天した三介の顔に、にやりと笑いをかぶせて、
「寿々女をな、とりかえしに来た」
三介は、次の言葉を咽喉までせりあげただけである。背負った刀を抜きざまに、袈裟がけの一刀が、ずばりと、あざやかに斬り下げていた。
唐突だったことが、三介の言葉を奪ったといっていい。叫びもなく、刀を抜きあわすこともなかった。刀の柄に手をかけただけだった。その一刀が致命傷である。棒を倒すようにぶっ倒れた。三介の血しぶきから面をそむけた新九郎は、
「さあ、行こうぞ」
と、寿々女を促した。

あまりの驚きと喜びで、寿々女も、声を失っていたのである。
それが幸いだった。ここで漸く驚きからさめて、叫ばれたら、計画も、ぶち毀しになるところだった。
「新九郎さま！」
と、言いかけたのを、
「叱ッ」と、口をふさいで、「声を出してはいけない。あの連中に聞きつけられると、またひどい目にあうからな」
断末魔のもがきをつづけている三介の懐紙で血を拭うと、それを口の中に押しこんだ。呻きを洩らさせないためだった。
新九郎ということが知られさえしなければ、遠目の人影くらい見られてもかまわない。
寿々女を促して新九郎は牧ヶ谷寄りの岸へおりると、案ノ定、小舟がもやってある。
「さあ、寿々女、このいやな島から、さようならだ」
「あたし、こわかった」
「もう大丈夫だぞ、泣かなかったか」
「ええ……きっと、新九郎さまが救けに来て下さると思ったもの」
そこまで信頼していてくれたのか。新九郎はぐっと胸が詰った。
「安心していいぞ。もう二度とあんな目にはあわせぬ」
ぐいと、竿の一さしで、小舟は岸を離れた。
流れはゆるやかである。藁科川はすぐに安倍川の広い流れに併される。
その交ったあたり、小高い、やはり小島がある。両川の合流点だけに以前は堆積層のデルタ地帯の突端だったのかもしれない。それが洪水などで切り離され小島になって残ったものであろう。小枯ノ森よりは、やや大きい。一寸見たところ、倍ほどある。
楕円形の小島で、びっしりと樹木に蔽われているが、これは、
〃舟山〃
と、このあたりで呼ばれているものだった。
そう言われてみれば、なるほど横から見ると、舟のように見えないこともない。小舟ではなく舷側の高い大船であろう。
藁科川の小枯ノ森と、安倍川の舟山とは、したがって、近距離のせいもあるが、二つの川とともに、いつも対比されている。両者の距離、二キロたらず。それは、そのまま藁科川の下流の距離を意味している。
新九郎は、小舟を、この舟山の下につけたのである。月明りのもとに漕いできたのだが背後から尾行してくる舟もない。
新九郎は用心ぶかく、駿府側へゆくように、舟山の東側

をまわって、やはり下流へつけた。
「さあ、ここだ」
「やっぱり島なの」
「そうだ、あそこに近すぎると思うだろうが、そこが方略だ。灯台下暗しといってな、かえって、見つからない」
　新九郎は皓い歯を見せた。
　こちらのほうが標高も上だ。先日も見たが、小枯ノ森の倍はないにしても、高い。新九郎は舟を引きあげると、流木や、木の枝でかぶせた。
「こうしておけば、見つからない」
「探しにくるかしら」
「心配するな、寿々女、そなたのともだちもいる」
「ともだち？」
　誰だろう？　寿々女は可愛く首をかしげた。
　森の中の急な坂道をあがってゆくと、少年の声がした。
「おじさんかい」
「おれだ、黒丸」新九郎は快活な返事で、「ともだちを連れてきてやったぞ」
「だれ？　おいらのともだちは赤主だけだよ」
　黒丸だった。その腕に赤主を抱いている。
「だれ、その子」
「寿々女というのだ」新九郎はひきあわして、「仲良くやれ」
「――ふうん、女だろ」
「見ればわかる。女なら、いやなのか」
「女の子って、すぐ泣くからね、いやだよ」
「あたし、泣かない」
　寿々女は言い張った。
　そう言いながら、新九郎の腕をしっかりつかんでいるのだ。
「黒丸、そんな意地の悪いことをいうものではない。この子は、可哀想な身の上なのだからな、仲良くしてやるんだ」
「ふうん、そんならいいや、仲良くしてやる」
「おまえの方が兄貴だからな」
「なんだ、おいらと同じか、少し上だと思ったんだ」
　それで牽制していたのだ。
「だったらいいよ。おいで」と、黒丸は寿々女の手をつかんで、「おいらの家に連れていってやる」
と走りだした。
　もう寿々女も機嫌をなおして、
「おうちがあるの？　こんなとこに」
「あるさ、いい家だぞう、大きいんだぞう」
　その大きな家というのが、なんと、掘立小屋だった。
　森が深いから、太い樹々の下枝を屋根に、梢に小枝をからませて拾ってきた蓆や板を乗せてある。流木や破船の舟

板などが壁になっているし、雨もふせげるだろう。
「いいだろ、ね、いいだろ」黒丸は、自分でほめちぎっている。「三人はゆっくりさあ、赤主もいるから、三人半だ」
「おい、おれもここに寝るのか」
「大丈夫だよ、風が吹いたって、飛びやしない」
「いや、それは大丈夫だろうが」
　三人で、この島で、のんびりと暮したら、楽しいにちがいないが、新九郎はそれどころではない。
　この駿河の府中へ乗り込んできたのは、理想があってのことだ。すでに年齢も若くはない。一日一日が貴重だった。
　今川家の内紛にどう処してゆくか。おのれの考え一つ、行動の如何によって、新しい道がひらけてゆく。
　乱世の劫火を、この伊勢新九郎という一介の牢人の力で、如何に消しとめ得るか、そこに賭けることの生き甲斐が、新九郎をして、もとめて紛争の中に飛びこませているのだった。
「おれは、また戻らねばならぬ」と、新九郎は言った。「黒丸、寿々女をしっかり守っているのだ。それと赤主をな」
「しまった！」
　もとのところへ、一人で戻った新九郎は、思わず、声をあげた。
　川岸の草むらの中に、着衣がなかった。いや、全部なくなっているではないか。
　川を泳ぎ渡って、小枯ノ森へゆくために、下帯と奈良半晒の腹巻という素ッ裸同然の姿になっていたのだ。打ち刀だけは、下緒で背負っていたが、巾着まで、そっくり、草むらに置いてきた。
　どうせ夜だし、一刻かからない。そのつもりで、無造作に突っこんできたのだ。
（たしか、このあたりだった……おぼえ違いではないが）
　岸の草むらのなかに、灌木が生えていた。それを目印にしていたのだ。間違うはずはない。
（誰が盗んだのか）
　川水があふれて流してしまったはずもない。となると、どう見ても人為的なものだ。拾った――いや盗んだやつはとんだ月夜の大儲けと、喜んでいるだろう。
（野伏りでも偶然目にとめたのだろうか）
　とすれば、これは戻りっこない。
「さあ、弱ったぞ……」
　と、呟いたが、月明りに新九郎の表情は、そう弱ったようにも見えない。
　下帯に刀一本。裸虫の新九郎はあたりを探しても、何一つ残っていないのを見ると、あっさりとあきらめて、舟へもどった。どちらにしても府中へ行かなければならない。

小鹿範満の人物はさぐり得たが今度は寿々女の身をどうするかだ。
　それに、おりょうは一体どこにいるのか。あのようなことで湯女のところで知りあっただけに、明珍高義にも、おりょうのことは話していない。
　高義の話の中にも、おりょうのことは出て来なかった。とすると、おりょうはこの府中には戻っていないわけだ。たしか戻っていると思っていたのだが、どうなったのか。新九郎は、府中へ入ると、まず着物の調達のことを考えた。
　あの雷神うらの細民街にゆけば古着も売っているにちがいない。が、古着でも、少額なりとも、銭がいる。とすると、一文無しでは話にならぬ。
　打ち刀はかなりの業物だから、これを売りさえすれば、着物くらいは、買えるが、刀は武辺のいのちの次に大切なものだ。
　この今川氏の府中では、あくまでも新九郎はヨソモノだから、刀がなくては、いついのちに関わるかもしれない。
「まあ、なんとかなるかもしれんわさ」
　あてもなく、ぶらぶらと歩き出している。

こぼれ萩

　その夜を過したのは賤機山の浅間神社の境内だった。
　この駿河の府中と浅間神社の因縁はかなり古い。
　もともと、山麓、宮ヶ崎の社地は、平安時代にその基礎を確立しているといわれる。
　当初、賤機山下には神部神社が鎮座し、官社に列せられていたが、駿河の国府の近くであったから平安朝末期、国司が駿河の惣社を結成しようとするや、第一に着目されたらしい。
　また大歳御祖神社も遷されて、神部ノ社と同域に奉祀されていたと思われる。
　当時、どこの国でも惣社の結成がさかんで、この〝惣社〟という名そのものが、岡山県では市制が敷かれるほど、固有のものとなっているが、小社を集めることで、神社勢力の結集により、威厳を増そうとしたのは、仏教への対抗の意味もあったようだ。

国司による勢力の扶植などにも利用されたらしい。
　ともあれ、駿河の国司は、この両社だけでは弱いと見て、富士郡の浅間神社を勧請した。もともと、富士山信仰とつながった浅間神社は、駿河の名神として天下に聞えていた。
　この浅間社はよくいわれることだが、古くはアサマと読んだらしい。アサマの語源には諸説あるが、朝舞う――富士山の早朝の、旭光を受けた神々しい姿からの霊的信仰に由来するのではないかとされている。
　美しく彩られた雲気が富士山頂に映ずる姿に、天女来仰を描いたとしても不思議ではない。
　〝富士山記〟には、こうある。――日午ヨリ加フ、天甚ダ美晴、仰イデ山峯ヲ観ルニ、白衣ノ美女二人有リテ、山巓上ニ双舞ス、巓ヲ去ル一尺余、土人共ニ見ル。
　信仰に加えて、荘厳な霊峰は屢々こういう霊験をもたらすものだ。
　これは貞観十七年のこととされているが、こうしたこともあって浅間神社の神は女神とされている。
　もっともこの女神を木花咲耶姫にあてたのは後世のことである。
　ともあれ、この浅間神社は、霊峰富士をふり仰ぐ駿河の国らしい由緒のあるものだ。
　貞観元年には、すでに正三位の神位を与えられているから、駿河一ノ宮としての尊崇を受けるに不足はない（延喜七年の諸社根元記によると従二位）。
　ところで、この浅間神社の境内に入った新九郎は、楼門の下で一夜を過したのだ。
　昼間は残暑があるが、夜はすでに秋である。夜が更けると冷えてくる。さすがに、雄偉の体格でも、ぐっすりとは眠れない。
「これこれ、起きなされ」
　何かで小突かれた。白い水干を着た男が立っていた。まだ夜明けまでは、少し時間がある。
「何だおぬし……」
　眠い眼をあけた。
「これは図々しい」その男は、呆れたように言った。「なんじゃ、その恰好は」
　どうやら、この浅間神社の社人らしいと、わかったが、その威たけ高な調子に、新九郎もむっとなった。
「なんじゃとは、なんじゃ。恰好もくそもない。暑いゆえ、裸で居る。悪いか」
「悪い」と、遠慮なく、社人は浴びせた。「悪いとも、大いに悪い。当社をなんと心得ている」
「富士新宮、浅間神社であろ」
「そこまで存じておって、けがらわしい裸とは、何じゃ、従二位の当社は、御神体は女体におわします、けがらわしい男の裸身は、もってのほかのこと、出て失せい」

「ふうん、女体か、御神体が女体ゆえ、おれの男の肌がけがらわしいというのか」
「出て失せい」
「呆れたな。おぬし、社人にてあれ人間であろ」
「……」
「男に女、女に男だ。女体にはおれのような男がよいのだ」
「むさい浮浪人が、何をつべこべと申すことじゃ」
「まだつべこべとは申しておらんのう」
　相手しだいでは新九郎も人悪くからみたくなる。
「第一、女体というのがおかしいではないか。おれが耳にしているのは、寡聞ではあるが、当社御神体と申すも、本地を金剛毗盧舎那仏(こんごうびるしゃなぶつ)とするとか。されば男体ではないか。金剛大日如来の梵名だとな。されば富士山頂に何とやら上人が大日寺を構えたのが、その證左でもある。
　大体、ここは神社なのか仏寺なのか、はっきりせぬではないか。垂迹(すいじゃく)浅間大菩薩とのたまうし、仏と神との混淆は、ややこしゅうてわけがわからん。どうやら、仏が主で、神がこれに従うているように、おれたちには思えるのだが、そういう、わけのわからん本体をもって、おれをけがらわしいとか裸を無礼などと、どこをおせば出る音(ね)だ」
　立板に水というが、こう一気にまくしたてられて、社人は、青くなったり赤くなったりした。
　たかが裸虫の浮浪人と思ったのが、どうやら、大変な目ちがいをおかしたらしい。
「さ、左様なことを申したとて、われらには、とてもに……」
「何にも知らんのか。宮司に申しておかねばならんな。こういう半ちくな社人がいるから、御神体にも垢がつく」
「……」
「考えてもみよ、仏が第一とあらばそれでもよい。大菩薩とあればなおさらだ。仏は慈悲を第一とするぞ」
「……」
「裸虫のおれがここに寝ていることは、つまりは大菩薩の腕(かいな)に抱かれているのと同じだ、そうではないか。出て失せろとは何たる申しようだ」
　社人はもう真っ蒼になって、声も出ないのだった。
　左様なしだいなれば、どうぞ御随意に、と、言いまくられた社人はほうほうのていでひっこんでいったが、暁のうちから大論陣を開陳したあと、眠れるものではない。
　新九郎は、うつらうつらするうちに夜が明けてしまった。御手洗へいって、顔を洗った。冷たい清水が落ちてくる。裏の賤機山から湧き出る山清水だ。
　顔を洗うと無精髭が気になってくる。髭は濃い方だから、一日でも剃らないと、われながらムサくなってくる。
「髭よりも、まず、着るものだ」

　人出が多くなると、まさか裸では歩けない。
　思案していると、御屋形の方から、美々しい行列がやってきた。
　多勢の従者を従えて、女輿がやってくるのだ。侍女や、供侍や、大きなむく犬までいる。供侍たちは抜き身の薙刀や槍を持っているし、小具足を着こんでいる。
　この時代、応仁ノ乱以来、世の中が乱れてから、小具足くらいはすでに日常着化している。いつ、どこで敵に襲われるかしれない。そんなとき、武装していなかったから、といっても、言い訳にならない。
　いかに生き残るかが、この乱世の命題なのだ。
　男女ともあわせて、三十人ばかりのその一行は、浅間神社の前までくると、ぴたりと止った。
　女輿がおろされる。
　供の者たちは、あるいは片膝ついたりうずくまるなかに、一人の女性がおり立った。
（これは！）
　と、新九郎は遠目に見て、はっとなった。立ちすくんだのである。
　そういう男が境内にいるとは知らぬように、女あるじは、侍女をしたがえてやってくる。
　侍女は何やら神前に捧げるものを両手に持っている。衝重(ついがさね)で、上に瓶子(へいじ)や菓子などが、載せてある。
　それが三つ。
（――酒か）
　新九郎は、咽喉をぐびりとさせた。
　女は、北川どのであった。
　余分なまわりを見ない。まっすぐ前を見て神前へ進んでゆく。
（――きれいになった……）
　新九郎は、北川どのを見て、嘆息した。
　京にいるときから、きれいではあったが、環境が変れば、こうもなるものか。
　豪奢な衣裳と供揃いだけでも、人間の姿かたちはちがって見えるものである。
　金銀糸の縫いとりの多い、箔を押した小袖に打掛をかぶってしずしずと歩いて神前へくると、侍女が衝重を供え、ぬかずいてからひきかえした。
（なんだ呆気(あっけ)ない）
　毎日のように行われているからであろう。
（それにしても贅沢なものだ）
　腹の虫が音をたてた。
　女主従は、やがて、また来たときのように去ってゆく。
（はて……気がついたかな）
　殊更、隠れもせず、出しゃばりもしなかった。
　強いていえば、素っ裸で下帯と腹巻。背中に一本打ち刀

といういさましい姿の男のからだは、女なら、ぬすみ見ずにはいない。
　行列が立ち去ったと思い、新九郎は境内を出ようとした。すると、急ぎ足に入ってきた男がある。さっきの供侍の一人である。
「やあ、お待ちなさい」
「……」
「卒爾ながら、いまの上臈より贈り物がござる」
「おれに？」
「裸にては、御不自由であろうゆえ、これを貴公へ」
　供侍の態度が、横柄でなかったのは、北川どのに言い含められていたのであろう。
　つと差し出した包みは、ひらいてみると、白絹の小袖と帯だ。
「ふうむ」
「お召し下さい」
「なんと。これを着ろというのか」
「お召し下されば、御案内いたす」
「案内？　どこへだ」
「申し付けられました」
　供侍は、背は低いが、肩幅の広い逞しいからだつきで、頑固だった。
（あの女は、おれに気がついていたのだ）
　みんなのてまえ、そしらぬふりを装ったのであろう。
（どこへ案内するというのか）
　ともかく、新九郎は行ってみることにした。
　小袖を着、帯に刀を差した。いささかゆきたけが短い。新九郎は人並みより大きいから、腕と脛がにゅっと出るが、まあ裸よりはいい。
「さあ、参ろう」
「ござれ、直ぐ近くなれば」
　供の者は先へ立った。
　新九郎の氏素姓も名前も聞かなければ、自分のほうも名乗ろうとしない。ただ命令されたからやるというだけだ。
　案内されたのは、大きな酒倉が並んでいる家だった。土塀がめぐらされ、濠が囲繞している。
「ここですぞ」
「大きな構えだな」
「府中随一の造り酒屋でござる」
　我が家でもあるかのように、低い鼻をうごめかせた。
　案内を乞うと、人が出てきて、丁重に招じ入れた。
「北川どのよりお預かりした客人じゃ。暫時のお世話を願いたい」
「左様でございますか、それはそれは、北川どののお口添えならば」
　大した勢力らしい。

通されたへやは、立派な書院造りだった。この時代、まだ町人の独特の屋内美というものは確立されていない。
　平安以来の貴族政治と、それに付随した建築調度から武家屋敷が分離発展したが、屋形様式と武家風の、どちらかの影響をうけている。財をなすということは、必ず権力とつながっていた。
　当時、町人で分限（金持ち）といえば、酒屋か質屋だった。この二つが大いに儲かったからである。
　物価が騰り、庶民の暮しが苦しくなると、こうした大分限のところは、
〝打毀し〟
の噂におびえる。
　腹を減らした群集が、棒や錆刀をふりかざして、襲ってくる。飢えくらい人間を原始的、野獣性と、残虐性に還元するものはない。
　狙われるのは、日ごろ儲けている酒屋と質屋だった。大名たちも権力とともに財力を貯えているが、これは武力があるから、烏合の勢では刃が立たない。
　酒屋、質屋は商人だから、攻め易いのだ。こうしたことが、度重なれば、酒屋、質屋でも、私兵を備えるようになる。
　社家や寺院が、武装するのと同じ理由だ。中世の宗教武装集団として有名な叡山の荒法師も、一向一揆なども、その号するところは、
〝法灯護持〟
である。
　こうして、乱世の勢力は、必ず武力を貯えていねばならなかった。
　穏便な銭勘定だけしていればいいという、町人社会の大分限というものは出来ない時勢であった。町人文化というものの発展には泰平がまず要求されるし、安息と安逸と開放感が、美としての調度を作るに至るまで、尚、一世紀を待たねばならなかった。
　自然、安息と静謐をもとめるものは、閑寂と孤独の世界に沈潜するようになる。ワビ、サビの世界、幽玄の宇宙には、銭はかからない。
　したがって、この酒屋が、書院造りの武家風の室内であるのも、不自然ではなかった。
「いいへやだ」
　落ち着くと、すぐに、茶と点心が運ばれた。
　点心はチマキであった。
「ほ、こりゃ美味そうだ」供侍はむしゃむしゃと平げて、
「では、てまえは、これで立ち戻ります」
「おう、世話になった」
「いずれ、両三日うちに、主人より何分の沙汰あるものと存じますれば」そう言ってから、ふと、声をひそめて、

「何か……お伝えすることはないかな」
「北川どのへか」新九郎は、ちょっと考えたが、「何もない。茶を飲んでチマキを喰っていたとお伝えあれ」
「ははは、はははは、よろしいかな、それで」
「ほんとうのことだ。それしかあるまい」
「面白い御仁じゃ。では左様に言上します」
供侍は笑いながら立ち去った。
新九郎、ごろりと横になって、
「さて……」
と、口に出して呟いた。
（いよいよ、今川屋形に乗りこむか）
新九郎はもともと、緻密な計算をたてる男ではない。こまかく計算して、ちょろちょろ動きまわれば、それなりの利得はあるし、出世の階段にしがみつけもする。
そういう鼠のような人間を、気質的にも、新九郎は嫌いだった。
（人間には、それぞれ、持って生れた天分というものがある）
と、信じている。
天分は、すなわち天職とつながる。いうなれば、天職につくための天分――その人の宿命ともいえる。人生の軌道は、生れたときに敷かれているとする考えだ。
愚かで、雑念の多い人間にはそれが見えない。見えないだけで、存在はしている。予言者というのは、たまたま、それを予知する能力を具備した者にすぎない。
こういう人生観を持っているから、新九郎は、まず焦らない。焦らないから、この中年といわれる年齢まで、これと天下に名前を喧伝されるほどにのし上れなかったのだろう。
だが、その悠々たる行動の底には、
（おれの道があるはずだ）
という信念がある。
おのれの道がどこにあるか、それを見つけるために、自然にさしてさからわずに生きてきたのである。
たとえば、戦火をめざして、自ら飛びこみ、ひとかどの武功をあらわし、名をあげ、地位を築くという生き方がある。
が、新九郎は、
（おれの性格にはあわんのう）
と、思う。若年から老成したところがあった。
（おれの道が、すでに敷かれている以上、死の危険をそう冒すことはないではないか）
その軌道に乗ることを心がけていればいい。
戦火を避け、性（しょう）にあった道を歩いてきたのだ。ここが、おのれの場だと思うところへ出たら、力一杯、おのれの能力を生かす。

まだ、その場へ出くわしていない。
（――いよいよか）
今川屋形を目前にして、そう思う。
伊勢で、六人のなかまと東海を目ざしたのは、この駿河の今川家であった。
むろん、そこには〝北川どの〟という足がかりが含まれていたのは否定できないが、新九郎の無理をしない、という方針は、敢て自ら、北川どのへ近づこうとしなかったのである。
（天が、おれを迎えたくば、必ず運命はそのように運ばれる）
めぐりあいというもののふしぎさを、新九郎は、運と結びつけて考える。
いま――
それが来た。
まさか裸で浅間神社に佇んでいるとき、北川どのと逢おうとは思いもしなかったのである。
（いよいよ、道はひらけたな）
神社にしろ寺院にしろ、その門前や境内で開運の兆（きざし）を得た場合は、まず、
（おかげさま）と、思う。
常人は、そう思う。神示であり、あるいは仏の慈悲だと。おひきあわせだと感謝する。
だが、新九郎はちがう。
（おれの運がひらけた）
道をさぐりあてた、というのではなく、道に、
（めぐりあった）
と、感じるのだった。
そのあたりが、凡と非凡、常人と天才のちがいであろう。
この造り酒屋は、
〔安倍乃〕と称う。安倍川のきれいな水を用いるという謂（い）いであろう。
酒では駿府一の大戸前であることはいうまでもないが、ここの主人は、茶人としても聞えていることが、のちにわかった。
「一服いかがでございますかな」
挨拶が済んだあと、主はこういって誘った。
善四郎宗心と名乗った。宗心は雅号であろう。
これだけの大分限者になると、茶や歌は余技というより、必要欠くべからざるものかもしれない。
むろん、今川屋形への出入りと、諸将やその簾中、関係者たちとの交際が、日常のことだからだ。
この時代（現代もそうかもしれないが）上層階級との取引きを抜きにしては大規模な商いは成り立たない。
むろん、運上（うんじょう）と称する税金なども、権力者の任意であり、それを如何に巧妙に値切るかも、またこの交際の巧拙如何

にかかっているのだ。
財閥というものは、常にこうしたかたちで、政府権力とつながってゆく。
茶室へ誘われた。
善四郎宗心は、ゆったりとした小袖を着ている。まだこの時代、頭巾というものは流行ってはいない。
茶人といえば、投げ頭巾や宗匠頭巾というふうな姿が浮ぶが、ああした風俗は、ずっと後のことで、ワビ茶をてらうようになった紹鷗、利休以後のことである。
僧侶の地位が高かった時代には、名刹の僧にして茶人という名と実をとる。
利休も御多分にもれず、法体となり、したがって坊主頭を蔽うために頭巾を必要とした。
それが風俗化される。
利休の名声によって、茶道が今日の発展を見たのは、いうまでもないが、それまでは、茶道というものは、きわめて、実用的なもので、茶は作法ではなく、心気を休める薬(煎じ薬)であり、うまく飲むことが第一義だった。
ある意味で、利休は茶の本来の目的をねじまげたといえる。
したがって、逆にいえば、当初は茶は道ではなく、たんなる飲物だった。抹茶にしてしかりである。
日本人の形式好き、事大主義は、茶でも歌でも舞踊から、花にまで及んでいく。
道を得るに形より入る——とよく人々は口にする。
形より入るのが入り易いのは事実だが、これくらい、人の凡愚を嘲った言葉はない。親孝行は真似ごとでもしろ、というが、それと同じだ。つまり、愚か者の指導要領を意味している。
中身があって、はじめて外形がある。外側から云々しようとするから、形はととのっても、中身のない存在が増える。
茶の道、花の心、すべて、その類いである。
仏作って魂入れず、の諺もある。花を活ける者は多い、茶の作法を識る者も尠なくない。が、花の優美、茶の静謐を、おのれの人格の陶冶に資せしめた者は少ない。
形を重視するのはしたがって愚であり、一歩を譲っても凡である。何よりも、道は心である。心を得れば、形式は二の次だ。
話が飛んだが、要するに、この時代、まだ、〝茶〟は道と号する必要がなかった。
茶の美味さ、薬効に信を置き、愛(め)でることでその存在の意味が充分にあった。
「——先ほど風炉(ふろ)の火を入れさせましたれば」
善四郎が案内したのは、広い敷地の北向きの部屋だった。
青竹の簀ノ子縁が廻(めぐ)らしてあり、紋縁(もんべり)の畳の上に風炉を

乗せてある。
傍に火吹き竹。敢て囲炉裡を切ってないのは、この家の贅美を示すためであろう。
風炉は、青磁の珍しいものであった。中で揃い切りされた炭火がきれいに朱の色を見せて、すでに茶釜は微かな音をたてていた。
支度をととのえていたのは細面ての目のさめるばかりの美貌の女性であった。
この女は、善四郎の何になるのか。身なりもいいし、娘分か、寵している女かわからない。
善四郎は、へやに入ってくると、茶釜の音にちょっと耳をかたむけ、
「いま暫く」
と、ひとり頷くと、茶の支度を見まわして、
「退ってよろしい」
と、女に言った。
新九郎にはあらためて紹介しようとしなかったところを見ると、娘ではないかもしれぬ。
妻女もいるはずだし、この女が表むきただの使用人としても、善四郎の態度から見るかぎり、
(手をつけている)
と、見ぬいた。
女は、はいと答え、新九郎の方に手をつかえて一礼し、廻り縁から立ち去った。
「茶はお好きかな」亭主の座へ胡坐して、善四郎は福々しい顔をむけた。
「酒は百薬の長、茶は十徳、と申すが、如何思し召されますかの」
酒屋なのである。造り酒屋だから、酒の百薬は力説したいところであろう。が、余裕があるとみえ、茶人を気取っている。風流茶なのだ。
〝茶は十徳〟と、みとめるところも、その余裕であろう。
「なるほど、拙者も左様に思いますな」
一面識もないのに、厄介になったわけだから、新九郎も調子を合わせた。もっとも、その意見に反対のわけではない。
「これはうれしい。なかなか、そのように思うて下さる人はいないでの」
「酒は酒、茶は茶、これはどちらもよろしい。女房ばかりが女ではないようにな」
新九郎は、さっきの女のことを諷したつもりだが、善四郎は乗ってこなかった。
「このように申した仁がござったよ。酒を飲み、ほろ酔いにて女体を愛で、こと終りて後に、茶を喫す、またよきかな、と」
「ははは、それはよい。そうしたいものだ」新九郎は、

腹をゆすって笑った。「あいにくと、浮浪の身には、左様な贅沢は許されぬ」
「思うことは、やがて成る、と申しますから」
善四郎は慰めるように言った。それ以上、新九郎の素姓を詮索しようともしない。
北川どのの紹介が、いかに効力のあるものか、よくわかるようであった。
善四郎の慮りでもあろうか。客を遇するの道を知っているからであろう。
普通なら、たとえ北川どのに保証されていても、生国や駿府に来た理由くらいは聞く。一言も、触れようとしない善四郎だった。
「酒をつくっていても、茶を愛でる気持では、他にひけはとりませぬで」
と、善四郎は話しながら、壁際の茶臼をひきよせて、茶を挽きはじめた。
余談にわたるが、後世、遊女などが、客がつかないことを、
〝お茶を挽く〟
と称したのは、実際に、売れない妓にはお茶を挽かせたからである。
茶がひろく愛用されるようになると、自家栽培する者が増え、挽くのも自分でやった。そのほうが、好みに合わせられるからであり、茶売りも、挽く前の状態で売ってまわった。
「私が調べたところでは、茶が唐土から持ち込まれたのは、奈良朝のころらしゅうございますな、伝教大師（最澄）が茶の種をもたらしたとも伝えられていますが、その点は如何なものか」
「遣唐使などが持ち帰ったという話は聞いているが」
「左様ですな、面白いと思うたのは、当時は、いまのように、煎茶ではなく団子にしたようで」
「茶を団子に？」
これは初耳だった。
茶釜が松籟の音をたてはじめた。
「左様、団子に」
と、善四郎は頷いて、茶臼をおしやり、風炉に向きなおった。
茶釜は静かに松籟の音をたてはじめている。
「いまのような煎れかたではありませぬな。葉茶を搗き、甘葛や生薑などを加えて団子にしましてな、たぎり湯に入れる、かくして煎じたものですが」
「ほう。どんな味がするものか」
「こころみてみましたが、ま、ちょっと面白い風味で」
金持ちになると、閑をもてあましていろいろとこころみてみるのだろう。

「このあたりで茶の名所と申せば、清見でしてな、これは、栂尾にもまさる茶葉でございます」
駿河清見が茶の産地ということは聞いていた。
「その他には、仁和寺、醍醐、宇治、伊勢の八島、武蔵川越……などでございましょう。手を尽くして、これら名所の茶を集めましてな、飲みくらべてみましたが……」
と、善四郎の茶についての蘊蓄は尽きない。
うるさいだけに、茶の煎れかたも大したものであった。
新九郎は、久しぶりに茶のうまさを思いだした。あわただしい日々に、茶の味などすっかり忘れていたのである。
ゆっくりと茶を飲み干す新九郎を、凝っと見ていた宗心は、
「長く御滞在ですか」
と、はじめて、質問した。
「さあ、如何なものか」あいまいに新九郎は返事をして、
「まだ、この府中のことがよくわからぬゆえ」
「………」
「しかし、人間の運命というものは、ふしぎなものでござるな」
「左様……」
「かように知り合うということもつい半刻前までは、思いもしなかったことで」
「ははは、そこが人の世のおもしろさではありますまいか」
この人物が、新九郎の生涯にも大きな翳を投げるような存在になろうとは、そのとき、まだ知らぬ。
ただ、宗心という男が、ただ大分限の酒屋亭主という以上の何かがあるのを感じたにとどまる。
（こういう男でも、女にかけては存外……）
と、新九郎は、さっきの女のことにこだわっていた。
北川どのからの使いの者が、あらためて来たのは、午後の陽も漸く黄ばみ初めてからである。
一重ねの着物がまず用意されていた。綾織の直垂である。
「これをお召し下されますように」
という。
今川屋形とあれば、むさ苦しい姿では許されない。況や、北川どのの関係者となれば尚更であろう。
直垂は少し以前まで、多く麻布で作られ、武士の礼装として用いられるようになっている。このごろ、地質も絹や綾織が増えてきていた。
麻は着た感じがごつく、皺の寄りかたが面白くないとして、絹を好む者が増えた。絹は染色があざやかであり、着心地もいい。礼装としての豊かさがある。
新九郎は、こうした立派な衣装を着るのは久しぶりだった。
伊勢で足利義視と袖を分ってからは、気楽な身になった

ので、素襖や小袖、あるいは十徳など、気随に着ていた。
　この時代は、応仁ノ乱によって、世の中が乱れ、いわゆる戦国時代と呼ばれるようになっただけに、すべての格式が、混乱しはじめたころで、その点、前代の身分制度の崩壊にともなう、合理性が、衣服の上にもあらわれていた。
　下着から下帯、一式すべて揃っている。
　北川どのの心づくしである。
「奇妙なものだな。女性と違うて、男児たるもの、衣服によって、気の持ちようが変るなど恥ずべきことだが、やはり、良いものを着ると、気持がいいな」
　新九郎は、着付け終ると、爽やかな気持になった。
　この直垂という衣服は、本朝の服飾のなかでも、かなり華美で、完成されたものである。
　胸の左右の二本の胸紐や、袖をしぼるときの紐が袂の角にさがっていて、これは〝露〟と呼ばれているのだが、実用と装飾を兼ねている。
　前の袖付けや、背の端袖と奥袖の縫目、それから、背の頸下の縫目に菊綴がつけられているし、脇と前膊上のところにもこれがあって、きわめて、華美なものにしている。
　公卿の寛闊な直衣や束帯などは、無駄によって、華麗さを強調しているが、武士の衣類には無駄が少なく、武士の生活に適するように改良されていた。
　新九郎が袖を通したのは花いろ紺である。
かなりに派手で、若むきであった。年齢の色合いとしては、萌葱などのほうが若いが、すでに新九郎若くはない。
　因みに紫は御禁色で、将軍家の着衣色合いということになっている。
　侍烏帽子を頂いて、りゅうとした恰好になった新九郎は、太刀を佩いて、
「さ、まいろうか」
　すぐれて上背があるから、凛々しく見える。
　迎えに来た連中も、
（これが、あのはだか牢人か）
と、呆れたように見上げている。
「どうした、まいるぞ」
「は、はい、それ、お草履を」
　あわてて、草履を揃えさせたり急にぺこぺこした。
威あって猛からず、というか、黙っていても風采がいいと、自ずから衆目の見るところが違ってくるものだ。
　駿・遠二大国の守護にして、いまや三河もその勢力におさめている今川治部大輔義忠の屋形である。
　さすがに、伊勢新九郎は感慨を禁じ得なかった。
（いよいよだ……おれの運は、ここからひらける！）
　神示を得たように、そう感じている。
「こちらへ……」

　案内の者の態度も慇懃である。
　宏壮な屋形のうちは、塵一つとどめぬほど掃き清められ、武士たちは礼儀正しい。
　新九郎を遠くで見かけても、猜疑の眼ではなく、親近の面持ちで目礼する。
　こうした礼儀は外見のものではあっても、屋形内の風儀がととのっていることを意味している。
「北川どのは、いずくに居られる」
「先ほどまで、持仏堂にて念誦なされておりましたが」
　出迎えの侍は、敬虔な態度でこう答えた。
　へやへ通されて茶菓が出された。侍たちの姿は、それきり見えなくなった。
　茶を捧げてくるのも、点心を持ってくるのも、いずれも女性である。それも年若い少女ばかりだった。行儀作法もきちんとしている。よほど教育がゆき届いているのであろう。
　どこかで、琴の音が聞えた。静かな調べである。
　むろん、この客人をもてなすための演奏にちがいなかった。高くもなく低くもない、心を柔らげ鎮める音色である。
　その音は新九郎の気持をたしかに鎮めた。
　北川どのと二人きりで逢う——そう思うことが、いつになく新九郎の気持を昂ぶらせていたのは、否めない。
（おれとしたことが……）
もっと、冷静にならねば。
　相手は何しろ今川義忠の寵妃となっている北川どのとの関係を見破られては、新九郎のいのちはない。
（冷静に、冷静に……）
　琴の音はそう訓しているかのようであった。新九郎は茶を含み、胸の昂まりをおさえた。
　やがて、少女が二人で、案内に立った。
「御方さまの申されます様には、亭の方へお越し下さるようにとのこと」
「まいろう」
　新九郎は立ち上ると、へやを出た。
　広い庭のなかには、秋草が咲き乱れている。萩の白い花がこぼれている細い路であった。この庭が一面の花で彩られているのは、北川どのの配慮であろう。
（昔から、花の好きな女であった）
　京でのことを、新九郎は思いだしている。萩の花は、かれに京の日々を思わせた。
　庭の築山には、一宇の亭があった。
　花の屋形——そう称いたいほどの花に埋もれた庭である。
　秋草の乱れたなかに、美しい花々が、群れ咲いているのだ。
　もっとも、季節はまだ夏の名残りが濃い。彼岸花は死人花といって嫌う者が多いが、池の畔にびっしりと咲いている。百日紅や紅蜀葵が、ふと北川どのの風情を思わせた。

新九郎の肌に残る記憶には、強烈なものがある。
真っ赤な花弁をひろげて誇らしげな風車のような紅蜀葵に新九郎は目をとめて、
「御方さまの好きな花であろ」
いますぐに逢えるというのに、やはり新九郎の気持は落ち着かないものがある。
「いいえ」と、意外な返事だった。「御方さまの好まれる花は」
「……」
「白萩でございます」
「萩を？……」
人間の好みは、年月とともに変るものであろうか。花でも衣裳でも、華美なものが好きであったあの女が、十年ちかい歳月の間にそれほど変ったのであろうか。
正確には八年と数ヶ月ということになろうが、その歳月は、思春期の女には、もっともはげしい変化をもたらす。
生活環境も変った。気持も変っていよう。食物や、花の好みも変化しているのも、むしろ当然かもしれない。
（そうか、変っていないほうがふしぎなくらいだ）
だが、新九郎は、賤機山下の浅間神社で見かけたおり、
（変っていない……）
と、感じた。
もしも、北川どのが、新九郎を無視したなら、歳月の変化を痛感したかもしれない。
白絹の小袖をまず届けた上で、〔安倍乃〕へ案内をさせ、ちゃんとした直垂で支度をさせて、万端の準備を整え、この屋形へ呼んだ——この周到な配慮は、やはり深い仲でなければ、できることではない。
北川どのの、新九郎への思いがまだ残っている証拠であった。
その気持の温かさのゆえに、花の好みの変化におどろいたのである。
あらためて歳月の経過をふりかえらなければならなかった。
広い庭の一角に築山があり、そこに亭が見えたとき、新九郎は、壮軀の血が、おどろに騒ぐのを知った。
亭の中には、女性が一人。
亭は萱葺きの屋根で、三方腰の網代で風通しのよいものである。中で腰かけていれば、遠くからでも見通せる。
義忠の寵妃である北川どのは、対面をするのにも、疑惑を招かぬよう、こうした場所を選んだらしい。
新九郎が近づいたのを見て、その人が立ち上るのが見えた。
ひたと目が逢った。
そのまま他に人がいなかったら、抱きすがってきたかもしれない、目の輝きであった。

新九郎は微笑した。そして軽く一揖した。
「一別以来でござる」
腹ちがいの〝兄妹〟ということになっている。
兄妹がこういう取り澄ました態度で挨拶するのは、おかしいようだが、身分というものが、下々のように気軽にさせないのだ。周囲の眼というものも、無視できない。
「御健勝のおもむき、何よりでございます」
北川どのも、丁寧に応えた。
小袖に打掛の姿である。
朝のときは、神社へ詣でるためであろう、模様も地味なものであったが、いま、新九郎の前にある北川どのの衣裳は、染色といい、摺箔といい、派手々々しく、絢爛たるものであった。
やはり、女心は、昔の男に逢うよろこびで、華やかなものに手が出たのであろうか。
「お掛け下されますよう」
腰かけも、青竹のふちに、籐を編んだものである。
侍女たちは、外にうずくまった。
声は筒抜けだし、二人の仲をさとられぬように話をしなければならないのだ。腹ちがいの兄妹という演技をつとめなければならぬ。
「——まさかと思いました」
静かに、北川どのは言った。
「あのようなところでお逢いしようとは」
「はははは、奇遇であったな」
「それも、あのような姿で」
「いろいろと、わけがあってな。話せば長くなる」
「いつ府中に」
「数日前だ」
「それならば、牒を賜わればよいものを。誰ぞ使いの者をよこされても」
「実を申せば、まだ逢いたくはなかったのだ」
「……」
「いま暫く、様子を知った上でと思うていたゆえに。だが、浅間神社が、引き合わしてくれたわけだ、感謝せねばなるまい」
「嬉しゅうございました」と、率直に、北川どのは言った。「ほんとうに、吃驚いたしました。嬉しいやら、羞しいやら」
「裸のことか」
「はい。いかに無鉄砲なお振舞いは昔のままとはいえ」
「はははは、いや、わざとしたことではない。盗人に、そっくり持ち去られてな、当惑していたところよ」
「ではわたくしが、救いの神」
「そういうわけ、浅間神社のお導きであろ」
「ずっとお詣りしております。まことにお引き合わせでご

ざいましょう」
「太守は、遠戦さか」
はじめて新九郎は、義忠のことにふれた。
「はい、三河に出陣しております」
北川どのは答えた。
その心の動きを、新九郎は凝っと見まもっていたが、女性の心中は複雑である。表面は平静を保っている。誰が見ても、そのときの北川どのは、治部大輔義忠の寵妃としての態度からはみ出していない。
「お懐かしゅうございました。殿も御凱陣遊ばされましたれば、いかいお喜びになりましょう」
「お目通りの日を楽しみにしております」
新九郎も折目正しく答えた。
「では、御宿の方は別殿へ用意させましたほどに、ゆるりと御寛ぎ下されませ」
それで、対面は終ったことになる。
新九郎は、もっと話したかったがはた目もあることだし、何を話してもそらぞらしくなるばかりだ。
もっと、心から話しあいたいのだった。その想いは、北川どのも、同じではなかろうか。
新九郎が立ち上ると、北川どのは、熱い視線で、
「お気楽に」
と、言った。
吸い込まれそうな眼だった。新九郎も、視線に想いをこめた。
案内されたのは、広い邸内の別殿で、家臣たちの態度も丁重だった。
「いつごろ太守は凱陣になるかわかっているのか」
と、聞くと、詳細はいまだ、という。
すでに現地を出発したというくらいのことだった。
太守の留守に、いかに寵妃とはいえ、おもてむき兄であっても、こうした待遇をうけていいかどうかいささか心配だったが、新九郎は甘えることにした。
北川どのには、それなりの考えがあってのことであろう。悠然としているほうがいい。
その夜——。
夜半に至って、奇妙な手紙が来た。
ひそかに戸の隙間から、さしこまれたのである。戸のあたりで音がしたので、怪しんで立っていってみると、白い紙片がさしこんであったのだ。
ただ一行——
〝御待ち申し候間、是非々々、御出で被下度〟
と、ある。
それだけである。ただの一行なのだ。宛名も、差出し人の名もない。が、宛名はなくとも、新九郎のところへ差し入れたのだから、かれに宛てたものであるのは、間違いな

いし、差出し人の名がないのは、
(万一をおもんぱかってのことであろう)
と、思った。
新九郎は帯をしめ直した。が、ふと、迷いが出た。
(待てよ、この文は？……)
この文が、北川どのから齎されたという証拠がどこにあるか。
(——こりゃァ、うっかりひっかかってはならぬ……)
新九郎は件の文を手にして、佇んだ。
まだ、誰か戸の外にいるようだった。
(聞いている！)
差し入れた奴は、新九郎の反応をさぐっているはずだった。
新九郎は、何事もなかったように、寝床へもどって、大の字になった。
さてどうするか、だ。
まず、この文を差し入れた者の真意である。新九郎に何の行動を促そうとしているのか。ただの悪戯ではない。相手の女の名を明記していないのが面妖だった。
新九郎に行動させることで、新九郎の真意をさぐろうとするのか？
(なるほどな)考えてみると、頷けることだった。(おれでも、やるかもしれんな)
こういう格式と因習の強い今川屋形では、特に新九郎のような風来坊には、疑いの目をむけるのも当然だった。
ただ、躾がよいのか、新九郎の前では、あらわに反意を示そうとはしない。躾というよりは、大大名の貫禄なのかもしれぬ。しかし、それだけに、かえってその仮面の厚さを感じるのだ。
(おれのひがみでなければよいがな)
浪々の性格は、ものごとを素直に見なくなる。
新九郎は自戒するのだが、どう考えても、この投げ文には疑問が残る。
(おれと北川どのの仲を怪しんでのことか)
そうだとすると、油断はできない。
北川どのは、そういう見方をする者がいようとは知らぬげであるし、その点も知らせねばならない。安心しきっていて、うかつな行動はとりかえしのつかぬことになる。
(誰が、こういうことを企んだか、だ)
まず、それからさぐりだすことだった。
新九郎は灯を消した。
闇の中で苦笑した。
(腹の中を見ぬかれたようなものだ)
できれば、今夜、忍んでゆくつもりだった。久しぶりで見た北川どのの肌がほしくなったのも、無理からぬことなのだ。

(あきらめものだな、これは)
当分、北川どのの肌は忘れよう。
忘れさえすれば、ボロをだすこともない。あくまでも腹ちがいの兄として振舞っていればいいことなのであった。
新九郎は、その文をほうり出したまま、眠ることにした。
女の名が書いてないのが、かえって幸いだった。これが、北川どのの名が書かれてあったら、新九郎も握りつぶすわけにもいかなくなる。
翌日、新九郎は今川家中の重臣たちに引き合わされた。
義忠の一族である関口、新野、名古谷の諸将たちであった。いずれも錚々たる武将たちである。数万貫の所領を持ち、数千の武力を持つ。
ほかにも、小鹿一族や瀬名、入野など名だたる武将が居るが、いずれも義忠の供をして出陣している。
「伊勢どのか」と、関口左京亮景良が心易げに声をかけた。
「すると、伊勢備中守盛時どのが嫡男ということになるか」
「左様」
新九郎は微笑した。うっかりしたことは洩らせない。新九郎は用心した。外見はゆったりと見せているが、どのような質問が飛ぶかしれない。この家臣たちが北川どのの立場を理解しているかどうかも明らかではない。
伊勢備中守盛時の娘というかたちで、北川どのは義忠のもとにあがっている。
守護大名ほどになると、寵妃とするにも、素姓卑しきものは許されない。
「御前とあまり似ていないようだが」
こう言ったのは、名古谷大膳大夫である。
「ははは、他人にても空似ということがござる」
「……」
「世間にはままあることじゃ。あれも、いや、御前も、それがしなどに似なくてよかった。もしも似ていたならば、今日の倖せはござるまい」
「ははは、なるほどな、それもそうじゃ」老臣の朝比奈帯刀が大きく頷いて、「夢御前のお姿を見ると、町の者どもも後光がさすようだと申しておるようじゃ」
「ははあ」
この連中の気持を忖度するのは難しい。いずれも年配だけに、容易に本心を明さない。
磊落な態度だった。戦場往来の強者である上に、一癖も二癖もある連中の内心というものは窺いにくい。
(夢御前……か)
新九郎は口のうちでつぶやいた。
夢――
北川どのの名前である。
夢子、と、京では呼ばれていた。

(なるほど、夢子は、ここでは、北川どのであり、夢御前と呼ばれる身分なのだ)
新九郎に好意を明らさまに示したのは、今川陸奥守一秀であった。
一秀は範忠の二男貞延の嫡子であり、幼時に某寺に預けられ喝食で過したという。
「新九郎どのは、京に在せられたならば、蹴鞠なども、ようなされるであろうな」
そう言いかけたとき、聞きおぼえのある声がした。
「蹴鞠よりも軍鶏の蹴合いにたけているぞ、その男」
大きく哄笑をひびかせて、新五郎範満は入ってきた。
「軍鶏では妙な由縁があるなあ、新九郎」
むろん、新九郎のことはすっかり聞いてきたのだろう。
夢子とのことも、以前から知っていたような顔で、上席へ、どっかりと坐った。
「おぬしも人が悪いぞ」
ははは、と笑いにまぎらせてなじるように言っただけである。
「いや、これは、新五郎どのか、先日は御無礼つかまつった。ずいぶんと楽しい思いをさせて貰いましたな」
人を食った挨拶である。
一介の浮浪人が天下の今川家の第二の実力者に対して平然とこう言ってのけたのだ。
さらに、新九郎は、範満の顔を凝っと見ながら、
「軍鶏の行方は如何かな」
「なに！」
ふっと、範満の顔色が変った。一瞬だった。それをすぐに巧みに寛闊な態度で塗り代えている。
「軍鶏は好きか新九郎、ちかごろこの府中ではよう流行っているが、逸物は少ないものよ、ははは、ところで」と、席を見まわして、「若がお見えにならぬが」と、夢子を見、それから、視線を侍女にうつした。
侍女の綾川は、狼狽を見せた。はっとなって、何か言いかけた。夢子の表情を気にして、おろおろしている。
夢子は表情を崩さない。こうした席では、動揺を見せることも、心の中をあらわにすることも避けねばならないのだ。
夢子にとって、新五郎範満は、もっとも手強い〝敵〟なのである。冷たい家庭内の戦いでは、感情をあらわすほうが負けだった。
義忠の子を生んだとはいえ、範満が壮年で覇気があり、それなりの人気を保っている以上、必ずしも、夢子と、その腹に生れた竜王丸は、安泰とはいえない。
いつ範満がどういう卑劣な手段で、魔手をのばしてくるかしれない。
家臣たちの動向も、権勢下にあって、うつろい易いもの

だ。
　義忠の力がある上は、範満も軽々には動かないが、人間のいのちは明日知れぬ。況や、出陣しているいま、その無事を祈るしかない。
　そうした立場にあっては、感情を表面に出せないのである。
　夢子がにこやかな表情を保ちながら無言なのは、侍女に答えさせようとしていることだった。
　その意を体して、綾川は、あわてて、
「はい、あの、少しおからだが」
と、言った。
「なに、おいたつき（病気）か」範満は膝を動かして、
「そりゃいかん、御見舞いに参上せずばなるまい」
　同情したのではない。心配になったのでもない。大仰な驚きで、同情を装ったにすぎない。この男は、顔立ちも派手だが、動作も仰々しい。
「そりゃいかんのう、ただちに御見舞いに行かにゃならん」
　新五郎範満に大声をだされて侍女はさらに狼狽した。
「いえ、それほどのひどい御様子ではありませぬゆえ」
「それほどとは、どういうことじゃ」
「はい、あの……」
「医師は呼んだか」
「いいえ、それほどでは」
「ではなんだ、おかしいぞ」範満は意地悪く追及する。「病気ならば医師を呼ぶ」
「……」
「呼ばないというのは、病気ではない、ということになる」
「あの……ほんの軽微な風邪を……」
「ほう、風邪か、この夏場にのう」不思議そうな顔をして、
「ともかく、わしが見舞いにまいるのが道だと思うが」
　綾川の当惑は、はためにも、気の毒なくらいだった。
　洒脱な風を装いながら、範満の態度は、猫が追いつめた鼠をいじめているような感じで、むろん、その舌鋒は、綾川にむいていると見せ、真意は夢子へ挑んでいるのだ。
　夢子は、凝っと唇を結んでいる。ここで何かいえば、待ってましたとばかり、範満が食いついてくる。その意中は、わかりすぎるほどわかっていた。
（耐えねば……）
　顔には微笑をたたえながら、おのれを殺すことは、辛い。さすがに、新九郎は黙っていられなくなった。
「夏風邪ということもあるなあ」
と、独り言のように、呟いた。
「なに！」
と、範満が気色ばむのを、意に介さず、

「どうやら、おれも夏風邪をひいたようだ」
「……」
「もっとも、夏風邪というやつは大したことはない。一々、藪医に診せたりなどしたら、かえって、悪うなる場合がある」
　くすんくすん、と、鼻を鳴らせてみたりした。独り言だから、範満も、苦笑するしかなかった。
「――では、若には病気と申しても大したことはないわけじゃな」
「はい……」
　念をおすように、こう言われては、もう綾川も、それ以上、拒めない。
「それは重畳、ならば、この伊勢ノ新九郎を引見なさるべきであろう」
「……」
「若には、伯父にあたる身じゃ」
じろりと、夢子を睨めつけた。
　伯父と甥――この血縁は近い。
　範満の意図するところは、奈辺にあったのか。
　この席で、新九郎と竜王丸を引き合わせることで、夢子の反応を見ようとしたのか。
（はたして、兄妹か？）
　その疑問を持っているにちがいなかった。
　この範満の態度や言葉は、新九郎に昨夜の怪しい文のことを思いださせている。
（こやつか？　あの文を入れさせたのは）
　範満の心の奥底は、計り知れない。
　一見、豪放磊落のように見せているだけに、一層、その陰に潜むものの、どす黒さを感じさせるのである。
「御方さまへ申し上げたい」と、新九郎は視線を綾川のほうへ向けて、「若殿に拝謁したい、この儀、取り計らい下さるまいか」
と、言った。すぐつづけて、
「いや、両三日中にでも」
と、言い直したのは、範満の機先を制したのである。
「この儀、相叶えば、忝けなく存じまするが」
　ほっとした色が、夢子と綾川の顔に流れるのが見えた。
夢子の気持を、新九郎はこのやりとりで察したのだ。
　範満には、竜王丸を逢わしたくないのであろう。義忠を弑逆するほどの気持はあるまいが、
〝次の今川屋形の主は〟
　おれだ、といわんばかりの態度が夢子たちには、よくわかるのだ。
　むろん、義忠存生のかぎりは、この〝野望〟は鋭鋒をむきだしはすまい。が、範満も野望を全く隠しているわけではなかった。

少なくとも、その実力を誇示するという面に於ては、喧伝するのに吝か(やぶさか)ではない。
それは、義忠の身に万一のことがあれば、いやでも、竜王丸の後見になる。
この、NO2(ナンバーツー)の立場をくりかえし誇示しておくことで、勢力の温存と伸長をはかるのである。
重臣たちの前で、竜王丸を範満に逢わせれば、必ず、妙なことになる。表面は〝若、若〟と立てるように見せながら、巧妙に引き下げるのだ。
たとえば、
「若は年齢のわりには成長が早い、背が高い、御前の養育がよろしいわけじゃな」と、ほめるかに見えて、「じゃが、侍大将たる者、なんぼう背が高くても、そのように日陰の青草のようでは、どうにもならん、鎧が重うてぶっ倒れよう、古今の名将は、いずれも、雁股にして胸板厚く、肩幅ひろく、猪首にして……はははは、このわしのようでなければ、ならん」
と、おのれの体軀を誇る話に移ってしまう。
群盲は、こうしたテクニックに自然と惹きこまれて、範満こそ、今川の社稷を支える重鎮、という認識を抱いてしまうのだ。
うまく切り抜けた。新九郎の機転に、夢子は、ほっとした。

が、曲者の範満だ。巧みに、軍鶏に話を持っていったのである。
「若は、軍鶏がお好きであったゆえ、献上いたしたい」
と、家人に持たせてきた軍鶏三羽を衆目の前へ出させた。
三羽の軍鶏。それぞれ、首に名札がついている。
「若も、この軍鶏どもを見れば、尚更に、御快癒となろう」
これまで要らないとはいえないのだ。
「それはそれは、さぞお喜びと存じまする」と、綾川が代弁した。「では、明後日、あらためて御機嫌伺いに参上しますが」
「おぬしも、軍鶏をつれてこぬか」
じろりと範満は新九郎を見て、
「……」
「蹴合いをさせては如何か」
どういう存意か。
範満の畳みこみかたは、新九郎に軍鶏なぞ持たない、と言わせないものがあった。
ふいだったので、はっとした。新九郎、咄嗟に、あの赤主のことを思いだしたのだ。
(こやつ、おれが赤主を……)うまく奪いとったことを、
(知っているのか?)その動揺を圧えきれなかった。
新九郎も相当、逞しい男だが、放浪の歳月は、やはり人

間をのびやかにしている。
こういう由緒と伝統の中の大家族の微妙な駆け引や、感情の間隙を衝く狡智には欠けていた。
範満にこう申し出されて、
「軍鶏など、持たぬ」
と、言い放ってしまえばよかったのだ。
だが、ああいう経緯ではあったにせよ、赤主を抱いていたのは事実だし、蹴合いの仕手(後見)としても、一応の腕を見ぬかれている。
はっきり、無縁とはいえなかったのである。
また、この時代、軍鶏の蹴合いは、博奕の一つとして、盛んであったから、軍鶏を売ることを商売にしている者がいる。
この駿府には、どこにその者がいるか知らないが、ともかく、入手は困難ではなかった。
「――の、そうせい、の……」
念を押されて、新九郎、頷いてしまった。
竜王丸のことを切り抜けて、ほっとした安堵の隙を衝かれたといえよう。
「……」
「はははは、これはおもしろうなる」
「先日の仇討ちだな」
「しかし赤主ではないゆえ、なかなか」
「はははは、赤主さ」ぎろりと範満は目をむいて、「おれは、まだ赤主をあきらめてはいない」
「……」
「どこかに在るはずだ、新九郎よ」
軍鶏はただ、その脚が強いというだけでは、蹴合いに勝てるものではない。蹴合いは、あくまでも試合であって、野中の争闘ではない。
ここに面白さがある。つまり、人為的だということである。
人間が動物を使うというのは所詮、人間の利己的なものから出ているのだが、動物の争闘性を知悉し、それを利用するところから、こうしたものが発生する。
闘牛でも闘犬でも、その動物たちが、野中で争闘するのには、ルールがない。ルールがない試合は、たんなる死闘でしかない。人間の手が加わることで、これはスポーツ化し、賭けの対象になる。
軍鶏の争闘性があるのはいうまでもないが、これをその仕手と呼ばれる飼主が、どのように馴らすか、鍛えるかで、その軍鶏の運命も変るのだ。
新五郎範満が、軍鶏を三羽、竜王丸に献上し、新九郎に三者の試合を挑んだのは、明らかに公けの場で、勝敗をはっきりとつけ、
(たとえ、竜王丸の血縁などと称してあらわれても、おれ

にはかなわぬ)

と、顕示したいのであろう。

(これは負けられぬぞ)新九郎は、範満のうしろ姿を見ながら思った。(おれは負けてもよい。負けるのも奴を安心させる手だてにもなる。が、竜王丸を負かしてはならぬ)

新九郎のこうした考えは、その実態を知れば、異様といえる。

夢子は、新九郎の女だ。表むき、兄妹といっているだけで、縁につらなるのは事実だが、肉体的な関係から見れば、これは男と女だ。

その女の産んだ子というだけで、新九郎が肩入れをする気になるのは、いささか、おかしい。それほどの義俠心があるはずはない。おのれの我意をむきだしにして、生きてゆくのが常態の時代なのである。

新九郎は翌日から、三羽の軍鶏を仕込みはじめた。あの範満がくれた軍鶏である。どうせ弱いやつを連れてきたに相違ない。まず、欠陥を調べねばならなかった。

「軍鶏など、あたくしには、どう見てよいかわかりませぬ」

と、不安がる夢子に、新九郎は胸をたたいて、

「まかせて下され、やつに一泡吹かせてくれる」

と、頷いた。

三羽の脚、爪、その気力などをためしてみたが、いずれも、使いものにならぬ。

「こりゃアいかん」

「え?」

「負け軍鶏ばかりだ」

「と仰せられますと」

「叩き台に使われすぎると、試合の場合、怖じ気づく、とても、まともに試合できる軍鶏ではない」

夢子は、まあ、と言ったきり、二ノ句がつげない。

軍鶏と女

シャモ七と呼ばれる男が、軍鶏を養育しているということだった。

道を尋いて、その家にいってみて驚いた。安倍川に近い、広い敷地の家だった。もとは農家だったのであろう。柴垣が、普通の家よりも丈が高いのは、軍鶏が飛び出さないためか。

その広い庭内に脚に紐をつけられた軍鶏が、ざわざわしていた。蹴合い出来ぬような距離をとってあるものの、いまにも、お互いに躍りかからんばかりに啼いて、羽搏いたりしている。

大籠をかぶせてあるのもあり、立木につながれたのもあり、その間を数人の女たちが、世話をしてまわっている。

女たちはみんな髪を桂包みしているのは、髪が軍鶏の脚に絡んだりするのを憚ってのことらしい。小袖を裾短(すそみじか)に着て、中には襷がけで、盥で軍鶏を洗ってやっている者もいた。

「大変だな、軍鶏をこれだけ飼うというのは」

新九郎はそこへ通されてから、呆れたように見まわした。

「なあに、十羽も百羽も同じでございまさ」

シャモ七はそういって欠けた歯をのぞかせた。

この男、脚が不自由である。いざって歩く。両手に皮の厚い〝爪〟と称するものを圧えるようにして歩く。

膝にも皮蒲団をつけている。手の〝爪〟も一種の蒲団だが、先に二本の爪が出ていて、これが土を掻くわけだ。遠出するときには、車に乗るという。

「軍鶏をあんまり可愛がりすぎましてね、筋を食い千切られましたのでね、へえ、軍鶏でも女でも、甘え顔を見せちゃいけませんわな」

「軍鶏と女か、はははは」

新九郎は、笑いだした。

なるほど、そういわれれば、逆上し易いところ、爪でひっかくところ、女が怒った形相など、軍鶏に共通している。

「可愛いところも同じか」

「へえ、そうなので。そいつが困りものでさね」

そう言う間も、シャモ七は、怠りない眼を、軍鶏に向けて、ホの五番が羽に虫がついている、とか、イの三番に水浴びさせてやれ、とか、チの五番は下痢をしているようだとか、一々、指図を下しているのだ。女たちはその指示にし

たがって丁寧に介抱する。
軍鶏たちのそういうNOは、いずれも首につけた名札で、一目瞭然だった。
「この軍鶏どもには、名前はないのか」
「へえ、わっちは育て売るのが商売でございますからね。名前はお買いもとめになった方でつけて頂くことになっています」
そのほうが、軍鶏が自分の名前を間違いなくおぼえるのでいいというのである。
「三羽、強いやつを欲しいな」
新九郎は贅沢を言って選んだ。
金はたっぷりある。夢子の御手許金を預かってきている。おのれの軍鶏ではない。竜王丸のものである。
（範満の鼻をあかしてやらねばならん）
贈られた三羽の軍鶏はいずれも、弱い〝負け軍鶏〟であった。
あのとき新九郎が見たように、強いやつを、益々強くきたえるための叩き台というか、闘牛でいうところの、〝突かれ牛〟闘犬ではこれが〝咬まれ犬〟となる。
こうしたものは使いものにならない。いうなれば廃馬だ。あとは食用にしてしまうしかない。
（こんなものを寄越しおって、東雲に咬ませるつもりであろう）
その裏をかく。
三羽のうちに笹目はいなかったが、笹目のような目にあった連中にちがいない。
一度、負けた軍鶏は、すっかり意気地がなくなる。試合の場へ出ても、いじけて、当然、勝つべき相手に負けることがある。
竜王丸のためにも、強いやつを選ばねばならなかった。新九郎は一羽一羽、つかみあげて、脚腰の強さ、爪の逞しさ、嘴の鋭さなどを調べた。
羽毛の艶や張りなども無視できない。眼を見る。眼にも生気があらわれているものだ。
新九郎は、さらに羽翼の勁さもたしかめてみた。跳躍力なども、ためしてみねばわからない。
紐をつけた軍鶏の脚をぱっと竹で叩く。ひらりと、舞い上る。その遅速で、敏捷さがわかる。
竹の先を割りササラにしてこれを折ったり曲げたりしたやつで、軍鶏の顔面を叩いたり、小突いたりして見る。
その〝敵〟に対して、どういう反応を示すか。
同じ怒りでも、各様だ。度合いが違う。根性と憤怒ぶりと、攻撃性を見るのである。
一羽一羽をこうして試すのだから時間がかかる。
シャモ七がさすがに苦い顔になったのも気がつかぬふりで、新九郎は、三羽を選びだした。

「こいつを貰おう」
ハの一番、イの六番、トの二番——その三羽を選びだしたので、
シャモ七は目を丸くした。
「ひえっ、なんて目が高けえ、その三羽は、おれのところにいる軍鶏の中でもすぐれたやつばかりだ」
「だから、需める」
「ちょっと、おい、そいつァ困るわな」
「困ることはないさ、お前は、また育てあげればいいいわい」
「ひえェ、苦労なことじゃ、軍鶏にも素質ってものがあるわいな……」
くどくどという前に、新九郎は丁銀の袋を投げだした。
八幡。
天山。
雲岳。
その三羽の軍鶏につけた名である。
訓練の時間は一日しかない。極上ものばかり選びだされたシャモ七は嫌な顔をしたが、丁銀が多かったせいか、〝蹴られ軍鶏〟を三羽つけてくれた。
その一日いっぱい、新九郎は三羽をきたえた。
「まさか若が、軍鶏をつかうわけにもゆかぬ。傅役のどなたかを」
近習の一人が出された。
本間源次郎宗季という。傅役といっても、まだ若い。竜王丸の選び相手には少し年をとっている。十八歳だということだった。清和源氏の満政流で、四代前まで遠江国に住み、鎌倉幕府のころには北条家の被官だった。
「源次郎というのか、軍鶏を扱ったことはあるか」
「はあ、少し」
「このやつらは、まだ、負けを知らぬ。猛きやつらだ。よく仕込むことも必要だが、それよりも、おぬし、この連中と仲良くなることだ」
「はあ」
「仲良くと申しても、べたべた可愛がってはならぬ。きびしく、優しく、だ」
なるほど、と源次郎は大きく頷いた。
「きびしく優しく、ですか」
「そうすれば、軍鶏の信頼を得ることになる」
「つまりは、命令をよく聞くというわけで」
「そうだ、おぬし、理解が早い」
軍鶏には、それぞれ素質がある。その素質を上手にひき出す腕の如何による。むろん、弱いやつは、論外なのだ。
「唾をくれてやるのが、一番いい」
「は？」
「唾よ。男と女の仲と同じじゃ」

これは源次郎には解せなかったようである。

「軍鶏の口をあけて、唾を吐きこんでやれ、傷つきなどしたら、舐めてやるといい、そういうまじわりが、信頼を深めるのだ」

新九郎は、源次郎にまかせておけば大丈夫だと思った。

約束の日――。

範満は、やはり三羽の軍鶏を伴ってやってきた。三つの籠をそれぞれ小者に担がせて、意気揚々と乗りこんできたのである。

その時刻に先立つ四半刻前。

新九郎は竜王丸に引見されている。竜王丸はあどけない少年だった。漸く八歳。夢子によく似た涼しい眼と、小さな唇や、うすい眉のあたりも、少年というより少女のようであった。

「新九郎か、近う」

(これが、夢子の生んだ子か)

新九郎は、にじり寄って、竜王丸を見上げた。

義忠との間の子であるが、殆ど、夢子の顔に似ている。伯父と甥――そういうたてまえだから、新九郎はせいぜい懐かしそうな顔をした。もっとも、夢子の子と聞くと、別の興味がある。

夢子は、恥しそうな、誇らしげな顔で、

「新九郎どの、何分ともに頼みまいらせます」

何を頼むのであろう。今川義忠という立派な父親がいるのだ。浮浪人の新九郎に頼むことはないはずであった。

義忠は、夢子を寵愛しているらしい。世間の噂もそうだし、夢子のこの屋形での振舞いでも、それがわかる。にもかかわらず、新九郎を頼ろうとする気持は、奈辺にあるのであろう。

(何かを案じている?)

新九郎にはわからなかった。

女は、子を持つと、いくら若くても老成する。その子の将来のことを考える。一人でも味方を増やしておきたい気持か。義忠だけでは不足なのか。京では深い仲だった新九郎が、とどまってくれれば、力になる。

それだけ、新九郎を信頼しているわけだが、

(おれが、面の皮だの)

夢子の子と思えば、満更、憎くはないが、

(義忠の子)

と、見方を変えると、なぜ、他人の子の力になってやらねばならないのかと、妙な気持になる。本来、関係の深かった女の子、ということになると、その父親を憎むのが普通だ。

新九郎の淡白な気性が、そういう憎しみを湧かせないのだろうか。

(妙なものだ……)

そういう関係を忘れてみても、この竜王丸のあどけなさが、憎めない。

可愛い子だ、と思った。勘ぐって考えれば、夢子の態度は調子がよすぎる。が、子を思うあまりの、ひたむきな女心――というふうに見てやると、それなりに、あわれで愛しい。

(やれやれ、男というものは、どっちにしても、損なようにできているわい)

新九郎は、おのれの気持をふりかえってみる。夢子を抱きたいと思う気持は、必ずしも愛ではない。

それに、新九郎の方には、大いなる志がある。その志をのべる範疇において、竜王丸を助けるという行為のメリットをかれは考えたにすぎない。

もっとも、竜王丸のあどけなさは、別のものだ。たとえ、竜王丸が、敵の立場にあっても、邪気のない幼児には、害意はわかない。

(おれが甘いのかな)

利害を超えた感情に、新九郎はふっと苦笑した。

(東雲だな)

新九郎は一目見て思った。見おぼえがある。猛々しい相貌、あの独特の啼き声。

安倍川の丸石、白砂利を敷きつめた白洲である。竜王丸と夢子が座敷に並び、白洲の東の桜の老樹の下に範満が陣取り、本間源次郎は、西の楓の下に立つ。

新九郎は、南の老梅の下の床几に腰をおろした。

「新九郎はどうした」と、範満が眉をひそめた。「そちも軍鶏を連れてくる約束じゃぞ」

「左様、それで昨日、願をかけました」

涼しい顔で新九郎は言った。

「願を?」何を言いだすのかと、範満はけげんな顔をした。

「何の願だ。神の力で、おれにうち勝とうというのか」

「いや、探しものでござる」

「探しもの?」

「軍鶏のな」

「……」

思い当った。赤主のことを言っているのではないか。

「あ、赤主か……」

範満は身を乗り出した。

「左様、赤主を盗まれたことは、先日、申し上げた通りじゃが……おや、如何なされた? 巷間仄聞するところによると、文殊とか天殊とか、おんな陰陽師の占いにより、赤主をとらえたとか」

「いや……誤聞じゃ」苦虫を嚙みつぶしたような顔になって、「あれはな、あやまりじゃ」

「ほう、おんな陰陽師は、役に立たなかったと仰せられる」

「いや……まあよい、そのようなことは」
あのときのことは、範満は思いだすのもいまいましい。
東雲之助の狡智に気がつかないし、赤主は第三者に奪われたと思っている。
その奪った奴は、
(この新九郎ではないか)
という疑いを、ずっと抱いていたのだ。
ただ、まるっきり証拠がないし、新九郎の不在証明ははっきりしているのだ。
いかに範満でも、そこまで強く押せない。
「軍鶏の探しものとは、どういうことだ。おぬし、〝手ノ者〟を連れて来ていないのか」
「願意が天に届けば、これへ参りましょうな」
新九郎、相変らず、そらとぼけている。
「いつだ、その吉左右がわかるのは」
「ほどなく……おお、あれにまいったようだ」
中門のところに、少年があらわれた。
黒丸だった。鳥籠のような竹の編み籠をぶら下げている。
小者が制止して、何か言い争っている。新九郎は急いで声をかけた。
「軍鶏を持ってきたのだな。こっちへ来い」
あっと、範満は声をあげている。
「赤主!」遠くではあったが、一目でわかった。「それは、赤……」
「黒主、と呼ぶことにする」しゃあしゃあとして、新九郎は言い放った。「な、なんじゃと、その軍鶏は正しく、赤主……」
「黒主と呼んでもらおう」
「……」
「安倍川の向うで、見つけたと申している。願いごとがかのうたわけだ」
「それ、そ、問わずに語ったわ、願いをかけてあらわれたというのか、赤主を見つけてたべ、と願かけたなれば、やはり赤主」
「いや、そうではない。強い軍鶏を一羽……」と、新九郎は動揺を見せない。「強い軍鶏を是非ともに、与えてたべ、とな」
「……」
「かくて、あらわれた。黒丸が見つけたなれば、黒主……」
「きさま、ぬけぬけと……」
「この府中で見つけたのならば、どういう名前か、おぬしの申す通りかもしれぬがな、川向うへ渡れば、もはや府中ではない」
「へ、屁理屈を」
「何やら唄にもあるな、一たび閾をまたげば外の風、と」

「うぬ! その赤主は、おれのものじゃ」
「黒主だ、これは。さあ、愚図々々していては日が暮れる。試合をはじめてはどうだ」
範満がいきりたっているのは、まともに立ち合っては、とても赤主を相手に、東雲では勝ち目がないと知っているからであった。
新九郎は赤主を抱きあげると、羽の下から腹をなでてやった。
「赤主、かまわぬから、力一杯やれ」
と、囁いた。
赤主の眼玉は闘志を輝かせて、ぎらぎらしている。吐く息も荒く、ばさっと、羽が動く。いまにも飛び立ちそうだ。
新九郎は赤主を凝っと押えて、顔は範満と東雲へむけた。
「いいか、あいつだ、蹴りに蹴殺してしまえ」
けしかける。
指だ。新九郎のあの掌と指の合図を、赤主は思いだした。
信頼感がある。この人間の命令通り動くことが、勝利につながることを、赤主は気づいていた。
ひくッひくッと、息づきのうねりが、新九郎に応えてくるのだ。
「よし、よし、合図するまで待て」新九郎は赤主を抱いて進み出た。「さあ、こちらは支度はととのったぞ」
竜王丸の三羽を戦わせるまえに新九郎の赤主で、徹底的に、東雲と二羽をやっつける。
竜王丸に挑む前に、範満は諦めるに違いない。
二羽が対峙したときである。あわただしく入側を駈けこんできた者があった。
「大事出来にございます」
急使であった。
馬を飛ばしてきたのであろう、汗と埃りにまみれ、煤けた顔に血が流れていた。具足の背の押板に矢が一筋突っ立っている。
足軽たちに助けられて、中門から入ってきた使者は、がっくりと白洲に膝をついた。
「小芝か」
本間源次郎が、叫んだ。
「殿の御身に……?」
「は、はい、途中で、伏勢に逢って……」
「殿は!? 殿の御身に間違いがあってか」
「矢を……」
あとは声にならず、小芝善六は突っ伏した。
「しっかりせい」源次郎は抱き起して、「詳らかに述べよ、殿の御身の様子を」
夢子も竜王丸も立ち上っている。石階へおりかけてきて、さすがに矜持が、それ以上の醜態を圧えていた。

前にも一寸述べたように、今川義忠は、横地や勝間田などの叛旗をひるがえした連中を討って、帰国してくる途中であった。

この横地氏は城飼郡横地郷に古城址がある。また勝間田も名家で、切山の小山谷、中村、植松村、下湯日、養勝寺などに城砦が点在している。この中村城跡などは、城之段と呼ばれ、眺望のよいところだ。

切山村を源泉とする勝間田川は、永代切山、永代伏山の二村の間を通って中村の西より東南に流れ、三栗、朝生、下庄内などの村境いをなしている。

勝間田氏が、ここを領していたから、勝間田川というのか、この川の近傍に起ったから、勝間田を名乗ったのか、いずれとも判然としない。しかし、遠州に隠然たる勢力があったのは事実だ。

ところで、この横地郷に近い、遠州城飼郡南山村の塩買坂というところで、義忠は将士ともに一泊した。

その寝込みを襲われたのである。

ここを塩見坂と書いたものが多いが、塩買坂の方が正しい。塩見坂と呼ぶところは他にも二、三ヶ所ある。

十九日の夜である。晴れていれば月がある。夕方から雨になっていた。これも不運というしかない。

小寺に入って義忠はじめ諸将は屋内に眠り、士卒は、縁の端や、回廊の下や納屋や木ノ陰などに、思い思いに宿った。

この周辺から、黒い影が数多飛びだし、矢を射かけたのだ。足軽たちは仰天した。寝込みに矢がうなり、喚声が聞えた。

見張りが最初に倒され、悲鳴をおしかぶせるような喚声が四方に湧然と起って、どっと攻め寄せてきた。

「夜襲ぞ、出合え」

漆黒の闇である。小雨が、かれらの行動を阻んだ。

襲撃者の方は、このあたりの地ノ利を知りつくしている。

今川勢はただ狼狽し、逃げまどった。

夜襲に備えて見張りが立っていたし、義忠はじめ、くつろいだ姿ではなかった。士卒たちは足ごしらえを解かず大半は具足を着込んだままだった。

悲鳴と喚声にはね起きたが、四囲に敵が充満し、矢羽の音と人馬の響きは、寝耳を驚かせ、狼狽させるに充分だった。小雨のために篝火も充分ではなかったことである。

「ひるむな、敵は小勢ぞ」武将の瀬名、入野などが、声をはげまして、「今川勢の力を見せよ、夜襲にうち負けたと汚名を残すな」

自らも、槍をとって、駈けだしている。

義忠は、喚声とともにはね起きて小姓らに具足をつけさせていた。

武将ではあるが、当時の守護大名の多くがそうであったように、義忠も額に天眉を描いている。いわゆる公家顔を作っているのだ。

守護大名といえば、武将であるが、治部大輔であり上総介を称する義忠は、貴族意識がある。

貴族階級であるという誇りが天眉をうたせていた。うす化粧をほどこし、天眉をうった顔は、かたちよく刈りこまれた鼻下の髭とも相まって、まさにお公家さんの顔である。

だが夜襲と聞いて、素早く鎧を着こむところは、やはり武将だけのことはある。

「馬曳けい」

走り出ながら言った。

いうまでもなく、堂内で着具するとき武者草鞋も穿いている。すでに鹿毛の逸物が石階の下に控えている。

義忠が巨体をまたがらせたとき、うなりを生じて、矢が飛んでき、兜をかすめた。

「ぬ！」

義忠は顔をふっただけである。動揺はない。

「槍！」

と、手をのばした。

朱槍が捧げられる。ひったくるように掴みとるや、義忠の武者草鞋は馬腹を蹴っている。

「つづけ」

一声、あとに残して、義忠の騎馬は山門の外へ走り出た。

朱槍を片手に握って、群がりよる敵兵を薙ぎ倒し、叩き伏せ、突きまくった。

「やあ、あれが上総介ぞ、討ちとって手柄にせよ」

寄せ手は、功名にかられて、槍を突きかけ、馬の轡を掴もうとする。馬が首を振って拒み、棒立ちになる。

かけつけた従者が、その男を突き伏せた。その従者を横合から薙刀が一薙ぎする。ばさっと血が、義忠の足と馬腹にかかる。

「痴れ者、退れ！」

槍で突こうとしたが、もはや、前後に群がり寄った敵には近すぎた。

義忠は、槍を数間離れた敵に投げつけておいて、太刀を抜き討った。馬上から鮮やかに斬り下げている。

義忠の討ち死にしたときの様子については、諸説がある。

矢で傷ついたことは事実らしい。

槍で突きまくり、槍が使えなくなると、太刀を抜いて、斬り伏せつつ、縦横に馬を駈って敵勢を蹴散らし、首級をあげること少なくなかったという。

因みに、鎌倉時代以降、いわゆる古刀と呼ばれるものに名刀が多いのは、周知のことだが、これらが反りがふかいのは、馬上から斬り下げるのに都合がよいからである。

往昔の刀、ことに剣と呼ぶものは直刀か、反りが少ないのは、斬るよりも刺すことに重点をおいたのだが、武門が栄えて、武将にとって、馬上剣の効果が探究されるようになって、反りが深くなっていった。
刃が湾曲していれば、馬上から片手斬りにするのに、刃の部分が多く触れる原理である。
江戸時代に入ってからの、新刀が、しだいに反りを少なくしてきたのは、馬に乗っての戦いが、殆どなくなったからである。島原合戦が、その最後になっている。
幕末に至って復古刀と称して、直剣がもてはやされたのは、皇政復古のアジテーションの一つでもあるのだが、ともかく、この戦国初期に於て、武将らの用いた刀は多く、反りが深かったのは、右の理由による。
義忠は柄が血でぬらぬらするほど斬りまくっていた。
かれが斬り伏せた敵の首級は、従者が掻きとって担ぐ。こんな夜襲のときに、こうした首獲りは、おそろしく悠長で間抜けているようだが、当時は常識だった。
もっとも、首を是非ともとるのは、兜首だけである。それも急場の間にあわぬときは片耳をそぎとったり、鼻をそいだりする。
これは、むろん証拠だ。中には指を切ることがある。雑兵などの場合は、殆ど、そうする。
義忠の働きは、天眉うった公家顔にふさわしくない猛将そのもので、奇襲の敵はひるみたち、どっと退いた。
義忠は、馬上でほっと息をついて、
「この間に、陣容をたてなおせ」
と、下知した。
そのとき、矢がうなった。どこから飛来したかわからない。矢は義忠の脇腹に突き立った。巨体がぐらりと動いた。
「あ、殿！」
馬わきにいた某が思わず、両手を差し出した。
落ちてくる巨体を受けとめようとしたのだ。が、義忠は、凝っと、馬上で怺えた。
「——よい」
自分で、おりる、と言ったのである。
義忠は、馬上からおりた。が、矢は深く、そのまま、がっくり膝をついていた。
宿泊した寺から半丁ほどのところだった。
そこから、寺まで戻ることが出来なかったのだから、よほどの深傷だったらしい。
「殿を、あの家へ」
近くの民家へ数人で運びこんだ。
矢を抜きとろうとしたが、鏑矢が脾臓のあたりにくいこんでいて、抜くのは容易ではなかった。近隣に医者をもとめ、持参の金創などで圧えたが、出血がとまらない。
とにかく、この変事を告げばやとて、急使を駿府へ走らしたのだが、この比留間某という急使は、府中へついていない。
途中で消えた。逃げるなどということは考えられない。
途中で、一揆の者に殺されたのであろう。
早朝、義忠は、息をひきとった。その死を知らせる使者が、小芝だったのである。
因みに、義忠のこの享年には異説がある。
二十八歳。四十一歳。五十三歳。
歴史上の人物でも、戦国前期には、正確な年齢のわからない者が多いが、これほどの人物で、こんなに説がわかれるのは珍しい。
が、竜王丸の年齢や、かれの経歴からしてみて、連歌師の宗長手記の義忠誕生を永享八年とするあたりが、正しいのではあるまいか。
これだと四十一歳になる。
それはともかく——駿河の太守の横死は、府中を驚愕させた。
「何たることぞ、今川家にとってこの上ない不慮の出来事じゃ」
「若はいまだ幼いに……」
誰もが、次の代のことを考えた。
義忠は、ただ世襲の太守の座に晏如としていたのではない。その威名が、近隣諸国に対して、圧えとなっていた。
弱肉強食の乱世である。弱いと見れば、口実をもうけて攻めこんでくる。正といい悪というも、大義名分は、あとから、何とでもつけられるのである。
とにかく、強くなくては、生きてゆけない時代であった。
僅か八歳の幼君があとを継ぐ。これは、外敵の侮りをうけずにはいない。
「ともあれ、ただちに、四辺を固めねばならぬぞ」
「各被官大名を集めることじゃ、若への忠誠を確認せねば」
一族や重臣たちの狼狽を、新九郎は黙って見ていた。新参者の口出しするところではない。
その様子に、ふと夢子が気がついて、
「新九郎どのは、如何なる御考えあってか」
と、声をかけた。
兄妹ということになっているが、身分が違うから、みんなの前では、もの言いに気をつけている。
「いささかの考えはあるが、新参者ゆえ、控えております」
新九郎は、出しゃばる風がない。
こういう今川家のような名門にあっては、一族や老臣など、重役が多い。名門になるほど、縁者は増えてくるものだ。黙って控えている新九郎に、夢子が声をかけたのも、

新九郎の実力を知っているからだった。
「いまは、常とは違います」と、夢子は、みんなに聞えるように言った。「いかに新参の身でも、そなたは若君、いいえ新太守の縁に連なる者、この駿遠二国の興亡にかかわる大事のいま、遠慮しているときではありますまい」
「――さりながら」
と、新九郎は、なおも、一座の者たちの意志を聞こうとした。
迂闊には動かぬ。あせることはないのだ。
「かかる大国の武将方も多いのに新九郎一人の所存など、かえって……」
「いや、そうではない。申されるがよい」と朝比奈が膝を動かした。「おことは、広く世間を見ている。京でも将軍家に仕えていたそうだな。いろいろ方策もあろう、存じよりを申されよ」
「さ、それは、それがしにも、考えはあるが」
「申されよ」と、由比も、口を添えた。
「あとのことは、あとのことで考えるとして、いま、もっとも考えねばならぬことは」と、新九郎は、みんなを見まわして、「殿の死を、秘密にしておくことでござる」
「おお」
「即刻、急使を塩買坂へ向けられるがよい。一刻も早く、だ。あくまでも、殿は矢傷を負われただけのことにする」
「して、その後は、なんと」
「影武者を仕立てる」
「なるほど」
「恐れ多いが、殿の鎧を着て、堂々と帰府すること」
狼狽して、誰もそのことに気がつかなかったのである。
「急ぎ、早馬を立てよ。小者などは、口さがない者、世間へ洩れてはならぬ」
範満も、その意見に賛同した。
ただちに、早馬が立った。
「二ノ手はなんと？」
「殿の御凱陣と称して、各地の被官大名を集め、誓詞を出さしめた上で、殿の討ち死にを公けにする。若君の叙任を京へ申し出る。これも、早いほどよろしかろう」
新九郎の方策は、一々、肝要のところをさして、無駄がない。
一座が、酔ったように、その方策に耳を傾けているのを、夢子はうっとりとなって聞いていた。
（やはり、新九郎どのは……）
思った通り、大した男だった。新九郎がついていれば、竜王丸のことも安心だと思う。
義忠の死で、気が狂いそうに先行きの不安を感じた夢子だったが、新九郎の泰然たる様子にほっと、胸をなでおろすのだった。

女性にとって、男性とは、常に頼み甲斐ある存在でなければならない。
伊勢新九郎長氏の、ことに当って動じず、冷静に処理し、緻密な頭脳と、高ぶらず謙虚でありながら、的確で迅速な行動力は、夢子の不安をかき消してくれたのである。
事は新九郎の計画通りに運び、矢傷を蒙りながらも凱陣した義忠は、府中の屋形で死去したことになった。
帰国の途中で、土匪に襲われて死んだのと、たとえ、その傷がもとではあっても、おのれの屋形で死んだのとでは、あまりにも違う。
名誉がものをいう時代では、こういうことも、大きな意味をもつのである。
義忠の遺体は篤く葬られ、法号、長保寺殿と号し、桂山宗（昌）公大禅定門と諡されることになった。
城東郡高橋村の正林寺に義忠の墓があり、五輪塔が残っていたが、現在はどうなっているか。
この寺の東方の塚は義忠の死によって、殉死した十八人の忠臣を葬ったものといわれるが、詳らかにしない。
ともあれ、義忠の時代は去り、竜王丸（後の氏親）の時代が来たわけだが、未だ八歳という幼さが、家臣の間に、紛糾を起す結果となったのである。
いつの時代でも、権勢のあるところ、派閥がある。
大名は大名なりに、小名は小名なりの勢力分野がある。
人間の欲望は、理想にむかって発せられるよりも、利己心に走るほうが多いのは人間の常だ。
むろん、この時代でも、乱世の汚濁と地獄の劫火に呆れはて、悠々自適、心を無何有の郷に遊ばす者もいた。
いわゆる風流韻事である。駿河では有名な宗長などもその一人だし、高潔有徳の僧なども、いないではなかった。
が、そういう仏心・遊心の者などは、干戈を枕にする武辺者たちから見れば、
「生ける屍じゃわ」
として、笑殺されるだけだった。
乱世といい、戦国というも、常に、それは人によって作り出されるものだ。人間の業が生みだした乱世。
人はおのれの行為が劫火のもとになったとは知らず、いや、知ろうとせず、その劫火を怨み、もがきあばれて、なお、その火を蔓延させようとする。
欲望がつづくかぎり、世の乱れは治まらない。いま、義忠の横死によって、駿河はその火がちろちろと燃えはじめたのである。
火のもとは、今川新五郎範満だった。
範満の野望に賛意を表する連中が、八幡山の御殿に集まってきた。
範満の御殿に集まる連中には、二通りあった。
白昼堂々とやってくる者と、宵闇にまぎれ、あるいは、

早朝、朝靄をついてくる者と。世間ていを慮る者が多いのは、派閥を意識するからであろう。
「次代の御領主は範満どの」
と、見た者は、顔を見られても平気だったが、二股かける方はなるべく見られたくないのだ。
ところが、夜の組の中には二通りあったのである。
範満の方で、
「見つかっては不味い」
と、思っていた男がいる。
横大路介右衛門という、当時、梅ヶ谷の辺一円を領有していた男だ。
「――いよいよ、機は熟したぞ、ぬかりなくやれい」
ある夜、範満は命じた。
時雨が氷雨に変った冬の初めだった。いかにも冷たげな雨の音が戸外を濡らしている。
漆黒の闇の中に、誰も聞き耳たてているはずもないのだが、介右衛門は、話の間にも、何度か外を見た。
「びくびくすることはない」
「はあ、左様なことはありませぬさ、ただ、念には念を入れねば」
「成功すれば、そちには岳南一円をくれてやる」
範満は気前のいいところを見せた。
「それは忝けない」
岳南とは、いうまでもなく、富士山の南麓から海辺までの肥沃なあたり。沼津へんから、富士川辺までくらい。駿河の三分ノ一の収穫はある。
介右衛門も抜け目ない。
「では、そのこと、一筆頂けませぬかな」
「なんだと」
「ただいまのお話、お約束を」
「約束した。武士の約束だ」
「さりながら、万一それがしが討ち死したるときには、一族や伜どもに」
「――そうじゃな」
範満は、しまった、と思った。
二人きりの口約束ならあとから、どうにでも否定できると腹黒く計算していたが、こう始められては、それもいやだとは言えなくなる。
「それもそうだ、が」
「ははは、お疑い申すではございませぬよ。ただ、万一の場合」
「まあ、待て、その万一だ。それが、あちらへ洩れては、せっかくの計画も台無しになる」
「そのようなことは、それがしだけが知っている、大事なところへ納めておきまする」
そうまで言われては、否めない。

「よかろう、口が裂けても、洩らすまい」
範満は覚悟をきめて、一筆、したためた。
――此企計、成功の暁は、岳南一円、望みに任すもの也云々。
というものである。
範満は花押するとき、故意に筆をゆっくりと動かした。
花押は、いわば当時のサインである。一寸何を書いてあるのか、わからない。わからないところがミソなのだが、たいてい諱など一字を崩して書く。
この崩し方に一定の方法はあるのだが、あまりきちんと書いては、他との区別がなくなる。個性を出さないと、意味がない。
ところが、この筆勢と手の癖によって個的であるべき花押が、戦国中期以後、木彫の印判になった。
相変らず手で書く者もいたが、この印になったことで、信憑性がうすれてきた。
右筆が書いたものに、自署して花押する習慣が、自署だけになると、それだけ、稀薄になる。花押のほかに朱印を捺すという、二重三重の証拠が必要になってくる。
役所の判コ行政といわれるものも、こうしたことが、複雑化していった結果なのだが、範満がおのれの花押をゆっくりと書いたのは、丁寧なようでいて、そうではない。
署名には筆勢が要求される。その勢いをわざと撓めたのはいざというとき、
〝偽筆〟
と申し開きをする余地を残しておくためだった。
他人の筆勢を真似しようとすれば、勢い、ゆっくり書かねばならなくなる。
介右衛門には背をむけて、経机に向ったのである。
「――これでよかろう」
ふわりと投げた。
介右衛門は拝受して、
「忝けのうござります」
と、丁寧に畳んで懐中にした。
「では、よいな。かまえて、われら、同志の名を出すまい」
「それはもう」と、頭を下げたが、「御屋形様のほうでも、お手違いなきようになされて下され。もしも、御加勢なく、われら討ち死ということになれば」
金壺眼がちろちろと動いた。
(こやつ、おれを脅迫する気か)
と、範満は、ちょっと鼻白んだが、
「ははは、その心配はない」と、笑い飛ばした。「おれにとって、生涯一度の賭けじゃ」
「はい」
「おぬしは、おれの股肱ではないか」

「……」
「いや、右腕と言い直そうか」
「はい」
「おのれの右腕を斬り落す馬鹿は居るまい」
　そう言いながらも、範満は肚裡(はら)の中で、（右腕でも、瘭疽になったら斬らねばならんこともあるだろうがな）などと考えていた。
　介右衛門が来たときと同じように頭巾をかぶりひそやかに退出してゆくと、範満はうすく笑った。

叛乱

　野心を抱いた者は、天国と地獄の縁を歩いてゆく。一歩を誤れば、地獄に落ちるしかない。が、野心とは、地獄を意識の外に置くところから、出発する。
（おれが、駿遠の太守となるべきだ）
　武勇でも、人望でも、血統でも——どれをとっても、不足はない。そう認識したとき、小鹿新五郎範満の胸には、うつぼつたる野心が湧き上ったのである。
（竜王丸など、まだ八歳ではないか、あのような餓鬼に、何のことが出来る）
　いずれ、誰かが後見しなければならぬ。
　その後見役として、範満は最適な立場にある。が、いわば、縁の下の力持ち的な、その役目で、晏如たる男でないことも、人々は知っているのだ。
（おれは……）
と、ひとりいるときも、範満は肩をそびやかす。

（そうなるように生れついてきた……）
　そうなるべきだ。
とすら、考えた。
　かれの胸に野心が芽生えたのは幾歳のころか、判然とはしない。が、その野望は、義忠の死によって、逆に範満を勇気づけたのである。
（それ見ろ、運命は、おれを必要としていたではないか）
むしろ、そう運命づけられていたのだと、思った。
　野心も野望も、たとえ、それが私的な欲望によって裏付けされていたとしても、世間もまたその人材を必要だとすると、存在理由は生じてくるわけである。
　範満の自負は、その時代の流れによって、ふくれあがった。
「おれが立たねば」
と、公然と、かれは重臣らに言った。
「駿河の今川家は亡びる」
　そこまで揚言したと聞いて、顔色を変えた者たちも多い。
「不所存者が」「僭越な言葉じゃ」「駿府に竜王丸がおわすことを忘れたか」
　だが、その語尾が小さくすぼまったのは、竜王丸が八歳という幼年だったことである。八歳の幼児に、天下の大国を預けられるものではない。
「いかがなものか、一時、新五郎どのをして仮の……」
「いや、それは駄目だ。さようなことをしては、乗っとられてしまう」
「そうじゃ、たとえば、若君成人の暁は、太守の座を譲りわたすことと約定しても」
「守るような御仁ではない」
　衆目の見るところ、その点は一致していた。また、その傲慢さが、一種の人望となっていたのも、事実である。時代は、〝強い男〟を要望していたのだ。
　その範満は、次の日、あの妖女と逢った。
「おれの運命を占うてくれ」
　範満が直々に天殊のところへ来たのは、はじめてのことである。
　文殊堂を、
〝伏魔殿〟
と、誹り、
〝妖婦〟
と、侮蔑していた範満がである。
「まあ、それは！」ものに動じたことのない天殊が、そんな表情を見せたのも、あまりに意外だったからだ。「あの御方が……ほんとうに」
「はい」
「ほほほ、どういう風の吹きまわしでございましょう」
「あの赤主の占いが当ったので、気持をお改めになったの

ではありませぬか」
　巫女がお追従を言った。
　そんなに天殊は甘くはない。
「そうかしら、でも……」
　あのときは家臣の刑部が来た。
　どんなことがあっても、義忠に次ぐ権勢家の範満が自身で、このようなところへくるはずはない、と思っていたのだ。身分階級差の厳しい時代である。
　戦国時代は開放された時代だと単純に思われているが、血統や由緒などが、重みを失ってくるのはまだずっと後のことである。この文明年間はまだ、戦国時代に入ったばかりといっていい。
（どういうつもりか？）天殊は、着替えながら思った。
（何かある……）
　範満は、素直に非を認めるような男ではない。
　それがわざわざ来たということは、よほどのことだ。
「御家来衆が」
「それが、僅かで」
　と、巫女は指折り数えて、
「草履とり槍持ちなどの衆まで入れて十人たらずで」
「ほほほ、いよいよ面妖ですね」
　常識的に考えれば、出入りには三十人はついているはずだ。もともと、そういう、羽振りのよさを誇示することが好きな男なのである。
　ふっと、天殊の手が止った。
（あのことを?!）
　赤主のことで、東雲之助に頼まれた一件である。
　あの秘密が漏れたのではないか。
　東雲之助が赤主を発見する。範満に売りこむための策謀だった。赤主が入手出来なかったのは、久能山で失敗したせいで、東雲之助が突きとめた功績は、残っている。
　そのかぎりでは、東雲之助と天殊が組んだ計画は成功しているのである。
（――まさか、ばれてはいまい。そういうときは、下っ端の者が横柄な顔でやってくるはず）
　そう思いなおすと、天殊はいつもの冷静さをとりもどした。
　しずしずと神がかりに、雲間を歩くかのように、妖しい姿で出てゆくのだった。
「美しいな……」
　呆れたような顔になっていた。
　範満は、二度目であるにもかかわらず、その臈たけた妖しい美しさに呆然となった。
　女人にとって、年齢が定かでないというのは、一つの魅力である。殊に美しいだけに、幽艶な感じであった。

「先日は、そう思わなかったが、やはり文殊菩薩の生れ代りか……」
　小さく含み笑いが、これに応えた。そうだとも、そうでないとも言わないのである。
「本日は、如何なる御用にございましょう」
「まあ、急ぐことはない」
「………」
「あまりの美しさに、驚き、呆れているのだ」
「ほほほほ、お目もじ仕るのは、はじめてではございませぬ」
「だから、驚いた」
「………」
「逢うたびに綺麗になるのか」
「まあ、そのような」
「いやー、ほんとうだ。女人というのは、だいたい、誤魔化しがうまい」
「………」
「したがって、逢えば逢うほど、醜い面が出る」
「はい」
「つまり、化けの皮がはがれるわけだな」
「では、もうこれぎりにいたしましょう。三度は、お逢い致しますまい」
「いや、その美しさに、驚いたと申したではないか、三度目は、もっと美しくなっていような」
「御落胆なされましょう」
「逢いたくないな」
　と、強い声で言った。
　天殊が何か応えようとするのを目で抑えて、
「美しすぎるので、惚れると困る」
「………」
「おれは、美しい女人に弱い。つまり、惚れっぽいのだな」
「その代り、飽き易い……のではございませぬか」
「ならばよいが」
　と、たじろがない範満である。女にかけても、かなり自信がある。
「それが出来ぬゆえ、困っておる」
「仄聞いたしております」
「おれの女のことか」
「はい」
「ははは、ははは、どうせ嫉っかみ半分の、悪口であろう。世間と申すものは、とかく、色恋のことにかけてうるさい」
「――恋……」と、呟くように天殊は言った。「恋をなさいますか」
「せぬ。武将たるもの、女人に恋などせぬ」こう言い放っ

てから、ゆっくりとその言葉をくつがえしたのである。
「いままでは、な」
「……」
「女に恋したことのない、範満が、どうやら、恋のやっことなり果てたようじゃ」
恋のやっことなり果てた――と、男の告白を聞いて、天殊は、その奥深い妖しい瞳をまっすぐに、範満にむけた。
「――では、そのお悩みでございましょうか」
「ん?」
「どなたさまかに、想いを寄せて……お苦しみでございますか」
「――まあな」範満はおどけたように、口辺に笑いを漂わせた。「そういうわけらしい」
「運勢を占うとは……その女人との行末を」
「そういうことだ」
「わかりました。では早速に」
天殊は退っていった。
祭壇のある部屋には、灯明が点され、香が焚かれている。天殊が拝む間、範満は、座敷で待たされた。出されたのは酒である。
「よいのか、かかる御堂内で飲酒しても」
「御屋形さまは、特別でございます」
「特別か」はははは、とまた高笑いして、「文殊菩薩も、新五郎範満の無礼を許してくれるか」
「さあ」と、巫女は、首をかしげて、「わたくしには、わかりませぬ。天殊さまの仰せですから」
「なるほどな」
範満は、口髭をなでた。
一体、かれの言葉を、天殊は、どう受けとっているのか。あの謎を、理解しないのであろうか。
(あいつだとて、女であろう)
女ならば、わからぬはずはないはずだ。
範満は自信がある。女にかけての自信が、強い男の臭いとなって、さらに、女性をとらえるのである。
その男の自信は、ときには、鼻もちならないものになるが、女の特性である受動的な感情――時に被虐的であるその感情が、男の魅力に圧倒されるはずであった。
たいてい、会話しているとわかるものだが、
(手ごたえがないな)
のれんに腕押しというが、天殊の場合、まるで、
(香煙に腕押しだ……)
手ごたえがないだけでなく、かえって、こっちがのめりこんでしまう。
(そんなはずはない。あいつとて女だ、妖婦ではあるが……この文殊菩薩の衣裳を剝ぎとってしまえば、ただの女だ)

その語尾が、消えそうになるのを、強く打ち消した。
(女だ、やってみれば、わかる)
ただ、一筋縄でゆかぬのは、否めない。
小半刻たった。
「まだか」
肴を持ってきた巫女に言うと、
「はい、いま少し……」
「いま、少し、だな」
その少しの時間を、範満は、決心の時とした。かれは、暫くののち立ち上っている。神聖な場たる文殊堂へぬっと入っていった。
文殊堂は、この女陰陽師天殊がお籠りするところである。異様な香の匂いに満ち、範満には催淫のそれではないかと思われた。
並の量ではない。まるで、けむりのように、室内に籠っていた。
香煙は、ゆらゆらとたゆたい、出口を失って、天井から、文殊菩薩の御厨子を飾った祭壇にまつわり、室内にたちこめて、いちめんに、霞のように、立ちこめていたのである。
その中で、天殊はきちんと正座し、何やら呪文を唱えている。
範満は、意外な面持ちで、佇立した。まさか、ここまで、真剣に祈っているとは思わなかったのである。
(どうせ、まやかしであろう)
文殊堂へ籠れば、愚昧な連中はきれいに瞞される。
中で昼寝していようと、
(鼻糞をほじくっていようと、わからぬからの)
そうして、とり澄ました顔で出てくるのではないか。そのいかさまをあばいてやるのも面白い、と思った。
もっとも、範満が、ここへ自ら出張って来たのはそのためではない。もっと重要な理由があったのである。
だが、範満という男は、その目的にひとすじになるほど、単純でも律義でもない。死にかけていても、傍に女の乳房があれば、手を伸ばすだろう。
濃い香煙のなかで、天殊の姿態は、一心になっているだけに、男の興味をそそった。
範満は、うしろ手で板戸を閉めた。そしてつかつかと、天殊に近づいた。
呪文がふっと、跡切れた。
天殊はふりむいた。
その虚ろな瞳は、まだ夢を見ているようであり、うつぼつと胸に情感の盛り上った男には、いいようもなく妖美なものに見えた。
「――天殊」
と、身をかがめたとき、範満の声はわれになくかすれていた。

「わかったか」
「……」
「おれの想う女」
「……」
「天殊、そなただ」
「え!?」
「おれには、心を奪われた女など、他にはいない」
「……」
「そなただ。そなたの妖しい美しさに、おれは、恋をした」
「――そのような」
天殊は身を顫わせた。しなやかに身をひねって、逃れようとした。
「何を仰せられまするやら」
「思うたままを言うたまでよ」
「聞えませなんだ」と天殊は、手をするりと逃れた。「聞えませぬ。見えませぬ。天殊は、けがれのないからだでございます」
「人間であろう、人間とは、まぐわい楽しみをわかち合うものよ」
範満はおどりかかった。
天殊は、男の手を拒んだ。
が、あとから考えてみれば、その拒みようには、多分に、余裕と計算が作用していたようである。
余裕とは、拒みきれる、という自信ではない。
腹づもりでは、
（範満の自由にさせて……）
という、狡猾な女の計算があった。
あくまでも拒む――つまり、自分は否定していたのに犯された、という体を装うことで、立場を有利にするのだ。
天殊が、その魅力的な流し目で範満を見たときから、すでにその算盤ははじかれていたのである。
「そなたほどの女、一人でおくのは惜しい」
あえぎつつ、緋の袴の帯を片手でほどきながら範満は言った。
「いけませぬ、放して」
「放さぬわい」
「はしたないことを」
「なんの、これが人の世のふるまいよ。文珠山では、せぬかもしれぬが」
「声を立てます」
と、天殊は、男の手が、袴の下に入ったとき、言いしれぬ悦びで腰をふるわしながら、
「御身分にさわりまする」
「左様なことがあるものか」
「……」

「新五郎も男じゃと、手を打って、ほめたたえてくれようものを」
そう言われてしまえば、女はどうすることもできない。
事実、天殊のからだは、もう、期待と、悦びでふるえている。
男の強い力が、これほどうれしいものだとは、知らなかったように、天殊は、腕のなかであえいだ。
上気した面てが、﨟たけた女の美しさを、一層華やいだものにして、範満の感興を煽った。
「よいぞ、よいぞ」
とうとう袴を足で、蹴たぐるように脱がせてしまい、雪白の小袖も脱がせかけた。
強引に肩からまくると、くるりと、うで卵の皮を剝いたように、乳色の肩の皮膚があらわれた。
範満は、そこに唇をあて、女のほそいくびすじから、その肩、胸へと、狂ったように頰ずりをし、乳房へ唇を這わしていった。
「ああ、いけない……」
それでも、天殊は、そう叫んでいる。いや、呟いた、というほうがいいかもしれない。
板戸の外へ聞えない程度に、範満の耳に、女の媚々しさと聞える程度に――それは、紅唇から発せられたのだ。
板戸の外に聞えてはならないのだ。うすうすは知られても、そこまでしては、事が大きくなる。事を大きくすることはなかった。
範満と、つながりが出来ればそれでよかった。
被害者顔をしながら、性の快楽を貪り、加えて、この不安定な地位を固めようとする女の狡智は、さすがに範満も気がつかない。
およそ四半刻ほどのち――
いまの時間にして、十五分ぐらいか。範満は、漸く、天殊のからだから、身を起した。
かれは、いつになく、よごれたところをおのれで始末した。
この男、こういうことを、自分でしたことはない。やはり名門の生れで、女がいつも、そのあとを、きれいに浄めた。
天殊は、それをしない。あたかも、十三、四歳の少女が、はじめて、ことを行ったように、何も知らぬうちに、男に凌辱されたように、ぐたりとなって、横たわっていた。
「――佳い肌だ」
範満の、そんな言葉は、いささか弁解じみていた。
「はじめてだったのか？」
「……」
「そなた？……」

女には狎れた男だったが、天殊の肌は、何とも判断がつきかねた。
　十七歳とも三十七歳とも見える、といわれるだけに、処女かと思えば、それらしくあるし、男を知っていると思えば、そのようでもある。
　はっきりと、女体は反応を示したのだ。
　成熟した女は、感じ易い者も、鈍い者もいる。反応がはげしかったからといって、必ずしも、男狎れしたともいえないし、反応がなくても、処女だったともいえないのである。
　早熟で、情感が豊かであれば、男を受け入れる態勢が出来ている。
　燃える燃えないは、女自身の情念の如何にかかることが多い。単に、性感帯の敏と鈍との差にとどまらない。
　天殊のように理性のかった女は他の女にはない自意識の作用があるのだ。その動きが、普通の女にはない反応があって、男の好奇心をくすぐるのである。
「天殊よ……」
と、また手を延ばしたとき、板戸の外で声がした。
「お屋形さま……」
　範満を呼ぶ声だった。
　かれは目をあげ、それから手を放した。
　その放しかたが、悪事をしていて、突然の声に咎められて手を放したというより、何か予期していたもののような感じだったのである。
　天殊は、うす目をあけて、その男の挙動を見た。
　範満は立ち上っている。天殊の肌に未練もなく、板戸を開けていた。
「何じゃ」
「一大事にござりまする」と、従者は、昂奮をかくしもせずに言った。「謀叛にござる」
「なに」
「謀叛にござる、梅ヶ谷に旗が立ち申した」
「梅ヶ谷？　……」と、範満は聞きかえしている。「横大路か」
「はい」
「介右衛門が謀叛を？」
　範満はこうくどく念を押し、天殊をふりかえった。
「妙なことになった」
「大事が？　……」
　身を起して、衣紋をとりつくろいながら、天殊は、この突発事件に、どう対処すべきか、迷っているようであった。
「せっかくのところを、妙なことで邪魔されたな」
　白い歯を見せて、範満は出ていった。
　かれは、その足で、今川屋形を訪れている。
　そのころは、すでに物具した武士たちが、右往左往し、

屋形の前には、鹿柴を並べ、頬を緊張で引き攣らしていた。抜き身の槍や薙刀をかいこみ、出入りする者たちへ、一人一人、きびしい眼をむけているのである。
　街の空気も、
「戦さじゃぞ」
と、囁き交して、気早な者は家財を持ち出しているのもいた。どこへ運んでゆこうとするのか、その波紋は、今川屋形周辺からしだいにひろがってゆくにちがいなかった。
　この殺気だったなかを、範満は数人の従者を従えただけで、悠々と通った。僅かに、馬の口とりと槍持ち、草履とりの三人。
　その他の者は、帰したのである。
　わざと供廻りを最少の人数にしぼったのはその寛闊な平服と相まって、範満をこの事件と無関係に見せた。すべては、かれの狡猾な企みであった。
「若君の御機嫌を伺いに新五郎がまいったと取次ぐがよい」
　範満は、悠然として、屋形侍に言った。
　一族重臣の中から、謀叛する者が出たとあれば、誰かれなしに猜疑の眼をむけるのはしかたがない。
　だが、この鎧武者たちの中に平気で平服でやってくる、それも小者三人しか連れていないと聞いて、新九郎と夢子は、意外な顔を見あわせた。
（彼奴が……）
　もっとも懸念せねばならぬ男が、どういうつもりか。
「臭いな」と、新九郎は言った。「油断はならぬ」
「そうでしょうか」
「横大路謀叛のことはすでに聞いているはず、あまりにも、異様でござる」
「でも……」
「逆もまた真、と申す」
「……」
「尺とり虫の延びんとするには、まず屈む、との諺もある」
　そこへ範満は通されてきた。
「若君の御安否、如何かと案じ、馳せつけましたが」
ぬけぬけと言った。
　文殊堂で菩薩の天声に耳を傾けていたところでござる、と信心ぶかい顔をしてみせる範満だった。
　信仰心というものは、女の心をとろかす最大の武器である。この時代、人は猜疑と憎悪の中で生きている。信心ぶかいということは、それだけで、一つの人間的資格に思えた。
　範満の野望は、疑いのないところであるにもかかわらず、正面から堂々とこう言われると、その仮面の下の悪心までは女にわからなくなってくる。

「文殊堂に……天殊どのと」
「左様。あの者は、御当家の盛運を念じておりました」
「……」
「それがしも、そのことにて」
そこで範満は、哀しげな顔をしてみせた。
「お屋形の不幸を奇貨おくべしとなしての謀叛とは、なんたる不忠の者か」
「ただちに討手をむけたく思いまする」夢子は言った。
「軍勢を催して下され」
「先鋒を承りましょうぞ」
第三者が見たら、いかにも頼母しげであったろう。
「したが、横大路めは一体、いかなることを」
「突然でした。横大路の手の者二、三十人ばかりが、騎馬にて、攻めよせ来り、火矢を放ち、今川家の当主たるには」
言いさして、夢子は、さすがに口を噤んだ。
「それがしが申そう」新九郎が、あとをひきとった。「竜王丸ぎみにては不足、とかように呼ばわったな」
「それは……」
「竜王丸ぎみにて不足とは、誰ならば満足ということか」
新九郎は、じろりと範満を見かえした。が、こたえない。面の皮は、人一倍厚いのである。
「まことにもって慮外な」と、驚いてみせ、さらに憤って見せた。「慮外千万。早速に軍勢をむけ、梅ヶ谷の屋敷を地獄火で灰燼にしてくれましょう」
憤りを抑えかねた如く、膝を起して、
「われらだけでは、万が一、逃げられてはならぬゆえ、瀬名、関口、名古谷どもを語ろうて」
「いや、それほどまでにせずともよろしかろうがな」新九郎は、凝っと、かれの眼を見て言った。「横大路はたかが二十貫ほどの所領とか、軍勢とてもしれたものであろう。これを除くに、大軍を催すのは如何かと思うが」
「いやいや、それは新九郎、おぬし、考えが浅い。横大路いちにんなれば、さしたることはないが、隣国に通じていたならば、なんとする。まず、他と断ち、しかるべき上で、押し包み、討つ。これが兵略よ」
肩を振って去ってゆく範満を見送って、新九郎は、
「狸には狐だな」
と、立ち上った。
（上手の手から水が洩れる……彼奴、うかと本心を洩らしたな）
新九郎は、一つ範満の弱点を握った、と思った。
（あまりにも、わざとらしい。彼奴のほうでは、充分に策を練ったつもりであろうが、その手には乗らぬぞ）
謀叛騒ぎの中に、わざと平服姿で伺候して、他意ないところを見せる。みんなが周章狼狽しているときに、悠然と

した態を見せれば、それだけでも、人の尊敬を得られる。そうやって夢子や竜王丸を安心させておいて、軍勢を動員する。
（謀叛人を討つ、といえば、いくら人馬を集めてもいいわけだ……狙いはそこにあったのか）
前にも少しふれたが、当時の武門政治は、まだ後世のように武士集団というものが、闘争を主体として、戦争に明け暮れるというところまではいっていない。
今川家にしても、守護大名として、駿遠二国を差配してはいても常時数万の武士たちを、徒食させるだけの経済的余裕もない。武士が必要なのは、戦争のときだけで、その他のときはいうならば不必要な存在だった。
したがって、一家眷族と、その屋形を守るための武士がいれば、用はたりる。それぞれの所領を与えている地方の被官大名らを、イザというときに動員する。
その実権さえ握っていればいいわけである。
日ごろは、五穀や布帛あるいは海産物その他小物成りの貢進を受け、貯財し、戦備の用意を怠っていなければ、いい。
あくまでも国の守護として、足利将軍に任命され、関東公方たる管領（かんれい）の監督下にあるという、この組織の中で動いているかぎり、現在の地方自治のように、あるいは日銀の支配下にある地方銀行のように、潰れることがない。
のちの世のような、群雄割拠の暴力さえあれば、天下がとれるといった時代ではない。
範満の胸に野心があったとしても、あくまでも今川家の一族として、その名門の血統の上での首班争いなのである。
（範満が股肱とたのんでいるのは、すりゃ、瀬名、関口、名古谷だな……）
それだけでも目安がついた。
うっかり口にしたのだ。
ほかにも、一族としては、新野、入野など、豪族がいるが、先の三人が、陰謀の同志であることは間違いない。
かれらは、早速牒を持って、軍勢を動員し、駿府に集まってくるにちがいない。
（梅ヶ谷の横大路を討伐に、と称して、この今川屋形に矛先をむけるに相違ない）
新九郎は、そう読んだ。
こうなると、竜王丸に忠誠を誓う反対勢力を集めるしかない。
「どうしましょう」
夢子は、範満の企みを耳にすると、顔色を失った。
「新九郎さま……」
人目がないところでは、夢子は、北川どのでもないし北川御前でもない。一人の気の弱い女になる。わが子の将来

を案じる母に還る。

「範満どのが、すでに瀬名、名古谷の者たちを語らっているとすれば、数万の大軍となりましょう」

「あるいはな」

「こちらには、どれだけ集まるやら見当もつきませぬ」

もう、夢子は、いまにも、その軍勢が怒濤のように鯨波をあげて雪崩れこんでくるような気がして、落着かない。

「まあ、気をしずめるのだ」

新九郎は笑った。

ひき寄せると、口を吸った。あっと、夢子は、顔をふった。避けようとしたが、新九郎の唇は、的確に花の唇を吸っている。

夢子はその感触にとろとろとなりかけた。いままで、新九郎があらわれて以来、抑えてきた感情であった。新九郎のからだに惹かれるものと、竜王丸の母たる立場を思っての自制との相剋に苦しんできたのが、その一瞬に、破られたようであった。

むろん、その自制は、道徳的なものではない。

あくまでも、

(あたしが感情に溺れると、竜王丸の将来が……)

女である前に、母であることの自戒だった。

いうまでもなく、

(今川の権力を)

わが子の手に、と思う母の心である。この竜王丸のためには、それこそ、身を捨てても、という気持がある。

それだけに、女体の疼きよりはそのほうが優先した。賢しらな女の智慧だった。

女の肌の疼き――情欲の誘いに耐えられたのも、竜王丸の母たる立場のゆえである。それが、突然、襲ってきたのだ。

人目がないとはいえ、男の匂いの中で、夢子はもがいた。

「いけませぬ……」

男の唇の感触と分厚い舌の動きの中で、そう言ったつもりだったが、言葉にはならなかった。

新九郎は、両腕に、女のからだを抱えこみ、唇をむさぼりながら、久しぶりの甘いまじわりにのめりこんでいた。

京での思い出が絵巻物をくり展げるように、脳裏を掠めていく。

(あれから何年になろう?)

ぬめりとした唇の感触と甘酸っぱい唾液にくるまれて、

(やはり、こうなるような、めぐり合わせなのだ……)

と、思っていた。

夢子の手にも、力がこもった。そのからだは、こまかく、顫えている。まるでそれは、男に次の行為を促しているかのようであった。

「万一ということがある。お味方に頼める者どもに、ひそかに意を通じておきましょうぞ」

新九郎は、顔をあげて言った。

唇は濡れていた。まじわった舌の味が、まだ、夢子を呆然と虚脱させている。

「十中の八九、範満は、反旗をひるがえすはず」

「……」

「梅ヶ谷を討つと号して、軍勢を催したれば、敵は梅ヶ谷にあらずして、この屋形へ向ってくることは必定」

「まあ……」

「大地を打つ槌ははずれても、この目に狂いはない」

「それでは、お味方を」

「瀬名、関口、名古谷はまず敵と見てよい。新野、入野など、何と出るか」

「……」

「御当家一族方は、範満につく者が多いと見てよろしい。若にお味方する者あれば、その分は儲けものと考えた方がよい」

「そうでしょうか」

「案じてみられよ。範満の一族類縁は多い。が、このほうは、そなたの縁辺は、この新九郎一人。それも新参者で、勢力がない。みんな悧口じゃ、酒樽が二つあるとすれば、蓋のあいたほうへ柄杓を出す。中身がわからねば、誰でも二ノ足ふむ。それが人情よ」

「ああ、竜王は、竜王はどうなりましょう」

「そのゆえにお味方だ。重臣にひそかに牒を出そう、これまで、そなたと若に、好意を寄せていた武将は」

「はい……」

「三浦どの、朝比奈どの、庵原どの……」

「三浦次郎左衛門に朝比奈帯刀か」

「――由比民部どのも、多分、お味方に」

「早い方がよい。一刻遅れれば、一刻だけ、陣営が崩れたと思うことだ」

新九郎は別間に入ると衣類を脱ぎ捨てて、下帯一つになった。

夢子が選んでくれた侍女の一人に命じて、小者が着るような粗末な小袖を持って来させた。

「よいか、このことは秘密だぞ」

「はい」

「誰にも口外してはならぬ」

こうなると、屋形の内部にも敵の手が入りこんでいると見なければならなかった。

そのことを注意して、夢子に選ばせた女である。

侍女の名は、乃里と、称った。

「珍しい名だな、が、いい名だ」

新九郎が微笑すると、乃里はうれしそうに頬を染めて、

「わたくしも、好きです」

はっきりと言った。

眼が大きくひらいて、黒い瞳がいっぱいの感じだった。
この時代は、こうした顔はあまり美人のうちに入らない。が新九郎は、その大きな眼を好ましいと思った。新九郎の裸を、その眼は、眩しそうに見ている。
新九郎は小者の着物をとりあげた。小者にやつすのだ。
新九郎は、直垂を脱ぎ捨て、よれよれの袴に、手細（てぼそ）と呼ばれる袖の短いものを着た。
新九郎の腕は太い。鍛えた肉塊が、閂のようだ。袴も四幅袴で行商人や漁師の着るものだった。
刀だけは、長い打ち刀を差した。
「どうだ」と、新九郎は両手をひろげて見せた。「似合うか」
「似合いませぬ」小首をかしげて、乃里ははっきりと言う。
「借り着ということが、誰にでもわかります」
「そうか、それァいかんな」
髪のかたちか、と思ったが、そうではない。やつす、というのは、やつしたという意識があっては、成功しない。
「なりきらねばいかんな」
「なりきるとは、何にです」
「牢人者さ。おれ自身も牢人者にはちがいないが、そうだなあ、腹減らしで、がつがつしていて、戦さがあれば、すぐに飛びつく」
「……」
「雑兵の端に加えてもらって、お扶持を頂く、粟飯の一炊きにありつけばいい、うまくいって拾い首でもして、三人扶持にでもなりゃ、儲けもの……その程度に考えているやつさ」
女は、口に手をあてて、笑いを抑えた。
「それは無理でございましょう」
「なぜだ」
「新九郎さまには、無理だと思います」
「だから、なぜだと聞いておる」
「新九郎さまには、そういうお気持がありませぬ」
「……」
「そういう気持になりきるには、ひもじい思いをせねば、とてもその顔には」
「なんの、おれも、ひもじい思いは、随分したぞ、心得ているわ」
問題は、逆境におちても、それをどう受けとめるか、だ。乃里が言っているのは、そのことであろう。
新九郎は、常に明るく、平然として余裕を失わない。おのれを信じ、おのれの明日を信じている。
(明日は、おれのためにある)
おのれの行く道は、目の前に通っている。ただ、それが草に隠れ、茨に蔽われているだけなのだ。
それは切りひらきさえすれば、臆せずに進みさえすれば

道はおのずと、おのれを迎えてくれる。
そう信じて歩みつづけてきた新九郎である。逆境におちても絶望はしない。表情にいやしげなものがない。むしろ困苦は、かれを逞しくし、鍛えるものだと受けとめる。
「では、こうすればよかろう」
新九郎は、縁からおりると、土をすくって顔に塗った。土を顔に塗りつけただけでは、まだ充分ではない。
梅干しで顔に二つ三つ腫瘍をこしらえ、さらに鍔に紐を通して片眼を蔽った。
「これでどうだ？　おれとは、わかるまい」
「はい……やつしでございますね」
女は小首をかしげて見ていたが、
「おきれいすぎまする」
「何のことだ」
「お待ち下さいまし」
女は手焙りの傍へよると、灰を掬って、新九郎の髪の上にはらはらとふりかけた。
「ぺっぺっ、これはひどいな」
「はい、やっと……新九郎さまとはわからなくなりました。でも、なるべくお知り人には」
「顔を合わせぬようにせねばな」
新九郎は、おもしろそうににやりとした。
このやつしを自ら楽しんでいるふうである。
今川家中の重だったところには、一々引き合わされている。
殊に範満の屋形では、闘鶏のときよく顔を知られているし、いかに変装しても難しいが、そのほかではこれだけ工夫を凝らせばまず大丈夫であろう。
新九郎が、ひそかに屋形を出て行った先は、名古谷大膳大夫の屋敷だった。
山を背負い、川に面した名古谷屋敷は、門前に大篝火をいくつも焚き、幔幕を張り、鹿垣を結い、足軽たちが抜き身をぎらつかせて、ものものしい様子だった。
農民たちが米俵を運びこんでいる。一方では蓆の上に米を盛り上げて、これを升ですくい、雑兵たちにわけている。緡（さし）にした銭の山もある。
「さあ、腕と力に自信のあるやつはいないか、この合戦に手がらをたて、功名してみる気はないか」
割れ鐘声で怒鳴っているのは戦場往来の名残りを凄まじい刀傷に見せた強者である。
雑兵を募っているのだ。戦争がはじまって徴募とは、ずいぶんのんびりした話だが、当時はまだのびやかなものがある。
侍という職業が、後世ほど確立されていなかった。足軽を含めて、侍の大半は、日ごろは農事にはげんでいる。
武将たちは、所領に住み、いざ合戦となると、兵を率い

て馳せ参じるのである。
つまり、「いざ鎌倉」の風習が、まだ残っている。
この名古谷大膳大夫も、そのように、牒を受けるや、兵を集めている。日ごろの勢力だけではたりないので、銭と米を直接給付ということで、あさっているのだ。
のっそりと新九郎は、そこへ近よった。
「きさまもか」
「へえ」
「強そうだな」
「――力ならあるぞ」
新九郎は、太い腕の力こぶをつくってみせた。
「槍も使うぞ」
雑兵の一人の槍を借りると、あっと思う間に、その槍で米俵を突き刺した。
突き刺すというより、ぱっとはねあげたのだ。誰も止めるひまがない。それほど素早い行為だった。米俵が宙に高く飛び上る。
「それ！」
新九郎は槍を捨てた。米俵は、落下するにしたがい凄まじい速さと重さで、新九郎の頭上に落ちてきた。
ひょいと、身をそらして、すぽりと抱きとめる。はたから見ると、まるで綿の包みでも扱うような、軽々とした様子だった。
これをもとのところへ置いて、
「どうだ」
と言ったが、美味い茶を飲んだあとのように爽やかな感じだった。
みんな唖然として、暫くはものが言えない。やれとも言わないうちに、軽々として見せたことで、ど胆をぬかれたのだ。
「よく見たかい。見損ったらもう一ぺんやってみせてもよい」
「い、いや、よく見た」
と、言った男も、まだ、狐につままれたような気持で、その眼にうつったことが、現実とは思えないようであった。
（目くらましにかかったのではないか）
という顔だった。
「どうだ、ひとはたらきするぞ、雇わぬか」
「よ、よろしいとも」係りの侍は早速、足軽の小頭を呼んで、「お前の組へ入れてやれ」
ここへ名を書いて、あっちで米と銭を受けとれ、と言った。
「名前を書くのか」
「そうじゃ、どこの生れで、名は何と申す」
「生れは清水でな、名はやすけ」
「やすけ？　どんな字だ」

「知らん」
「矢は弓矢の矢か」
「知らん」
と、新九郎はくりかえした。魯鈍な顔をしてみせた。
「そうか、では、弓矢の矢にしておこうな」
矢助、と書いた。
この時代の雑兵だ。名前すら書くことが出来ない者が大半だ。なまじ、字が書けると、疑われる。いくら稚拙に書いても、字は人なりで、人格まで見抜かれる。
腕が強ければ、それでよい。所詮、雑兵などは一時の戦力として利用されるだけなのだ。
こうして、新九郎は、うまく名古谷大膳大夫の雑兵にもぐりこんだ。
（さあ、どうでるかだ）
名古谷が範満の腹心がどうか、その動きでわかる。
「梅ヶ谷の軍勢はどれくらいでしょう」
「およそ八百ほどでございましょう」
「その他の連中は」
「関口左京亮景良のもとに五百余、名古谷大膳大夫に六百ほど……」
「肝腎の範満が三千というところですね」
夢子は首をかしげた。今川家に忠誠を尽くす者たちの数はどうなっているのか。女人の身では、すぐに数字が浮ばない。
（どうすればよいか）
新九郎が名古谷の軍に細作に入っていったあと、夢子が動かなければならなかった。
腹心の者は少数である。誰それが、味方に馳せ参じるか見当もつかないのだ。
それは、範満が、どのように、手を伸ばしているかにかかってくる。
梅ヶ谷の横大路介右衛門に蜂起させることで、範満が、どのような秘策を練ったかは、夢子たちにははっきりとわからない。
が、その動きは、一つのバロメーターにはなった。範満としては、充分、成算があったのであろうが、介右衛門ほどは態度を明らかにしていない者が多い。
一つ間違うと、家も名も失い、一族がむくろをさらすことになるから、なかなか大勢が決するまでは、態度を表明しない。
範満が手をまわして、
（おれの味方に）
と、申しおくるにしても、相手の腹がわからない以上、誰かれにというわけにはいかない。
よほど、かれの恩寵をうけたものか、義理のあるものかでなければ。そうでないと、かえって、その証拠を握られ

る。つまり、逆目になる。
範満としては、その辺のところは充分、考えての行動だったが、人間は複雑だ。味方と思っていても、いつ敵になるかわからぬ。まして、同族であり、同国内でのことだから、うかつには、誰も動けないのだ。
範満は、牒をまわすにしても、まだ腹のわからぬ相手には、はっきりと目的を書かずに婚姻のことで、話がしたい、とか、産物の買い付けのことなどを匂わせるという巧妙な手を用いていた。
範満の勢力は、とにかく、駿河では、お屋形たる義忠の次に位するものであるのは、誰も認めているところだったから、その範満との関係が深くなることに関しては、誰も否定するはずがない。
その上、人間は、おのれが、それだけ認められた、ということがうれしいものだ。
しかし、心ある者は、
（何を考えてのことか）
と、反撥する者もいた。その人々の中には、範満の野望を敏感に見抜いていた者もいたのである。
一番に駆けつけたのは三浦次郎左衛門の軍勢四百三十人であった。
その馬蹄の音がどろどろと東の方からひびいてきたとき、
「素破！　敵の押し寄せたるぞ」
と、今川屋形では狼狽して矢倉の物見へ怒鳴った。
「旗印は見えぬか、横大路の勢の押し寄せてか」
矢倉は、後世のような高層の塗り壁ではない。丸太を井桁組みにした簡単なものである。
昇り降りに射落されぬように、ところどころ楯板をうち、最上部には屋根を乗せ、楯板の囲いがしてある。
夜目遠目の利く者が、小手をかざして目を光らしていたが、
「いまだ、文様が見えませぬわい、いま少し……」と焦りを声にして、「ええい、この暗さでは……」
もはや夕闇が迫っている。
夜討ち朝駆け、というが、季節や月の盈ち欠けによっても違ってくる。
夕闇は刻一刻と濃くなってくる。その中にへんぽんとひるがえる、旗から、家紋を見さだめるのが、物見の役だ。
敵か味方かわからないとあっては、
「固めよ、四門を固めよ」
と、屋形侍たちは、声をからして、
「弓組、矢はざまに並べ」
その用意のうちに、
「見えましたぞ」
矢倉から、声がおちて来た。

「何の紋じゃァ」
下から、大声で聞きかえす。
「まだ判然とはしませぬが、どうやら桔梗のような……」
「なんと！」
「一重桔梗のごとくに見えまするわい」
「すりゃ、新五郎が……」
新五郎範満の紋所は、今川家の赤鳥（垢取）紋であるが、替紋を幾つかもっている。一重桔梗はその一つである。
「桔梗のような……」
といった言葉で、屋形の中は、騒然となったが、
「や、違いました」
と、また声が落ちてきた。
「違いました、あの旗こそは、かたばみじゃ」
「なに、かたばみ？」
「大かたばみにござる。かたばみ草でござるぞ」
声がはずんだのは、それが三浦次郎左衛門の家紋であったからだ。三浦は、義忠が目をかけていた者で、（三浦こそは、間違いなく、竜王丸のお味方）と、夢子も信じていたのだ。
「大かたばみに違いありませぬ。三浦次郎左の軍勢じゃ」
ほっと、屋形のうちに、安堵の色が流れたとき、ただ一騎、まっしぐらに駆けつけてきた先乗りの武者が、
「これは三浦次郎左が家人にて同苗金六、御警固に罷り越しました」
と、大音声に呼ばわった。
桔梗と酢漿草はたしかに遠目には似ている。物見も、動顚していて、最初は見違えたのだ。
大かたばみは、三浦次郎左衛門の家紋である。
向背の定かならぬ今川の被官大名の中で、三浦だけは間違いなく、義忠の遺児竜王丸に忠誠を尽くすにちがいないと思われている。
その三浦の軍勢を皮切りに、朝比奈帯刀、庵原遠江介、由比民部などが、三百、五百、と手勢を率いて駆けつけてきた。
いずれも、まず、先乗りが来た。
こういう場合の先乗りは、味方であることを知らせるためである。
つまり急襲ではないことを伝えるためで、したがって、門前までくると、槍と刀を捨て、いわゆる〃まるはだか〃になって、城内へ入る。
自らを人質にする。もしも、軍勢が敵対行為をした場合は、血祭りにあげられてもしかたがない。
そうやって、味方であることを証明した三浦たちの軍勢は屋形の周辺を、二重三重に、固めた。楯板を並べ、逆茂木をからみあわせ、さらに、鹿垣を結いまわす。
敵の騎馬に蹴散らされないためであり、足軽らの槍に突

き崩されない用心である。

この配軍が殆ど整ったころ、範満の軍勢が勢揃いしたという報告が入った。

新五郎範満は今川家最強の勢力がある。かれの野望に対するには、必要以上の備えがいる。

範満のもとから来た使番は、武者一騎に従卒二人で、今川屋形にくると、

「これより、梅ヶ谷に向いまするぞ」

と、告げて踵をかえした。

屋形のかためが厳重で、手を出せないことを知ったのだ。

抜け目ない範満だけに、戦略には長けている。予定の行動を変更したのだ。

範満は第二の方策をとった。

梅ヶ谷へ——

範満の軍勢一千が向った。

中備え、後備えとなるべき残りの二千は、谷津山沓谷の範満の屋形の周辺に配置された。

これは、

「いざという際の、今川屋形を守るための」

と、標榜していたが、実は竜王丸がたから、不意を衝いて襲われるかもしれないという、用意のためだった。

姦策を企む者は、相手の心をも悪意でしか考えないものである。

だが、もしも範満が、さらに一段と賢明であったら、全軍あげて梅ヶ谷へ向わせるべきだった。

そうすることで、叛意のないことを明らかにした方が、竜王丸がたで安心したはずだった。

狡智の限界か。そこまで、智慧がまわらなかったのか。

だが、範満には、確信があった。

（おれが梅ヶ谷へ向えば、北川どのは安心する）と、胸算用した。（あわよくば、三浦らの軍勢の大半を梅ヶ谷へまわすにちがいない）

その隙に、関口左京亮と名古谷大膳大夫、久野佐渡守、奥山民部少輔らが、一気に屋形へ襲いかかる。

その手はずだった。その予定が狂ったのは、屋形の布陣が鉄壁だったからである。

「とてもに破れますまい」

関口のところから使番が飛牒を持ってきた。

〝屋形攻め〟のことは、かなりの身分の者にも秘密にしてある。

同国同族での争いだから出来得るかぎり、態度を表明しないほうが、目的に近づける。

屋形攻めが難しいとなると、範満は第三の方法をとらなければならなくなった。

「指令を待て」

と言い送った。

久野佐渡守のところからも、使番が来た。

これは屋形の搦手を突かせることになっていたのだ。

久野の飛牒には、

〝五合の升に二合は不入〟

と、あった。

一寸見ると、おかしな文言だ。反対ならばわかる。

つまり、屋形の布陣が我が勢力の倍以上だということである。攻めこむことが難いという隠語なのだ。

つづいて、名古谷大膳大夫からも同じような牒が来た。

この場合もう一行、別の文句が、添えてあった。

〝小物成り、本年は少し〟

小物成りとは五穀以外の産物のことである。

隠語で正規の士卒以外をさしているのであろう。範満は唇を噛んだ。

第三の方策も挫折したのだ。

（第四の方策を……）

そう思いたったとき範満の顔は冷酷な鬼相を呈した。

（奴には死んでもらわねばなるまいな……）

介右衛門を討つ。勢力がそれだけ減ることになるが、しかたはない。陰謀をさとられないためだ。

「後備えを梅ヶ谷へ向わせよ」

沓谷に置いた二千の軍勢をすべて出動させる命令を出した。

今川屋形を急襲することをあきらめた。いまは、少しでも、疑いを解く方向へ行動しなければならない。

沓谷の軍勢が西へ向って動きはじめたころ、やはり範満の返事を受けとった名古谷大膳大夫も、

「敵は梅ヶ谷じゃ」

と、馬首をむけた。

雑兵となって混入していた新九郎は、おやっと、思った。

（これは意外なことになったぞ）

あてがはずれた。こうすんなり、梅ヶ谷に向って進撃しようとは思いがけなかった。

（偽装ではないか……）

と思ったのだが、名古谷大膳大夫と、その一族、同苗蔵人、左馬頭などが、それぞれ手勢を率いて、

「梅ヶ谷の横大路を討つべし」と号し、次々とくりだした。

（ほんきらしいぞ）

雑兵の中にまじって歩きながら、新九郎は考えている。

（横大路を討つ気か、なかまを一人失うことになるではないか）

それとも、新九郎の睨んだのが間違いだろうか。そこまで、

〝目ちがい〟

するとは思えなかったが、実際に名古谷の軍勢は、抜き身をきらめかし、馬蹄の音たかく、梅ヶ谷へ向って進んで

いる。
「横大路とはどんなやつかい」
わざと新九郎は、隣の男に聞いた。
その男は歩きながら蛸を食っている。片手に槍、片手で煮蛸をわしづかみにして、むしゃむしゃと、足を食っている。
「横大路介右衛門か」と、くぐもった声で、「知らん」
「知らんのか、知らんで、よく討てるな」
「へえ、銭と米にせえなりゃ、親兄弟でも殺すわい」
とんでもない連中だ。雇われ雑兵の大半がこういう手合いだ。したがって、城を落せば、金銀財宝を奪い、女たちを犯し、落武者の殺戮を楽しむ。その楽しみを与えてやるのが不文律で、雑兵の報酬は安い。
「なんじゃあ、おまえ、そんなことをいまさら聞いて、驚いとるのかい」
ぎろりと疑いの眼をむけた。
「いや、なに、その介右衛門の首をあげるには、面を知らねば討てまいが」
「こやつ、御大層な口をきく」
「……」
「敵の大将の首を討てるつもりかい」
「討つわい」
「そのような広言ひろげおって、陣笠一盞とれやせんぞ」
「まあ、やってみなけりゃ、わからんさ」
「ふうん、こやつが」その男は目をむいた。「うぬの名は、なんというたかいの」
「矢助だ。うぬは」
「おれを知らんのか、太兵衛じゃわい、蛸の太兵衛、誰ぞ吐かしおって以来な」
「蛸が好きとみゆるな」
「女の次にな」
と、八本の足を食いおわって、太兵衛は、こんどは、頭を食いはじめている。
「何が得手だ」
「太刀でも槍でも、弓矢でも、おっと組打ちもな」
太兵衛の鼻柱には、深い刀傷がある。
雑兵たちの恰好はひどい。
一騎二騎と数えられる武将や侍たちは、いずれもひとかどの者らしく、大鎧や当世具足など、それぞれ、武威を競うがごとくに、きらびやかに、あるいは猛々しく、――猪首に着こなしているが、その下の足軽となると、これは短い四幅袴に半袖で腹（胴）巻に草摺で足ごしらえ、陣笠という程度だ。
籠手や脛当をつけた者はいいほうで、槍や刀もいずれ拾ったものか盗んだもの。
この足軽でも、しかし、正規のほうはまだよい。

一時的に雇われた連中は、服装などかまってはいられない。すべて自前である。したがって刀、槍、長巻、鎌から、大まさかり、手斧、棒――ただの棒でも庖丁でも、武器にちがいない。
鎧具足など、満足なのは一人もいない。みんな、拾って来たり、死体から引き剝いできたようなものばかりで、少しぐらい死臭がしても平気なのだ。素姓など、どうでもいい。力があればいい。度胸があれば、役に立つ。
（こりゃ、様子が違った）
新九郎は、途中から脱けだそうかと思った。横大路を討つのなら、一緒にいっても意味がない。
（だが、これも術かもしれぬぞ、軍勢が合してから、方向をそらすかもしれぬ）
途中、石落というところで、関口左京亮の軍勢と合した。
「梅ヶ谷へ」
「梅ヶ谷へ――」
口々に叫びながら、進んでゆく。
梅ヶ谷は、現在清水市に入っている。高速道路の清水インターチェンジから三キロほど北西の山懐にある。
文珠岳連山の南端にあたり、前面にひろびろとした柏尾、高部、押切辺の田畑を一望にできる兵陵の上に、横大路介右衛門の屋敷があった。
地の利からしても、この梅ヶ谷の城館は守るに易く、攻めるに難い。
城攻めの常識からいえば、南にひらけている場合、北側よりも、城の分は悪い。寄手は太陽を背にするからだ。だが、別の見方もある。それだけ明るいから、白日のもとに、寄せる姿が、手にとるようにわかる。
殊に、たいていの城館は高みにある。寄手の人数まで判然としては、不利である。
それにしても、僅か八百ほどの守りに対して、数千の軍勢となれば、また話は別だ。十倍の人数があれば、如何に難攻不落を誇る城も、陥すのは容易だ。
「力押しに攻めれば、半日も保つまい」
人々はそう感じ、あせった。ところが意外なことに、前衛は遠巻きにしたまま動かない。
膝を抱えて日向ぼっこしているではないか。
「どうしたのだ、奴らは」
あとから、あとからと押し寄せる軍勢で、瀬名川、草薙から狐ヶ崎一円は埋め尽くされた。
岳南から来た軍勢は、興津の清見寺前から押し出されるように、横砂、尾羽、西久保一帯に布陣した。
梅ヶ谷の城館をのぞむ、蜂ヶ谷から押切、高部、柏尾の東にかけて、半円型に置かれた軍勢は、新五郎範満の前衛だった。
かれらは、楯を並べ、弓や槍を傍へ置き、どっかりとあ

ぐらをかいている。中には横になっているやつもいる。瓢簞の酒を飲んでいる者、握り飯を食べている者。まるきり戦争の気分ではない。
「何をしているのか」
後続部隊は疑問に思ったが、武将たちがいってみると、
「命令を待っている」
と、いうだけだった。
(やはり、戦う意志がないのだな)
範満は、今川屋形急襲をあきらめたが、梅ヶ谷討ちと称して、ここに集結させ、あらためて、大軍を方向転換することも考えているのかもしれない。
新九郎は案じた。
(とにかく、これだけの大軍だ。急襲でなくても、今川屋形に向けられてはたまらぬ)
そのためには、梅ヶ谷館を討たせるに如くはない。
「どうやら、この塩梅では、戦さになるのは、夜になりそうだな」新九郎は、蛸の太兵衛に言った。「どうじゃ、手柄をたてようではないか」
「手柄を?」
「兜首を二つ三つ」
「悪くはないが……」
「おれに考えがある。どうだ、まかせるか」
「ふん、言葉通りにいくならな」
太兵衛はまだ新九郎の力量を知らぬ。
日が暮れて、闇の中に、梅ヶ谷の城館が浮び上っている。
「謀叛」
の示威が目的だから、二重三重に柵をめぐらし、要所に篝火をたき、せいぜい派手に戦さがまえしている。
山麓の内懐になる丘だ。左右に幕ヶ谷、蜂ヶ谷の峰がのびて、それを双の下肢に見立てるなら、梅ヶ谷の城館は丁度、恥部にあたる。梅の里で知られているところだが、いまやえんえんたる篝火が段々畑のように一ノ郭、二ノ郭、三ノ郭とその規模を夜陰に示して、さながら、巨大な城のように見せている。
「うまくいくと、介右衛門の首がとれるぞ」
「ほんとうか、おい」
蛸の太兵衛は乗り気になった。
「うぬの働きしだいだ」走りながら、新九郎は言った。「いざとなって、怖じ気づくことはあるまいな」
「なんの。おれさまが」
「そういうやつにかぎって、土壇場に来て腰を抜かすやつが多い」
新九郎は、悪たれを吐く。こういう単純な男は、激発し易い。けしかけるほうがいい。
「用心せい、このあたり、見張りがおるはずだ」
「どうしてだ、見たのか」

「いや」
「見ないで、どうしてわかるぞ」
「兵略じゃ」
うるさくなって、こう言い放ったが、新九郎は、
(しまった)
と、闇の中で、顔色が変った。
一介の足軽が、兵略などということを口にするなどあり得ない。聞きかじりだとしても、疑うに足るのだ。が、太兵衛は気がつかなかったらしい。単純な男だ。そこまで頭がまわらなかったのか。
「とにかく、用心しろ」
「なあに、見つかったら、一刺しじゃわ」
太兵衛は、手槍をしごいた。
蜂ヶ谷から尾根伝いに梅ヶ谷の城館の搦手へまわる。
山腹にたてられたこういう縄張りは、必然的に、外郭の濠が掘り難いので、山につながっている部分がある。塀をまわしてあっても、山容によって、低いところがでてくる。
新九郎が狙ったのはそこだった。
「入るぞ」
と、あたりを見まわして、よじのぼった。
「おい、大丈夫か」
いまになって、太兵衛は怖じ気づいたらしい。
「早くしろ、死にたくなければ」
「ま、待ってくれい」
漸く、あとから入ってきた。肥っているせいもあるが、動きが敏捷をかく。
「介右衛門の首を狙うのかい」
傍へ寄ったとき、太兵衛のからだが顫えているのに気がついた。
武者震いなのか、不安のそれかわからない。
「しっかりしろ、兜首がほしくないのか」
「ほ、ほしいわさ、じゃが」
「はっきりしろ、いやなら、先へ帰れ」
「か、帰れるかい、一人で」
「ならば、おれの言う通りにしろ」
「うむ、わかった」
こうなると太兵衛は、新九郎の命令下にある。
「御殿はどっちだ」
「あの塀の向うあたりであろ」
城の内部というのは、およそどこでも大差はない。新九郎は見当をつけてその近くへいったが介右衛門がどこにいるか、わからぬ。
「太兵衛、火をつけろ」
「え? 焼くのか」
「鼠をあぶり出す。狐でも狸でも同じことだ」
火にはこと欠かない。篝火が随所にある。蛸の太兵衛は

薪に火を移すと、燃え易い藁や蓆などに点火してまわった。
「わあッ、火事だ」
「消せ、消せ、水はどこだ」
「透破が入ったぞ、見つけだせ」
「それより消火が先だ」
「殿の御身を……」
狼狽の声が渦を巻き、混乱が起った。御殿に向って数人が走っていった。
混乱になると、敵味方の判別が出来なくなる。
新九郎や太兵衛の姿を咎める者もいない。
二人は火明りの中で、にやりと笑った。
御殿に飛びこむと、磨きのかかった床の上に熊の皮を敷き、床几に坐した武将が、近習をしたがえ数人の侍に囲まれていた。
八幡大菩薩の大幅を掛けた床ノ間を背にしている。鹿角の兜が据えられ、三方の瓶子や勝栗、昆布、熨斗鮑など勝利を希う膳部があり、数本の太刀が刀立てに立ててある。
鎧を着ての戦いでは、いかなる名刀でも、すぐに切れ味が悪くなる。折れることも稀ではない。歪ることも多い。
大将になると少なくとも十振や二十振の刀は持っている。刃こぼれしたと思うと、取り換えて戦うのが、大将の常識であった。
さて、新九郎たちはこの御殿に踏みこむや、正面の武将を、介右衛門だと思った。思ったが、たしかめる余裕はない。
「何者だ!?」
突然、前ぶれもなしに飛びこんできた男に、数人がきっと片膝だてて、
「いずれの手の者だ、下郎、控えろ！」
と、一人が怒鳴った。
この城でも、むろん雑兵を雇い入れている。顔を知らない者も多い。その新参の者と思ったのだろう。
咄嗟に、新九郎は、大音声をあげた。
「これは沓谷の屋形より遣わされた者でござる」
ほっと、喜色が流れた。
「新五郎範満どのからの使者か、して、情勢はなんと！」
「横大路介右衛門どのに直々」
正面の男とは思ったが、確かめなかったのだ。
「近う」
正面の男が言った。やはり介右衛門か。
シュロの髭をぴんと生やした鉄面をつけ、鉄扇を握って傲然とかまえていたのだ。
（やはり、こやつか）
新九郎は、ぺこりと一揖した。
「内密のことなれば、御免！」
新九郎はつつーと近よった。

「御免！」
つつーっと近よった新九郎は、介右衛門の面前、五尺ほどに迫るや、
「素っ首、もろうた」
大喝して跳躍した。
抜き討ちである。
寸前、傍にいた男が、気配に応じて、さっと身を乗り出したのを、ぐわッと肘ではね飛ばすのと、抜いた刃が、介右衛門のこめかみのあたりをさっと、撫いだ。兜はかむっていないのだ。ぱっと血がしぶいた。よろめきながら、
介右衛門のからだがぐらりとよろめいた。
「太刀！」
と、叫んだ。
が、突然のことで、近習は、日ごろの訓練も忘れて、刀を差し出すことを忘れた。虚脱していたのである。
新九郎はおどりこみざまに、二ノ太刀で介右衛門の首を打ちおとした。馴れている。あざやかな斬り込みであった。
「やったぞ」
新九郎は叫び、むずと生首の髻をつかんで、そのまま走りだそうとした。
数人の武将たちは立ち上っている。一歩おくれた蛸の太兵衛が、牽制の刀をふるっていた。
瞬く間に左右を斬り倒し、さらに血刀を大上段にふりかぶって、あたりを睥睨した。
二人とも素早い。戦さ馴れしているのだ。生首をひっ下げた新九郎は、哄笑を残して走り出した。生首からしたたる鮮血が、さーっと、宙を走った。
「横大路介右衛門の首はかくの通りなるぞ」
大音声に叫んで、新九郎は生首を高々とかかげながら、御殿から、城内を搦手へ走りぬけた。
そのあとを蛸の太兵衛がこれも討ちとった生首二つ、素早く髪をむすび合わして、振り分け荷のように肩へかけて走り出る。
二つ首作法といい、この髪を早く結び合わせる方法がある。油のしみた髪は滑って結び難いし、解け易い。
その結び方でやれば、戦場を疾駆しても、ほどけることがない。二人のその凄まじい姿を、篝火が、悪鬼のように照らしだした。
それでも何人かが、前を遮ろうとしたが、おどろしい形相に恐れをなして、ぱっと飛び離れてしまう。弓に矢をつがえた者も、きってはなつ気力を失っていたのである。
「逃すな、射よ、射よ」
という叫びが起ったのは、二人がさっき入ったところから、出ようとしたときだった。
新九郎が先に塀を越えた。つづいて越えようとした太兵

衛がうっと呻いて、のけぞった。
「や、矢助……」
太兵衛はのけぞって、悲痛な声を放った。
「おう、何とした」
「やられた……」
太兵衛は、塀にしがみついている。
その背に突っ立った矢が見えた。親友でもなかまでもない男だが、僅かの間に、この男に、人間的な親しみを抱いている。見捨てる気にはなれなかった。
「しっかりしろ」
えりがみをつかんで、ずるずると引き上げる。
その二人へ向って、矢が飛んで来た。一矢は、肩をかすめ、一矢は、太兵衛の膝裏へぐさりと刺さった。
「うっ！」
ぶるっと顫えたとき、太兵衛の肩から、生首が二箇、もんどりうって転げ落ちた。
新九郎は、太兵衛をひっ担ぎ走りだした。松林の中である。起伏のはげしい丘を走るうちに、背後からの追跡の声も聞えなくなった。
城内の火を消すほうが、追跡よりも大事だと思ったのか。一気に二丁ばかり走って、倒れるように、新九郎は、林間に膝をついた。
「大丈夫か、おい……」
「う……」
「しっかりしろ、矢の一筋ぐらい、トゲが刺さったようなものだ」
新九郎は背中の矢をひきぬいてやろうとして、ぎょっとなった。
一筋と思ったが、矢は二筋、つき刺さっていたのだ。担いでくるとき、狙い射ちにやられたのか、盲めっぽうの追矢が、命中したのか。一本はひき抜けたが、もう一本は、ぽきりと折れて、矢尻が、からだの中に残った。
「——もう駄目だ……」
「なんの気弱な、しっかりしろ、蛸の太兵衛が、これくらいのことで」
「おれは……死ぬ」
「馬鹿、しっかりしろ」
「たのみが、ある」
太兵衛は、宙に手をはわせ、新九郎の腕をつかんだ。
「おれの、女に……」
「おい、お前の女は、そこら中の、誰でもお前の女じゃなかったのか」
太兵衛は笑おうとした。が、その笑いも、こわばったものになった。
雲が流れたのか、月光が、林の中に斑（まだら）を描いて、太兵衛の顔を蒼く見せた。

「女……よねという女だ、山西の長者の屋敷にいる。たのむ……」
「わかった」
「よね、だ……」
「わかった。山西だな」
「法栄長者……」太兵衛の胸は大きくうねって、「よねに……こ、これを」
何やら、鎧の引き合わせの下から取り出そうとして手を動かしたとき、頭上から突然、凄まじいかけ声と、白刃が叩きつけてきた。
いつの間に忍び寄ったのか、
「くたばれ！」
凄まじい刃風だった。
背後から叩きつけてきた一刀を新九郎は辛うじて逃れた。刀は、松の根瘤をしたたかに打っている。
「うぬ！」
新九郎が横に払ったのが決って、ざくりと胴を両断していた。げっと、臓腑を吐瀉するように、からだを海老折りにしてその男は、のめり倒れた。
このあたりに配されていた見張りであろうか。
蛸の太兵衛の上に折り重なったからだを蹴転がして、
「太兵衛、気をたしかに持て」
と、ふたたび抱き起したが、もう、断末魔だった。その手がしっかりと、何やら握っている。
（山西の法栄長者のところにいる女、よね……）
に渡してくれ、と言い残した太兵衛の言葉が、耳に甦った。それは、掌くらいの大きさの貝だった。
「はて、これは？」
新九郎は、月光のもとで見た。ただの貝ではないか。いや、蛤などとは違う。貽貝（いがい）である。
黒褐色の殻で、内側は青白く、中央に黒ずんだクレバスがある。その形態は、女性の性器に似ている。
似タリ貝、とも称されるものだ。新九郎は、にやりとした。
「なるほどな」
いかにも太兵衛らしい。
よねという女とは恋仲なのであろう。その昔、室ノ津など、遊女が、心を通わせた男へ、おのれを忍ぶよすがとして、こういう貽貝を贈ったというが、そのものであろう。
見れば見るほど、（似ている）のである。
全国、たいていの海でとれるが、殊に、東海地方は多いせいか、
〝東海夫人〟
の異称すらある。
「おかしな奴だな」新九郎は、件の貽貝を懐中にすると、
「安心して成仏しろ、よねに渡してやるからな」

月光の斑のなかで、太兵衛の死顔は、満足したような、微笑すら浮べて見えた。
もう、梅ヶ谷の城は、内部の火災は消えたのか、騒ぎの様子は見られなくなっていた。
新九郎は、介右衛門の首をぶら下げて歩きながら、
（どうしたのか）
と、何度もふりかえった。
城主の首をとられてしまえば、謀叛の戦さもおしまいである。第一、城に火の手があがったというのに、寄手の方で攻撃をかけないというのは、どうしたことだ？
動かぬ？——と見えたのは、しかし、そのときまでであった。
新九郎が十間と走らぬうちに、わー、わーッと喚声が夜をふるわして、馬蹄のひびきがどうどうと、大地を揺すり、多勢の足音が潮騒のように、野をいっぱいに占めて、聞えてきた。
「やった！」
功を奏した。
この介右衛門の首など、どうでもいいのだ。新九郎は、おどり上って走りだした。
（裏をかいてくれたぞ）
あの新五郎範満の狼狽する顔が見えるようであった。
範満には、この梅ヶ谷の横大路を攻める気はなかったのだ。攻めると見せて、ここへ集結し手うすになった今川屋形へ一挙に襲いかかる。
その目的とするところは、北川どのと竜王丸を抹殺し、駿遠三を掌握し、今川の名誉を踏襲する。
その深謀遠慮だったのだ。新九郎は、こう睨んだ眼に間違いはないと思っていた。
新九郎と蓼子の手配が早かったために、第二、第三の方法と、範満は変更を余儀なくされていたのだ。
横大路介右衛門とその一党を討たねばならない羽目に追いこまれることになった。新九郎は、さらに、それを一層決定的なものに持ちこもうとしたのである。
介右衛門の首を討ち、火を放つ。これは、睨み合いのかたちで、動かなかった両者を、判然と、戦争に突入させることになる。
つまり、けしかけたのだ。範満が下知をしぶっても、両者が黙っていない。
雑兵たちには、お互い機密は洩らされていないから、いやでも、戦さの火蓋を切ることになる。
山麓の野を埋めた寄手の、どの軍勢が先に動き出したのか、判然しない。一犬虚に吠えて、というやつだ。
わーっ、わーっ、わーっ！
地軸をゆるがすような凄まじい鯨波となり、その昂奮は、さらなる昂奮を煽って、寄手は全軍が動きはじめたようであった。

あとから判明したことだが、城内に放火され、
〃介右衛門の首〃
を討たれた、と思った城内から寄手に矢を放ったのが、きっかけだったという。
「おれが命令するまで動いてはならぬ」
介右衛門はくどく言い含めていたし、範満の方でも、
「軍令に反いたやつは斬るぞ」
とまで、厳命していた。
が、こうなると、誰がどうしたということにはならない。虚に吠えたのは誰か。それは城内の火であり、城内からの矢だということになる。
寄手は、横大路の城へ殺到した。
「しめた、これで、おれの役目は終ったわ」
新九郎は、介右衛門の首級をぶらさげたまま、戦況を見ようともせず、今川屋形にもどってきた。
今川屋形の周囲には、何重にも柵を設けて、鹿垣を結い、篝火を赤々と焚いて、襲撃を警戒している。
「誰だ！」
雑兵たちが、槍をむけるのを、
「おれだおれだ」新九郎は、変装を拭って、「伊勢ノ新九郎だ」
「おお、おてまえか」
「通るぞ」
「その首級は」
「横大路介右衛門の首だ」
「え!?」
「ははは、おれの手がらではない。名古谷の手の者で蛸の太兵衛というやつが、とった」
せめて、太兵衛の手がらにしてやりたかった。
ところが、その配慮が、意外にも、かれを醜態から救ったのである。
「それは、ちと面妖じゃ」途中の陣所で、そういう者がいた。「横大路とは人体（にんてい）がいささか異なるような」
「なに、介右衛門ではないのか」
「はあ、多分……」
一人ではない。何人かが首をひねった。決定的に言った者もいる。
「間違い首でございますな。てまえは横大路をよく存じておる。別人でござる」
「そうか……」
「十中八九、狂いはない」
「というと、これは、影武者か」
「多分……」
「なるほどな」
あのときの様子を思いだした。

言われてみれば、そうかもしれぬ。あのものものしい様子は、何かそらぞらしいものすらあった。

(影武者か……くそ!)

せっかく、蛸の太兵衛の手がらにしてやろうと思ったのに。

そうすれば、山西のそのよねとかいう女性のところに、恩賞がいったかもしれぬのだ。

「まあ、しかたがあるまい」

影武者では、一文にもならぬ。新九郎は、首級を投げ捨てた。

「犬にでも喰わしてやれ」

そして、屋形へ駈けもどった。

まず、井戸端にいって、裸になり洗った。着物を着替えてから、夢子と竜王丸の前へ出た。

「──どこにいっていたのです」

「ちょっと、梅ヶ谷へ」

「まあ」

「城内へ入りましてな、介右衛門の首を掻いたところ」

「えっ、それはお手柄を」

「いや、それが影武者だったらしい、ははは、失敗じゃ」

「でも、大したお働きを」

呆れたように、夢子は、新九郎をまじまじと見ている。

「いやいや、小手しらべでござる。が新五郎どのの裏をかいたつもりだが……」

しかし、そのころ、戦局は変っていた。

「──刃向ってはならぬ。ただ固めよ」

横大路介右衛門は、声をからして城士をおさえてまわった。

その腹心たちも、命令を伝えてまわる。

「戦うのではない。矢を放つな」「ただ固めよ」「槍を用いるな。石突で、はたき落せ」

そんな戦さがあるものか。城侍たちには、意外すぎる命令だったが、

「仰せだ、守るしかない」

「ちえっ、勝手にさらせ」と、首をすくめて、「石も落してはいかんというのか」

「敵が、じゃ」

「ひえェ、敵をかばうのか。こっちがかばっても、向うは、どんどん射てくるではないか」

「危なくないように落せということだ」

「だれが危なくないように、だえ?」

こんな馬鹿げたことはなかった。だが命令とあればしかたがない。

石落しも威嚇にとどめ、弓矢も狙いをはずし、熊手大鈎で、石垣をよじのぼって来、侵入しようとする連中を、槍

の石突で叩いたり、突き落したりするくらいで、消極的抵抗を見せるよりしかたがなかった。

介右衛門の腹では、こうしておいて、

(約束が違うぞ)

と、範満に言うつもりだった。範満の心情は理解しているつもりだ。計画が狂って、攻めてくるしかなかったのだろう。

なぜならば、かれにとって、今川家の当主に坐ることが、当面最大の目的であることを知っていたし、その可能性があると見たからこそ、このオトリの役目をひきうけたのだ。

(だが……)

他の軍勢への一時の、

〃擬態〃

と、見るには、不審もあった。

(乱破(ラッパ)者を入れて、おれの首を狙った……なぜだ?)

ラッパは、城内をかき乱し、火つけをしたり、暗殺したり、隠密行動をする専門家である。

明らかに、

(おれの首を狙った……)

介右衛門は首をなでた。

(影武者をおいていたからいいようなものの……)

もしも、影武者がいなかったらいまごろは、首が飛んでいる。これは範満の計画が変ったことを意味する。

「放火もした、……とすると、範満はおれを見殺しにする気か。いやおれを討つことで、竜王丸の御機嫌をとり結び、次の機会を狙う叩き台にするつもりか」

裏切られた、と思った。踊らされたおれが馬鹿だった。

(うぬ! 見ておれ、こっちにも考えがあるぞ)

(こうなったら、範満の企みを訴えるだけだ)

介右衛門は肚裡をきめた。

(ひとをコケにすると、どういうことになるか、おぼえておれ)だまされた、と思うと、(こちらにも手があるのだぞ)

あの密書をとりだした。

範満がしたためたものである。万一の際にと思って、介右衛門が、ねだって書かせたものだ。

それは、この戦さは、範満が、今川家を奪うために、介右衛門をそそのかしたという歴然たる証拠だった。

そそのかされた、のは名誉ではない。愚かだし、嗤われることではある。が、このまま、内情を秘めたまま、

(攻め殺されてはたまらん)

「どうせ、義によって結ばれたのではない。おれが駿遠の主になったら、おぬしを右腕に」

という、私欲からの共同謀議なのだ。

相手が裏切った以上、こっちでも、報復に出て何が悪い。

だが、この、

〝返り忠〟
は、必ずしも、成功するとはかぎらない。
下手をすると、一蓮托生。
「謀叛に変りはない」
として、処断されるかもしれない。
介右衛門としては、賭けだった。が、五分五分でも、一縷の望みがないよりはいい。
どうせ、〝賽は投げられ〟ていたのだ。
介右衛門は、秘めていた範満の密書をとりだした。そして、
「犬市を呼べ」
と、近習に命じた。
そのころ――
今川屋形では、新九郎が、夢子の部屋に入っていた。むろん、ひそかごとである。
夢子は、この戦さの様相を知らされると、やはり気丈でも、女の身で、
「どうなることか。思うだけでも空恐ろしい」
疲れたように、居間にひきとった。
そのとき、すがるような眼をむけて、新九郎を誘ったのだ。新九郎の男の力がほしくなったのであろう。
侍女たちを遠ざけたあとに、新九郎が入ってゆくと、ひしとすがりついてきた。
「抱いて、しっかり抱いて下さいまし」
「案じることはない。新九郎がついておる」
力強い男の言葉であり、強い男の抱擁だった。二人が唇を合わせたとき、外に、一人の男がうずくまっていた。
〈密々に申し上げることがございます〉
〈お騒がせして、申し訳ありませぬが〉
と、外の声は言った。
〈内密に申し上げることあり、参上いたしました〉
新九郎は、やむを得ぬ、というふうに首をふり、
まるでのぞかれたような感じだ。
「返事をせねばなるまい」
夢子のからだを離した。
新九郎とのこういうところを見られたら、今川義忠の御後室という権威がなくなる。竜王丸を擁立するのにも障害となるのだ。
「――待ちや」
衣紋をつくろいながら、夢子は言い、立ち上った。
板戸をあけると、そこにうずくまっている小男の姿があった。
「いずれよりまいったぞ」
「――これを差し上げるために」
と、犬市は片膝ついたまま掬うように上眼づかいに見上げて、青竹の水筒(みずつつ)を差し出した。

戦場に出るばかりか、狩りなどでも、腰につけることが多い。新しい、竹の節から節まで切ったもので、上蓋になる節に穴をあけ、栓をつけてある。
「水筒を？」
不審の眉をひそめて、夢子はうけとった。
「中を、おあらため下さるようにと」
「誰がつかわしたのじゃ」
「おあらため下されば、わかりまする」
犬市は、あたりを気にしている。万一ということがある。
「暫時、そこへ控えているように」
夢子は件の竹筒を手にしてへやへもどった。板戸はちゃんと閉めた。
話は新九郎のところへも聞えている。黙ったまま夢子は、手渡した。
受けとった新九郎も無言である。眉をひそめて、耳もとで振ってみた。
水の音がした。栓をぬいて、枕元の提子(ひさげ)に傾けてみる。水が出た。が、少量である。
普通なら、そこで、ほうりだしてしまう。
新九郎はあとから、
（水の音が上の方でした）
と言っている。
小刀を抜くと、竹筒を立てて、薪でも割るように、たッと割った。
「あっ……」
と、思わず、夢子は声をあげている。
中は二重底になっていた。いや二重蓋といったほうがいいかもしれない。上部に中段が出来ていて水はその部分に入っていたのである。
下の段に、一葉の書付けが折りたたんで入れてあった。
「密書だな」
新九郎は、呟いた。
竹筒は、実に巧妙に細工してあった。
仔細に見ると、蓋のところは一たん切り離し、中に水を入れる部分の受け皿を入れ、その上に蓋をしてある。
節のところを利用してあるし、その切り離した部分に、下げ紐を巻きつけてあるのでわからなかったのである。
（これほどまでに細工して、隠しておくとは……）
重大な秘密にちがいなかった。
灯台をひきよせて、一読した新九郎は、低く呻いた。
「謀叛状だ」
夢子ものぞきこんで、
「新五郎どのから、横大路へ」
「やはり、思った通りだ。範満がそそのかして、旗をあげさせたのだ」
「謀叛を」

「梅ヶ谷を攻めると見せて、軍勢を動員し、この屋形へ押し寄せるつもりであったのだろう」
「でも、どうしてやめたのでしょうか」
「お味方を集めたのが、早かったからだ。こう軍勢が固められていればとても攻めこめぬ」
「……」
「それにしても、これは誰が齎したものであろう、誰が、なぜ？」
「まさか、横大路が……」
「かもしれぬ」
あれが影武者の首だとすれば、介右衛門は生きているわけだ。
対峙したまま、一向に戦さがはじまらなかったわけも、これで解けた。
新九郎が影武者と知らずに首をとり、放火したことから、戦さの火蓋はきられたのだが、範満の大軍が、どっと攻めてきたので介右衛門は、
（約束が違う）
と、激怒したのだろう。
「これは、面白いことになりましたな」
「ええ……でも、どうすればよろしいのでしょう」
「呼ぶのだな」
「……」
「介右衛門に違いない。ここへ参るように言うがいい」
「参るでしょうか」
「そのために、この命よりも大事な証拠を持たせたのであろう」
新九郎の的確な推理に、夢子はうっとりとなっている。
竜王丸のためにも、この男がいることは、何と力強いことだろう。
「介右衛門が生き延びる道はただ一つ。すべてを告白して哀を乞うしかあるまい」
「でも、こちらで許さなかったら」
「それは、賭けさ。はじめから、介右衛門は賭けた。本来なら、この賭けに敗れたのだから、ここで死ぬ。それが逃げ道を一つ作っていたわけだ。成功率が五分五分でも、ムザと死ぬよりは、まだいい。喜んでくるさ」
夢子は頷いた。
犬市は、承りました、と、身を翻して闇に消えた。

炎の館

梅ヶ谷城を囲んだ全軍に、戦闘中止の命令が伝えられたのは、翌日の昼すぎであった。
「なんじゃ、いったい、戦さをやめろというのかい」「もう少しで城を陥せるというのにな」「面妖じゃぞ、何かの間違いではないか」
間違いと思うのも、無理はなかった。
先陣を承った一隊は、三ノ郭へ殺到し、はげしい攻防のあとに、漸く、城の一部を毀し、侵入の望みがもてたところだった。
城の石垣といっても、半ば土塁であり、丸石を乱積みにしたものだから、足場を確保しさえすれば、飛びこめる。この足場作りが出来ないように空濠が、まわりを囲繞していたが、ここへどんどん、土や材木などを投げこみ、埋めてしまって、侵入口をこしらえた。
上からは熱湯をかけたり、梯子を突き倒したりしたが、何よりも、
「敵を傷つけてはならぬ」
という介右衛門の厳命が禍いして、その工事を阻むこともできなかったのである。
「夜になって一気に攻めこもうぞ」
と、先陣では、勇躍して、まず、昼の腹ごしらえ。その食事が済んだところに、命令が来たのだ。
「しかたがない、戦さは止めじゃぞ」
「命令が正しいかどうか、お屋形へこちらから伺いを出したらどうだ」
「それもやったらしい。何にてあれ、軍を退くようにとのことよ」
将士は、納得いかない顔だが、どちらにしても、戦さは命令ではじまったことだから、やめろと言われれば、槍をひくしかない。
だが、首領の新五郎範満にしてみれば、この突然の変更は、
（ばれたか！）
と驚愕させられるものだった。
（まさか、そのようなことはあるまいが……）
名古谷大膳大夫をはじめ、腹心の軍勢は、計画通りに、攻撃軍に参加している。
仲間から、裏切りが出たとは思えない。が、この戦さは、

横大路介右衛門が、一番損なクジをひいたわけだから、
(ひょっとすると、あやつ)
寝返ったかも、しれぬ、と考えた。
範満は、東雲之助をやることにした。
「介右衛門のところへ、密かにまいって、仔細を話せ」
「この戦さが、決して、介右衛門の首をとるのではなく、見せかけだけのもので、今夜中には、軍をかえし、屋形を襲うから、合図に従って、大手をひらき、城兵もわれらに加わるように」
ということであった。
東雲之助はこの命令を受けとると、顔色を変えた。
「それがしが参るので」
「お前がよい。他の者では、疑われる」
「しかし……」東雲之助は、この役目は、地獄の使いになるのではないか、と戦慄した。「かように申しても、信じましょうか、横大路どのが」
「わからん、が、信じさせるのだ、それが、お前の役目だ」
「はあ……」
「巧弁をもってせい。いや、このことは、必ずしも嘘ではない」
「……」
「お屋形からの命令ゆえ、他の者は軍を退く。そのさまは、向うから見れば、よくわかる」
「左様でございますな」
「したがって、お前の申し条も、疑われることがない」
「ははア」
聞いているうちに、東雲之助は、安心してきた。なるほど、それなら、自分が殺されることもあるまい。
顔だちがよくて、すらりとした今業平を気どっている若者だ。こういう男は、概して気が小さい。日ごろ、虎の威をかる狐で、自分より弱い者に、威張っているから、いざとなると、胆がちぢみあがってしまうのだ。
範満としても、一世一代の賭けだ。下手に介右衛門に動かれてはせっかくの計画が御破算になってしまう。
同じ使者をたてるにしても、この場合、なまなかな者では、介右衛門が信用しない。
(東雲之助なら、信用するであろう)
と、思ったのだ。
日ごろ、範満が、東雲之助に目をかけているのは、知らぬ者はない。
「いって参じまする」
東雲之助は覚悟をきめた。
ただ一騎、兜はかぶらずに、具足に身をかため、旗差物は、おのれのものをはずし、ただの白旗を差した。
まっしぐらに大手門へ馬を走らせた。
潮の退くように、包囲陣が後退し空地には、死体が転が

っている。当初の矢まぜで射仆された者たちである。
その原を、東雲之助はまっすぐ走った。午後の陽が明るいなかを、ただ一騎で走ってくる武者の姿は、城からはまる見えだから、
「やあ、誰かやってくるぞ」「使者であろうな」「軍を退いたのが面妖だと思ったが」「様子を見るまでは、門内へ入れるでないぞ」「——はて、あの者、見たような」
小手をかざしている。その城下までやってきた東雲之助は大音声をはりあげた。
「それがしは、小鹿東雲之助。御城内へ申し入れのことあって参上した、横大路どのへ取次がれい」
東雲之助にしても、こんな大声を出したのは、はじめてである。晴れがましいことの好きな、いささか軽薄な若者だが、この役目には、首がかかっている。
談判が決裂すれば、血祭りにあげられる。まずその可能性は五分五分だった。
だから、東雲之助も、いつになく必死だ。真剣な顔になっている。
顔立ちがいいから、気をひきしめると、なかなかいい顔になる。この男の悪いところは、才子型の小悧口さであり、精神の空白さだ。
「横大路どのは、どこだ」
その答えは保留された。
「控えておれ」
と、怒鳴りつけられた。
普段なら、おとなしく聞くはずもないが、この大役を果すことがすべてに優先する。
東雲之助は城門の前で、待たされた。その間、城内では、重役たちが額をあつめて、鳩首会議になっていた。
「なんとする」
「どうせ、新五郎の使者とあれば、信はおけぬが」
「だが、様子が変った」
「寄手の勢が退いているのだ。あれはやはり、攻めを止めたのだ」
「しかし……」と、長老である介右衛門の伯父の大村剛左衛門が慎重に言った。「もともと、この戦さは、新五郎範満の方策に関わるもの」
「……」
「軍勢を退くというのは、ちといぶかしいが、これも、最初の兵略にもどったのかもしれぬ」
「いや、それはおかしい」と、やはり一族の関戸右兵衛というのが、膝をすすめて、「それなら、まず、兵をとめて、それから、来る」
「だから、来たのでは」
「そうではあるまい。寄手がどんどん退いているが、いずれも、あれは、ただの退き方だ。矛先を、転じるのではな

い」
　そういわれてみれば、たしかに転戦の様子ではない。
「ますます、いぶかしいな。ともあれ、あやつを呼びこんで、口上を聞こう」
「しかし、主君が不在なのに」
「ははは、もう一人の〝影〟がおるではないか」
「そうだな。あやつを坐らせておけばよい」
「夜だと、よいが、この白昼では、影武者ということが、ばれはせぬか」
「奥の部屋で引見させるのだ。暗いところなら」
　話がととのってから、はじめて城門が開けられた。
　東雲之助はほっとして、馬をおりた。
「通るがよい、主君が御引見下さる」
　仄暗いへやの中に、介右衛門は具足着て床几に腰をおろしていた。
　その左右に武将らが居流れている。
　許された東雲之助は、平伏して、あらためて名乗った。
（――介右衛門か、あの男？）
　東雲之助は、眉をひそめた。
　違うようだ。はっきりと断定できないが、感じが違う。
　介右衛門はもう随分前から見ているし、何度も口をきいている。
　仄暗いし、場合が場合だから、平常と違うのは当然だが、何がなしに、
（違う！）
　と、感じたのだ。
（近う）
　と呼ばれたら、図々しく、そばへ寄って顔を見よう、と思ったがその〝介右衛門〟は、招こうともしないで、むすっと坐っているだけだった。
「御前じゃ」と、案内した侍の一人が言った。「書状があれば、取次ごう」
「いや、口上でござる」
「申されよ」
「ことは、他聞を憚ります」
「なに！」
「されば、御前に直々……」
　ただの戦さの場合の使者ではない。範満と介右衛門の密約は、武将たちは知っている。
「よかろう」
　と、長老は言ったが、
「こちらへ参れ」
　腰をあげたのは、介右衛門と二人きりにするのではなかった。別の小部屋に連れこまれた。
　円座が二つ、栗色に磨かれた床板の上に置いてあるきり。
　左右が煤けた板戸、正面に摩利支天像が描かれて、その前

に小熊の生首がそなえてある。
　小熊の首は土器に盛られ、その切口から流れ出た血は、そのまま異臭を放って湛えられていた。これは摩利支天に捧げてあるものだった。
　横大路一族としては、浮沈にかかわる大事である。摩利支天の加護を願う心は切なるものであったろう。
「――聞こう」
　と、長老は言った。
「話せ」
「これは」東雲之助は見まわして、「横大路どの直々に」
「わしが取次ぐ」傲慢な老人であった。「わしが聞いて、納得すりゃ取次ぐ。それ以外は、殿直々には逢わせられん」
「………」
「万一ということがあるからな」
「それがしを刺客だというのか」
　むっとしたが、老人はそっぽをむいた。
「そうだと申しておらん。刺客でなければ、要用を、わしに申せ。すりゃ、信じてくれよう」
　こうなったら、向うの言いなりになるしかない。
　第一、ここは敵の城なのである。もともと、味方のはずが、どこで食いちがったか。
　範満の股肱が、一転して、敵になってしまった。それも、範満の作戦に欠陥があったせいであり、お屋形（竜王丸）方が、意外に固めが早かったのが、見込みちがいだったのだ。
（下手をすると、おれは、この城から生きて出られない）
　そう思うと東雲之助は、背すじが寒くなった。
　長老の顔は、冷酷そのものに見えた。
「では申し上げる」東雲之助はなるべく摩利支天から目をそらすようにして、「当初の約定をたがえて、城攻め仕ったこと、一時の詭計でござる。これが一つ」
「うむ」
「二つには、今夜、軍をかえして今川のお屋形を襲撃する手はず」
「まことか」
「お屋形より、軍を退くようにとの命令が参ったのが、勿怪の幸いでござれば」
「しかと左様か」
「ゆめ、お疑いなさるまじ」
「摩利支天に誓うか」
「――むろんのこと」
「左様か、そうであろうとは思うていた」
　漸く老人の顔に、喜色が浮んだ。
「じゃから、われらも、疑いはしたが、戦さをせなんだのだ。はじめは驚いてな、大分、矢まぜしたが、死傷者も出

たようだが、城に寄せてきてからは、矢尻ぬきの矢しか射させなんだであろう」
「はあ」
「では、もう一度、お屋形に軍をむけるか」
「されば、一刻も早く、大手を開き、軍勢を城外へお出しなさるようにとのことでござる」
　東雲之助は役目が果せたと思った。が、その最後の言葉が、疑惑を招いたのである。
　長老がその話を伝えると、諸将は目の色を変えた。
「それはなるまい」「うかと乗っては……」「謀略かもわからぬ」「しかし……話の筋は通っているように見えるが」
　もう、こうなると、何が真実か見きわめるのが困難だった。
　範満が野心家であることがはっきりしている以上、その行動も言葉も、アテに出来ないのだ。自分の保身と、出世のためには、約定など平気で踏み破り、人を殺しても、利用し兼ねない男なのだ。
　それだからこそ、介右衛門はあの一札をとった。そして、それを持って、ひそかに城をぬけたことを側近は知っている。
「とにかく、吉左右あるまでは、うかとは出来まい」
「すると、あやつは」
「どうするか、あの若僧を」
　評定がおのれのことに及んでいるのを東雲之助は知らぬ。
「――どっちに転んでも……だな」
　ということに評定が決ってから間もなく、東雲之助のところへ、酒肴が運ばれてきた。
　美しく化粧した女性二人。膳を捧げてきたのである。
「一こん、お過し下さるようにとのことでございます」
「いや、酒などは」
　とは言ったが嫌いではない。
　美女の酌で酒を喰い、珍味を食べるのは、誰でも嫌いではない。が、東雲之助は、いまこの城から生きて出られるかどうかというところだ。うまく咽喉へ通るか。
「御評定は、いましばらく、かかりそうだとのこと」
「左様か」
「それまで、お口よごしに」
「だが……」
　ためらった。
　大事な役目を、ほうり出して、酒にうつつをぬかしていたとあっては、範満に、どんなに叱られることか。
　もっとも、その範満は、いま今川屋形にいっている。
「少々なら」
　と、東雲之助は手を出してしまった。二人の美女にべったりと傍へ侍られての酒と肴である。
「一杯だけだぞ……」

　その一杯が二杯になり、三杯になった。
「まだか、まだ評定は終らないのか」
　といいながら、東雲之助は、女の手をつかみ、抱きよせ、乳房を掌におさめたりした。
「あら、およし遊ばされませ」
　と、身をくねらすが、女は逃げようとはしない。
　東雲之助は、酒には強い方ではない。適当に飲むつもりが、すっかり酔ってしまった。それが城将たちの目的でもあったのだ。
「酔ったぞ、そなたの顔が二つに見える……」
「ほほほほ、二人いるのでございますから、二つ見えるのは、不思議ではありませぬ」
「いや、二人はわかっているわい。だから、四つ……顔が四つ見える。美い女だな、ふふふ、いい胸だ、まだ男を知らぬようなこの胸、この肌……」
「あれ、いやらし」
「何がいやらしい、女は男に抱かれて喜びを知る。ほれ、こうしてやるだけでも、いい気持だろ」
「まあ、くすぐったい」
「何を申す、左様なときは、左様なときは、もっと、もっと、と申すものだ」
「でも……」
「ふふふ、この駿府で今業平といわれている東雲之助に戯れられていやだと申す女なぞいないはずだがな」
「あれ、執っこい……。それより、もう一つ、ね」
「う、もう一つ飲めば、抱かれるか」
「はいはい」
　と、たっぷりと注ぐのを、東雲之助は、騎虎の勢いで、ぐいとあけた。
　人間、いのちがかかっていると恥も外聞もない。むろん、恥をいのちよりも重しとするのが、武士の本質であるべきだが、
〝返り忠〟
　という都合のいい言葉に、横大路介右衛門はすがりついた。
「それがし、もともと、新五郎範満と心を合わする気はござらなんだ」
　と、夜闇にまぎれて、城を脱け出てくると、告白したのである。結構、涙まで流さんばかりの演技を見せた。
「いかなる卑劣な手段を弄するか、この目ではっきり見ることによって、叛逆の意図を、判然させるつもりでござった」
　口は重宝である。もっとも、事態が変化してから、あれこれ、弁疏を考えたにちがいない。
「もとより、まず軍勢を集め烽火をあげた罪、いまさらに、

言い逃れする気はありませぬ」と、殊勝なところを見せながらも、「かの新五郎範満が悪埒なる企み、ここまでせねば、信じませぬ。まず、信じさせた上で、かように、御屋形へありていを申し上げる所存でござった」

これも最初から、予定の行動だったというのだ。

(こやつも狐だな)

と、新九郎は、凝っと、介右衛門の顔を見つめている。

なるほど、影武者とよく似ている。いやよく似た男を影武者に選んだものだ。

「しかし、おかしいではないか」と、新九郎は、突っこんだ。「おぬしに、その気が当初からあるなら、軍勢を動員し、旗をあげる前に、この密約書を、北川どのに御披露すべきところだ」

「さ、それは……」ぐっと詰った。

ぎろりと、眼をあげて、睨んだ。うぬは何だ、いったい、何の身分で、そのような口をきく。と言いたいところだった。新九郎の身分は、あいまいなものだ。いうなれば、一介の客人にすぎない。

義忠引見のうえで召し抱えられたのなら、それなりの身分があるが新九郎は牢人である。

強いていえば、北川どのの兄。竜王丸の〝伯父〟ということになる。竜王丸が、義忠の遺児としての身分と権威を持っている以上、その信頼にこたえて、若君御守護という立場にある。

しかし、その立場は別の見方をすれば血縁にすぎず、守護大名家に於ける地位を物語るものではない。

が、北川どのと竜王丸の面前だしこの二人に糾問を一任されている立場である。介右衛門としても反撥のしようはなかった。

「一片の書状にすぎないゆえ」

と、辛うじて介右衛門は、弁解の糸口を見つけた。

「書いたおぼえがないと言い張られたら、ものの用に立ちませぬ」

「……」

「したがって、軍を動かしたること、また、故意に梅ヶ谷城を攻めずに、遠巻きにしたること、これすなわち、軍をかえして、御屋形に攻めこむための擬態だったこと。これらの行動あって、はじめて逆意の存するところを、明らかにさせしめたことになりましょう」

介右衛門は必死だった。

一つ間違えば、首がとぶ。謀叛は大罪である。

成功すれば報酬は大きいが、やり損えば、地獄が待っている。

新五郎範満にとり入って、その勢力拡大の一翼をになうについても、全幅の信頼を置いているわけではなかった。その人柄に疑惑を持っていたからだ。

したがって、

(やはり)

という気持が強い。

北川どのと竜王丸に〝返り忠〟をしたことにも、別段、忸怩たるものがない。あるのは、

(はたして、心よく受け入れてくれるかどうか)

という心配だけだった。

「おぬしの申し分はよくわかった」と、新九郎は言った。「だが、一方口では、真偽が正せぬ」

「……」

「この書状も、はたして、範満どのが書いたものかどうか」

「それは神に誓って、間違いない。それがしの目の前で筆をとったゆえ」

「範満と対決するか」

「そ、それは……」

「われらの面前で対決すれば、信じられもするが」

「うむ……」苦しげに介右衛門は顔を歪めたが、「よろしい。だが、あの巧弁、何を申すやらしれぬ。その辺のところ、よく御勘考下さるか」

「もとより、狐にも狸にも、たぶらかされはせぬ」

新九郎は大きく笑った。

対決といった言葉を、介右衛門は甘く受けとったようである。

竜王丸の名で、軍を退くようにとの命令が出されたのは、そのあとである。軍を退き休戦状態とする。その上で介右衛門と範満を逢わせる。

新九郎の狙いは、今川一族重臣の前で、

〝範満謀叛〟

をはっきりさせて、禍根を断つというのにあった。

範満はそれとは知らぬ。軍を退き、諸将と同じく今川屋形にくると、大広間に通された。

「戦さをやめると申しても、梅ヶ谷が旗を伏せぬ以上、どうにもなるまいが」

などと声高に言っていたのが、はっとなって息を呑んだ。介右衛門の姿を見たのだ。

あまりに、意表をつかれたのであろう、「あっ!」と、思わず声をあげている。範満ほどの男にしては、不覚だった。

まさか、介右衛門が、この席に平気で顔を出すとは思いがけないことだった。

(しまった……)

瞬間に、介右衛門の真意を感じた。

(彼奴！　寝返ったな)

範満は唇を噛んだ。

範満が動揺したのは、しかし僅かの間である。すぐにお

のれをとりもどした。
　かれはうすく笑い、
「ほう、横大路が」と、周囲に聞えよがしに言った。「矛(ほこ)をおさめて、詫びを入れにまいったらしい」
「……」
「ま、人間、あやまちを改むるに憚る事なかれと申すことがある。これよ、若君への詫びのとりなしは、この新五郎が口添えしてくれようかな、わしにまかせい」
　横大路介右衛門はそっぽをむいたままだった。
　範満は、手ごたえの違うものを感じた。これは、あきらかに、かれを不利な立場に追いこもうとしているのではないか。
（しまったな、一足遅かったか、東雲之助が行ったのが、遅かったのだ……）
　東雲之助が戻ってくることを、じりじりしながら待っていた範満は、時刻が迫ったので、しかたなく吉左右も聞かずに、今川屋形へ参上している。すでに、竜王丸側は万全の手を打ったあとという感じであった。
　だが、範満は容易に屈しない。
「妙なものだ。謀叛の旗あげした者と同席はいたしかねるぞ。おれは去ぬる」ぬっと立ち上って、「方々も立ち帰るがよいぞ」
　と、腹心の者たちに顎をしゃくった。
　つられて立ち上った者が二、三人いる。
　が、そのほかの者は、あるいは膝を起したまま、顔を見あわせたり、新九郎たちのほうを窺ったり、どうするべきか、決しかねているようだった。
　こう事態が変化してくると、かれらも、態度を決めかねてくる。右するか、左するかで、一族の運命も変ってしまうのだ。
「待たれよ」新九郎がするどく、呼び止めた。「待たれよ、何処へまいるぞ、戦さの相手はこの場に居るのに、梅ヶ谷まで、まいる必要はあるまい」
「ほう……これはしたり、たしか軍を退くようにとの若君の上意ではなかったかな」
「左様。横大路より逆意の存するところ、分明にしたいとの申し出があったのでな」
　新九郎は顎をしゃくった。介右衛門は、待っていたように懐中から件の書状をとりだした。
　範満の顔色がまた変った。
　一目でわかった。おのれが渡した密約書だ。
〝謀叛状〟
　といってもいい。
　範満の顔色が変ったのはしかたがない。いうならば、それは、範満自身の罪状書でもあった。
「見おぼえがあろうな」

　と、新九郎は、凝っと、そんな範満の顔を見まもったまま、書状をひらいた。
「――どうだ」
「……」
「今川新五郎範満……この字と申し、花押と申し、おぬしの筆に相違あるまい」
　小鹿を名乗っている範満だが、正式に認めるときは今川と書く。
「そ、それは……」範満は絶句した。
　その表情が、こわばったものになり、やがて、大きく崩れて、哄笑を噴きあげた。
「なんだ、これは、見たこともないしろものだな」
「なに！」
「偽筆じゃ、おれを陥し入れようがための偽筆じゃ、ははははは、おれの筆跡ではない」
「たばかりめさるな」と、介右衛門が、片膝をおこして、「それは、まさしく、それがしの目前にて、したためられたものに相違ない」
　顔を真っ赧にして、力説した。
「そのときの、おてまえの言葉の一つ一つ、表情といい、すべておぼえておるわ」
「ふん、夢でも見たか」
「ゆ、夢だと、なんたることを。おてまえが、軍を起し、竜王丸ぎみと北川どのを弑逆し奉って、この駿遠両国を一手に掌握せんこと計りし上に……」
「黙れ！　何をたわごと申す」
「何がたわごと。おぬしの謀計を申しておる。まず、わしが烽火をあげ、梅ヶ谷攻めと称して軍勢を動員し一転して、この屋形を攻め、火を放ち、一人あまさず殺戮するという計画ではないか」
「はははは、愚かな夢を見たものかな」
「黙らっしゃい。おぬしに教唆されねば、なんとして、この横大路ごとき卑小の身で、お屋形に反抗しようぞ」
　なるほど、と頷いた者が多い。
　そうでなくても、範満の叛意というか、野心のありようは周知のことだったのである。
「卑小か、なるほど、卑小な者は考えもまた卑しく、小さい」
　と、あくまでも範満は、ひるまない。万一に備えて、弁疏を練習していたのではないかと思われるほどしゃあしゃあとしているのだ。
　動揺が過ぎると、この男の持ち前の図々しさ逞しさが、ゆるぎないものに見せるのだ。
「悪い夢を見たらしいな。それとも、妄想か。いやさ、謀叛に失敗したゆえに、おれに罪を被せようとして、捏造したか」

範満は、書状をひき裂こうとした。
ひき裂いてしまえば、証拠は失くなる、と思ったのか。
「待て！」
新九郎は大喝するや、手にした扇子を咄嗟に投げた。
扇子は、範満の肘を打った。ぽろりと書状をとりおとす。
新九郎は、ゆっくりと、それを拾いあげた。
「偽書かどうかは、日ごろの、おぬしの筆跡と照し合わせてみればわかるのではないか」
「む……」
「すでに、用意してある」
新九郎が顎をしゃくると、次の間から、北川どのの侍女が数葉の書状の入った藤葛で編んだ覧筥(らんばこ)を捧げてきた。
「これは、いずれも、おぬしの筆だ」
「……」
「見くらべるがいい」
ぱっと、覧筥をひっくりかえすようにして、書状を散乱させた。証拠のものは、裏返しにして、誰にも見えるように掲げたのである。
「これが別人の筆跡といえるか」
しかし、範満はそれでもひるまなかった。
「たしかに、いずれも、わしが書いたものにちがいない。が、その一葉だけは偽筆だ」
「まだ、左様なことを」
「何といわれても、おぼえのないものは、ない」
「だが、横大路の証言が」
「奴は嘘吐きだ」
「だが、この字は、誰が見ても同じというだろう。言いひらきはきかぬ」
「さあ」と、あくまでも、範満はとぼけた。「――勢いが違う」
「なに」
「よく見てくれ、日ごろのわしの書いたものは、これ、この通り、筆に勢いがある。が、この偽書のほうは、まるきり勢いがない」
「……」
「つまり、わしの筆跡に似せて書いたせいだ」
「うぬ！」
「似せよう似せようと思えば、つい筆先の歩みがにぶくなる」
「……」
「誰が見ても、これは偽筆だな」
範満は勝ちほこったように言った。そう言われてみればたしかに勢いがない。
「なるほどな」と、新九郎は書面を見直して頷いた。「勢いがないのは事実だ」
「であろう」

「しかし、横大路が見ている。目の前でおぬしが書いたと」
「嘘吐きめ」
「さあ、嘘を吐いているのは、どっちかの」両方を交互に眺めて、新九郎は確信的に言った。「同じく筆勢をたわめて書くにしても、本人が書くほうが、容易であろうな」
「わしは新五郎範満ぞ」威たけ高に、かれは叫んで立ち上っていた。「うぬらは、わしの言葉を信じないのか、かような、宿無し牢人ずれの申しように耳かたむけて、わしの言うことを疑うとは、何たることだ、それでも駿河の人間か」
「いかにも、おれは牢人だ」と、新九郎は、静かに言葉をはさんだ。「だが、いまは若君のお申し付けで、この件を糾明している」
「……」
「いさぎよく、みとめたらどうだ、新五郎どの」
「黙れ、おれは……わしは、知らぬ。何も知らぬ。左様な、一片の紙きれ、なんの証拠になろう」
「あくまでも、偽書だと言い張るのか」
「――占ったらどうだ」範満はふてくされたように言った。
「占えば、真偽がわかるであろう」
この時代は、神示や占術に対しては、呆れるほど人々は素直だった。この範満の言葉は、現代人には、言い逃れとしか聞えないがその席に居合わせた人々には、もっともな言葉に聞えたことである。
「そうです、それがよろしい」こう言ったのは、北川どのの夢子であった。「占いで見てもらえば、間違いありますまい」
「……」
「天殊がよろしい、ただちに呼ぶように」
意外なことに、その言葉に、範満も賛成したのである。
「天殊ならば間違いあるまいな、文殊菩薩に、嘘はあるまいて」
その態度には、毫も忸怩(じくじ)たるものが見えず、かれの野心を直接のぞいたことのない者には、まるで横大路介右衛門の方が嘘を吐いているのかとすら、思った者もいる。
それほど、範満の態度は、堂々としていた。居直り、と、新九郎や介右衛門には見えたが、知らぬ者は、態度で、自分なりの結論を出してしまう。
「――新五郎どのが、謀叛など考えるわけがない」
「介右衛門が、窮余の一策で、罪をなすりつけようとしているのではあるまいか」
「うむ、そういえばの……」
したり顔の、もっともらしさのほうが、愚鈍の眼には、効果がある。介右衛門は、もともと小心者だから、あまりに手強(てごわ)い範満の態度に、おろおろしてしまって落ち着かない。ひょっとして、妖女天殊が、範満を真実とでも言った

ら、とんでもないことになる。
範満のことだ。天殊に手は打ってあろう。天殊を抱いていようし、妻にするくらいの報酬を約束しているかもしれない。
その心配が、介右衛門を落ち着かないものにしている。範満も、そんな介右衛門の小心者ぶりを、計算にいれていてのことだった。
(それ見ろ、おれを甘く見るからだ……頭も悪く、才もないくせに、おれを敵にまわすと、どんな目にあうか、いまに見ておれ)
範満は、介右衛門が相手なら、負けぬ自信がある。黒を白と言い逃れることもできるのだ。
その自信で、悠然とかまえて、酒を飲んでいる。
が、介右衛門の方は、酒などとても受けつけない。腕を起すかと思えば、坐りなおしたり、尻をもぞもぞさせたり暑くもないのに、扇子をやたらと動かしたり、まるきり落ち着かないのである。
第三者の眼では、これではどっちが嘘をついているのかわからない。範満が自信を喪わないのは、介右衛門のこの弱い性癖を知っているからだった。
女陰陽師の天殊が呼ばれてやってきたのは、半刻と経たぬうちである。
「如何ような御用でございましょう」
謎めいた微笑を含んで、天殊は設けの席へ坐った。
北川どの母子、新九郎、範満、介右衛門そのほか、新野、名古谷等今川一族重臣ら諸将が居並んだ席であった。いうならば駿遠二国の重だった者が綺羅星の如くに、連なっているのだ。
常の者なら、竦んでしまう席であったが、天殊はものおじする風もない。
妖艶といっていい眼である。本人は、それを意識しているかどうか。
じろりと見渡した。流し眼の艶っぽさと、異様な自信に満ちた光が、その瞳をきらきらさせていて、嬌めいたものではあっても、媚とは違う。
そこに一種、異様な妖しさがあった。男女を問わず、老幼の別なく、おのれの術中にとりこめてしまうこれはあるいは魅力と呼んでいいものかもしれない。
天殊の視線は、範満の顔を通りすぎた。半ば暴力的に犯されたことも、そしらぬげであった。
あのとき、天殊はかたちの上では犯されながら、心から、範満を拒もうとしなかった。むしろ、かなり恣意的だった。
その真意が奈辺にあるのか、推測は難しい。
が、少なくとも、範満の方では、
〃ポイントを押え〃
てあるつもりだった。

(おれの一物では楽しんだはずだ……おれに悪いようには、計らうまい)
と安心していた。
天殊が故意に知らぬふりを装っているのも、かえって、その深謀からと思った。
修法を行うには、文殊堂へ籠らなければならない、と天殊は言った。
「この場に於ても、出来ぬことはありませぬが、気が散りましては」
「しかし、その時間はない」
このままずるずると時間が経過するのは、避けねばならぬ。奸智の範満が、どんな手をうつかはかりしれない。一刻も早く、決着をつけねばならなかった。
「急がねばならぬ」
と、新九郎は、範満に視線をむけて、
「新五郎どのの名誉にかけてもな」
皮肉な微笑を、範満はどう受けとったか。
「む、むろんだ」
「少しでも早く嫌疑を霽らさねばなるまい」
「その通り」
「ただし、これが偽筆だった場合は、だ」
「……」
「天殊どの、この場でやって貰おう、公けの席でやれば、いかなる答えが出ても疑われることはない」
「わかりました。でも、なるかならぬか……ともあれ」
「いい加減なことでは困るぞ今川家の運命に関わることだ」
「左様に仰せられるならば、やはり文殊堂に七日七晩、お籠りしなければ」
天殊はいつになく強硬だった。
美しく臈たけた顔が信念にひきしまって、一層、神韻に似たものさえ感じさせる。
「なるかならぬか、ともかく修法して下さい」
北川どのは疲れたように言った。
身分ある男たちが、いのちと名誉を賭けての争いに、弱い女の身ではついていけない。といって竜王丸の将来のことを思うと、この場の闘争に耐えなければならなかった。その苦しみの刻を、少しでも早く切りぬけたいのだ。
そう言われると、天殊も、一応祈念しなければならぬ。すぐにその場で修法の支度がされた。
秘香が焚かれ、天殊はもっともらしく、数珠をつまぐって、文殊菩薩を拝んだ。
はじめは口の中で、唱える祈りの言葉がしだいに激してくると、妖しいひびきとなって、室内にこもり、居並ぶ諸将たちを、その奇怪な雰囲気の中にとりこめてしまう。
範満だけは大きなからだをゆらゆらさせながら、口辺に

皮肉な微笑をたやさない。この秘香の匂いは、かれに、先日の天殊の肌の柔らかさを思いださせている。
　かれは条件反射のように、股間に充実をおぼえた。
（いい肌だったな、あの味は忘れ難い。天殊もいい思いをしたはずだ……おれに悪いような答えはだすまい）
　そのとき、天殊はどれほど、この〝修法〟に熱を入れたろう、おそらく、みんなの手まえだけ、かたちをつくろったにすぎないのではなかろうか。
　天殊の駿河における評判は、その美貌と、ミステリアスな生い立ちと相まって、浸透している。
　その妖艶だけでも、衆愚をたぶらかすことができる上に、運命の予言者であり、祈禱によって活殺する。謎めいていることは、それだけでも魅力だった。
　天殊が文殊堂に籠って、どういう修法をするものか、見た者はいない。
　いや、新五郎範満だけは別だ。勝手に入りこんでこれを見、さらに抱いている。
　が、ほかの者には興味がある。好奇心だ。決着がどうつくかよりも、この妖しい雰囲気には、興味を惹かれる。
　その人々の、固唾をのんだ気配を背中に察しながら、天殊は数珠をつまぐった。
　香煙が絶え、修法は終った。
　が、北川どのをふりかえった天殊は、あの自信に満ちた顔を沈鬱にゆがめて、左右に振ったのである。
「――だめでございます」
「なんと！」
「気が散りました」
「……」
「文殊菩薩のお告げがありませぬ」
「やはり……ここでは駄目か」
「はい」きっぱりと天殊は言った。「文殊堂でなくては、とてものことに」
　語尾は悲しげにすぼまった。
　それは、北川どのの愛顧に応えることのできぬ悲しさを見せて、巧みに範満の苦境を救い、おのれの立場も維持するものだった。
「――やむをえぬ」新九郎が言った。「七日七晩の修法をすればよいのであろうが、そのひまはない。ほかの方法に頼るしかないな」
「なんだ、ほかの方法とは」
　範満は、漸くこれで解放されたと思ったところだけに、この提案には不服な顔を露骨に見せた。
「文殊菩薩でもわからぬというのは、偽書がいかに巧妙かということの証しではないか」
　と、あくまでも言い張った。
「この上は……」

と、範満ぐいと袖まくりした。
　介右衛門に殴りかかるのかと思って、名古谷などは、思わず袖をおさえようとしたが、そうではなかったのである。
「文殊菩薩は仏じゃ」
「……」
「仏でわからぬとあれば、あとは、神示によるしかない」
「何を申すのだ、新五郎どのは」
「神のお告げよ」と、肩まで右腕をまくりあげて、「介右衛、わしとくがだちを争うてみい！」
　くがだち――に就いては前に述べた。
〝探湯〟
　あるいは、
〝盟神探湯〟
　とも書かれる。
　事の正邪を決せんがため、神明に誓って熱湯を探らしめ、傷つかざるものを正、傷つきたるものを邪とした。
　この起源は古い。おそらく、太古から存在したのであろう。文献にあらわれるのは、応神記などぐらいからである。
　武内宿禰と、甘美内宿禰がこれを行い、武内が勝ったとある。
〝誓湯〟〝湯立〟〝湯起請〟など言葉は違うが、同じことだ。
　人間は嘘を吐く。その真偽を見わけるのは難しい。
　以前にある作家が、重大事件の容疑者の〝眼が澄んでいる〟から、犯人ではない、と断言して一時、騒がれたことがある。が、これなど、いささか老作家たるものが軽率な発言であった。
　眼が澄んでいる、濁っている、で、犯人の真偽がわかるのなら苦労はしない。疲れた眼は濁っているし、罪意識のない犯罪者の眼は、子供のように澄んでいる。
　人間とは、そんな単純なものではない。二千年の間、そのために社会は苦しんできた。
　動物だったら、単純だから、眼が澄んでいる、で判別できるかもしれないが、複雑な社会の中で生きる人間は、そんな安易な見方ではとらえられない。
　太古、近古にあって――社会がもっと単純であったころから、いかに、人間が巧妙に罪を匿すのに長けていたか、それを見破ることが難しかったか、このくがだちの存在が証明している。
　強大な権力をもってしても、ことの真偽が判然するには、〝神示〟に頼るしかなかったのだ。この神示をもとめる方法は、現代人から見ると野蛮すぎる。体力の相違が正邪の区分になるなどとは、あまりにも非合理的だ。
　だが、古い時代は、人間への尊敬があったのだろうか。
　人間というものを、ただ、体力の違いで見ようとしない。もっと〝神〟に近い〝精神〟を持つ者という眼で見ていた

ことも、わかるのである。
つまり、
「正しいならば、負けるはずがない」
ということは、
「神が助けるはずだ」
という理屈につながる。
神の力とは、それほど偉大であり、人間は、その庇護のもとに存在していると信じて疑わなかったのだ。
範満の方で、それを挑んだことは、
(かれの方が正しいのでは？)
と、思わせる効果があったのである。
「介右衛、くがだちに神示を仰ごうぞ」
吠えるような言葉だった。横大路介右衛門は愕然となった。
「な、なんとして、左様なことをせねばならぬぞ」
思わず、介右衛門は、おのれの手を抱くようにした。
どちらかといえば、介右衛門は逞しさに欠ける。くがだちの熱湯を、瞬間的に思い、慄然としたのであろう。
「うぬは、おれに申し掛けた」
と、範満は喚いた。
「おれのむじつの証しをたてるためには、くがだちが一番じゃろ、神示によって、正邪がはっきりするであろうぞ」
その自信があるのか。

新九郎が口をはさもうとしたとき、北川どのが、
「それがよい」
と、言ってしまった。
「神さまの御心のままに」
「左様じゃ、では、即刻、この場に於て、神示を仰ごう」
範満が促しているのである。
ただちに鉄釜が用意された。子供ならすっぽりと入るくらいの大釜である。
薪を集めて、火を点じる。小者が二人で火吹竹を吹き、炎を噴きあげる。
湯が沸きたつまで、介右衛門は落着かなかった。そわそわして、酒を飲んだり、立ち上って何度も小用に行ったり、おかしくもないのに、ひとりで急に笑い声をあげたりした。
範満のほうは悠然と盃を舐めながら、
「彼奴を見張っていろよ、逃げだすかもしれんぞ」
「まさか」
「あの顔を見ろ、まるで死人だ」
そう言われると、なるほど、半分死にかけている。いや、死ぬまえに、気狂いしそうだった。
いよいよ、これでは範満のほうが正しいように見える。
新九郎にも、わからなくなってきた。
(はてなあ、九分九厘、新五郎範満が邪心ありと思うていたが)

人間とは不思議なものだ。黒は黒、白は白と思っていても、その黒が白と主張しはじめると、いつの間にか、白く見えてくるものだ。
自分の考えなり、〃眼〃なりに自信を持っていても、その自信そのものが、実は、かなりにあやふやなことを思い知らされるのである。
北川どのはどんな気持なのか、この場の成りゆきに、興味を感じているようだった。
このくがだちの結果は竜王丸の将来にかかっている。にもかかわらず、いま、北川どのをとらえているのは、〃神示〃が、如何なるものか、その興味らしかった。
(これは……呆れたな)
新九郎にとって、新しい発見だった。
北川どのの隠れた一面を見た思いである。眼がきらきらして、頬が紅潮し、艶めいて見えるのだ。
「滾りましてござる」
大釜の湯は、音をたてていた。
「……………」
介右衛門には、その音は、地獄の釜の湯の滾る音に聞える。
「さ、用意がととのいましたぞ」
耳の傍で言われて、はっとなった。すでに、範満のほうは、片肌脱ぎになって、逞しい腕をあらわにしている。

「さ、あちらへ」
促されて、もはや、介右衛門もあとへはひけなかった。逃げたい思いに駈られながらも、
(おれのほうが正しいのだ)
と、思った。
祈るような気持だった。
(おれは嘘を言っていない。すべてを告白している……武士として卑怯には違いないが、だが、神がおれを、殺す権利があるか？)
体力的にも、範満に勝つ自信はなかった。
まるで、屠所にひかれる牛のように、介右衛門はよろめきつつ、大釜に近寄っていった。
「今川家で、くがだちが行われたという話は、これまで聞かなんだな」
と、範満の方は大声で、誰にとなく話している。あるいは、これも、不安を消すための、豪放を装っているのかもしれないが、
「これは歴史に残るであろうぞ、今川新五郎範満、くがだちに勝って、……」
そのあとの言葉は、のみこんだ。
大釜の火がそのときおとされた。一度、滾ったところで、火をおとし、あとは小さな火で、ふたたび沸かせるのだ。
二人は釜をはさんで向きあった。

「不肖、伊勢新九郎が検視の役を承る」
新九郎は床几に腰をおろして、釜を見まもった。
「さ、御両所、同時にさし入れるのだ」
もはや、ここまで来ては、ひっこみはつかない。介右衛門は眼を閉じた。右腕をまくりあげると湯にかざした。
「ほう、やるつもりだな」
湯気の向うで、範満が嘲笑するように言った。
「その腕がとろけるぞ、骨までとろける。不具になる、よいな」
「う、ううむ、くそ！」
介右衛門の顔は真っ蒼だった。
「それっ」
新九郎の白扇がさっと、あがった。
同時に——二人の腕が熱湯の中にさしこまれた。どっちの唇から発せられたか、ううッという声が洩れた。
北川どのも竜王丸も、他の諸将たちも、息を詰めて、この場の様子を見守っている。
湯気の中で、二人は、顔を近寄せ、お互いに睨みあっていた。
腕を煮る熱湯のはげしさに歯を食いしばって耐える。その全身が灼かれるような苦しみも、目前の敵のせいだと思うと、かっと双眸に憎悪の炎が燃えあがるのだ。
「ま、まだか！」
範満がたまらずに叫んだ。
釜の下で、炎が大きくなるにしたがい、ふたたび、釜の湯はふつふつと滾りはじめていた。
浸しているのは、右腕だけだが熱湯は全身をおかしているにひとしい。
燃えるような熱さで、両脚ががくがくし、握りしめた五本の指が、そのまま、一塊の肉になってしまうようであった。
二人の顔は真っ赤にうだり顔いっぱいに汗を吹きだしていた。いや、汗は、顔だけではなく頭髪からも流れでた。
流れでても、流れでても、なお尽きることのない汗は、滝のようであった。その汗と湯気で眼前がかすみ、お互いの顔もおぼろになっていた。
「う、ううむ、負けぬ、負けぬ、おれが、負けるはずはない、神よ、八百万の神よ、照覧あれ、こ、この介右衛門は……」
心で念じることが、いつか言葉になっていることも、わからなかった。
もはや、この場所が、今川屋形の中であることも、この勝負に勝たなければ、生きる道がないことも忘れていた。
ただ、熱湯の中で耐えることだった。ただ、耐える。耐えることで勝つ。耐えるほうに神が宿る。
その一念だけだった。

「ぬう……くそ！　勝つ、おれが勝つ！」
範満は叫んだ。おのれにむかって叫び、神にむかって叫び、叫びつづけた。
「八幡大菩薩！　おれは、今川の範満ぞ、八幡！　見よ、見よ、おれが勝つ、おれの方が勝つ、お、おれのほうが……」
血を吐くかと思われる声だった。その二人の声は、湯気にくぐもり、さながら、熱湯が滾り発する呻きのようであった。
（神が……どちらに味方するか）
新九郎は、凝っと二人を見まもっていた。
その答えは、また、神の存在の証しでもあるかもしれぬ。
新九郎はどちらが勝とうと、かまわぬ。今川家のためには、どちらが勝っても、直接には影響はない。
（おれがいる！）
新九郎の自負が、この勝負を冷静に見守っているのだ。
釜の下の炎は大きくなり、熱湯はその凄まじい沸騰とともに量を減じながら、二人の腕から全身を溶解せんばかりに、泡だち狂おしく滾り立つ。
苦痛をしのぶ二人の、言葉にならぬ声が、しだいに高くなるにつれ、周囲の人々は、声をのみ、息をつめた。
竜王丸などは、北川どのにしがみついてしまっている。
このままだったら神示のあらわれぬうちに、二人とも、煮られてしまうであろう——と、思われたとき、うわーっという悲鳴とともに一方が、のけぞり倒れるのが、見えた。
倒れたのは、どっちか。
「やっ、負けた」
思わず叫んで、人々は腰を浮している。
勝負はついた。
「か、勝ったぞ！」
凱歌をあげた男は、真っ赤に爛れた腕をふりあげて、たたたっとあと退った。新五郎範満であった。
「勝ったぞ、見よ、おれが、おれが、勝った、やはり、八幡大菩薩は、おれの守護神よ、今川家の武運永遠なろうぞ、勝ったのじゃあ」
昂奮は、何を叫んでいるのかさえ、わからないようであった。
「と、殿、早く、薬油を」
近習が油壺を持って、駈け寄った。
「この中にお浸けなされませ」
「う、腕を……」
握り拳が、一つの肉塊になったかのようであった。指をひらこうとしたが、ひらかない。
「くそっ、くっついてしもうたか……」
「そっと、そっと……」
じゅっと、油が音を立てたような気がした。気のせいで

あろう。
　範満はよろめいた。家臣がうしろから支えた。
「か、勝ったな、たしかに勝ったのだな、おれが」
「はい、左様でございますとも、殿の御勝利、神の裁きは、まさしく、殿を正しいと仰せられたのでござりまするぞ」
「そうだ、そうじゃとも、おれが正しい」
　おれが正しい、と、範満は口の中で、おのれの心へ言い聞かせるように、
「おれが正しいゆえに、勝った。し、新九郎、どこじゃ、新九郎は」
　目がかすむようであった。
「新九郎、見たか！　神示を見たか！」
「見た」と、新九郎は、平静に答えている。「おぬしが勝った。負けたのは、横大路介右衛門だ」
「すりゃ、あの書状は、偽書ということに」
「まことの神示なればな」
「なに！」
　痛みが、新九郎の皮肉な言葉を追及する力をなくさせていた。
　介右衛門のほうが、たしかに、ひどかった。右腕は、殆ど煮えて、赤く爛れ、指と指がくっついてしまい、気息えんえんたるものだった。
　その場から一歩も動けず、横たわったままだった。家臣たちが駈けよって、冷やしたり、気つけ薬を飲ませたり、介抱して、漸く、正気づいた。が、もはや、そのまま、息をひきとるのではないかと思われた。
「し、新九郎どの……」
　と、介右衛門は、うわごとめいて、絶望の声を洩らした。
「か、神はいまさぬか……」
　神は死んだ。
　介右衛門はそう言いたかったのではないか。
　だが、所詮、勝負に敗れた以上、それは、範満方から見れば、「曳かれ者の小唄」でしかなかったろう。
「や、奴を討て」
　範満がここぞとばかり喚くと、周囲もそれに和した。
「神慮、只今、明らかなる答えを示し給うたぞ、正邪は判然した。横大路介右衛門こそ、邪心者じゃ、謀叛人じゃ、奴の首級をあげよ」
　一気に介右衛門を殺してしまえという範満の意を体した者たちの叫びであった。
「待て、騒ぐな」新九郎は立ちはだかって、両手をひろげた。「たしかに神示は見た」
「……」
「横大路の処分は、この方で行うぞ、うぬらは手を出すまい」
　しかし、気力をしぼっての範満の煽動は的確だった。

異常な、
〃くがだち〃
で昂奮しているところへ、油をそそがれたかたちである。
「やれ、やっつけろ」「謀叛人は横大路」「天誅じゃあ」
どっと、介右衛門の方へ殺到した。
　一人が抜刀すると、まるで、天の啓示を受けたかのように、次々とそれにならった。あらかじめ、示し合わせての行動のようであった。
「退れ！　御館を騒がす者は、片っ端からぶった斬るぞ」
　新九郎も遂に抜刀した。
　だが、もはや狂いだした群集には、その制馭の声も耳に入らねば新九郎の存在も見えないようであった。
　血を見て狂い立つ野獣たちのように、かれらは、完全に理性を失っている。
　範満は、
（しめた！）
　と、思った。
（この騒ぎにまきこまれたことにすればよい。竜王丸を殺ってしまえば禍根が残らぬ）
　腹心たちに顎をしゃくった。
「いまじゃ」
　と言った。この範満の心の中は、その男には、すぐに通じなかったようである。
「え？」
　と、意味をはかりかねて、けげんな表情をした。
「若を」
　勘の鈍さに腹が立った。東雲之助なら、すぐにかれの意を体して、行動するだろう。
「殺れ！」
　もはや仮面を脱ぎ捨てるしかなかった。
　強者が、弱者を支配する乱世の倫理を、行動で示すだけであった。
　そのとき、ふいに、中門の方でわあーっと喚声があがった。弓矢を手にした足軽らが、雪崩れこんで来たのである。
「偽りの神示に耳かたむけるな、かくなる上は、神火によって裁かん」
　理非曲直も力であった。弓につがえた矢は火矢である。ばしっ、ばしっ、と屋形の板戸に突き刺さった。
　火矢――
　火はすべてを浄める。
　いま、神示を仰ぐ〃くがだち〃によって、敗れた横大路介右衛門の一族にとっては、もはや、
（問答無益！）
　という気持なのであろう。
　もともと、範満の腹心たらんとしたのも、またかれを裏切って密告したのも、すべては、おのれの出世と、保身に

ある。

　密告が成功しなかったのは範満の用意が周到だったせいだが、神様までが、範満に加担したとなると、もうあとは、破壊しかなかった。

　介右衛門の一族郎党らは、弓をひきしぼり、火矢を放った。火矢は激しい音を立ててぶすぶすと、寝殿に突き刺さり、板戸や柱を焦がし、軒を舐めてひろがっていった。

「火を消せ」

　新九郎は火矢を叩き落しながら、本間源次郎に、

「おぬしは若だけを守れ」

と叫んだ。

　だが、手桶に水を持ってくる者も、白刃をきらめかして、殺到する範満の配下に仰天して、投げ捨てるしかない。

　新九郎は斬りこんできた白刃をはねのけ、右に左に斬り伏せて、火の中に飛びこんだ。

　家の内では、女たちが悲鳴をあげて逃げまどっている。其処此処で斬り合う人々の凄惨な叫びが、一層、燃えさかる炎をあおるようであった。

　火と血が、人々を狂わしていた。

　はっきりと分ければ、これは三つ巴になっての争いだが、混乱が混乱をひきおこして、火ノ粉と、熾烈に炎上する火の音、さらに風が空に唸った。

　半死半生となった横大路介右衛門を逃がすためにも、火事は役立った。

　範満にしても、介右衛門ほどではなくても、腕がただれて、高熱を発している。

　この混乱の間に、竜王丸を斬ってしまおうとしたのも、無理だったようである。かれ自身、立っていることもできなかったのだ。

　北川どのは薙刀を手にし、竜王丸を片手抱きにし、対ノ屋に逃れ、裏手へ走った。

　まわりを侍女たちも、護衛するようにして走りながら、追いすがる連中へ威嚇の刃をむけた。小薙刀や脇差を手にし、裾をからげている女もいた。

　そのころになると、竜王丸の味方の者たちが、数を増してきて、炎に水をかける者、火のついた板戸を長鉤でひき倒す者、消火につとめる一方、範満と介右衛門の手勢を追い詰めはじめていた。

　煤と返り血にまみれた新九郎はその様子を見て、ほっと、刀をおろした。

「騒ぐな。若は御無事ぞ。謀叛人を誅戮せよ」

　むしろ、範満が、炎の屋形から脱出出来たのが、不思議なくらいであった。範満と介右衛門の手勢は少ない。

　屋形を二重三重に警固していたのは、三浦次郎左衛門、朝比奈帯刀、由比民部など、重臣たちであった。

ただ、新九郎や夢子の懸念は、この連中にしたって、

〃範満謀叛〃

ということになれば、動揺しないはずがない。

　横大路の謀叛くらいでは、加担しないが、大物である範満の動向には、やはり平静ではおれない。くがだちの神占が一転して、修羅場となった事が、かれらに動揺を与えたのは事実である。

だが、

「竜王丸は無事ぞ、北川どのにもつつがなし。謀叛人は、新五郎範満に介右衛門じゃ」

　という声が、かれらの動揺に決定を与えた。

「若を守れ」

「お屋形の火を消せ」

「謀叛人を討て」

　口々に喚きながら、範満を追った。

　さすがの範満も、こうした事態へ備える用意に欠けていた。

　範満の周囲には十数人の供侍しかいなかったし、変事を聞きつけて、強引に屋形へ駈けつけてきた軍勢の一部も、三浦の手勢に阻まれた。

「怪しの動きあれば、容赦なく討ちとれとの仰せだ」

　槍を突きつけられて、動きを失っていた。

　範満が逃げ出したのを守るだけのことが漸くできたにすぎない。

「沓谷へひとまずひき上げるのだ」

　範満は家来の肩にすがり、前後を守られて、馬に乗ることが出来た。

　敵味方が入り乱れて、槍を合わせ、白刃を打ちあっている。矢が飛び交い、悲鳴と怒号が、渦を巻いた。

　逃れ出たのは介右衛門も同様である。

　これははじめから範満よりも分が悪かった。小心なだけに、いざという際の逃げ道も用意していたのだ。

れいの雷神うらのスラム街だ。介右衛門は助けられて、このスラム街に逃げこむと、夥しい牛の群れの暴走が演じられた。

　その混乱にまぎれて、介右衛門は姿をくらましてしまったのである。

　その少し前、東雲之助は、梅ヶ谷の城で、女を抱いていた。

　女たち二人は、城代から言い含められていたのだ。東雲之助に酒を奨めるのが執こかった。

　東雲之助が戯れようと、女の腰に手をのばすのを、巧みに避けて焦らしながら、

「もっとお飲みにならなければ楽しゅうありませぬ」

　と、執こく奨めた。それが不審を起させたのである。

「もう、これ以上、飲めぬ」

東雲之助も漸く、女の態度と城内の様子のいぶかしさに気がついていた。
　それくらいの頭ははたらく。
（こやつらは……）
　おれを酔いつぶそうというのか。それなら、逆手をつかってやる。と、東雲之助は、盃を捨てて、女を抱きよせていたのだ。
「飲むのは、これをしてからだ」
「まあ、いやな人」
「どうかの、あとで、もっともっとと、望むはずだ」
「いやですよ、ひとの目の前で」
「同じことさ、おまえから先だ」
　と、やにわに、女の下肢をひきあけ、のしかかった。もう一人の女は、思わず、顔を袖で蔽った。
　東雲之助は女を犯しながら、ちらちらと、もう一人の女を見ている。その女の困惑と好奇の心の動きを見ていることが、一層、快楽をあおるのであった。
（こいつも好き者だ）
　困惑するなら、逃げ出せばよさそうなものを、逃げようとはせず迷惑そうに、羞恥で真っ赤になりながら、しかし、袖の間から、熱い瞳をむけているのだ。
　わざと東雲之助は、男のものを見せるようにし、女のからだを自由に扱いながら、
「そなた、名は、なんと」
「あ……」
「あ、というのか」
「あたくし、竹……」
「お竹か、ほう、なるほど、青い竹のように、痩せているな」
　脛も細い。もう一人の女のほうが肥りじしで、肉感的なのである。
　東雲之助は、あらあらしく女体を扱った。早く済ませて、その小肥りのほうを抱きたいと思った。
　が、その冷たいほどのあしらいが、かえってお竹には、強烈な愉悦をもたらしたようであった。
「……」
　息もたえだえになって、あらぬことを口走り、裸身を波うたせて悶えるのだ。
　女のそんなさまが、かえって東雲之助にはうとましく思え、萎えるような気すらした。
　小肥りの女のほうは、袖で顔を蔽ってはいるものの、はっはっと、呼吸も荒く、目の前で展開された男女のまぐわいに、魂も奪われたように、身を乗りだしてきている。
　裾がみだれ膝がしらがのぞいていた。東雲之助は、かえって、それによってそそられた。
　かれはお竹の中に果てると、

「さあ、こっちだ」
　と、手を伸ばした。
　その手が、無言でぴしゃっとはねつけられている。
「……」
「来いよ」
「いやです」
「ふッ、遠慮か」
「いや、そんな……」
　拒みながら、二度払い、三度目の手につかまれると、もう、払おうとはしなかった。
　女心は複雑だ。常に他との比較で生きている。お竹がさきに東雲之助に抱かれたとき、敗けた、と感じたのだろう。
　男がお竹の方に先に手を伸ばしたのは、たまたま右側にいたからにすぎないのだが、女はそうは思わない。二人以上いれば、選ばれた、と、単純に思ってしまう。
　それに対する反撥が、
（見てやれ）
　という、蔑みの眼になって、むしろ、見ることによって、侮蔑を加えたつもりだった。
　だが、東雲之助とお竹の行為は、灯火のゆらぎのもとで、妖しく、かえって、女の心をゆるがした。
　東雲之助の手をふり払いながら結局はその手におのれをゆだねたのは、燃えあがった肌がさせたものであろう。
「名は何というたかい」
「とき」
「ときか、おときか、ふふふ、おとき、おれのこいつは、おときに入りたいと呻いているわ、それ、このように」
　と、女の手を強引に下腹部にひき下げて、触れさせる。
「あれ、いやだ」
「いやではないさ、好きになる」
「……」
「嫌いでない証拠は、これ、ここにあるわさ」
　逆に、東雲之助の手が、女の下肢の間に入った。
　素早い。
　乱れていた裾前である。男の手に内股を触れられると、それだけで、おときはもう、かっとなって眼がくらんだ。
　東雲之助が、おのれで言うように今業平の優さ男だったせいもある。おときの股間に、東雲之助の手は延び、そこに触れている。
　指先は濡れた。
　明らかに、おときは燃えていたのだ。東雲之助は、おのれの女というものの見方に、また一つの実証を得たのだ。
　東雲之助の指先が濡れているのを見て、あわてておときは拭きとろうとした。
「いいさ、どうせ、また濡れる」
　と、おのれの鼻先に寄せて、匂いを嗅いだ。

「そんなこと！」
「おときの匂いさ」
と、また裾をかきわけた。
帯は解けかかっていた。小肥りのからだから発する情感で、しなりと帯がそら解けたかのようであった。
東雲之助のからだの下で、おときが身をくねらせて、羞しい声を出しはじめたとき、お竹のほうは、裸身を蔽いもせずに、あえいでいた。
果てても尚、余炎をもてあましているふうであった。その肉体のほてりが、おときをも惑乱させた。
さっきまで侮蔑していた人目を憚らぬ醜い姿をさらして、おときも絞るような呻きをあげはじめていた。
もともと東雲之助は、おときのような肌が好きなせいであろう、果てるのは、意外に早かった。
が、そのまま、かれは、からだを離そうとせず、凝っと、あたりの気配をうかがっていた。
「あれ……もう？」
おときは、不満そうに言った。
女体はまだ快楽へのぼりつめていなかったのだ。せっかく燃えたところで、男のほうが、放ち果てた。その感覚は、女の裡に、不満を残しただけである。
「ねえ、もっと……」
おときは、腰をゆすった。
「む……」
「もう、駄目？」
女の手が、下へのびた。触れた。男のものは、あの熱した鉄のように固かったのが嘘のように女の掌の中でぐにゃりとしている。
「——つまらない」
おときは、鼻を鳴らし、男の唇を吸った。
義務的に、東雲之助はそれにこたえた。こたえながら、かれは、板戸の外に、誰かの気配を感じとろうとしていた。
(——居るのか？)
この女たちの来た目的が、どこにあるのか。それを知らなければならなかった。
女たちは、酒を奨めた。手厚いもてなしではない。酔い潰すつもりであろう、と思った。
かれの誘いで、からだをひらいたのも、油断させるためにちがいなかった。そう命じられていたのかもしれない。
とすれば、酔わせ、女の肌で力を失わせたあと、命をとるつもりかもしれない。
東雲之助はもともと小心者だ。その不安を感じている。
(逃げださなくては……)
こんなに待たされる、ということが、第一、怪しい。
女二人と戯れている姿に、敵が安心しているとしたら、その隙だった。だが、よく考えてみたら、かれを殺すくら

い、きわめて容易なのだ。
酒の中に毒を混じるだけでいい。それをしようとしないのは、ただ殺すのが目的ではない。いや、斬るのだって、簡単なはずである。
東雲之助は、一応の刀槍の腕はあるが、強者ではない。少し自信のある者なら、東雲之助の息の音を止めるのは簡単だった。とすれば、あとは、何がある。何が目的か。
あっ、と思い当った。
(人質？……)
そうか、おれを人質にしたつもりか。なるほど、それなら考えられることだった。かれは範満の寵臣だから、人質としての価値がある。
(こいつはたまらぬ。早く逃げ出さねば)
東雲之助は、おときから身を離そうとした。が、女の手がそこを握ったまま、
「いやですよ、このままでは」
「あたしのからだに火をつけただけで、逃げようなんて……ひどい御方」
女の手はつかんでいる。東雲之助の一物である。濡れて哀れに弱々しく小さくなってしまったものを、女の手は、さも愛しげにつかんで放さないのだ。
「ねえ、お前さま、もう少し何とかして」
「よせ、済んだ」
「あたしは、まだよ」
「放せ」
「いやよ」
おときの眼は、欲情して、きらきら輝き、狂気したようになっている。その唇から吐く息も熱い。
「ねえ、お願いよう」
ここまで燃えたたせられて、果てないでは、女のからだはたまらない。
「しょうのないやつだ」
東雲之助は、美しい眉をしかめた。
こういうことは、はじめてではない。これまでにも、いろんな女たちと関係を持ってきている。つまらない女ほど、東雲之助のような、安手の美貌に惚れるものだ。そういう女の執こさは、いやというほど経験している。
「したくとも、そう、すぐにはできぬ。それより拭いてくれ」
裸のまま、仁王立ちになって言った。
「あいな……」
布や紙を用いるのではなかった。やにわに、おときは顔を近づけた。
「む……」
始末するのではなく、再び、怒張せしめようとする。
女は、誰から、それを教わったのか。おときの唇と舌は、

この時を待っていたように、温かく包みこみ、微妙な動きを見せて、かれをふるいたたせようとした。

「……」

含んだまま、舌や唇を動かしながら、何か言った。むろん、何と言ったかわからない。東雲之助は、また、しだいにいのちを甦らせてくるのを自覚した。

おときは、そうしながら、乳房をゆすり、腰をくねらせている。おのれもまた、おのれ自身の行為によって、欲情してきているのである。

（いかんな……）

このままでは、東雲之助は帰れなくなる。その心配が先に立った。が、この女の手をふり切って飛び出すことも難しい。きっと、金切声をあげるにちがいない。

ここから脱出するには、逆に、この女たちを利用するしかない。それには、この女の期待に応えてやることだった。それが一番良策だった。

「――む、よいぞ、よいぞ」

ふたたび大きく、雄々しくなってきたのを知ると、東雲之助は、また、女を抱きよせた。

時刻は――

丁度、あの凄まじい、くがだちの裁きが行われているころであった。

横大路介右衛門とその一族郎党らにしてみれば、思いがけない成りゆきだったが、そのことも何度目かの使いが戻ってきて、梅ヶ谷の城内には知れていた。

「恐ろしいことを」

介右衛門の妻などは、身をふるわせて、

「とてもに、そのようなことをして勝目があろうはずはありませぬ」

となげいた。

「相手が、常の人にてあればよいが、新五郎範満どのでは……もはや負けたも同然」

「いや、そう決めたものでもございますまい」と、一族の関戸右兵衛が、慰め顔に、「あれで、殿には、仲々、芯のお強い方だ。それに、何と申しても心の勝負」

「……」

「殿は有りのまま申し述べ、それを神慮に問うているのじゃからこれは、強い」

「そうだ、範満の方はひたすら嘘を吐いているという意識がある。その真と嘘のちがい、心の支えじゃな、それが勝敗を決めるのではありませぬか」と、長老の大村剛左衛門も言った。「されば、この勝負は、神慮を仰ぐかぎり、大丈夫でござるよ。神の前では、嘘は吐けぬ」

その言葉は、むしろ、おのれの弱さを糊塗しようとするものではなかったろうか。

しかし、慰めの言葉は、ともかく、一時的にせよ安心させるものである。

「それならば、よろしいが」

「左様とも、神が嘘を吐くはずがない。殿は真実だけを申し述べ、その真実を神示が裏付ける。左様の次第では、これはもう、わが殿の勝ちに決ったようなもの」

そう言いながら、いまさらのように神力にすがる気持になっている人々だった。

（もしも、万一……負けたなら）

あの人質を使う。

それも、剛左衛門や右兵衛たちの間で決定していることだった。

範満と東雲之助の仲はこの駿府で誰も知らぬ者はない。

主従であるが、肉体的には衆道である。この時代、さして、異様でもなかった。むしろ、そういうことのないほうが、不思議とされる時代だった。

したがって東雲之助が、範満の使者になったことは、範満の言葉を伝える信憑性があったし、それだけに人質としての価値があったわけである。

「そうじゃ、あいつのことを範満に知らせた方がいい」と、右兵衛が思いついて、膝を打った。「万一の際は、東雲之助を殺す、そう伝えるのじゃ。さすれば、範満は、争いに負けよう。誰かを走らせよ。お屋形に走らせよ」

下種（げす）の智慧は後から出る、といわれる。

もしも、右兵衛のその考えが、実行されたら、あるいは、範満の気の張りが弛み、くがだちの審判は介右衛門が勝ったかもしれぬ。

だが、思いつくのが遅すぎた。

すぐに人を走らせたが、何しろ戦時中のことだ。包囲こそ解いたが、横大路の軍勢がどう出るかわからないので、見張りは要所要所に立っている。その目を盗んで、お屋形まで走るのは、容易ではなかった。

かれが辿りつかないうちに、くがだちの決着はついてしまったのである。

むろん、敗北したときのためには――これは最初の密書の判定での範疇だが、火矢による火事騒ぎを起して逃走するという手はずは出来ていたわけだ。

東雲之助が使者にやって来たことは、梅ヶ谷城にしてみれば、願ってもない人質が、向うから飛びこんできたようなものだった。

お屋形でどんなことが行われているか、介右衛門が城を出たことも知らない東雲之助だったが、身の危険だけは感じていた。

お竹とおときを抱いているうちに、脱出の方法を考え出したらしい。

むろん、城では、出入りを厳しく見張っている。

範満や名古谷の軍勢が、包囲を解いたからといって安心できない。数ヶ所の門には抜き身の槍を抱えた足軽たちが見張っていた。
その一人が、北の曲輪にゆく女を見ている。
北の曲輪は、一族の家族などが入っているところだ。何気なく見送った。
火の手が北の曲輪から起ったのは、そのすぐあとだった。
「や、火事だ」
またか、と口走った者がある。
新九郎たちに放火されたのをあのときは漸く消し止めて大事に至らなかったからよかったようなものの、また突然の怪火は、
「透破(スッパ)だ！」
という叫びをあげさせた。
悪いことに、場所が女子供のいる曲輪だったことである。狼狽の叫びが闇の中にけたたましくひびき、女たちが逃げだしてきた。若い女も中年の者も、年寄りも子供も、半ばはすでに寝ていたのであろう。
事態がどうなるかわからないにせよ、一時、小康を得て、ほっとして、眠りを貪っていた者が多かった。
そこへ、この火事であった。火は風を得て、囂(ごう)ッと吹き上った。
寝衣を着たままの者、灯火の下で鎧の繕いをしていた者も、湯浴みしていた者も、着のみ着のままで走り出したのだ。
女たちの金属的な叫びが城内をかき乱した。その混乱の中に東雲之助もいた。これは、女の被衣をかぶって、女装していたのである。
火をつけたのは、おときだった。
東雲之助の女を喜ばすに馴れたワザが、そこまで、女を狂わせたといっていい。
「――もう、おまえさまとは、離れられない」
かれのものを口に含んで雄々しくさせたことからおときは、今度は快楽へのぼりつめるのが早かった。
そういう体質でもあったろう。たまぎるような声をあげて、白いからだをのたうたせて、東雲之助の背に爪をたて、狂ったように引っ掻いたりしながら、惑乱した。
髪をふり乱し、熱いあえぎで、東雲之助の唇に嚙みついたり、肩に歯型をつけんばかりで、汗みどろになって、何度も何度も、のけぞり、目を白くした。
これまでおときの知っている男には、こういうワザはなかったのだろう。
東雲之助は、女に馴れている。女の歓心を買っては、出世の蔓とし、男のくせに男の玩弄物になって恥ないだけに、歓びの技巧は、いうならば東雲之助の表芸といっていいかもしれない。

「まあ、おときさん、あたしを差し置いて、何をいうのだえ」
漸く気力を恢復したお竹が、裸身のまま、武者振りついた。
ここまでくると、もう、東雲之助の思いのままだった。
「二人とも好きだ」
ぬけぬけと言った。
このぬけぬけと言うところが、東雲之助の術(て)であった。
「そなたらと、これから、ずっと交りをつづけたい」
「うれしい」
「いつまでも」
「いつまでも」
「そのためにも長生きしたいがなあ」
嘆息してみせると、二人は膝にすがりついてきた。
「長生きして下さんせ」
「おれの命は、狙われている」
「え？」
「この城の様子がおかしいな。そなたらは、どういうことを申しつけられて、私を」
「あの……」
二人は口ごもった。
が、よほどに惚れたのであろう、おときが白状した。
「お命までも、とは申されませなんだ」
「うむ」
「お酒を沢山……ええ、酔いつぶして、明日まで」
「なるほど、足止めしておこうというのだな」
そうか、すると、この二人の女は、抱かれることまでは計算に入っていなかったのか。
「明日になれば、私は、斬られるだろう」
せいぜい哀しげな表情で言ったものだ。眉を寄せ、うなだれて、声をおとした。いつも東雲之助が女心を獲(と)る術(て)である。
「死ぬのはいい、武士じゃゆえ。だが死んでは、そなたらと別れにゃならんからなあ」
「死なないで！」二人は同時に叫んだ。「わたしたちがお救けします」
女心は哀れである。惚れた弱みは、厳しい掟も踏み破らせる。武家の社会の規律と女心は所詮、両立しない。
おときもお竹も、東雲之助の美貌と女を喜ばせるのに馴れた技巧にすっかり心を獲(と)られ、かれの脱走を助けることになったのである。
お竹が持ってきた被衣をかぶった東雲之助は、混雑にまぎれて、城から出た。
二度目の火災だし、城内は混乱している。東雲之助とお竹は外へ出ると、裏山へのぼった。
遠廻りしたほうが間違いなかった。

「道は知っているのか」
「ええ、長尾の峰を越えて、北沼上へ出ます」
「よく知っているな」
「うふふ、すぐ下の四ヶ谷の娘だもの」
二人は尾根へ出た。おときを待つことになっている。
だが、暫く待ったが、おときはあらわれない。
「行きましょ」お竹が促した。しっかりと東雲之助の手をつかんでいる。「ねえ、行きましょ。ね、どうせあとからくるでしょうから」
「だが……」
「あら、そんなにおときさんのことが気にかかるの？」
「いや、そういうわけではないが」
「ならいいじゃないか」
お竹は鼻を鳴らした。この女の気持は、もうわかっていた。
いつまでも、このあたりにまごまごしてはおれない。東雲之助は、あきらめて、お竹の案内で、道を下った。
お竹の家はこのあたりでは、かなりの土地を持った豪農で、村の肝煎をつとめているということだった。
「――こうしてはおれぬ」
お竹の家で一休みすると、東雲之助は気が急いた。
「ねえ、そんなことを言わないで」
囲炉裡のある傍で、お竹はしなだれかかった。
自在鈎には、鍋がかかって美味そうな匂いが立ちのぼり、酒もふんだんにあった。
「ねえ、飲んで下さいましな」
「それどころではないのだ」
「いいでしょ、何も、こんな夜中に帰らなくっても、明朝まで、ね」
「しかし……」
「お酒もいくらでもあるから」
家族たちも、東雲之助をひきとめようとしている。
「実を申しますと、わたくしどもは横大路さまに怨みを持っていたのでございますよ」
と、お竹の伯父という老人は言った。
「お竹を無理やり連れてゆかれましてな」
東雲之助はとんだところで恩人になってしまったらしい。

七人の仲間

戦さがあると、難儀するのは、直接に勝敗に関係のない庶民である。
武士たちにとって戦さは、日常的な行為かもしれないが、庶民はどっちが勝っても、貧しい暮しに大差はない。
戦乱は、しかし、そうした弱い人々を、否応なく殺戮と劫火の嵐の中に巻きこんでしまう。
女たちは、若い娘や人妻のきらいなく強姦され、あるいは連れ去られ、あるいは叩き売られ、財産は奪われたり、戦火で灰燼に帰し、住む家を失ってしまう。
戦国時代のこうした庶民の悲惨さが、百鬼夜行の非情冷酷な世情をつくりだしてしまうのだ。
「やつらはいいやな」
と、泥亀は、あの雷神うらの小屋で、酒漬け飯をかきこみながらおだをあげている。
「戦さに勝てば天下がとれる」
「へえ、負ければ、サラシ首でんね」
子分が首をすくめた。
「負けたときのことまで考えることはねえ、勝つために、戦さをするものだわさ」
「へえへえ」
「どっちゃにしても、こちとらは迷惑だあ」
「………」
「この屋敷が焼かれるだけでも損だ」
「屋敷なら焼き甲斐があるが、小屋だから、ぱっと火をつけて、ぱっと燃えたら、あとは灰で」
「うるせいやい、小屋で悪かったな。うぬらは、今夜から溝のなかで寝ろい、これでも、わァしには、お屋敷だ、な、お貝」
「はいはい、立派なお屋敷で」
「こんなところでも、焼けちまやことだ。損ばっかりだ。戦さがあるからには、儲けなきゃな」
「どっちにお味方するので」
「馬鹿。どっちが勝つかわからん戦さに、味方できるか」
「へえ、もっともで」
「だいたいな、金儲けというやつは」
泥亀は、ぺろりと上唇を舐めた。
もう金時のように真っ赧になっている。無精髭のあばたのある肉の厚い顔だから、鍾馗の火事見舞いという感じで

ある。
「金のほしいやつを鴨にする、これが第一」
「なるほど」
「第二には、資本の要らぬこと」
「全くで、へえ、そいつが出来るなら、誰でも大分限になれら」
「じゃろ、だから、やるのだわい」泥亀は自信満々の顔だった。「駿府一の長者になれるでの、武士どもが殺し合いをしたあとでわァしが生き残る。銭を沢山かきこんで、長者になる」
「さ、そうなりゃよいが」と、お貝は手を泥亀の膝に置いて、「儲けたら、わたしにも、帯を買うて下さるかえ」
「帯どころか……」
と、言いさしたとき、子分が二人戻ってきた。
二人は入ってくるなり言った。
「貉と小蛭でございまさ」
泥亀は用心深い。名乗らないとひどく怒る。たとえ、子分や妾でも、黙って入ってくると殺されてもしかたがないと思え、と教育してある。
「うむ。仕事はうまくいったか」
「へえへえ、今日も三人」貉は革の巾着を腰からはずして、どさりと置いた。「銀十匁で雇うて、三十匁で売り渡したので、へえ、口銭六十匁というわけで」
「たった三人か」
「へえ、無いよりマシで」
「それもそうだわの。明日ということがある」
「へえ」
「戦さは当分、つづきそうだでのう、うははは」
あれ以来、駿府の勢力は鼎立していた。むろん、勢力は互角ではないが、お屋形たる竜王丸と、新五郎範満と横大路介右衛門――この三つに分割されている。
あのくがだちから、三ヶ月。戦さは決着がつかないままに、いまは膠着状態になっている。
軍勢の数は沓谷の範満が一番多いが、竜王丸には今川義忠の直系という名誉があり、その正当性を高く評価して、与力を申し出ている大名小名も尠なくない。
何度か、大軍をもって屋形に攻撃をかけたが、そのたびに、伊勢新九郎は巧妙な軍略と、正確な指揮で、寄手を悩ませた。
範満の軍勢がもたもたしているうちに、背後から介右衛門の軍勢が乗りだしてくる。
沓谷を突かれては、本拠を失うので、範満はいやでも、軍を還さねばならない、というふうだった。
むろん、その間にあって、銀をつかったり、領地を分けたりする工作は行われていた。
「過半数を配下にしさえすれば」と、範満は左手の爪をか

みながら、思案した。「おれの墨付きをくれようというのに、誰も信用せぬ」
介右衛門の裏切りが、みんなを疑い深くしてしまったのだ。身から出た錆というところだろう。
この駿府朱引内における、いや、駿府以東の今川氏内紛は、近隣諸国に聞えて、
「われこそ功名して」
という意気に燃えた連中が、陸続としてやってきた。
西から東から、南から北から、腕におぼえの刀槍弓箭を携え、あるいは徒歩で、あるいは馬でやってくる。
泥亀こと土呂亀三郎は子分を要所に配して、それらの牢人者を雇い入れた。
「誰か知り人がいなさんのか」
と、聞かれても誰も知らなければ、世話を頼むということになる。今川家という格式に、牢人者たちは、やはり一種、近寄り難いものを感じていたのだ。
羽衣ノ松の伝説で名高い三保の松原は、清水の入江をかたちづくって袖をのばしたように駿河湾に岬が出ている。
この清水港に伊豆からの廻船が着いた。
「へへ、また鴨が来たでえ」
貉がのびあがって、船から降りてくる人影を見た。五、六人の一団だった。遠目にも牢人風である。
時が時だ。陣場借りか、雇われて一旗あげに来た牢人たちにちがいない。牢人たちは、いずれも逞しげに見えた。
それぞれにタイプは違うが、大きいも小さいも、太ったも痩せたも、強烈な個性が、荒々しい戦国の世のいのちの典型のように光っている。
(ふう、こいつらは、いままでの食いつめ者とは、チト違うわな)
貉は、内心恐れを抱きながら、にたりとした。
(どっちゃにでも売れるわな)
ただ頭数があればいいというものではない。
はじめのうちは、数がほしかったが、しだいに長い戦いの様相を呈してくると、腕っぷしの強いの、刀か槍か弓か、秀でた芸の持ち主が望まれるようになる。
そのほうが、この牢人口入れ屋の斡旋料も高く要求できるのである。
「へへっ、お出でなさんせ」
貉と二人の男が、飛びだしていって、
「どっちゃへお越しで」と揉手をしながら、「どこにでも御案内いたしまするわな。どちらから来なさったので」
「われらか」と、六人の男たちは、顔を見合わせて、「あっちからだ」
「へえ……？」
「海からだ」

それはわかっている。
「お屋形へ行くのなら、御案内しますで」
「さあ、な」
「では、沓谷へ？」
「……」
「それとも梅ヶ谷で」
貉は食い下った。
「どこでもいい」と、一人が言った。「金になるほうがいいが……小鹿新五郎範満というやつの屋形はどこだ」
「あ、沓谷で」
「沓谷でわかるか」
「ですから、御案内しますで」
「よし、案内せい」
「ですが、ちょいと……」
貉は、ばらばらと帳面をめくって、頭をかしげた。これは、値を吊り上げるための所作にすぎない。
「陣場借りの御牢人衆は手一ぱいでございますなあ」
「なに」
「ま、話のしようでは、入れないこともございませんがな」
そういって、貉は子分の一人に、顎をしゃくった。
その日その日で、値段が違う。三者ともそうだ。範満は殊に感情の起伏がはげしく、情勢如何で、くるくる気持が変る。
戦さに勝目が出てきたときは、
「牢人者なぞ、もう要らん」
と、言うし、ちょっと敗色が濃くなると、
「いくらでも出す、どんどん集めろ」
と、変る。
その日その日で、天気が変るように、牢人者に出す支度金の額も違ってくるのだ。子分の一人を走らせたのは、その額を聞かせるためだった。
「まあ、ちっと、こちらで休んでお出でなされ」
小屋に腰掛けがある。陽ざしをさけて牢人たちは、腰をおろした。
「戦さの様子はどうだ」
と、肩幅の広い男が言った。
「へえ、どっちとも」
「範満の方が人数は多いと聞いたが」
「そら、そういうことで」
「だが、今川屋形の方が、豪ノ者が揃っているらしいの」
「どうですかねえ、わっしらにはなんとも」貉は、頭をかきながら、「ところで、御尊名の儀は」
「名前を明かさねばならんのか」
「へえ」
「人に名を聞くときは、うぬから名乗れ」

「へえ、こいつあ……わっちは、貉で」
「ムジナか。なるほど、おれは、虎だ」
「へ？　……虎」
「おれは、熊だ」
と、別の男が言った。
「こっちは、山犬だ」
三人目が笑いながら、歯を剝いてみせた。
貉は、記帳しようとしていたのだが、筆を止めて、
「御冗談ばかり言わっしゃる。その、本名を」
「これが本名だ、悪いか」
悪いとはいえないのである。貉は眼をぱちぱちさせて、その通り書き入れながら、
(ちえっ、おどかしやがる。なあに、売り渡してしまえば、どうせそれきりよ。戦さで、ぶった斬られてしまえ)
と、肚(はら)裡で毒吐いた。
「おれの名は獅子」
「へえ、へえ、わかりましたよ。はい、はい、お次は」
「蝮だ」
「はい、その次は青大将で」
「おれか、まあ、蜂というところだな」
「へえ、なるほどねえ、藪蚊でなくて、蜂なので」
勝手にしゃがれ。だいたい、流れ者の名乗る名は大半は嘘が多い。先祖は、平氏だとか源氏だとか、いろいろに言っているのも、どこまで本当かわからない。
六人の男たちは、腰の瓢箪をはずして酒を飲みながら、あたりを眺めている。
交渉がまとまったらしい。やがて子分が戻ってきた。
「どうだ」
「へえ、それがねえ……」ここで思案顔をしてみせるのもいつものことである。「十匁ではいい顔しねいので」
「馬鹿野郎、豪傑の価は十匁だ」
貉は怒って見せた。手がこんでいる。ここで怒らないと、共謀がばれる。
「十匁出させろやい」
「へえ、それが、人手が余り気味でしてね、五匁なら、というのでさ」
「たったか」
「へえ、五匁でいやなら、どこへでもいってくれと」
「しかたがねえ、ねえ、お前さん方、一人頭銀五匁で如何なものでげしょう」
「なんだそれは」
と、蜂が言った。この男、隻眼である。
「支度金であろう」虎が答えた。「戦さには、つきものだ。無縁の者が命を的に手を助ける。じゃからタダというわけにはいかぬ」
「なるほどな」

と、頷いたところでは、この連中は、金が目あてで、はるばるやってきたのではないのか。
「ま、銀五匁でも、一戦さあればすぐに一貫二貫つかめるわな。そこらで手ェ打って下され」
与し易しと見て貉は断定的に言った。
「よかろう」熊が頷いて、「われら六人沓谷の小鹿新五郎範満の手に属する。その支度金が銀五匁、そうだな」
「へえ、そういうわけで」
「では六人分、貰おう」
「お渡ししますゆえ、ここに名前と花押を」
「名前とは、本名か」
「本名で」
「五匁で本名を書く馬鹿はいないぞ」
と、山犬が歯を剝いた。
「それでは、わっちが困るので」
それにかまわず、虎、と書いて虎の字をもじったような花押を書くと、次の奴は、熊と書いた。笑いながら、みんな書いてゆく。
貉たちは、弱り顔だが、
（どうせ、こいつら売り渡してしまえば、それきりじゃ）
（三十匁から五匁引けば、二十五匁、随分と儲けたわの）
泥亀から腕がいいと褒められて、地位がよくなるだろうと、貉の中にはそれくらいの計算がある。
今川家の竜王丸が勝とうが、範満が駿府を乗っ取ろうが、そんなことは、この連中には関係ない。ごたごたを利用して、儲ければいいのだ。
契約？　が済むと、六人を伴って、子分の小蛭は沓谷の本陣に行った。
六人はあたりを見まわしながら肩をそびやかし、長槍を担ぎ、大太刀を担ぎ、あるいは両刀をたばさんで、逞しげな姿で、範満の本陣に入っていった。
六人の侍たちを見て、範満は目を細めた。
「強そうだな」と、頷いた。「いままでの奴らとは違うようだ、一人三十とは安い」
そのとき、ぎろりと、〝虎〟が眼を光らせたのに気がつかない。
「どうだ」
と、まわりに顎をしゃくった。腹心の大小名たちも、羨ましそうな顔をした。
「役に立ちそうだ。顔が知られぬうちに、あちらに乗り込ませるか」
範満は、六人を一人一人、射るような眼で見た。
おのれは石階の上から、片膝立てで盃を傾けながらである。
「東雲之助を呼べ」
六人は白洲の上に胡坐をかいている。

酒をくれようともしない。諸国から、戦さ目あての牢人者など、範満の眼からすれば、虫ケラにすぎないのだ。
東雲之助がやってくると、範満は、例の方策をこころみてみよ、と、言っただけで、牢人たちの前から姿を消した。
「こちらへ参れ」
東雲之助は六人を促した。
連れて行かれたのは、御鷹部屋であった。
ずらりと御鷹部屋が並んでいる。鷹という猛禽は、人見知りするし、同類に対しても、警戒心が強く、一羽に一室を与えられている。
六人が招じられたのは、その鷹部屋に附属したお鷹匠部屋だった。
「おぬしたちは、鷹を扱ったことがあるか」
東雲之助が聞いた。
「さて、あるかな、誰か」
〝虎〟がみんなを見た。
「さてのう、誰も鷹匠や鳥見なぞやったことはあるまい」
「いや、鷹匠でなくとも」
東雲之助の眼は蔑みの色をあらわにした。
身分ある侍なら、鷹狩りをする。その経験がないところを見るといずれも侍とはいっても軽輩だったのだな、という眼つきだった。
「鷹を扱えんでも、おぬしの首をねじ切るくらいは、朝飯前だぞ」
〝熊〟が腕を突きだして、力瘤をつくって見せた。
「いや、強いのは、見ればわかる、ただ、われらの計画があるでな」
「どういうことだ」
「鷹匠に扮して、敵方へ入りこんで貰う」
「ふむ」
「鷹を持ってな、そうすれば、向うでも安心する。その上で、竜王丸を捕える。母御の北川どのも一緒ならば申し分ない」
「母子を捕まえて来いというのか、これは戦さではないのか、女子供を痛い目にあわせるために、雇われたのではないぞ」
「さ、そこが軍略じゃ。あの二人を捕えてしまえば、伊勢新九郎とても折れて出るわ」
「伊勢新九郎……」
六人は顔を見合わせた。
「存じておるのか」
「いや……」と、虎は首を振って、「名前は聞いている、なあ」
「うむ、評判はな」と、熊が答えた。「今川義忠の遺孤を守って、悪人輩と戦っておるとか、噂をな」

「あ、悪人とは」
東雲之助が顔色を変えたが六人は平然としている。
「世間の噂さ」
「わが殿は悪人ではない、いやしくも今川家の正しい……」
「正も邪もないさ、強い者が勝ちさ」と、山犬は鼻の先で嗤った。「善も悪もな。ただ、世間ではとやかく申すのさ、おぬしが、青筋立てることはない」
「そ、それはそうだが」
「せっかくの色小姓が台無しになるぞ」
蝮が舐めるような眼で見た。
東雲之助は赧くなった。顔のことを言われると、褒められているつもりになる。
「だが、おぬしがムキになるところを見ると、範満は相当の悪人らしいな」
これは、〃獅子〃と名乗った男だった。
「左様な言葉が殿の耳に入っては」
「はははは、構わぬさ。悪人ほど、この世では頼母しい」
「………」
「範満なら天下はとれような」
「そうだ」と、片目の蜂が相槌を打った。「ただし、われらが力を致せばだな」
「銀五匁では、どうかな」
東雲之助には、嫌味に聞えたのである。
「まあ、銀のことはどうでもよい。嫌になったら、やめるだけさ」熊が哄笑して、「東雲之助とやら、その鷹匠の話は面白い。やろうではないか」
「やるか、やる以上は、成功せねばならぬぞ」
「成功するさ、やり損じたら、二度と戻らぬ」
「おい、やるのはいいが、竜王丸を連れて来たら幾らくれる」
蝮がぶすっとした顔で聞いた。
「それは、莫大な恩賞が貰えるぞ」
東雲之助の煽りの手には乗らぬ六人だった。
「莫大とは、幾らだ」
「さあ、それは……殿に聞かねばわからぬが」
「聞いてくれ」と、熊も言った。「おれたちは、はっきりせぬことは嫌だからな」
しかたがない。こういう牢人の使い難さが、つくづくわかったように東雲之助は、範満のところに戻った。
「なに、恩賞金の額じゃと」ぎらりと眼をむいて、「あの牢人ども左様なことまで、ほざくのか」
「食い詰めの浮浪の者のくせに、小癪千万な」
範満はいきまいて、目の前の瓶子を蹴飛ばした。
戦さが膠着状態になって、はかばかしくないために、このところ、気が昂っている。まだ右手が不自由なせいもあ

った。
横大路介右衛門の方は、殆ど右手が手首から焼けただれて、生れもつかぬ不具になってしまったというから、それに比べればまだしもだが、右手は利腕なのですべてに不自由だった。
範満の方は、お匙（医師）の診たところ、あとひと月もすれば完治するだろうとのことだったが、その間、使いものにならぬ。
「おれは左利きではないからな、左手の指では、どうも砂をほじくっているような感じだ」
と、卑猥な手つきをしてみせたりした。
「どこの馬の骨とも知れぬ奴らが、大口叩きおって」
「はい、生意気な奴らでございます」と、東雲之助は、範満の意を迎えるように、媚びた笑いを浮べて、「ではございますが、使いものにはなりましょう」
「そうじゃな」
「危険な仕事をさせるには、丁度よい奴らで」
「うむ」
「恩賞金でございます」そう言ってから東雲之助は、膝をすすめ、声をおとした。「何も、必ずしも与えることはございません」
「何と申す」
「ことが成就すれば、駿遠二国の太守におなり遊ばします」
「おれがか」
「はい」
「そうなれば、たとえ、数十貫の銀でも、惜しくはありますまい」
「だが」
「いいえ、表むきだけのことで。左様なたてまえで、利用すればよいのでございます」
「………」
「もし、成功したとしても、あの六人……六人でございます」東雲之助の眼が蛇のように冷たく光っている。「たった六人」
「たった？」聞きかえして、範満は、漸く、にやりとした。
「なるほどな、そういうことか」
「はい。そういうことで」
「たった六人、ははは」
範満は折敷の上の煮豆を左手で、一つずつ押しつぶした。
残忍などす黒い笑い顔だった。
「これでいいのだな、東雲之助」
「はい、御明察」
「どの程度に、恩賞金を申せばよい」
「左様でございます。あの牢人どもの卑しい様子から見れば、銀十貫で充分でございましょう」

「よし、申し聞かせい」
ところが、東雲之助が、戻ってそのことを伝えると、
「たった銀十貫では、左様な危ないことはしたくないな」
隻眼を光らして蜂が言った。他の五人の態度は変っていた。
「な、なんじゃと、それでは支度金のタダ取りか」
「もっといい方法があるというのさ」
どうにも、扱い難い連中だった。
六人は、にやにやしている。そこらを歩きまわったり、微吟している者もいるし、時々、刀を抜いて、陽にかざして見ている者、あるいは立小便をしている者。そんなのを一々、咎めていたらキリがないし、また、聞き入れる手合いではない。
第一、雇われ兵なら、命令を聞いて働くのが当然だが、この連中は、そんな意識がまるでないように見える。
(雑兵のくせに)
と、東雲之助は、蔑みと怒りを感じたが、この六人のどの男一人にも対々では、勝ち目がないのを自覚しているから、その思いは顔には出せない。
「せっかく、殿から、恩賞金のほどを聞いてきてやったのに、いまとなって……」
「いいだろう」と、掌を返すように一人が言った。獅子と名乗った男だった。
「銀十貫で手を打とう。竜王丸を連れてきたとき、頂戴しよう」
と、獅子が胸を張って、大きく合点した。
「おお、やってくれるか」
「やらいでか。だが、少々、方法が違う」
「なんと？」
「やり方がな、違う」
「というと？」
「鷹なぞ、使わぬ」
「使えぬのだな、やはり」
「鷹匠面などして行っても、ひっかかるものか。もっと、手際よいことがある。絶対に、向うを信用させる手だ」
「ほう、そんな手があるなら」
「よいか。まず、この戦さで、向うが何を考えているか、だ」
「それは……戦さに勝つことだ」
「であろう」
熊が顔を突き出して、にやりとした。隻眼の蜂が話をひきとった。
「そこで、われらは考えた。まず相手を安心させる。つまり、戦さに勝ったと思わせる」
「なるほど」
それなら、一番いい。東雲之助もわかりかけてきた。

「この沓谷の陣から、多勢の兵を降参したと見せかけて、向うへゆく」
「………」
「そこで、急に立って、斬りまくる。竜王丸と北川どのをひっさらうなり、斬るなり、なんとでもする。どうだ」
「——名案だ」東雲之助は頷いたが、「しかし、易々と降参するというのは、おかしいな」
「なあに、刀や槍を捨ててゆけば信じるさ」
「しかし、それでは、イザとなったときに、手ぶらで戦えぬ」
「そこだ、秘策というのは」虎は舌舐めずりした。「よいか、よく聞けよ。われらの顔は知られていないゆえ、刀や槍などは牛車に積んで、持ちこんでおく。たとえば野菜などの下に隠してじゃ。そして、中でそっと手渡す」
これは、いかにも名案に聞えたのである。
「なるほどな、名案じゃ」
「鷹匠なぞに扮するより、よほど確実であろ」
虎や熊たちはしたり顔だ。いずれもそれぞれに不逞々々しい面構えなのである。
東雲之助は、この計画が、成功しそうな気がしてきた。
「殿に申し上げてくる。お許しになるであろうな」
「おっと、念には及ぶまいが、かようなことは、秘密が洩れてはまずい。お人払いの上、申し上げるのだぞ」
「心得ている」
「支度は牛と荷車さえあればよいのだ」
その支度はすぐに出来た。
前線の足軽らに、秘密の命令がまわされたのである。
まず、虎や熊たちが、足軽らの刀、槍、斧、薙刀などを荷車に山積みにする。それに藁をかぶせ、さらに野菜を積みあげた。
「これでよい」
投降の足軽らは三百人。いずれも無腰で前線を離脱する。
いよいよ出発となってから、虎は東雲之助と重役らにはっきりと言った。
「この役目は、一つ間違うと、首が飛ぶ。されば、本名を告げておく」
「本名を……虎や熊ではな」
「おれは、荒木兵庫」
「大道寺太郎」
「山中才四郎」
四人目は隻眼の蜂で、
「在竹兵衛」
と、言ったとき、きらりと片眼が光った。
もっとも色白の男が、
「荒川又次郎や」
残りの男は、

「鳥羽十蔵」
と、名乗った。
この男が一番若い。
「なんじゃ、みんな立派な名前を持っているのではないか」
東雲之助は呆れて、あらためて一人一人の顔を見た。
「では、われらがもどらなんだら、供養してくれ」
荒木兵庫がさっきの銀三十匁をとりだして、東雲之助の胸に投げた。
「どういうことだ、これは」
「そういうことさ」
するとこなすこと、東雲之助は驚かされるばかりだ。
六人は、さっぱりした顔で、牛車を動かして歩きだした。かれらは、槍を持ち両刀をたばさんだり、打ち刀を背に背負ったりしているのである。
沓谷と今川屋形の間は、彼我の陣所が睨みあっていて、緩衝地帯がもうけてある。
この牛車のあとから、無腰の足軽ら三百人がぞろぞろとついてゆくのは壮観だった。
たちまち、今川屋形の前衛に矢尻を向けられた。
「やい、どこへゆく。止れ」
これに大道寺太郎が、手をあげて、大声で答えた。
「伊勢新九郎どのに取次いでくれい。大道寺太郎がまいったと」
大道寺太郎の音頭とりで、荒木兵庫など、次々と名乗った。
「ふうん、うぬらのような虫ケラの名を一々、新九郎どのへ取次げるか」数十人が弓をひきしぼったまま、「沓谷屋形より参ったのであろう、十と数えるうちに去ね、まごまごすれば、大鏑矢の錆にしてくれるぞ」
「取次がぬと、悔むのは、うぬであろう」と、太郎は大音声に応えた。「取次げばわかること。われらが進物を持って参ったと、左様に伝えろ」
「一人だけ、刀を捨てて来い」
これには、山中才四郎が応じた。
むろん、その間に、後方では、本陣へ人を走らせていたのである。
新九郎は、丁度、鍛冶ノ者たちを見廻っているところだったが、
「なに、大道寺らが……生きていたのか！」
喜びの色が頬にのぼった。
鳥羽から遠州へくる途中、暴風雨にあって、船は沈没し、九死に一生を得た思いだったのだ。それきり、かれらは海の藻屑となったものと思っていた。
「そうか、生きていたか」
すぐにも、迎えにゆきたかった。

「六人か、五人ではないのか」
「六人でございます」
一人増えているが、友人ででもあろう。
「御進物と称して、牛車に何やら山盛りにしてきています」
「とにかく、彼奴らならば、間違いない。通すがよい」
「はあ、ところが、ほかに雑兵が三百人……」
「なんだそれは」
「降参ノ者で」
「三百人も、か」
「はい、なんとも、面妖なことで」
「まあよい」
新九郎は馬に乗った。数人の従者が、馬のあとを走った。屋形は本陣であり、周辺が二重、三重に、濠を切り、矢来をもうけ、鹿柴を重ね矢楯を並べるなどして、防壁が出来ている。
新九郎が馬を飛ばしてくると、太郎らは喚声をあげた。
「おう、生きていたのか」
「この通りじゃ、兄き」
「みんな揃うているな、一体、どこに……」
「伊豆に流れついてな。まあ、そのことは、後ほどゆるりとしよう。ともかく、あやつらを、引きとってくれ」
「三百人の降人か」
「左様、範満の手よ」
「一体どうしたのだ」
「降人さ」六人は、笑って、「ここに土産がある」
荷車の野菜の山を振り返った。
この段階まで、三百人の雑兵たちは、まだ、安心させる策謀と思っていた。
が、中へ連れこまれ、一向に、内応の気配が見えないことから、漸く、かれらに一杯喰わされたことに気がついたのである。
「はははは、軍略じゃ」
荒木兵庫は、腹を揺すって笑い、
「支度銀三十匁は、返したゆえ詐欺ではないぞ。ちゃっと名乗ったしな」
「あのひょろ侍め、いまごろは、新五郎範満にぶっ喰わされて、生白い顔を腫らしていることじゃろ」
それにしても、こういう思いがけない贈り物は、新九郎はむろん、北川どの他、今川の人々を喜ばした。
見るからに一騎当千の荒武者たちである。
駿遠の守護大名今川家の栄光と勢力の中で、ぬくぬくと、温室育ちした連中ではない。荒んだ世間の風波の中で、逞しく生きてきた男たちには、少々のことではくじけない強さがある。
新九郎一人でも、今川家にとっては新風といえたが、こ

の六人の男たちは、全く異色であった。泰平の時代には、世に容れられない連中であろう。乱世には、こういう野育ちがものをいう。
「――しかし、よく生きていたな。みんな海の藻屑になったと思うていた」
と、新九郎は言った。五人の顔をつくづくと眺めた。
五人は旧知だが、鳥羽なにがしと名乗る男は見覚えがない。
「こやつは妙な男での」
と、荒木兵庫は、鳥羽をあらためてひきあわせて、
「われらを伊豆で助けてくれたのでな」
「なかまにした」
と、大道寺太郎が言った。
もっとも、かれらにしても、無情の海は、どこまでも一緒に流してくれたわけではない。
沼津から西伊豆にかけてそれぞれ打ち上げられたのだが、このあたりは北條にいる堀越公方の勢力下にある。
いろいろなことがあったらしいが、いずれも、野心を秘めた男たちだから、韮山あたりに自然と集まる結果になって、再会を喜びあったらしい。
しかし、新九郎だけは姿が見えないので、
「兄きだけが溺れ死んだか」
「駿河の今川に由縁があると聞いていたが、死んだとあれば、われらが駿河を目ざしても、どうにもならぬ」
新九郎のことをあきらめるとともに、駿河行きも断念したのである。
ところが、荒木兵庫を助けてくれた鳥羽が、韮山の北條氏に仕えていたので、そのひきで、かれらも、最低の扶持にはありついていた。
そうこうしているうちに、駿河の騒ぎが聞えてきたのである。
今川義忠が討たれて、後嗣争いで、紛糾しているという。その一方の旗頭に、伊勢新九郎というきけ者がいるという。
五人は小躍りして喜んだ。
「やっぱり生きていたぞ、兄きは海に溺れるような弱い男ではないて」
山中才四郎はおのれの眼が正しかったことを吹聴した。かれは必ず、どこかで生きているに違いないと、信じこんでいたのである。
「すぐに駿河に行こう」
と、才四郎が言いだした。
「ここはどうする」
「韮山など、どうせ仮の宿だと思うていたわい。それに」
「それに、安扶持か」
「鼻糞だからな」在竹兵衛が相槌を打った。「行くか」

「戦さとあれば、新九郎兄きも、手が欲しいところだ」
「それも強い腕がな」
「われらがゆけば、すぐに戦さは片附くさ」
「はははは、そう思っているところが、身上さ」
新九郎という男に、それほど惚れこんでいる五人を見ると、鳥羽も、
「おれも連れていってくれまいか」
と、言いだしたのだ。一人でもなかまが増えれば、それだけ、新九郎の手になる。それを思うと、五人は賛成した。
六人で駿河を目ざしてやってきたというわけである。
「そういうわけか。だが、ともかく、よく生きていた」
「打ち殺しても死なぬわな」
又次が胸をたたいて、そっくりかえった。
「兄き、あの土産も、思いがけぬものであったろ」
「捕虜どもか」
「あやつらをどうする」
「そうだな……」
思いがけない土産だった。
それだけ、相手の人数が減ったのだから、勝ちに通じる。とはいえ、考えもしなかったことだけに、始末に困る。かれらが戦さで投降したのならそれなりに使い用もある。偽装投降ということもあるが、その真偽をはっきりさせることも難しくはない。
瞞されて連れてこられたのだから、かれらの心の中はわからない。味方にしようとしても、そう簡単には節を変えるとも思われない。
「なあに、あいつら、おれたちが連れてきたのだから、おれたちで始末をつけるわ」
「そうじゃ、まず、一通り、ぶっ喰わしてな。降参するかどうか、その上で、味方になるかどうか、いやだと吐かす奴は、やむを得ん並べて首を斬る」
「その首を沓谷に送りつけてやれば、随分と効果があるじゃろえ」
「それよりも、いずれも首竹に突き刺して並べたらどうだ。一々、範満の家来、何某と書いてな」
「それもいいな。だが、そこまでするまでもなく、味方になるさ。われらが相手では、敵であるより味方になった方が得だと、もう悟っているのではないか」
そのころ、範満の方でも、しかえしを狙っていたのである。
「はかばかしくない……」
と、範満は言った。
右手の指である。殆ど治りかけていたが、中指がまた化膿している。治りかけは痒いものだが無意識のうちにひっ搔いたのであろう。

「治して進ぜます」
　天殊は、その指をそっと両掌ではさんだ。はさんだまま、顔を近づけ、僅かの、隙間から、そっと吹いている。
　女の小さな唇から、吹きかけられる息は隙間風のように患部を冷やして、
「お薬？」
「うむ、いい気持だ」と、範満は目を細めた。「だが、火傷にはもっといい薬があるというではないか」
「そなたが持っているはず」
「いいえ、そのような薬などは」
「ここさ」
　と、左手で、女の股をひらいた。
「あれ、何をなさいます」
「指を治すには」
　と、言ううちに、右手が、股間に入っている。
　唐突だった。最初に、この男に奪われたのも、文殊堂でのお籠りの途中である。
　陰陽師は、念力を持つが、その力を発揮するのは、呪文を誦すなどして、おのれを常態から脱せしめるのである。その最中は、いわば痴呆のようになっている。範満に抱かれ、おし倒されたときも、秘香の中で、天殊は半ばうつつだった。
　いまは、そうではない。が、女には、男の眼の色で、その欲求がわかる。範満が、また彼女のからだを欲して来ていることがわかっていた。それがどのような経路で行われるか、むしろ楽しみだったのである。
　範満と今川竜王丸との争いは、天殊のような陰陽師には、直接関係ない。その渦中にあって、天殊は、あの妖しい微笑で、両者を巧みに操っていたのである。
「——どうじゃな」
　自然に、天殊はあおのけに倒れた。
　前がひらき、恥しい白い内股があらわになったのを感じると、思わず、天殊は両手で顔を蔽っている。範満の指は、濡れたところに入っていた。
「——こうしていると治るそうな」
「羞しい……やめて」
「やめたいが」と、含み笑いで、「この指がな、こうしてほしいとよ」
「……」
「武士の右手は、刀持つ手じゃ、この指が治らねば、天下はとれぬゆえ」
「でも、あ……いや、動かさないで」
　懇願が、いつか甘いひびきに変っている。
　女体の不思議な感覚は、羞恥と欲望が両立することであった。男の無礼なふるまいを咎めたい気持も本当なら、その指の動きを強く求める気持もまた、嘘ではなかった。

（もっと、もっと！）
　と、もとめたい気持が、顔に出ることをおそれて、両手で隠したのだ。
「いけませぬ、指を……」
　離して、と言いかけた語尾がしめっていた。
　そのときは、たしかに、そう拒む言葉を口にする気持だったのに範満がのぞきこんで、「もっと？　もっと欲しいか」と、揶揄すると、彼女自身、そう言いたかったような気がしてきた。
　下半身が痺れるように快く、いつか、波のうねりに乗せられたように揺すっている。それは、いやいやをする女童の動作のように見せて、官能の疼きを愉しんでいるのだった。
「欲しいなら、欲しいと申すがよい」
「いや！　抜いて……抜いて下さいまし」
　思いきって言った。
「いいのか？」
　と、意地悪い。
「知りませぬ！　ひどい御方」
「わしはかまわぬが、な、指がな、いやじゃと申している」
「あっ……あっ、いや！」
「指めは、そなたをずんと好きらしい。それもさ、永遠に離れとうないとよ」
　そんな戯れ言葉も、こういうときの女には、どんなに甘く響くことか、それを充分に知っている男の囁きだった。
　その間も、指は動いていた。いかにも指が、生き物のように、あるいは、範満の一物であるかのような、不逞な動きで、それは、女の羞恥のヴェールをひき剝がし、赤裸なおんなになることを要求しているのだった。
　そうしながら、範満はしかし、おのれのものを、ひきだそうとはしない。かれの目は、女体が喜悦し、しとどに濡れてゆくのを、楽しく見まもっているかのようであった。
「——よいか、よいか」
「あ……」
「指の火傷を治してくれいよ」
「……」
「おれの思いをかなえてくれれば尚よいが」
「あっ、範満さま！」
「おれは今川家の当主になる」
「は、はい……」
「そなたの力がいる」
「……」
「おれが太守になったならば、そなたの希むままに……望みをかなえてやる」
「うれしい……」

「おれに力を貸せい」
「はい、どのような、どのようなことでも」
「きっとか」
「はい！」
ぶるぶるっと、痙攣した。刹那、溢れた。温かいものが、指を濡らした。それは女の花押であった。
範満が、熱くなったおのれの肉塊を、指に代えたのは、その後である。うつつになった女の耳にかれは、そのままの姿勢で、悪魔の言葉を囁いた。
「――竜王丸をかどわかす」
範満の顔は、冷酷な鬼のような表情になっていた。
「どうだ、出来るか」
「さ、それは……」
うつつの裡ではあったが、天殊は、ことの重大さに、やはり、即座には返事が出来なかった。
「やってくれ」と、頭から、かぶせるように範満は言った。「竜王丸でなく北川どのでもいい。女同士で、そのほうが楽かもしれぬな」
「かえって、難しゅうございまする」
「いや、容易かもしれぬぞ。北川どのがこちらに参ったら、幼い竜王丸は、狂い泣きするであろうし」
「……」
「兄という伊勢新九郎も、刀を捨てるであろう。そうすれば、一族重臣どもも、あきらめるにちがいない」
「いいお考えでございますが」
「いい考えさ」
と、範満は、その思案に酔ったように、大きく頷いて、さらに、天殊を抱きしめた。
容（い）れたままである。範満はその案に酔ったようであった。おのれの考えを良しとする気持が、気力を充実させ、かれのものは温かい膣の中でまた怒張した。
天殊の出自は明らかではない。謎に包まれている。その身辺に漂う妖気には、しかし、俗人を惑わせる色香がある。呪術といい陰陽師の能力というも、所詮は無智な者を惑乱、盲信させるワザの巧みさにある。
秘香を用いたり、催眠のワザによって、庶衆をたぶらかすように天殊の美貌もまた、善男善女には〝神々しい〟存在で、有難く見えた。
女王卑弥呼の時代から、美は妖に通じ、渇仰は即ち服従を意味したのである。
その点でも、天殊は妖術の巫女として、資格が充分だったのだ。
武器を執っての戦争がはかばかしく進展しないのに業（ごう）を煮やして範満が、女の手を借りようとしたのは、些かきたない。
が、乱世である。乱れた世は人の心を汚す。権力への妄

執のためには、鬼にもなり、醜悪をも肯定するようになっている範満であった。
この場合――かれに誇るような何かがあったとすれば、それは天殊のような、常の女ならぬ女を、おのれの精でもって屈伏せしめたという事実であろう。
たしかに、精の強さは、誇るに足るものだった。かれにとってもこの賭けは、浮沈の要（かなめ）だったのである。
天殊が心から奉仕する女になるように――かれは何度か放ち果てながら、肉体に痛みをおぼえながらも、天殊を官能の嵐にまきこむのに懸命になっていた。

女性は占いに弱い。天殊の出現を、最初に好感を以って迎えたのは、北川どのであった。
いまも昔も、女の地位は不安定のゆえであろうか。それとも、生来、女性には、何かに頼らねば生きてゆけない脆（もろ）さ、弱さがつきまとうのか。その弱さがあるゆえに、女性はまた愛らしいともいえるのだが。
北川どのは、正式な〝夫人〟ではない。義忠が、上京したときに見初めて連れてきたのである。したがって、身分的には側妾ということになる。
この時代は、現代ほど〝妻〟と〝妾〟の差が多くはなかったが、それでもやはり、身分のある者には、政略的にも、格式からも、妻と妾の差はつけられていた。
竜王丸という後嗣ぎを生んだことで、義忠の寵愛も深くなり、その地位も正室を凌ぐものになったのだが、そうなると、今度は、竜王丸が、義忠の次の代を継承するまで、心配だった。
（どうぞして、太守の地位を継がせたい）
と、希うのは、人情だ。母親として、普遍的な感情であろう。
一時的にせよ、占いによる保証は、そういう心には、救いになる。所詮、根拠のない気休めにすぎないことでも、安心を買うには安いものだった。
また、天殊のほうでも、母親の気持を知っているから、時に、脅かすようなことを言うかと思えば、その不安を打ち消してやる。
「悪い星があらわれました」
凶運の兆（きざし）だと言い、祈りによって、その凶星を消すことが出来る、と、期待を持たせる。
「何分にもよろしゅう、祈念して下され」
北川どのが必死になるのが、予定のうちで、どれだけ祈念したのか。
「漸く、凶星が消えました」
こんな子供だましでも、ころりとひっかかる。
北川どのは、ほっと愁眉をひらくのだ。北川どのにしてみれば、伊勢新九郎があらわれるまでは、こんな天殊を頼

みにするほかはなかったのだ。
　もともと北川どのは、人を信じ易い性格でもあった。言葉を変えれば、甘えん坊のところがある。そうした性格を、天殊は、たしかに、〈利用〉した。
　だが、人間は甘いとか、お人善しとか、いわれることは、たしかに、乗じられるが、それも徹底すると、自ら、相手に反省を強いることになる。
　天殊は、北川どのの明るい人柄と疑いを知らない素直さに心を動かされている。それは、おかしなことだが、愛といってもいいほどのものだったのである。
（幼い和子をかどわかすなんて夢子さまに悪い……）
　悪いということと、しかし、範満の〝男〟の前には、霧の流れるように消えてしまった。
　男をよせつけず、あくまでも神秘的な陰陽師としての存在感を作りあげていた天殊である。自ら、男を避けていたところに、範満が、殆ど暴力的に押し入ってきたのだ。
　気丈に女の弱さをカヴァしていただけのことである。蟻の一穴から千丈の堤も崩れるように、張り詰めたものが、もろく崩れはじめた。
（あたしは、やっぱり女だった）
　範満の男臭いからだに弄れるあいだ、天殊は、きれぎれに声をあげ、波間に漂わされる感覚に溺れた。
　溺れることの快感を、天殊は知った。それは、北川どのと竜王丸への愛情を弊履のように捨てさせる強さを持っていたことだった。
「――この屋敷は大丈夫でしょうか」天殊は心配そうに北川どのへ言った。「沓谷では、戦さが長びくのを恐れて、和子ひとりを害し奉ろうと企んでいるとやら」
「まあ、そのような」
「いかに御屋形の軍勢が強大とは申せ、和子と北川どの亡かりせば、中身の腐った大木と同じじゃと」
「恐ろしい」
「この屋形の下人たちにも用心せねばなりますまい」
　天殊は膝を寄せ、北川どのの手をとった。
　少女のように小さい。重いもの一つ持ったことのない美しい手である。白魚のような指と俗に称うが、幼いときから、荒仕事をせず、常に綺麗に保っていれば、こういうすんなりと細い指になるのか。
　天殊は、その手を、掌の中に包みこむようにし、凝っと目を見つめた。
「……」
　北川どのは、天殊の黒い瞳に見つめられると、すーっと吸いこまれるような気がした。
「お美しい……」
　呟くような、低い、囁きに似た声が、天殊の唇から洩れたとき北川どのは、ぽうっと赧くなった。まるで、男に恋

を囁かれているような気になった。
「なんとお美しい……」
「……」
「こんな美しい御方を、悪人輩の手には渡せませぬ」
「天殊どの」
「夢子さま」
　天殊は夢子のからだを抱きしめている。女同士の抱擁は、見方によっては、たしかに美しい情景だ。
　二人とも美貌だった。天殊には妖しく臈たけた美しさがある。天殊は力をこめ、頬ずりし、感情が盛り上ると、夢子の顔を仰向けるようにして、唇を重ねている。
　唇の感触は、理性を失わせる。女同士の唇の触れあいである。
「お許しを……」
　天殊の唇は、そう言った。
　言いながら、熱い息を送りこんでいる。唇が吸いつき、お互いに貪りあった。甘い唾液が、その行為を速やかにする。天殊の舌が大胆に、夢子の口を犯し、感激の呻きが洩れると、天殊の手は、さらに夢子の恥しい肌をまさぐっているのだった。まるで男が女を愛撫するかのように。
　官能の愉悦は、北川どのだけではない。天殊も、その快感を楽しんでいるのだ。楽しみながら、彼女には、目的意識がはたらいている。
「――夢子さま」
「ああ……」
　とろとろと、情感のうねりの中にひきこまれながら、夢子は、ふと、その感覚に逆らおうとした。
「いけない……」
　天殊の手が乳房を揉んでいる。
（無礼なことを……）
　と、言おうとしながら、言葉にならなかった。はげしく悶えて、その手をはずさせようとした。が、それも力はない。
「いけませぬ、ああ……」
「お可愛らしい……お許しを。御無礼とは知りながら、つい、あまりのお可愛らしさに……」
「お放しなさい」
「天殊は、男になりとうございます」
　熱い語気で、叫ぶように言い、また唇は唇をもとめておち、舌をからめながら、その場にもつれるように倒れた。
　むろん――天殊にはこうした不遜な行為も夢子を本心から怒らせることにならないという、成算がある。
（女のからだの秘密は、女でなければわからない）
　夢子が、義忠亡きあと、ずっと孤閨を守っていることは、冷酷なばかりの年上の女の眼からも判然としている。
（新九郎どのにも……）

新九郎との仲が怪しい、という噂は、かなり高い。
兄と妹。
という話だったが、自ら、心の動きは外へ洩れるものか、兄妹ではないようだと思う者がいて、それを口に出す者もいた。
この混乱がなければ、その点は追及されたかもしれない。いま、竜王丸派にとっては、新九郎と北川どのとの血のつながりを追及するよりは、範満勢力を駆逐することのほうが先決だったから、表面化しないだけで、その疑いをといているわけではなかった。
天殊の眼では、
(兄妹ではあるまい)
と、見ている。もっとも、それも、六分四分くらいのことか。
(夢子が義忠亡きあと男を識ったとすれば……)
鍵はそこにある。まるで、その証拠を掬うかのように、天殊の手は、裾前から入っていた。
同じ性的な快楽をもとめるにしても、異性との間なら、〝正常〟さの安心感がある。
女と女。その背徳的な感じは、羞恥と困惑に包まれ、しかし、さからい難い魅力が、北川どのを惑溺させてゆく。
天殊の指は、まるで少女のようにおそれと恥じらいを見せるかと思うと、野卑な男の大胆で、無遠慮なはげしさで、北川どのの柔らかく、秘めやかな部分に、入りこんできた。
その緩急を心得きった、指の魔力が、僅かに残った北川どのの抵抗をひき剝いだ。
北川どのは、もう狂おしいほどの愉悦の中で、きれぎれな声をあげ、ひしと天殊にすがりついている。
そんな女の乱れが、天殊をも昂りの中にひきこんでいく。
嘘を完璧に吐くには、九十パーセントの真実を語らねば成功しないという。天殊の北川どのの心を籠絡する行為は、ただの技巧ではなかった。
女陰陽師の変った生きかたをしている女には、北川どののような美しさには、惹かれるものがあった。北川どのが、心の支えにしてくれるのも、妹のような愛しさなのである。
唇を吸い、秘所に指を這わせ、臀部に手をまわして、愛撫をつづけてゆくのであった。
「ねえ、夢子さま」
と、うつつになってゆく北川どのの耳に熱く囁く。
「文殊堂へお出でなされまし」
「ああ……もっと」
「文殊堂でなら……ねえ」
「ええ」
「行きましょう、ね、そして、二人でこころゆくまで、楽しみましょう。ね、ね」

「でも……」
ふっと、その熱情の中に、竜王丸の顔が浮ぶ。
「和子が……」
「ほほほほ、むろん若君も」
「でも……」
「よろしいではありませぬか、ねえ、若君も御一緒に、ねえ」
ぬめりと、分厚い舌が歯をわけ入ってくる。
北川どのはあえいだ。舌は彼女の舌をもとめてうねり、さらに歯ぐきを這いまわった。
義忠はどちらかといえば、性に淡白なほうであった。その行為も、常態を出ない。文学をたしなみ、連歌に興じることも多かった。
この駿河の国に生れた連歌師の宗長などを近侍させて、戦場にまで連れて行っている。
戦陣の夜に武将たちを集めて連歌を楽しむということも屢々やった。そういう風流も武辺の一面であったのである。後世の信長などの野卑さはない。その義忠の寵愛は、したがって、房事もまた、軽く楽しむ。
飢を知る者ほど、飯は腹一杯食べるものだ。常に美女に不自由しなければ、精根尽きるまで淫に耽るということはない。
人間は性から離れられない。性的行為と人種保存の自然の法則を超えて、享楽の具にしたのは人間の智恵であるが、その性の愉しみは、また人間を逆にとらえてしまう。
北川どのが、天殊の魔力にかかって、今川屋形を忍び出たのは、その夜だった。
(新九郎さまに見つかっては)
ひきとめられるのはわかっていた。
ほかの重臣たちにしても、北川どのと竜王丸に屋形を出られては——何のために命を賭して戦っているのかわからなくなる。
北川どのを、囚えている快楽の鎖は、そうしたものに容赦なく、ぐいぐい引きずってゆくのだった。
竜王丸の手を引いて被衣を目深にかぶり、屋形の裏門から出た。
空には風が唸り、黒い雲がおそろしい形相で、頭上を走っていた。まだ宵の月がある。黒雲はその月を隠しあるいは、掠めて走っている。月が落ちるのを待っていては、脱出の機会を失う。
戦さの最中なのである。屋形侍たちは、警戒を怠らない。深夜、北川どの母子が他出するなどとは常態ではない。宵の口だから、気を許した。
「文殊堂にお供します」
天殊がそうことわった。
「ほかにお供の者は」と足軽頭が怪しんで「二十人ばかり

つけさせまする」
「いいの、すぐにお戻りなされまする」
天殊が断わった。
戦さとはいえ、屋形の中に籠ってばかりいるので、他出したくなるのであろう、と、足軽頭は軽く考えた。
文殊堂は、範満の前衛との丁度中間の、彼我の緩衝地帯にある。幸い、ここのところ戦火は小康を得ているし、
（大事あるまい）と、思い、見送った。
屋形の周囲は、濠が一層、深く掘られ、幅も広くなり、その外側には鹿柴が並べられ、二重、三重に、土塁を固め柵を組むなどして屋形を守ってある。
この今川屋形が、まだこうして健在なのは、それだけ守りが固いからであった。
城というにはあまりに当時にしても貧弱である。だいたい、当時は、城といえば、山城であった。屋形は平時の住居であり、政務を執る場所であったにすぎない。
後には、この両者は一体となったが、山城時代には、歴然と別になっていた。
屋形を奪われるような合戦には、平然とこれを捨てて、山城へ入る。この今川屋形が捨てられていないのは、まだ、ここで充分に応戦出来ている証拠であった。
駿府が合戦場になれば、敵の攻めてくる向きにしたがって谷津山全部、沓谷まで含めて、城造りしたり、賤機山へこもったりする。
したがって、そのころの山城というものは、後世から見れば、〝城〟といえないような、簡略なものだったのである。
それは、戦争が常態ではなかったし、殊に強大なくにあっては、攻めこまれるよりも、攻めてゆくことが多かったせいでもあった。いうまでもなく、城は、あくまでも、〝守り〟を意味するのだ。
それだけ、今川家というものが代々、東海の覇者であったことがわかる。
この内紛にもかかわらず、容易に近隣諸国から攻めこんでこないのは、
（内紛と申しても、どこまで事実か）
（謀略かもしれぬぞ、うかとは信じられぬ）
（天下の今川家だ、多少の内紛があったとしても、われらが攻めてゆけば、また縒りが戻るのではないか）
こういうふうな懸念があるからであった。
今川家の強大な地盤と、その蓄積は、一朝一夕では、崩壊しないだけのものがある。
範満にしても、
「今川家の当主には、幼い竜王丸より、おれのほうが適任者だ」
と信じこんでの蜂起だから、あくまでも、〝今川家〟の

伝統の上に立ってのことだ。やみくもな戦争で、駿府をめちゃめちゃにしようという気はない。
「北川どのが諦めさえすればいいのだ」
むしろ、そんな気持だ。
「一歩を譲ってもいいぞ」
そう提案してきたこともある。
「当代は、この範満が立つ。が、おれが老いた後は、成人した竜王丸に譲ってもよい」
随分勝手な理屈だが、範満は大変な譲歩をしたつもりだし、竜王丸派の中にさえ、
「これ以上、戦さを永びかせるよりは、このあたりで妥協した方が」
と、言いだす者さえいた。
それを新九郎がはねかえした。
「何を申される。あの範満が左様な信用できると思うてか」
力が力を制し、勝者が正とされる時代である。譲ることは、即ち、劣を意味する。
新九郎が大声叱咤しなければあるいは、この妥協案はまとまったかもしれなかった。こうした両者だけに、徒らに駿府の城下を焼いたりはしたくない。
目的のためには、手段を選ばず、というのが、戦国の論理ではあるが、この時代はまだ、戦国時代に入ったばかりで、そこまで、人心が荒んではいなかったのである。
範満は、天殊を籠絡して、北川どのと竜王丸の誘いだしに成功した――。
（新九郎めの昔のなかまとは知らざったな）
六人の風来者に、まんまと三百人からの足軽を連れ去られて、範満は地団駄踏んで口惜しがった。
（してやられた！）
まさか新九郎の差し金ではあるまいと思ったが、ともかく、六人の者が、あの危険を犯して、三百人もさらったことは、それだけこちらの兵力を削減させることになったのだから、たとえ、あの捕虜たちが寝返りうたないまでも、大いなる損失にはちがいない。
（向うが、智略でくるなら、こちらも……）
範満は名門の出であるだけに、直ぐにその気になった。
これが、素姓のわからぬ野盗などでは、こうはいかない。新九郎の才覚を、残念ながら認めている範満だ。刀槍の戦いよりも智略で敗けたほうが、かれには口惜しい。
（彼奴も、女にはたけているようだが、その点は、おれの方が一枚上だ）
過剰な自信が、天殊を利用することを思いつかせたのである。
そこには、
（北川どのは、天殊とただならぬ関係にある）

という事実が、基点になっていた。
三日月の落ちぬ間に――
今川屋形を抜けた北川どの母子と天殊は、文殊堂にやってきた。
彼我の緩衝地帯になっているだけに、文殊堂の周辺は奇妙な静けさだ。
「さあ、着きました、早くお入りを」
天殊は北川どのを抱きかかえるようにして請じ入れると、
「和子さまの御寝所を」
と、傍の巫女に命じた。
その言葉は、北川どのには、竜王丸を寝(やす)ませた上で、二人だけで、ゆっくりと楽しもうというふうに聞えた。
が、天殊はちがう。別の巫女を物陰へ呼ぶと、
「あちらへこの由を」
と、囁いた。
心得て、その巫女は、緋の袴の裾を乱して、急ぎ出た。
それとは知らない北川どのは、まるで、恋の道行きをしたあとのように、わくわくしているのだ。
(恥しい)
胸の動悸を聞かれはしないかと気にして赧くなっている。
その気持を悟られないためか、
「寝所の様子を」
竜王丸の母らしいところを、一応、見せた。

大事な今川家の後嗣ぎ、いや、いまはまだ冠(かんむり)前ながら、当主に坐っているのだから、その就寝にも配慮せねばならない。
竜王丸は、文殊堂で寝かされることに、幼いながら不審を感じていた様子だった。
「――ここがわたくしたちのお部屋」
天殊は、北川どのを文殊堂に連れこむと、こう熱く囁いた。唇が耳たぶに触れ、熱い囁きが北川どのの情感を煽るようであった。
厚い褥に、灯を包む紙が、うす紅いろであった。これは、紅の小布を、紙の内側に貼ってあったのである。
香炉が一炷の煙をたちのぼらせてい、うす紅く染まった寝所のしつらえは、文殊堂の中であるだけに、妖美なものを感じさせずにはいなかった。
「ああ、あたし……」
北川どのは立ちくらみしたようによろめいた。
「あれ、どうなされました」天殊は強く受けとめて、「誰にも邪魔されずに、ゆるりと、いつまでも、いつまでも……」
誘惑の語韻が、なんと、妖しく女の胸をくすぐることか。
唇を合わせると、もう慎みも忘れ、北川どのは、舌をだし、天殊の口腔をまさぐるのだった。
こうした行為には狎れていない。その稚(おさな)さが、しかし、

かえって、初々しい娘のようで、天殊の気持も目的を忘れて、ひきこまれてゆくのだった。
下着も何もすべて脱いでしまって、二匹の牝はただ狂い、どろどろした愛欲の淵に溺れた。
むろん、溺れているとはいっても、北川どのとは違う。醒めている部分が残っていたはずである。
(四半刻もすれば……)範満の手の者がやってくる。竜王丸と北川どのを連れてゆく。それで、天殊の役目は終る。
その計画を範満が立てたとき、天殊に一抹の懸念があった。
「あたしはどうなるでしょう」
「北川どのに憎まれたくないのか」
「いいえ、それはかまいませぬ。でも……」
お屋形側からの報復が恐かった。陰陽師といっても、実体はやはり、ただの女なのだ。
範満はこれを一笑に附している。
「なんのことがあろう、北川どの母子が、おれの手中に陥れば、お屋形勢は散り散りになる。御本尊のいない寺など繁昌するものか」
それも道理だった。
「でも……」
「まだ案じることがあるか」
「新九郎どのがいれば……」

「ふん、あやつなど、おれが一打ちしてくれるわ」
その大言壮語に安心したのだったが――
「――天殊さま、天殊さま」
低く、だが急(せ)きこんだ声がしている。
「――天殊さま、天殊さま」
巫女の声が板戸の外から、聞えている。
「まいりました」
女同士のからみあいで、息をはずませていた天殊は、はっと顔を持ち上げた。
衾(ふすま)は半ばずり落ち、北川どのは夢中で、呻き声をあげていた。
天殊の唇が、乳房の谷間から、乳首、腋窩とはいまわって、彼女を狂わせていたのだ。
そして、その手は、恥しいところでも、淫虫のようにうごめいていて、もう逃れることの出来ない底無し沼にもがいているようなものだった。
この底無し沼の恐ろしさは、それが女による女の快楽の導きだったことだ。同性ゆえに、悦びの場所もその深さも識(し)っている。北川どのは、情痴の虜囚といえた。
「………」
巫女の声は、北川どのには聞えなかったろう。
「まいりました、天殊さま」
「おお……お通しして……」

静かに、北川どのから、離れる。北川どのは、まだ夢の中にいるような、ぼんやりした表情だった。
にっこり笑って、天殊は立ち上ると、うすものをまとった。髪の乱れを気にした。肌も汗ばんでいる。
(化粧しなければ)
と、思った。
そのとき、板戸の外に、荒い足音と、巫女たちの悲鳴が聞えた。
「あれ、入ってはなりませぬ、そこは」「もし、お控えなさりませ」「神罰が……」
哄笑が、その巫女たちの声を吹き飛ばしたのである。
「文殊の神罰か、真正あるならば、この身にあててもらおうぞ」
ぎくりと、天殊は、立ち竦んだ。
「伊勢ノ新九郎は、いかさま天殊など恐れぬぞ」
言下に、がらりと板戸が開き、ぬっと、新九郎の顔がのぞいた。
「あれ!」
「天殊! 北川どのはどこだ」
「あ、あの……」
「その優しい顔で、何を企むか」
あっ、と思ったとき、一瞬、天殊は、目がくらんだ。
目から火花が出た。新九郎の平手が、頬に音を立てたのである。
軽く打ったくらいであろうが、天殊は、目がくらみ、よろめき、御厨子棚にのしかかるようにして倒れた。
黒塗り螺鈿の棚が倒れ、柱が折れた。巫女たちが一斉に悲鳴をあげた。
新九郎は、じろりと一瞥しただけで、几帳をめくると、北川どのを抱き起した。
「さ、御帰館なさるのだ」
衣裳を手早くまとわせた。
猶予はできない。懸念した通り戸外で、わーっと喚声が聞えてきたのである。
北川どのには、この事態が、まだ判然としないらしかった。後世でいえば、麻薬に囚われたような、うつつになっているのは、さしづめ、〝目くらまし〟に罹ったかのようでもある。
「かようなものが」
入ってすぐにわかったのだ。新九郎は、足をあげて、秘香をくゆらしている白磁の香炉を蹴転がした。
「さあ、去(い)のう」
まだぼんやりしている北川どのを、ぐいと抱きかかえた。
六尺豊かの巨漢だから、小柄な北川どのは、軽々と抱えあげられて、
「あれ……」と、漸く、われにかえったように、「和子(わこ)が、

和子が……」
泣き叫ぶのを、
「安心せい、すでに、助け出したぞ」
その間も戸外の狂躁的な喚声はつづいていたのである。
新九郎が北川どのを片手抱きにして、文殊堂の外へ出たとき、
「兄き、やっぱり来よったわえ」
大道寺太郎が走ってきた。
「範満の軍勢か」
「三十ばかり」
「蹴散らしてしまえ」
「まかせておいて下され、われら六人で、軽いものだわな」
太郎は抜刀を一振りして、駈け出した。
北川どのと竜王丸が天殊と同行したと聞いて、新九郎は、本間源次郎と太郎たち六人を率いて駈けつけてきたのである。
範満の軍勢が到着する寸前だった。
才四郎や十蔵は大薙刀をふるい又次郎と兵衛は槍をぶんぶんふりまわして、雑兵たちを薙ぎ倒した。
「うぬらあ、死にたいか」「首が胴から離れると、継ぎようがないで」「死にたくなくば、とっとと退散せい」
荒木兵庫などは相手が落したり捨てたりした槍を両手にして、突きまくっている。
槍術も刀術もない。〝得物〟を如何に使い、相手を仆すか、それだけが目的だから、後世のように〝兵法〟としての作法も使い方もない。
その代り、こういう乱暴なやり方は、力が失せたり、息がつづかなかったら、逆に相手につけこまれるし、味方を傷つけることにもなる。
荒武者たちの凄まじい勢いに、多数の死傷者を残して、範満方は、どっと退いた。
すでに、竜王丸は本間源次郎が抱いて、馬上にあった。
「おお、御無事か」
「さあ、一刻も早くお屋形へ」
新九郎も北川どのを抱えたまま馬上の人となって、文殊堂をあとにした。
散々に打ち破られ、命からがら戻ってきた雑兵たちを見ると、範満は、仁王立ちになったまま、わなわなと顫えだした。
「な、成らなんだか!」
(あの手もこの手も駄目か)
天殊を色仕掛けでたぶらかして北川どの母子を拐かそうとしたのも失敗となると、範満は、
(手を失うた……)

と、がっくりきた。
自信家のこの男が、気落ちして、焦立ちを隠せないのである。
(ええい、なんとかせねば……どんな手段でも……)
立ったり坐ったり、髪の中をがりがり掻いたり、その指先にも気がつかず、爪をかんだり——そんな姿は、家臣の前で見せるものではない。
与力の一党の前でも曝すものではない。自ら、敗者であることを証明するようなものだ。
とはわかっていても、範満の焦躁は鎮めようはなかった。
「一つでは駄目だな。一つでは」
「一つと仰せられますと」
東雲之助も首をひねった。
「一があって二がある。一は即ち仕掛けだ、虚だ、二で圧える。虚でもって誘い、実は次の段階で勝ちを制する」
「なるほど、軍略にございます」
東雲之助は頭を下げた。
「こりゃ、感心しているときではない。おれのこの案、次は、汝が考えよ」
「考えました」いい考えではなくても、適当に案が出てくるのが、東雲之助の小悧口なところだ。「まず、屋形に火をかけます。いや、そうではありませんでした、まず、賤機山を北の尾根伝いに参って隠し砦をこしらえます」
「すぐに見つかるわ」
「隠し砦が難しければ、もぐら穴でもようございます」
「うむ、それなら、できよう」
「それから？」
「もぐら穴に百人ほど伏せておきます」
「一ノ谷の故智にならうて、火牛を数十頭、屋形に攻めかけます」
「——前衛で阻まれてしまうであろう」
「あるいは、卑賤の者どもを使嗾して、十数人を潜入させ、火を放たてまする」
「……」
「あわよくば、火事のなかで北川どの母子を弑し奉る」
「……」
「それが成らねば、成らぬとて、屋形が炎上すれば、母子は、いやでも賤機山にのぼりましょう」
「多分な」
「そこを、打ちのめしまする」
「もぐら穴から出てか」
範満は、少し気がはれてきた。二段三段の構えでやれば、やれぬことはない。(要は、屋形の結束を破ることだから)
「もぐら穴に弓槍をひそめさせるか」
「手練(てだ)れノ者百人ほどで、充分でございましょうな」
「一ノ谷、いや、賤機山から射落す……」

北川どのと竜王丸が針ねずみのように矢を浴びて血まみれになって坂を転げ落ちる姿を想像して、範満はにやりとした。
範満と東雲之助が、そうした考えをしているころ、屋形の方でも、六人の腹心と酒を汲みながら新九郎が方策を案じていた。
「このまま、いつまでも睨み合いしていたのではははじまらぬ」
持久戦の不利を感じはじめていた。
「いっそ、誘うか」
「如何ように」
「誘いをかける。つまり隙を見せる」
「ははあ」
「前衛に隙を作る……」
「攻めこまして、叩く……というわけで？」
「そうだ」
「それも術でござるが、チト危険が大きい」
「じゃとて、このまま、半永久的な戦いでは、隣国に漁夫の利をさらわれることになる」
「それもそうだが」
「彼我が疲れたところを見はからって、どっと攻めこんでくるぞ、まず間違いはない。早くに片をつけねばな」
「しかし、相手も、今度は大軍をもって一気に突っこんでくるかもしれませぬ。仄聞するところによると、横大路の一族が、沓谷との和睦に動いているとかで」
これは新九郎も、うすうす耳にしていたことだった。
横大路介右衛門は、完全に右腕が駄目になっているし、一族の者たちが、見切りをつけ、沓谷の範満へ、和睦を持ちかけているらしい。
戦さが長びけば、こういうことも珍しくはない。主を捨てて、強い方へつく。こうしたことも、この時代ではあまり不義なことに思われなかった。
(梅ヶ谷だけの問題ではない)
新九郎は、それを案じた。
いまでこそ、義忠の血すじとして、竜王丸を奉戴しているこの屋形の連中も、いつ、寝返りをうつかわからない。
(早く決着をつけねば)いささかの焦りを感じている。
「大事をとってばかりいては、勝てる戦さも勝てぬ」
「はあ、それはたしかに……」
「万一の際の、退き口も、むろん用意しておく」
「何処に」
「賤機山だ」
「砦はあるが」
「あれでは不備だ。ひそかに、整えておけ、その上で、この計りごとを実行に移そう」
「それだけの考えあっての上ならば、間違いはござるま

い」
「すぐに山上を調べい。そうだ、おれも行こう」
新九郎、虫が知らせたのかもしれない。
才四郎と兵衛を連れただけで供の足軽は五人。賤機山へのぼった。
山麓には、浅間神社や臨済寺など名刹がある。山の高さは二百メートルに及ばないが、南北に屏風のように盛り上った山というより丘陵で、東西の勾配は削いだような急斜なのが、攻めるに難い地勢をなしている。
この静岡市の西北に屏風のように立ちはだかる賤機山は、今川屋形の乾（いぬい）の守りでもあった。
屋敷の方位では、古来、西北を忌む。
方位だとか家相など、元来、科学的には無意味なのだが、こうしたことは多く古代シナからの輸入文化の影響なので、長安の都では、北西から胡賊などの脅威を常に感じていたのが忌む原因になったのと、本朝では、乾の風が強い。そうしたことが乾の方角に難多しと、した。
きわめて生活的にも、困惑が多い。
迷信というよりは、たいてい、その底には、日々の生活からの肯定が尠なくないのである。
賤機山の東方にひらけた平原は、国府を置くにも最適な土地といえる。
背面に賤機山を置くことで朔風を遮り、また背後の守りとする。前面の谷津山、八幡山は前衛になるのだ。
安倍川という広い川を控えているのも、拠点としての条件にかなっている。南は駿河湾がひろがり、西には、安倍川が外濠をなしている。
この地勢では、手近な山城は、賤機山ということになる。日ごろは望楼を兼ねた砦から周辺の敵の動きを展望していて、いざとなると、山に籠る。
新九郎は才四郎らを連れて、賤機山へのぼった。
曇り日で、かれらが山へのぼりだしたころから、小雨がおちてきた。
「これは、視界がきかぬぞ」
隻眼をほそめて兵衛はまわりを見まわした。
「明日ではどうだ、雨がやんでからのほうが」
「いや、思いたった日のほうがいい」新九郎は、おのれに備わった勘を信じている。「もっと早く、備えをするべきだったのだ。足もとに気をつけろ、草が濡れると滑る」
「簑笠を持ってくればよかったな」
才四郎は眉をしかめた。この男は顔だちがよく色が白い。優しい顔をしている。
「濡れて破れる紙ではあるまい。よくそれで戦さが出来るな」
山路をのぼってゆくと、雨にけむって、あたりは靄がひどくなっていた。

「見張りはどうした？」
誰も出てこないので、ふと新九郎は不審を感じた。
柵をめぐらし、木戸をこしらえ、望楼が峰々にあり、その下に小屋がある。地形を利用して矢狭間がつくられ、石落しのために石が積んである。後世の石垣や白亜の塗込めの天守閣など考えられない時代であった。
その小屋のかげに、人の姿が見えた。と思ったとたん、弓弦の音がひびいて、一筋の矢が飛んできた。
「やっ！　どうした」
矢は一筋だけではなかった。
頭上からも飛んでき、草むらの中からも、毒蛇のように飛びかかってきた。
「散れ、散れ！」
新九郎は兵衛たちに叫んで、近くの小屋に走り寄った。走りながら抜刀した。二ノ矢が飛来したのを薙ぎ払った。
「どうしたことだ、敵か、やつらまさか……」
才四郎には、あまりにも突然で納得ゆかないようであった。
「まさかということがあるが、やつら、敵だ」
兵衛も抜刀した。
足軽の弓組がただちに応戦の矢を放った。敵の姿も定かではないのである。飛矢のくる方へむかって放つしかない。
小雨のけぶるなかで、激しい矢交ぜと、怒号が渦を巻いた。
望楼の下の小屋におどりこんだ新九郎は一刀の下に第三の矢をつがえた男を斬り伏せ、突きかけてきた槍を千段巻の下をつかんで引き寄せざまに、血刀を叩きつけている。
小屋の中には三人いたのである。新九郎の息をつかせぬ刀さばきに恐怖して、ぱっと逃げだしたところを、誰が放った矢か、脚を傷つけたらしく、悲鳴をあげて転倒した。
そこへ駈けつけた足軽が、槍を振りあげて、叩きのめした。
砦といっても、柵の内に雑木林が残っているし、雑草は腰を蔽うばかりだ。そのなかで、そこここに斬り合いがはじまっていた。
こちらも驚いたが、向うも驚いたのだ。いうまでもなく、この敵は沓谷から派遣されて来た連中だった。
東雲之助の考えをとりあげて、範満は、この賤機山の乗っ取りを策したのだ。
数人いた砦の守りを皆殺しにしたところに、新九郎たちが登ってきたのである。
はげしい戦いは、新九郎たちの勝利に終った。二、三人が逃げだし、あとは斬り伏せたり、捕えたりした。
「よかったぞ、来合わさなんだら背後を突かれるところだった」
血刀を拭いながら、新九郎はほっと肩の力を落した。

「裏山の峰伝いに来たのであろうが、見張りが怠ったからだろう。こやつどもを糾明して、裏道を白状させろ」
「そいつは、おれにまかせてくれ」兵衛が隻眼を光らして、「逃げた奴がいる。すぐにも新手を連れてくるかもしれぬぞ」
　小雨はやんでいた。死体を一ヶ所に集めたり、新たに雑兵たちを呼びにやったりしていると、一人が口を割ったと、才四郎が報告に来た。
「兄き、東雲之助というやつを知っているだろう」
「うむ、おれを最初瞞した奴だ」
「指揮をしていたのは、彼奴だそうだ」
「――残念なことをした」
　東雲之助が、この隊を指揮して砦を奪ったとは。その東雲之助を乱戦のうちにとり逃がしてしまったと聞いて、新九郎は、地団駄ふむ思いだった。
「どっちへ逃げたか」
　もう、遠くへ逃げ去ったことであろう。
　かれらが侵入した経路は、遠く北方の有永のあたりから福田ヶ谷に入り、尾根伝いに、賤機山を南下してきたという。
　東雲之助も、その道を辿って逃走したのではないか。
「いや、そうではあるまい」
と、才四郎が刀の鎺(はばき)にこびりついた血糊に唾をかけては念入りに拭いとりながら、
「おれは逃げるやつを追って、山の頂き近くまでいったが、二人逃がしている。二人とも、西へ降りていった。一人は崖から転落したようだったぞ」
と、証言した。
「遠くてよくは見えなかったが、逃げおうせた方が、東雲之助だろうな」
「なぜわかる」
「崖から転がり落ちたやつを、助けもせで逃げたからな」
「どこだ、その崖は」
「案内しよう」
　そこは山崩れでもあったらしいあとで、削ぎ落したように大きくえぐられた箇所で、高さは三丈ほどある。ここから落ちたのなら、助かるまいと思われた。
　雑兵たちが、下へまわってその転落したやつを探しにいった。上からは霧の海をのぞくようで、姿は見えない。
「ここからおりると、籠上のあたりへ出ます」
と、雑兵の一人が言った。
「山下を迂回して、北へまわり、沓谷へ帰るか?」
「さあ、それは……大変な遠廻りになります」
「では、どっちへ」
　どこへ行ったのか。
　北から南へ――大きく湾曲して安倍川が流れている。川むこうへ行ったのであろうか。
「舟で川を下って、川口から、海岸沿いに、清水辺へ出るということも考えられますな、いや清水までまいらずとも、根古屋のてまえあたり、左様、大谷の浜あたりから上っても戻れましょう」
　お屋形の方では、ずっと、駿府の海岸線はおさえているが、そこらまでくれば、上れないことはない。
　ともあれ、安倍川の流域は遡るほど、山が迫っているから、東雲之助はどっちへ向うにしろ、行先の範囲はそう広くないはずであった。
　因みに、現在は安倍川は、ずっと水量が減っていて、貧しいかぎりであるが、中世には、もっと豊富な大河だったようである。
「川向うへ行ったとすると……東雲之助を匿うてくれるところがあるだろうか」
　新九郎が、ふっと思いだしたのは、泉ヶ谷の一族のことであった。

血の河

　転んでもタダは起きない男である。聡明ではないが、東雲之助は小悧口だ。天成の才智ではない。かれなりの必死の生き方であろう。
　女性的な容貌のほかに取柄のなかった少年時から、「尻で殿の寵を買うた奴」という蔑みの眼に絶えられず処世の術(わざ)を学んだのであろう。
　美貌などは、所詮、限(き)りがある。それも早い。男色は七、八歳から十五、六歳までというのが普通だ。二十歳の声を聞けば、どうにもならない。
　だが、人生は、それからが長い。男の仕事は、その大人になってからなのだ。
　東雲之助は、範満の機嫌をとりむすびながらも、将来のことを考えたにちがいない。
　幾らかの知行は貰えても、結局男の世界は、腕か、頭か、ということだ。

名門ではないし、腕もない。鍛えるには限度がある。限度がないのは、頭だ。才覚だ。
その基盤になるのは学問でありそれを応用する頭のめぐらし方だと知った。
敏か鈍か、明か暗か——人間には、その遺伝的、もしくは環境的素質というものがある。生れつき聡明なものと、鈍なものがいる。どちらかといえば、東雲之助は後者である。
幼時から、美貌をほめられたりおだてられたりしているうちに、ぼんやりしたものになって来たらしい。
それを、自覚したときから、かれは、頭をめぐらすようになった。頭は使えば使うほど、智慧の泉を掘り下げ、溢れさせるものだ。
東雲之助が、いくらかでも、小才を利かせることができるようになったのは、その努力のたまものである。大した才覚はないが、小才はきく。
東雲之助は、賤機山から逃れて廃寺で一夜を過した。暁闇のうちに漁舟を盗んで、安倍川を下った。
(このままでは帰れぬ)
と、思った。
土産がなくては帰れない。
あの賤機山占拠の案は、かれが考えたことだし、指揮者となって行動したのも、功を焦るものがあったからだ。
それが、殆ど全員を死なせあるいは、虜囚となって、おのれ一人だけが、逃げてきたとなれば、範満の怒りが、どんなものか。
思うだけで、肌に粟が生じる。
(何か、土産を持って帰らねば、何か……)その頭が思いついたのは、一人の男だった。(あれだ、あれを利用するしかない……)
東雲之助の脳裏に、背の高い、行人包みした男の姿が浮んだ。その男は、歩くとき、片足を曳きずっている。
その男——
今川弥三郎春忠。
竜王丸には叔父にあたる。治部大輔義忠の弟である。範満と義忠の不仲が、今川の社稷を危くするもととして、ひそかに、工作をしていたという。
範慶のわすれ形見寿々女が曳馬ノ城(浜松城)から逃げ出してきたと聞いて、これを囮に今川家の内紛をおさめて、権力を握ろうとしていた。
弥三郎春忠が、ひとつの勢力であり、これを味方にひきよせることが成功したなら、賤機山の失敗は、宥免されるであろうと考えたのである。
下種の智慧は、常に保身のほうにはたらく。
(——難しいことではあるまい)弥三郎春忠は、石脇の城にいる。

現在の焼津市、東郊、高草山の南端に城がある。
街道は宇津谷峠を通っているが、この海岸寄りにも、裏街道がある。いまは日本坂という名称があり、かなり嶮峻だが、宇津谷峠ほどではない。
石脇城は、ここのおさえになっているし、その城址からは、朝比奈流域から焼津の平原が一望に見渡せる要衝である。
弥三郎春忠は、この城を義忠から預けられていた。駿府城下にも屋敷があったが範満の烽起以来、石脇に籠ったきり、出ようとしない。
むろん、範満は与力を呼びかけたし、竜王丸方でも、味方するよう、使者を何度も派したが、春忠はどちらへもつこうとせず、言を左右にしている。
もとより、〝形勢展望〟のためだった。勝ち目のある方につく。その心中は誰にもわかる。
(卑劣な春殿よな)
と、敵味方とも噂した。
(おみ足が不自由なゆえ)(左様なことは理由にならぬ。片足が不自由であろうとも、馬には乗れる。舟にもな)
(歩くのもさして……)
しかし、それだけではなかったのだ。
(あの頭巾は)(行人包みも、戦さの場では脱らずともよいのだ)(そうだな、それなら、何を思うて沈黙しているのか)(ただの、こす狡さよ)(嗤うてやれ)
嘲笑は、武門の恥辱である。がなおも、春忠は沈黙している。
たとえ、嘲笑されようとも、
(最後に笑うのは、おれだ)と思っているのか。(どちらかが弱ったとき、おれの出番がくる)
そう思っているのかもしれない。
その卑劣さも、かれの行人包みに蔽われた顔を知る者には、理解できないことはなかった。
もっとも——その行人包みの内をのぞいた者は、数人しかいまい。
奇怪な行人包みの内の顔。
(幼少のころ……な)それを知る者は、こう言って、口を噤む。
幼時に、囲炉裡の火で、顔を焼いたという。あるいは、狂気した母親に、刃で切りきざまれたという。
真相は定かではない。三十数年の昔のことである。
ともかく、その顔を恥じて、春忠は、昼夜とも、人前では行人包みを解くことはなかった。双眸だけが、その布の間から洩れていた。
こういう男だけに、誰からも、腫れ物にさわるような態度で遇されていたのである。
(話の持ちかけようでは)と、東雲之助は思った。こちら

の思うように（動く……）
権力がほしいのはわかっている。範満の高圧的な態度がいけないのだ。しかるべき条件で、ちゃんと話を持ってゆけば、乗らないはずはない。
（春忠に、今川屋形を背後から突かせたら……勝利は疑いなしだ）
そう思うと、東雲之助は、わくわくしてきた。
もう、その話が成功したような気さえしてきた。希望的観測か、楽天的に出来ているのか。
流れが早くなり、渦を巻いていると思ったら、藁科川との合流点にさしかかっていたのである。
夜は漸く明けようとして、空の高みに濃紺の夜を残しながら、その底はうす紅い微光に彩られていた。
暁の明星が、行く手に恐ろしいほど強い光を放っている。
視線を転じたとき、目の前に近づいた舟山から、一艘の小舟が離れようとしているのが、ぼんやりと見えた。舟山は、前にも述べたが、藁科川が安倍川にそそぐあたり、ぽっこりと浮んだ小島である。
南北に長い楕円で、したがって東西から見ると、舟山のいわれも、無理はない。
（見られると、まずい）と、東雲之助は思った。
かれは、櫓に力をこめて岸に寄せようとした。
その耳に、少年の声が聞えたのだ。
「行ってくるよう、直ぐ戻るからな、誰が来ても、出たら駄目だよ」
はっとなった。その声に聞きおぼえがある。
（あいつ！）黒丸ではないか。（こんなところに隠れていたのか）
軍鶏の一件以来である。
東雲之助は舟を岸辺に寄せた。生い茂った葦の中に、舟を入れて、身をかがめた。
（それにしても、あの舟山には、誰がいるのだ。誰に話しているのだ？）
黒丸が舟を漕ぎ寄せてくるのをじっと見守っていながら、東雲之助は考えている。
（黒丸をとっ捕えて……）
と、東雲之助は思った。小舟はこちらへやってくる。だが、いまの東雲之助の立場は派手に動けない。
安倍川の流域は、竜王丸派の勢力範囲なのである。
（あいつ、直ぐに戻ってくると言っていたな）
誰に話していたのか。その興味もあった。そいつを糾明するうちに、黒丸が戻ってくるだろう。
葦のなかに身を伏せて、東雲之助は、黒丸の目を避けた。もし見つかるようだったら、抜刀して威す。そのつもりで、刀の柄に手をかけていたが、黒丸は幸い、気がついた

様子もなく、舟をつけて、上っていった。駿府に買物にゆくのであろう。
東雲之助はその姿が見えなくなるまで待っていてから、舟山へ静かに舟を近づけた。微茫のいろをのせて、安倍川は明けようとしている。
東雲之助は急な坂をのぼっていった。
（誰かいるはずだ）
黒丸が話していた相手は誰か。
狭い川中の丘なのである。多くの時間を要さない。東雲之助は樹々の生い茂ったなかに、無細工な小屋を見つけた。
「ほう……やはりな」
蓆の戸が垂れている。あけて中をのぞいた。誰もいない。
「おい、どこへ行った？」誰か残っているはずだった。
「おうい、どこにいるのだ、隠れていないで、でてこい」
怒鳴ってみたが返事がない。
「隠れることはないのだぞ」
「……」
「おうい、おれは味方だぞウ」
口から出まかせに、東雲之助は叫んだ。こういうことには、抵抗がない。嘘も方便、目的のためには、尻も舐める男である。
「ほんとうだぞ」
「…………」
「黒丸とは仲良しだ、隠れていることはない」
白々しい嘘も、その白面の美貌が幸いして、もっともらしく聞えたらしい。
色の白いは七難隠すというが、前髪ぶりも、そのほそいからだも女子供には、優しい人柄に見えるらしい。
「ほんとうに？」
と、女の声がした。
頭上だった。東雲之助はふり仰いだ。
「ほんとうだとも……」
まだ、しかし姿は見えない。傍の大銀杏の梢から、声は落ちてくるのである。
「ほんとうに黒丸さんと？」
「ああ」
「名前を聞かせて」
「おれの名か……黒丸がよく知っているさ。おりて来いよ」
疑うくらいなら、返事をしなければいいのに、そこが子供なのであろう。
東雲之助は見上げて、
（あの娘は？……）
はじめ、黒丸が少年のくせに、好きな娘と、こんなところで隠れ遊びをしているのか、と思った。娘は、高い梢から、おりてきた。

これは寿々女だった。木登りなど出来るはずはなかった育ちだが、黒丸との生活が、自然児のようにおぼえさせたのであろう。
(寿々女だ!)
東雲之助は愕然とした。
彼女が曳馬ノ城に人質にやられたいきさつは知っている。
寿々女のほうでは、しかし、東雲之助を知らない。
「ほんとうに、黒丸さんの、おともだち?」
と、眼を丸くした。
「ああ、そうだとも、だから、ここを知っているのではないか」
それで、寿々女は納得した。
「すぐ帰ってきます、府中に買物にいったの、餅を買ってきてくれるって」
「餅買いに?」
ふん、盗んでくるんだろう、と肚裡のなかで、東雲之助は笑って、
「そうか、寿々女は、ここで黒丸と……」
「あら、知らなかったの」
「うむ、いや、黒丸がな、ははは、寿々女とはいわなかったのさ」
「……」
「可愛い子と一緒だとしか」
「……」
「さあ、行こうか」
「え? どこへ」
「府中さ」
その言葉に、寿々女は、ふと不審を感じたらしい。
新九郎はときどき来て、二人が安全に隠れているのを確認しては府中がいま大変な騒ぎになっているから、まだ当分は、この舟山に隠れていなければいけない、と教えてくれたのである。
その府中の戦さは、黒丸もときどき見にいっては、どっちが勝っているとか、どこそこが火事だとか話してくれる。姫小袖なども、どこからか持って来た。
大人の世界がどんなに難しいものか、おぼろに感じている。寿々女は、ただ、新九郎と黒丸に守られて、ここに隠れていればいいのだった。
東雲之助の白皙の顔が、急に、何か、狐めいたものに見えて、
「いや、寿々女はいかない」
と、後ずさった。
「何をいうのだ」東雲之助はにやにやしながら、「みんなが、そなたを待っているのだよ」
「……」
「こんなところにいたら、まるで、乞食みたいだぞ。さあ、

おじさんが連れていって進ぜる」
と、手をのばした。袖をつかまれそうになって、
「いやよ」
ぱっとふり払うと、寿々女は、走りだしている。
あっと、東雲之助はたたらを踏んで、
「これ、待て、寿々女」
子供とあなどっていたのが、間違いだった。
この川中の小丘は、少年と少女の天地だった。走りまわったり木にのぼったり、のびのびと野性の快適な日をおくっていた。駿府で育ったときも、浜松に人質になってからも寿々女には自由がなかった。
屋敷で大事に育てられたのも、階級的な要因の方が強い。血統とその環境が〃お姫さま〃としての育ちを強要した。子供にしてみれば、大人の世界の仕組みはわからない。子供の本能的な伸びやかな思考と行動にとって、束縛は何よりも辛い。それがこういう逆境になったのが、少女にはかえって幸福かもしれなかった。
林の中を走ったり、草むらに隠れたり、木から木へ飛び移ったり、黒丸に教えられたのだから、およそ娘らしくない、活発なものだった。
東雲之助の手をすり抜けて、ぱっと、木陰へ走りこんでいる。馴れた場所である。もう、夜でも迷わずに、自由に往来できるくらいだ。
黒丸との鬼ごっこでも負けない。どこにどんな大きな樹があるか、どれくらいのくぼみがあるか、坂が滑りおりることができるか、すっかり頭に入っている。
「待て、これ、どこへ行く」
東雲之助は、狼狽したが、
(どうしても捕えなければ)
と、思った。夜でないのが幸いだった。
(せまい場所だ。どうせ逃げられはしない)
と、多寡をくくっていたが、寿々女は早い。
栗鼠のように、下枝をくぐり、樹間にあらわれるかと思えば消え、巧みに逃げてゆくのである。相手は年端もいかぬ少女で、こちらは大人の足、追いつくのはわけはないと思っていたが、追いつけるものではなかった。
散々、ひきまわされて、東雲之助は、疲れてしまった。はじめての場所だけに、頭を枝にひっかけたり、木の根に足をとられてひっくりかえりそうになったり、すっかり汗をかいてしまった。まだ、昨夜の疲れが残っていたのだ。
(くそ! ばかにしやがって)
東雲之助は地団駄踏む思いだったが、汗を拭いているうちに、ふと思いついた。
(相手は子供なのだ)
まともに考えては、駄目だ。
「寿々女よ」と、呼びかけた。「おまえが逃げまわってい

ると、黒丸がどういうことになるのか知っているか。黒丸がひどい目にあうぞ」
少し離れた櫟のかげから、寿々女の顔がのぞいた。
「こっちにおいで」
と、東雲之助は手招きした。
「……」
寿々女は大きな眼をあけて、凝っと見ている。〃大人〃の嘘を見破ろうとするかのように。
「嘘じゃない」
と、東雲之助は、恐い顔をしてみせ、それから、ふっと笑顔をつくった。
「黒丸は、間もなく戻ってくる」
「……」
「ちゃんと知っているんだ。な、寿々女が強情張って、私のいうことをきかないと、黒丸をひどい目にあわせてやる」
「いけない」
「黒丸がいじめられていいのかね、寿々女」
「いけない、そんな……」
「よしよし」と、大きくうなずいてやり、東雲之助は、汗を拭いた。「さあ、こっちにお出で」
「いじめないで」と、寿々女は叫んだ。「黒丸ちゃんをいじめないで」
「ああ、約束する」
「ほんとうに？」
「ほんとうだ」
こういうときに、色白の顔は七難を隠すのだ。
陰険、狡猾、卑劣、欺瞞、暴虐、奸譎……そうした悪心も、色白の優しい顔からは、一寸、わからない。寿々女にしてみれば、黒丸の身だけが心配になってしまって、幼な心の無邪気な目も、曇ってしまったのだろう。安心して、東雲之助の前へ戻って来た。
「いい子だ、いい子だ。いったいどうして逃げたりなんかしたのだえ」
「……」答えられない。
はっきりした理由はない、本能的に危険を感じたのだ。
少女には、こういう本能的なことに対して、分析はできないし、答えられない。
ただ、逃げたくなった、と言うしかない。
「まあいい、来るがいい」
東雲之助は、少女を連れて、舟山からおりた。
小舟に乗せると、漕ぎだした。
「あら……黒丸ちゃんに、黙っていくの」
「そうだ。どうせ、すぐもどるのだから」
「どこへ行くの」
もしも、あの〃小枯ノ森〃だったら、また逃げだすつもりだった。

ところが、東雲之助は、流れに乗って、舟を漕いでゆくのである。寿々女にもその方角はわかる。間もなく、川口へ出た。駿河湾だ。
東雲之助は、舟のへさきを左へむけた。石脇城にゆくのはあきらめたらしい。
朝風の強い中で、寿々女の表情はしだいに不安になってきた。

「寿々女か」
範満は一瞥しただけで、興のなさそうな顔をした。
むろん、知っている。人質にやった曳馬ノ城（現在浜松市）から逃れて、姿を消したことも、耳にしていた。
かれにとっては、大した価値はない。なぜ東雲之助が連れてきたか、その心情をさぐるような眼で見た。
「うぬの失敗を糊塗しようと思うても、それは許されぬぞ」
「けっして、左様なことは」と、東雲之助は畏怖してみせながら、内心は得意をのぞかせて、「たしかに、賤機山では、失態仕りました。慚愧に耐えませぬ。されば、その責めを」
「こやつで埋めるとか」範満はなおも不満をあらわしながら、内心は、もうあらたな考えをめぐらしていた。「まあ、よい、ま、使いようはある」
範満がそう頷いたので、東雲之助は、ほっとした。
その思案であった。どちらの悪智恵であろうか。和睦の使者が立った。
はじめ東雲之助を立てようとしたが、東雲之助は、懲りている。それに賤機山で戦ったばかりで和睦の使者というのは、面映ゆい。
これとて、真実、戦火を消す気があるなら、体面どころではないが、それも陰謀なのだから、（いくら、おれでも）色の白いが七難隠すといっても、そこまでは、鉄面皮になれない。東雲之助の気の弱さだった。
使者は酒井市右衛門定行という。雲つくばかりの巨漢で、槍も三間柄の凄まじいものを使う。これが従者三人を伴って、乗り込んでいった。
「降人にまいったか」
新九郎は頭から一喝を浴びせた。
「ははは、そうとなれば、そちらにはよろしかろうがな」
「申せ、使者の口上」
「おれの口から聞くより、黒丸と申す餓鬼から聞いた方が早いのではないか」
「……」新九郎は、一瞬、詰った。
黒丸から寿々女の失踪は聞いている。さては、こやつが、

と思った。寿々女が、舟山の暮しが嫌になって逃げたのなら、しかたがない。どこへ行ったのか、それが案じられていた矢先なのである。

（こやつらの手に……）捕まったのか。

こうなると、強気に突っぱねるわけにはいかなかった。

「なんのことだ」と、とぼけて、「早く口上を申せ」

「おう」と、酒井は吼えた。「和睦じゃ、それもな、竜王丸と寿々女の縁談だ。新五郎範満さまが寿々女の仮親となる。この儀、如何！」

（やられた）と、思った。

寿々女を奪っただけではない。その仮親となって、竜王丸と縁結びさせる。

いうまでもなく、〝政略結婚〟である。

双方とも同じ歳の八歳。この若さで結婚というのは、現在の習慣から見れば、異様に感じられるがむろん、その結婚は、いうなれば双方の親とその関係者の利己心がその形式を期待するだけである。

結婚ということを、この国では神聖なものにする。神聖であるがゆえに、その結婚による結びつきは破るべきではないと考える。政略結婚はこういう目的で、利用されてきた。

「われら一族が、血で血を洗う抗争は、お互いのためにも、大いなる損じゃ」

酒井は口上した。範満や東雲之助に教えこまれてきたのであろう。

「どちらが勝っても負けても今川家の勢力がそれだけ減ることになる、そうであろうが」

わかりきったことを、いまさら何をいう、と新九郎は、言い返したい思いを、どうにか怺えた。

戦さをしかけたのは、そっちではないか。

範満の野望が、竜王丸の座を奪おうとしたことに、端を発している。竜王丸が、横死した義忠のあとを継いで、今川家の当主となり、この駿河の守護大名になりさえすれば、少なくとも、この内戦は起らなかった。

「わが殿の仰せられるには、両家の結びつきにより、戦さのことは水に流して、駿河遠江に安らぎを齎せたいとのこと。この段、御承諾あるや否や、御返答、承りたい」

八歳の子供に、結婚の意志も判断もない。すべては親元で決定されて、子供たちは、その言いなりになるしかないのだ。

「和平は望むところだが、婚姻のことは、早急には返事できぬ。立ち帰って待て」

これは当然の返事だった。

「では、明日までに」

「明日になるか、明後日になるか評定の結果はわからぬ」

新九郎は突っ放した。そうそう範満の言いなりになって

はおれぬ。

酒井は不満げな顔で馬首をかえした。

むろん、これは正式の申し込みではない。和平のための提案にすぎない。新九郎たちは、早速、北川どのを中心にして相談した。

「範満の提案には、うかと乗れまいぞ」

「なにせ、狸じゃ、用心してかからねば」

心配する者が多い。新九郎も頭から信じはしない。

「北川どのの御意向を伺ってからだ」

北川どのは、この話に、はじめから期待をつないでいたようである。

「寿々女どのならば」と、疑いもせずに言った。「この縁談は、悪くないように思いますが」

「話に裏がなければ」新九郎は、女心の弱さに、失望を感じながら、「範満という男が、信頼できぬ以上、かような話を、字義通りにはうけとれぬ」

「……」

「目くらまし人形というやつだな」

「ほう、何かの、それは」

と膝を乗り出した男がある。

「京で見たことがある。目くらましの人形よ。人形のくせに、ものを言う」

「奇妙な」

「なんの、仕掛けがある。こやつ横をむいて、人の持ち物をあてうしろをむいて、人の懐中から金を抜きとる」

「左様なことが出来るか」

「だから、仕掛けだというている。人形がものをいうのではない、人形を操っておる男が、ものを言う」

「すりゃ、誰の目にもわかろうものを」

「いや、腹でものを言う方法がある。口を動かさずにな、腹で声を出すのじゃ」

「ふーん、左様なことができるものか」

「練習しだいだよ。足の指で折鶴を折る奴を知っている」

「はははは、足の指で女を喜ばせることも難しくないさ」

笑いかけた者も、北川どのの顔を見て、あわてて、口をつぐんだ。

「ともあれ、範満は信頼できぬ。彼奴の提案には、裏があるとしか思われぬ」

新九郎が、こう言えば、たいてい、北川どのは、意見をおさめるのだが、今度ばかりは強硬だった。竜王丸のことでは、人が違ってくるのか。

「ともあれ、これは、輿入れの話ですから」

「……」

「範満どのも、まさか、かようなことまでに、謀略化することはありますまい」

「いや、それは……」

「噂では、沓谷でも、随分と、この戦さに嫌気がさして、逃散する者が増えているというではありませぬか」

それは事実だった。

「しかしながら、それゆえにこそ範満めは、かような策を弄してことを急ぐのではないかと思われるが」

新九郎の言葉に頷く者も多かったが、北川どのは、退かなかった。

「このままでは、府中が、家はみな焼け、野原となって死骸ばかりの恐ろしいところとなってしまいます」

「……」

「和睦したいと申すなら、それが一番でありませぬか」

こう母親の感情をむきだされると、新九郎たちは、何も言えなくなる。

「話を進めて下され。和子を立てるという一条を否まぬよう、念をおして」

竜王丸のためには、北川どのもただ一箇の母親となってしまう。

むろん今川の家を立てることに力を尽くしていることになるのだが、その理性とは別に、わが子の婚姻という常の女親の感情に動かされるのは、しかたがない。

それからの北川どのは、浮き浮きして見えた。

守護大名という格式は、故実典礼と切り離せない。況や婚姻などとなると、面倒なことが多い。そのわずらわしさがまた楽しみともされるし、権威ともされるのだから大変だった。

刀はおさめたわけではない。新九郎の考えで足軽の配置などはそのままにしているし、警戒は怠らない。

今日から見ると、当時は、〝戦国時代〟であり、〝乱世〟にちがいない。

が、その渦中にいる人々にとっては、その状態は、大して異常とは感じられない。時代としては、まだ戦乱の世に入ったばかりだがそれまでの平和といっても、まるきり泰平だったわけではない。

地域的な戦争や、親子兄弟の間での勢力争いなども常に行われていたのだ。ただ、大か小かの違いで、五十歩百歩だった。

常に緊張を弛めることはできないし、弛緩は敵の狙い目になる。冠婚葬祭が、武装のもとに行われるということは、当り前のことだったのである。

守護大名としての勢威のためにもしかし、祝宴は大規模に行われることになった。吉日が選ばれた。輿入れの日は丁度、屋形の桜が満開で今川家の慶事を祝ってくれているようであった。

鹿柴や濠はそのままだし、柵も固く結えたままの中での祝い事だったが、

「これで、戦さは終るにちがいない」

と、安易に考える者が尠なくなかった。そう考えたい心境に誰もがなっていたのである。殊に、戦火をもろに蒙る民衆はそうだった。

「だいたい、御家中で、いがみ合うのが間違いですて」「もともと御一家なんじゃからのう」「膝つき合わせて談合すりゃ何とでもなろうものを」「戦さがあっては、わしら、一文の得にもならんでの」

善良で弱い人々は、そう話し合った。

慶事には、罪囚が大赦になるし、大振舞いがある。それを目あてに、民衆が集まってくる。

屋形の中には、幔幕を張り、輿入れ行列を迎える準備の支度に余念がなかった。

（大丈夫か？　この縁談は）

新九郎は、まだ疑念を霽(は)らさない。

（油断をすると、大変なことになる）

新五郎範満という男、どこまで腹黒いかわからぬ。尋常な智謀ではない。その申し出でをうのみにするわけにはいかないのだ。

「万一ということがある」と、新九郎は、大道寺たちへ念を押した。「怪しいそぶりが見えたら、すぐに和子（竜王丸）を守れ。婚儀など気にすることはない。式などどうなっても御身を守るほうが大事なのだぞ」

新九郎は、この段階になってもまだ、範満を信用していない。いや、その時が近づくほど、不安と危惧が強くなっている。

沓谷の方の様子を捜らせると、向うでは、輿入れの準備に余念がないという。

屋形の空気も、浮き浮きしたもので、みんなこの婚姻で、双方の確執が解け、また以前の平和が甦ると信じているようだとのことであった。

「どこを見てきたのだ」新九郎は透破の余一という男の言葉を頭から信じる気になれなかった。「まことか、それは」

「はい、私めには、そうとしか見えませせなんだが」

「裏がある、裏が」

範満の性質を考えると、信じられない。

一歩を譲って、和睦を望んでいるとしても、それは表面的なことだ。心から、この婚儀の成立を悦んでいるとは思えない。

「きさまは、それでも、透破として、ひとり前の眼があるつもりか」

「これまで、見あやまりはござりませぬ」

むっとしたように、余一は顔をあげた。

片膝ついて、敬意を表しているような姿も、かたちばかりで、内心は、新九郎を新参者として軽んじているのだろう。

今川家に飼われている透破の一人である。他の重臣たち

は、この男が、確かなワザを持っているといい、特に足の速さ、跳躍のワザ、夜目遠目など、常人の遠く及ばないところだと激賞している。

だが、新九郎には、どうも全幅の信頼がおけない気がする。（あの伊賀ノ太郎のほうが、忍びノ者としては、ワザも上であろうが）

より卓抜な者を知っているだけに、余一が拙なく見えるというのではない。それもあろうが、人間的に溶け合える部分が、この男には欠けているようであった。

「わかった。式は明日だ。もう一度、最後のサグリを入れて来い」

追いやってから、

「黒丸」

と、呼んだ。

庭前に巨大な老松がある。黒丸はその梢にいた。枝から枝へ飛び移ると、下枝から、ひらりと、地面におりてきた。身軽い。松葉がはらはらと落ちてきた。

「頼みがある」新九郎は、声を低めた。「――寿々女のことが案じられる」

「…………」

「さぐって来てくれぬか」

「――沓谷かい」

「そうだ」

「いいよ」

「危険だぞ、安易に考えてはならぬ」

「大丈夫さ」

「見つかれば、いのちはない。危ないと思うたら、外からでよい」

「うん。おれは逃げるのは早いから」

「見くびるな。甘く見てはならぬ、たとえ内部に入らなくても、出入りの商人などから様子を聞き出すだけでもよい」

「わかった」

「寿々女の輿入れに怪しいことがないかどうか、それを見てくるのだ」

黒丸は眼をくるくるまわして、走り去った。

沓谷の範満屋形では、庭前に夥しい輿入れの荷物が揃えられていた。次々と牛が曳かれてき、その背には、米俵や積荷が乗せられたり、支度に大童だった。

長持が二十幾棹、唐櫃も三十数領、ところ狭しとばかりに並んでいる。これはいずれも、長柄がさしこまれて四人もしくは六人で担ぐのである。

「大変な輿入れ道具じゃわ」「やっぱり新五郎さまの御威勢は大したものじゃて」「これだけのもの貰うたなれば、わしらの小屋なら潰れてしまうわいな」「何ほざく、わいらの小屋なんど厨子棚一つで、ひっ傾くくせに偉そに吐か

すない」

門前に集まった町衆や近在の農民などが珍しげにのぞきこんではがやがや言っている。

黒丸は、その連中の足の間から顔をだした。様子をさぐって来いといわれても、これは漠然としているのだ。

婚儀の次第などわかりようもないし、したがって、正常と異常の差がどんなところかもわからない。少年の眼では、リアルな判断ではなく、感覚的に、不審を嗅ぎとるしかない。

表面的には、しかし、不審な点はなかった。余一の報告も、嘘を構えているわけではないらしい。

「明朝、夜明けとともに行列してゆくのだからな、今夜中に整えておかねばならぬぞ」

八ノ字髭の武士が、大声で命令してまわっている。

輿入れを早朝に、と決めたのは夜闇にまぎれて乱波が侵入することを避けるためであった。

範満を信じない新九郎の、用心の一つである。少なくとも、白昼の行事には、つけ入る悪の手が、狭くなる。夜と闇こそ、悪の跳梁を許すものだからだ。

宵闇が、あたりをひたして、篝りに火が点じられた。

竜王丸のお屋形のほうとは違って、こちらは、武装した雑兵たちの数は少なく、濠にかけたはね橋を守っているくらいで、鹿柴や柵があるにしても、戦さのものものしい様相は感じられない。

敢て、それを避け、和睦の輿入れという、祝事に酔っているように見える。客観的には、したがって、範満に悪心があるなど、考えられない浮れぶりだった。芳醇な酒の香が、宵闇の中に漂っている。

「指樽(さしだる)は全部揃ったか」

「はい、美酒百樽、これだけ並びますると、蓋をしめていてもいい匂いでございますな」

「いまから、咽喉を鳴らせるやつがあるか」

「祝宴は、明夜だ」

「はっ……」

「明夜は、浴びるほど飲ませてやる」

「酒の海に溺れてみたいもので」

そんな会話も、他愛ないものに聞えたことである。

「はて、唐櫃が一つ足りぬようだぞ」目録と見比べて数を確認していた男が、頓狂な声をだした。「あわてるな、まだ、奥にある」

「あ、花嫁のへやか」

「衣裳をな」

「衣裳を入れるのか」

「錦や金銀ぬいとりのな、綺麗なものだ」

「…………」

「まず、あちらへ運びこんでから、披露する。蓋をあけて、

見せるわけだ」
　黒丸は、篝火の明りをさけて、暗がりに溶け、屋形のうちに忍びこんでいた。無性に、寿々女に逢いたくなっていた。
（寿々女は和子の嫁御寮になってうれしいのかしら）
　黒丸は、まだ少年なのだ。寿々女との舟山での二人きりの毎日は、兄と妹のような感情を芽生えさせている。浮浪児として早熟な黒丸は、男と女がどういうことをするか、婚姻とはどういうものか、むろん、知っていた。だが、寿々女の幼さが黒丸をそれ以上、大人の感情に近づけなかったのである。
　あれだけ二人きりの暮しではあったが、仲の良い兄妹以上のものではない。いや、それだからこそ黒丸は寿々女を奪われたことが悲しかった。
（――助け出したい）
　が、竜王丸の正室に迎えられるのは、寿々女にとって、うれしいことかもしれない。少年の黒丸にも、それくらいの分別はある。
　今川家の直統たる竜王丸の権威と華麗な生活ぶりは、浮浪児の眼から見れば、極楽だった。その富貴のなかに、寿々女が入ってゆけるとしたら、
（舟山なんかで、おれと一緒に遊んでいるよりもいいからなあ）
　黒丸はそう思うのだった。
　屋形の中に入ってゆくと、開放的に浮れているように見えるが、意外なところに眼が光っていた。
　誰もいないと思った小部屋や、衝立のかげに、人がいた。
「用心を怠るまいぞ」こう言った声は、範満だった。「忍びが入ってきていよう」
「まさか」
「そのまさかが、命とりになる」
「……」
「すでに忍びノ者が入って来ていると思うたほうがよい」
「はあ」
「口に気をつけるのだ、うかとしたことを申さぬようにな」
「それは、心得ております」
「気を弛めるな。気が弛めば、口が軽くなる」
　なぜ、範満が、そこまで気を配っているのか。
　寿々女が、竜王丸と婚姻することで、両家は和睦し、確執もとける。すなわち、これは、竜王丸を、義忠の後嗣ぎとみとめ、今川家を継承させることを意味する。
　もともと、その継承に反対したことが、戦火の原因なのだから、竜王丸を立てれば、平和がくるわけだ。それなら、範満が、ここまで用心深くなることは、何もないはずであった。さぐられても、隠すものがなければ、びくびくする

ことはない。一体、何を警戒しているのか。黒丸にも、その辺のことはわかる。
（変なやつ）と、思った。
　明るい灯台のもとで寿々女は、丁度、さまざまな小袖のためし着をさせられているところであった。あわただしい婚儀で、漸く間にあったというふうで、そこら中に衣裳がひろげられていた。
　眩い光を放つ金糸銀糸のぬいとりのある打掛や、摺箔や、錦襴や、派手な模様の小袖などが、あるいは衣桁にかけられ、あるいは、寿々女の肩に着せかけ、あるいは、もうためし着が済んだものか、侍女たちの手で折りたたまれたりしていた。
（ああ、寿々女……）
　黒丸は、屛風のかげから、彼女を見、とびだして抱きしめてやりたい感情を、必死におさえている。
　黒丸が金屛風のかげに潜んでいるとは知らず、
「寿々女よ」と、範満は、にこやかに入ってきて、「うれしいか、明朝は、そなたの輿入れだ」
「……」
「これ、うれしいかと聞いておるのだ」
「――はい」
「はははは、うれしいはずだな、守護大名たる今川家の正室になるのだからな。はははは、うれしくば、笑うがいい」
「……」
「これ、何とした。笑え」
「はい」
　寿々女は、微笑した。口のあたりだけである。そのつぶらな瞳は、少女なのに冷たいほど冴えて範満を見守っている。
（こやつが！）小便くさい娘のくせに、何を考えているのか。
　範満はどなりつけたい思いで、表情が、けわしくなりかけたのを、はははと、また馬鹿笑いでまぎらした。
「女は愛嬌だぞ」
「……」
「神代のむかしからな、アメノウズメノミコトなどはな、裸で舞い踊り、ためにこの世に光がさした。わかるか」
「……」
「わからぬか。なに、わかるようになるさ、間もなくな、女の肌は男を喜ばせるものじゃ」
　範満は舐めるような視線を、寿々女の胸のあたりに這わせた。寿々女の胸は、まだ、ふくらみというほどのものはない。
（あと一、二年で……）と、範満は、おのれの好色癖に言い聞かせた。（初ものは、おれが愉しむ）
　それまで、寿々女のからだには手を触れさせぬ。

（誰にも、だ）範満は舌なめずりをした。（竜王丸にも、だ）

そして、にたりと、奇妙な笑いに頬を崩した。

黒丸はその表情を盗み見ながら真意を探りかねていた。少年には、そのシニカルな笑いの裏は見ぬけない。

範満が立ち去ったあと、侍女たちは、その豪奢な衣裳を唐櫃へ蔵った。

「では、明日が早うございますから、お寝（よ）りなされますよう」

夜具がのべられて、寿々女は侍女らの言いなりに、身を横たえた。灯火も細くして、侍女たちは退っていった。黒丸が待っていたのは、そのときである。だが、一人になったのではない。乳母になった女が、残った。

（あいつ、いつまでいるのか）

黒丸はいらいらしてきた。

（早く出ていけばいいのに）

黒丸が金屏風のかげで待っているとは、むろん知らぬ。その中年女は、寿々女が寝つくまで見守っているのだ。

（ちぇっ、しようがねえ、おらも一眠りするか）

黒丸は金屏風のかげで横になった。六曲屏風だから、黒丸が横になっても、足は出ない。うとうとと、しかけたとき、衣ずれの音が起った。その女が漸く出てゆくらしい。

（しめしめ……）黒丸は屏風からのぞいた。仄明りのもとに、寿々女は、すやすやと寝入っている。明日が婚儀といっても、八歳の少女には、年ごろの女が感じるような、期待や喜びはないのであろう。

小さな胸には不安があるにちがいないが、それとても、おとめが女になる儀式というような肉体的なものではない。

性的には早熟ではあったが、八歳といえば、まだ子供だ。十三や十四になると、すぐに女になる。その間のひらきが、精神的にも肉体的にも大きいのだ。

ある意味では寿々女は、少女ながらあきらめがよくなっている。小さいうちから人質に他国にやられて、それこそ、心細い思いをした。どれくらい淋しさのあまり泣いたことだろう。その淋しさにも耐えることが出来るようになってからも、運命の非情を見た。幼いながらも、人生の冷酷さを経験し、諦めるしかないことを知ったのだ。

新九郎に助けられ、舟山で黒丸とののびのびした生活に、少女の喜びをとりもどしたが、それも東雲之助の奸策にあって、沓谷の屋敷で、軟禁されるようになっている。

（もう黒丸さんにもあえない）

それが寿々女の運命なのだろうか。運命という字や言葉は知らなくても、格子なき檻の実感はある。

寿々女は、もう泣いたり、騒いだりしなかった。この屋敷の人々の言いなりになるだけだった。

逃げ出すことも考えないではなかったが、袖をつかまん

ばかりにして、いつも見張られている。逃げても無駄なのだ。寿々女自身の意志に耳をかすどころではない。範満にとって、ただ、女童（めわらべ）人形でしかない。

そして、突然、輿入れのことを聞いた。それは命令というかたちだった。寿々女には、否も応もない。

「嫁（ゆ）くのじゃいな」

強く、駄目をおすように言われて

「はい」

と、ただ頷いた。幼い身の輿入れが何をするものかは知らない。

寿々女は、夢を見ている。夢の中に黒丸の笑顔があった。

「寿々女……おらだよ」

黒丸の声をうつつに聞いた。

夢を見ているのだと思った。

（黒丸ちゃんが、あたしを迎えに来てくれた……）

そんなことは、夢の中でしかあり得ない。でも、夢でもいい、黒丸とあえたのが、うれしい、と寿々女は、黒丸の名を呼んだ。

が、呼んだつもりが、声にならなかった。なぜだろう。

寿々女は、あせった。ううう、と、呻きをあげていた。

（うなされている）

と、黒丸のほうでは、そんな寿々女を心配そうに見やって、

「寿々女」と、また低い声で呼びかけていた。

「おらだよ、黒丸だよ」

「…………」

「黒丸が来たんだよ、寿々女」

そろそろと近よった。声を大きくすると、へやの外に洩れる。近くのへやに侍女がいるはずだった。

枕元へ近よると、そっと夜具の肩に手をふれた。

「――おらだ、黒丸だ」耳もとで言った。

漸く、寿々女は、眼ざめた。ぱちっと眼をあけて、あっと、驚きの声を洩らした。

あわてて、その唇をおさえて、

「叱ッ、声をたてちゃいけない」

うん、と素直に、寿々女は、頷く。

「お屋形の若君のところへ、お嫁に行くんだって」

「うん」

「いやだな」黒丸は歯に衣着せない。はっきりと言った。

「おれ、いやだなあ」

「寿々女も」

と、同じように、少女は言った。

「いやよ……でも」しかたがないもの、と言おうとして、黒丸の淋しそうな顔を見ると、その言葉が口にできなかった。

「かんにんね」

「うん、おれ……」
助けに来た、と言いかけた。
が、考えてみると、そうではない。そんな余計なことをしたら、新九郎に叱られてしまう。黒丸は、ただ様子をさぐってくるように、言いつけられてきただけなのだ。
「いやだけど」と、妥協点を見つけたように、黒丸は微笑した。「ほかのところへ行くんじゃないからね」
「……」
「お屋形だから」
「ええ」
「おれ、守ってやるよ」
誰から守るというのか。竜王丸から守るというのか。寿々女は竜王丸を嫌いというわけではないのだ。
もっとも、竜王丸の顔は何度か見た記憶がある。同じ歳だから、遊び相手にいいわけだが、向うは義忠という太守のたった一人の嫡男だから、立場は対等ではない。いうならば、好きでも嫌いでもない相手だった。
いや、どちらかというと、寿々女は、竜王丸を好きなのではないか。
それは他愛ない、夢にすぎないが、立場の違いは、幼心にもわかっていながら、凛々しい少年——その貴族性への憧れがあったはずだ。少女は夢が多い。きらびやかな衣裳や、多勢の家来や侍女に守られた存在、そのものへ憧れを抱く。
寿々女も、人質になってゆく前は、普通の少女のそんな感情を人並みに持っていた。そのことから見ると、好きなほうに入るだろう。
だが、命がけの危険をおかして、逢いに来てくれた黒丸に、竜王丸のことを、
（好き）
とは、言えない。
長い間の人質の悲しみや苦しみが、寿々女を、そういう意味では大人にしている。八歳といえば少女にちがいないが、それを口にしたとき、黒丸が、どんなにしょげかえるかも、わかっていた。
範満たちが、勝手に彼女を娶合わすという、その大人の都合だけで、猫か品物のように、やったりとったりする、それに反撥することも抗議することもできない弱い身が、
（きらい！）
と、叫ばせたにすぎない。
しかし、黒丸は単純にその言葉を、竜王丸に対する好悪の感情と受けとった。
浮浪児と守護大名の子と。このあまりにも隔たった身分の差は、楽天的で明るい黒丸をも、無心にはしない。
（生れが違うんだから）と、口では言っても、腹の中では、（ちくしょう、なんだい！）と、反駁したいものがある。

年齢がいくらも違わないだけにその気持が強い。
（喧嘩なら、あんな青瓢箪に負けやしねえ）
少年のうちから、男には、その根性がある。
大好きな寿々女が、その竜王丸に輿入れすると聞いて、もっともショックを受けたのは、黒丸にちがいない。
この屋形に侵入してきた目的はほかにあったのに、（ここに寿々女がいる）と、思うと矢も楯もたまらなくなって、忍び入ってきたほどなのだ。
「ここでは、難しいけど、お屋形なら、逃げたいときに逃げられるから」
黒丸はそのときこそおいらの腕の見せどころだと鼻をこすった。
「泣くんじゃないよ、寿々女」
と、手を握ったとき、さやさやと、衣ずれの音が聞えた。
「あっ、誰かくる」
黒丸はあわてて、へやの隅に走り寄った。唐櫃の蓋があけたままになっている。その華美な衣裳の下へもぐりこんだ。

花曇り、というのか、一面に空は雲に蔽われていたが、その雲のうしろから、ぼんやりと陽がさして、気温の高い日だった。
寿々女は手輿の上から、沿道の群集を見ていた。
自分が小鹿新五郎範満の養い女として、今川竜王丸のところに輿入れするという運命の変化に身をまかせているだけだった。
〝嫁入り〟
というような実感はない。まだ少女だったし、すべては、周囲で勝手に決めたことだった。その意味では人形にすぎない。その輿入れの意味も知らない。まるきり、彼女の意志は反映されていないのだ。
だが、寿々女は、もの心ついて以来、自分の意志で動いたことがあるだろうか。いつも、誰かの意志で動かされていた。彼女にとって人生とは、そういうものだった。流されてゆくだけでしかない。
八歳の少女が、自分の意志で人生を生きるには、戦国の世は非情にすぎた。
「——ほう、なんとまあ、可愛らしい」「人形のようじゃわえ」「あれで花嫁かの、なんと若すぎるがのう」「そういえば、可哀想だわのう」「なにが。お屋形の嫁御寮になるのじゃないかい、大した出世だわい」「ほんにのう、わしらでも、なれるものなら、なりたいわ」「へえ、お婆の嫁くところは、閻魔さまのところじゃねえか」
群集にとっては、面白い観物であろう。
行列は、花曇りの空の下を延々と長蛇をなして、進んでいった。足軽たちは槍を持ち、小具足に身を固めて、武装

はしているが、それは格式としてのことだけで、戦闘態勢ではない。

その行列はあくまでも、平和で華麗な花嫁行列と見えた。侍女たちの優雅な姿も、沿道の目を楽しませてくれたし、何よりも、牛馬の背にある品々や多勢の人足に担がせた長持、唐櫃の夥しさだった。

「あの中には何が入っているのかのう」「さぞ、金銀がどっさり入っていることじゃろ」「衣裳がなあ、目もさめるばかりの金糸銀糸の縫いとりに、花染め、摺箔、綾織りなど、そらもう大変なものじゃ」「何じゃい、見て来たような顔をして、あれは高蒔絵や螺鈿の道具類であろうがな」

それぞれ想像を逞しくしてざわめいている。その一つには、衣裳とともに、黒丸がひそんでいるのを知っているのは、寿々女だけであった。

(大丈夫かしら、黒丸ちゃんは、息が苦しくないかしら)

行列が平和な姿を保っていたのは、しかし、今川屋形に到着して、長持、唐櫃を、奥庭にずらりと並べるまでであった。

風習で、花嫁持参の品々は、衣裳でも道具でも、庭や縁側に並べ、飾り立てることになっている。むろん、室町時代の、この武家作法は、それ自体がすでに、猜疑から出発している。

披露するといえば、いかにも微笑ましい風景だが、その実は、一切の秘密を蔵していないことを証明しているわけだ。手のうちをさらけ出す。そうすることで、他意ないことを示す。

夥しい長持や唐櫃が据えられたのを、北川どのは満足そうに眺めやった。欲目からではない。その贈り物の多いことは、それだけ、竜王丸への尊敬の念をあらわしている証拠だ。

やはり女なのだ、北川どのは単純に受けとった。

「さあ、御披露に及ぶがよいぞ」

範満は満面に笑みを湛えて配下に命じた。足軽どもは、長持や唐櫃の蔽いを剥いで、蓋に手をかけた。

そのときだ。突然、唐櫃の一つが、蓋を吹き上げたのである。一瞬吹き上ったように見えた。と、同時に、ぴょんと、人間が飛びだした。

全く、唐突だった。誰もが、一瞬、息を呑んだ。その人間が、少年だとわかったのは、素早く、多勢の主客のなかから、新九郎を見出して、名を呼びながら走り寄ったからである。

「新九郎さま、御用心!」

少年のかん高い声が、花曇りの空のもとに異様にひびいた。

「罠だよう、長持の中は、侍で一ぱいだよう」

いうまでもなく、これは黒丸だったのである。

「わなだよう」はっきりと、黒丸は叫んでいる。「はかりごとだよう、新九郎さま」

さては。もっとも懸念していたことが起ったのだ。新九郎は瞬後に、抜刀すると、

「出合え、槍をとれ、弓矢をつがえよ」

大音声に喚いて、範満の方へ走りだした。

大道寺太郎たちも、その姿を見て、手に手に刀を抜き放つと、

「やはり、思うた通りの奸策じゃ、抜かるな」

「和子と北川どのを守れ」

あらかじめ、手はずはととのっていたのである。

山中才四郎と荒木兵庫が、竜王丸に駈けよる。兵庫が抱きあげる。才四郎が傍へついて駈け出す。

北川どのを守るのは荒川又次郎と在竹兵衛。殿りを大道寺太郎が受け持った。

侍女たちが悲鳴をあげて、逃げ惑うのを叱咤して、北川どのと竜王丸の傍から離れるなと叫びながら屋形の奥へ——裏口へと走った。

その間に、長持や唐櫃の蓋をはねて、武装の軍勢が蝗のように飛びだしていた。

夥しい長持や唐櫃は、竜王丸に敬意を表しての花嫁道具ではなかった。

それどころか、北川どのと竜王丸を弑逆するための刺客をひそませたものだった。

唐櫃の中にいた者は、打ち刀を閃めかして飛びだし、長持の中の者は短槍をかいこみ、あるいは弓矢をつかんで出てきた。

小具足に身を固め、この〝時〟を待って潜んでいた連中である。

打ち刀をふりかぶって駈け寄る者、短槍をひねって突きかかる者。弓に矢をつがえて、今川の屋形侍へきって放つ者。

「やったぞ、勝ったぞ、今川の天下はわしのものだぞ」

喜びのあまり、うつつに範満は叫んでいる。

「降人は許す、降人は一命を助けてやる。刀を捨てろ」

範満としては一世一代の謀略である。

すでに幾度かめぐらしたはかりごとが、そのたびに失敗したのだ。こんどこそ、と範満は成功を確信していた。北川どのの母性が、竜王丸のこととなると、甘くなるのを見抜いている。

(寿々女という幼児を娶合わせるという祝いごとに、まさか範満どのが)

祝い事をむざんに蹂躙してまで虚に乗じることはあるまい、と北川どのは考えた。

それが如何に甘かったことか。女の頭では〝祝い事〟は、すでにして犯すべからざること、という認識がある。

が、野望を抱く者にとって慶事も凶事もない。もとより、戦さに勝つために考えだした〝結婚〟である。はじめから祝い事は偽装であり蹂躙は予定の行動だったのだ。

「射よ、矢のあるかぎり、射たてよ、刃向う者を射仆せ」

範満も抜刀はしたが、もとより新九郎とまともに太刀打ちする気はない。

直垂の袖をしぼり、あるいは素襖の袖をたくしあげて、手早く、たすきをかける者もいる。それより早く、斬りこんでゆく者もいた。

侍烏帽子をかむったままの頭頂から血を噴かしてぶっ倒れる屋形侍や、矢に射られて廻廊から転げ落ちる者もいた。

「北川どのを逃がすな、竜王丸を是が非でも討ちとるのじゃ」範満は声を涸らして、「竜王丸の首をあげた者には、恩賞を与うるぞ、城持ちにしてくれるぞ、はげめや」

だが、それに応えるには、新九郎の股肱のほうが素早かった。範満の視界から、北川どのと竜王丸はすでに消えている。

「追え、追え、本尊を逃がして雑魚どもを討っても、何ほどのことはない」

そここにはげしい剣戟が起っている。血がしぶき、悲鳴がつんざき、花曇りの下の祝賀の宴は、一転して血の修羅場となっていた。

北川どの母子の脱出を知った屋形侍たちも支えるよりは、お供を、と、逃げだした者が多く、凄まじい斬り合いは屋形の外へ流れ出ていた。

（屋形を捨てる！）

もとより、新九郎には、未練はなかった。

この屋形で生れた竜王丸と、その母なる北川どのが、屋形を捨てた以上、新九郎たちが死守する意味はなかった。

あらかじめ、こうしたことを慮って、重代の財宝などは、ひそかにあるところへ運ばせて置いてある。

金銀から、太刀や香炉や唐渡りの壺、什器などで、今川家の財宝のそれは、五分の一にも満たないものであったが、何もしないよりは、やった甲斐があった。

竜王丸の祝事とあれば、屏風や棚や什器など、調度の必要性が、多くの物を持ち出させなかった。あくまでも、虚心を装っていなければならなかったからである。

血の腥い匂いと、死傷者を邸内に残して、争闘は屋形の外へ移っていた。

（賤機山へ逃げるにちがいない）

と、はじめ範満は北川どの母子の退路を、そう考えていた。きわめて常識的である。

ところが、北川どのたちが走ったのは、山への道ではなく、西南へ——安倍川へ向ったらしい。

賤機山は今川屋形の西北に屏風を立てたように聳えている丘陵で、山城がある。城籠りするには最適であった。

先般も、ここを押えんとして、遠く北方に迂回して尾根伝いに来た東雲之助と配下が一たんは占拠したが、新九郎らに追われている。

安倍川の川岸には、万一の際の渡し舟が用意してあった。北川どの母子はこれに乗り込むことができた。

それにしても、新九郎の唯一の失敗は、この長持作戦を予測できなかったことであった。

やるとすれば、供奉の人数が抜刀して、内応の火ノ手をあげる。それに呼応して待機した軍勢が、攻め寄せる——そういう方法をとるものと思った。

備えとして、目立たぬように外郭の防柵を堅固にし、雑兵の配置にも留意した。

近傍の家々にも三人五人と潜ませるというふうに疎漏はなかったはずだが、内部に多勢の敵に入りこまれたのは、たしかに、予測外のことだった。

何よりも、北川どの母子が、戦闘に耐えられない弱さなのだ。それが負い目になっている。太刀打ちするよりも、二人の安全を計ることが優先した。

（一時、屋形を捨てるのも……）しかたはない、と、思った。

竜王丸の幼さは、盟主と仰ぐには、この力の時代にあまりにも無力だし、北川どのはもろすぎる。

河原では凄まじい合戦が行われていた。雲がうすれ、うす陽がさしてきて漸く川波が光を反射すなかで、閃々と刃がきらめき、怒号と罵声と叫喚が渦巻いていた。

「屋形はすでに、われらが奪ったぞ」

範満の軍勢は、意気軒昂たるものがあった。北川どの母子が、屋形を捨てて逃げたことが、すでにして、この奇襲戦の勝利を明確なものにしている。

屋形の占拠だけが目的ではない。北川どのこと夢子と、竜王丸を殺す。そうしなければ、範満は安心できなかった。そのための偽りの婚儀であり、奇襲であったのだ。

母子の逃走を助けるように屋形を捨て、西へ走ると、範満の軍勢は、餓えた狼の群れのように、追いすがってきた。

「逃がすな、竜王丸を討ちとれ」「北川どのを討ちとれば、恩賞が貰えるぞ」その欲望が、かれらを盲目的にした。

雑兵たちにとっては、名誉も誇りもない。武士という気持もなかった。敵を斬れば銭になる。ただそれだけだった。首幾つで銭何貫、という報酬だけが、すべてなのだ。したがって雑兵などは、その行為と報酬の関係から見ればただの夜盗、殺し屋と変りはない。

武士は武士であることの誇りが行動を制馭し、美化するのに比べて、かれらは、ただ生きるための糧にしていた。敵を殺すことが生業なのである。

その連中だけに、容赦はなかった。野獣さながらに歯を剝き、眼を光らせ、咽喉を鳴らせて斬りこんでゆく。

逃げる敵を討つのは、まるで、鹿狩りや兎狩りの愉しさを与える。浮足立った敵には、すでに、十の力の半分も出せないのである。四か三になってしまう。そこに戦さの持つ異常さがあった。

「首をとるまじ、首掻くひまがあったら、一人でも敵を討て、殺せ」

範満の腹心たちは、こう大声に督励して、馬を駈った。

もとより、おのれの功の証しには、耳か鼻を削いでおけばよいのである。手づかみで、その血まみれの肉片を鎧の内に入れたり、腰に下げた皮袋につっこむ。

手も顔も血どろであった。戦場馴れした者は、この血の異臭と、剣戟や叫喚や悲鳴や馬蹄の音……それらの修羅場の響きによって、一層、昂揚するという。

安倍川の河原は、その殺戮の場となった。

優劣の差が判然としたとき、もはやその戦さは、殺戮と呼ぶしかなかった。強い方は一弾指ごとに、強大になり、弱い方は、一人減るごとに劣勢化する。

兜が飛び、腕が落ち、血まみれとなった死体が河原に転がり、負傷者が救いをもとめて這いまわった。血は河原から川へ流れ落ち、安倍川はために真紅となって、渦巻き流れた。

いわゆる国の境いや領土の境いをなすものは、山の峰や川である。この区切りは、古来からの人間の智慧だった。

安倍川を越えたところで、新九郎は立ち止っている。

「この川を越えさせるな」

川を越せなかった者は見捨てるしかなかった。恋々たる気持は弱さになり大勢を見誤ることになる。川の対岸に新九郎は敗兵をまとめた。

「弓の者は、川岸に楯を並べよ、槍の者は、松林に待機せい」

同時に川岸に枯枝を積み、火を点じさせた。これは火矢にするためであった。

向う岸の殺戮を逃れて、川を泳ぎ渡り、漸くたどりついた者たちが、河原であえいでいる。

騎馬の者は早く渡りきっている。北川どの母子や侍女たちを乗せてきた小舟を、ふたたび、府中の岸に漕ぎ戻すのは、もはや出来なかった。

敵はすでに、小舟をかり集めてきて、追跡に移ろうとしている。舟は足りないから、騎馬の者は馬を乗り入れようとしている。

波と水の深さを嫌った馬が、馬首をあげて拒むのを、鞭打ち、馬腹を蹴って乗り入れさせようとする。対岸からの距離では、弓勢は劣える。川の上は風が強いのである。

「中ほどまで引き寄せてから、射て」

新九郎は命じた。

騎馬が数十騎、咆吼をあげながら、川を横切ってきた。

「まだだ、はやまるな。よく狙っていろ、合図するまで待て」

楯を並べて、大きく足を踏んばり、弓をひきしぼった弓組は、ひたと武者の内かぶとに、矢尻の狙いをつけた。

前にも述べたように、当時の川は水かさも多く、流れも早い。これを乗り切るには、かなりの乗馬の技術が要る。

ざわざわと、波を騒がせて、乗り越えようとする騎馬武者たち。それを援護するように、血どろの河原から、こちらの岸へ向って数十の矢が飛んできた。

ばらばらっと、楯や木の幹に当り、河原石の上を滑ったり、石の間に突き刺さったりした。これはさすがに、風に流され、勢いを弱めていて、避けるのに難くはないのである。

「よし、いまだ、射よ」

新九郎の大音声とともに、一せいに河原の風が唸りをあげた。凄まじい弓勢であった。殺戮の報復をこめた矢は、怒りをこめて騎馬武者を襲った。

あわてて、兜をかたむけようとしたが、矢は、凄まじく、次から次と、飛来して、肩に、頸すじにあるいは腕に突き刺さった。

武者を狙った矢でも、馬を傷つけたものも尠なくない。仰天した馬は、暴れだして武者を波間に投げ出す。引きかえそうと馬首をむけなおすその背の押板に矢が突っ立って武者たちは動転した。

機をそらさない新九郎の命令で弓組が放った矢は、追走の騎馬武者たちを混乱させた。

仕寄りの外側に、家陰や林の中などに待機させていた騎馬隊である。その馬蹄で屋形の内外を蹂躙させるべく、内応の合図とともに、飛びだしてきたのだ。

だが、北川どの母子の脱出が意外に早かったために、追走の手はずが狂った。

すでに、母子が西へ逃走と知って範満が追走を命じたときは、かれらは安倍川を渡りきっていたところだったのである。

安倍川を血に染めて、馬が流れ武者が流れた。

なまじ重い具足をまとっているだけに、水泳に自信のある者も、波に流されずるずると溺れていった。水の中では兜を捨てようにも、胴鎧を脱ごうにも、自由がきかない。

馬の巨体に押し潰されるように沈む者もいたし、泳げぬ者に足をつかまれて、引きずりこまれる者もいた。

「舟だ、舟だ、怪我人を助けろ」

河原で武将が叫んでいるが、彼我の騒ぎは、その声をかき消してしまう。漸く調達した舟に乗った雑兵たちは、板楯をふなばたに並べて、矢を防ぎながら、えっさ〳〵と漕ぎだした。

「射よ、射よ、一舟たりと近寄せるな。矢のあるかぎり、射よ」

十数艘の小舟にむかって、矢が雨のように飛んだ。
相手も舟の上から矢を放ってきた。矢と矢がうなりを生じて馳せ違い、中には宙でぶつかり、折れ合うものもあった。
何といっても、揺れる舟の上からの狙いは粗雑になる。命中率は岸辺からのもののほうが勝った。
近寄り過ぎた舟は針鼠のように矢を射立てられ、楯の隙間から中へ飛びこむ矢が、かれらを傷つけ、舟から転落する者もいた。殊に船頭は立っているだけに命中率が高い。次々と船頭が射倒されると、舟は激流に流されくるくる廻りだす。
「かえせ、これでは向う岸へ着けないぞ」
櫓を握る者も、身を起せないまま中腰で操るしかない。舟はどんどん下流へ流されてゆく。中には、海中へ飛び込んで府中側へ泳ぐ者もいた。
「油断するな、まだ、彼奴らは諦めまいぞ」
新九郎は弓隊に注意を残し、槍隊の一部を率いて北川どの母子を守って、走った。
現在でこそ安倍川は、藁科川との合流点から大きく東へ湾曲しているが、当時はもっと西河原、すなわち手越、鞠子新田のあたり一円が河底であり、僅かに渇水期に地表を見せるくらいだった。
河原石のところがあるかと思えば、沼地になって葦の生い茂っているところもある。新九郎は街道を西へ、鞠子ノ里のほうへとった。
一方、黒丸と寿々女は、この混乱に乗じて逃げだしていた。
範満にしても、寿々女はこの偽装結婚の軍略の道具にすぎなかったし、長持や唐櫃から武装兵たちが飛びだしてしまえば、もう用はなかった。
家来たちは、なおさらである。北川どのと竜王丸を捕えるか斬るかすれば、恩賞は思いのままなのだ。かれらの眼中には、黒丸や寿々女はない。
「寿々女、こっちだよ」
黒丸は寿々女の手を引いて、混乱の渦を抜けて走った。
屋形の内部ははじめてではない。
新九郎の直属の家来のつもりでいる黒丸は自由に屋形の中を行き来して馴れている。それに黒丸のような生活では、そうした勘は常人よりもはたらく。
はじめ、荒木兵庫たちは寿々女も一緒に連れてゆこうとした。新九郎に言い含められていたからだ。
鳥羽十蔵が寿々女を助けてゆこうとしたが、飛来した矢が、間を裂いた。寿々女が転んだのを、黒丸が駈けよって抱き起すと、手をひいて駈けだしたのだ。
敵味方も判別できぬほどの混乱で、怒号と血しぶきと刀の閃きと――その中を少年と少女は走った。

流れた矢が少女の黒髪を掠め、流血に足をとられて少年が転倒したりした。
「あれっ、大丈夫?」
「なあに、平気だよう」
尻もちをついた黒丸はすぐにはね起きると、傍に転がっていた刀を拾いあげ、肩に担ぐようにして走った。
「邪魔するやつがいると、おいらが斬ってやる」
幸い、二人を阻む者はなかった。
屋形の中には、北川どの母子の侍女だけではなく、男女の召使いたちが多勢いる。
小女もいれば、走り使いの童もいる。その連中が、悲鳴をあげ、あるいは誰かれを呼び合いながら、逃げまどうのにまぎれこんだからである。
屋形の内外、そこここに凄惨な殺しあいが展開され、その危険な渦の中に、わざわざ飛びこんでくる町衆も尠なくなかった。
戦乱の危険度よりも、混乱こそは、千載一遇の好機とする気持が、かれらに虎の尾を踏ませるのかもしれなかった。
「火事にならないうちに持ち出すのじゃい」「早くしねいと、火をかけられるぞ」「そうなったら、あたら財宝も灰になるわい」「金目のものから探せやい」「死人の鎧を剝ぐのはあとだ、まごまごしていると斬られるぞい」
火事場泥棒というが、これは戦さ場荒しだ。そんな連中の中に、黒丸は、知った顔を見つけた。
あの雷神うらの泥亀の配下たちである。ばかりでなく、日ごろは温和しい牛飼いや餅売りや檜物師などもまじっている。戦乱は善良な市民も狂気にするのである。
「馬を探せ、歩いていては追いつかれるぞ」
大道寺太郎は大薙刀をかいこんで、時々、背後をふりかえっている。北川どのは侍女たちに手をとられて道を進んだが、何しろ足弱なのだ。小石に躓いてはよろめき、
「危のうございます」
と、支えられて、そのまま、侍女の腕の中にもたれこもうとする。
竜王丸を背負っている荒木兵庫へ才四郎は、
「重いであろう、代ってやるぜ」
と、声をかけた。
「なんの、案じるな。それより、気をつけろ、どこに敵がいるかしれん」
範満の手が廻されているかもしれない。
それくらいはする男なのだ。それに、こうしたときは野盗たちにとってもかき入れ時だった。
西にゆけば、坂になって山中へ入ってゆく。宇津谷峠である。
野伏りは戦乱を見逃さない。今川一族の内訌はむろん、

近隣で知らぬ者はないし、機会を狙っていたはずだ。野盗にも二、三人で組んでいるだけの者もあれば、大名の手先になっている者もある。
　その場その場で、都合のいい方と手を結ぶ者もある。どちらにしろ、天下の今川家の幼君竜王丸が、戦さに敗れて落ちてゆくと知れば、誰でも、
〝好餌〟
と、感じるにちがいない。
　そういう野心も、一がいに不埒とは罵れない時代であった。
　それが乱世の偽りのない人間の姿なのだ。人は、生きるためにはどこまでも残忍非情になれるものである。
(どこへ落ちるか)
　ただ、府中(駿府)から離れればいいというものではない。
　落ちる先が問題だった。まだ駿府に来て日の浅い新九郎には、これというアテはなかった。一応逃れはしたが、これから先の落ちる先を探さねばならない。
　駿河で顔が利かないということにかけては、弟分の六人も同じことだ。かれらの方が、もっとせまい。
(どちらにしても)と、新九郎は範満の執拗な手を逃れることを考えていた。
(山を越した方がいい)
　山西へゆけば、同じ駿河でも、府中から離れた感じになる。
　安倍川という一つの区切りだけでは心配だった。古来、難所の一つに数えられている宇津谷峠を越せば、とにかく、安堵できる。
　だが、その新九郎の気持を裏切るように、
「もう一歩も歩けませぬ」と、北川どのが、悲鳴をあげたのだ。「どこか、そこらで休ませて下され、とてもにこれ以上は」
「左様な弱音を吐いては追いつかれますぞ」
　叱りつけるように言ったが夢子の顔は真っ蒼だった。
　北川どのは疲れていた。このまま宇津谷峠を越えるには、その弱い足では無理なことは、誰の目にも明らかだった。
「このあたりに、どこぞ休むところはありますまいか」
「ないこともないが……」
　新九郎は、泉ヶ谷のあの隠宅を思いだした。
　あそこなら、手足をのばせるし万一、追手が来ても、ある程度、防戦できる。塀も堅固だし、濠もあり、望楼もある。
　だが、北川どのの母子にとって、必ずしも味方とはいえないのだ。
　それに、
(不義理をしたからな)

寿々女を連れ出して、無断で逃げだしている。あの事件は、その後も、あのままになっている。小菊という細作の女に瞞されたのも一因だが、ともかく、大きな顔をしてゆけるところではなかった。
(だが、この際だからな)
　図々しく、押しかけてしまえば、それまでのことだ。
　今川家の将来を、心から案じているという一庵老人の言葉に裏がないならば北川どのの母子と聞いて門前払いを喰わされることはない。
(なあに、そのときは、力で押し入るまでのことだ)
と、心に決めた。
　新九郎は、まず、大道寺太郎を呼んで、
「鞠子の村から、少し行ったところから、右へ折れる道がある。たしか、馬頭観音があったように記憶している。丘があるからすぐわかるが、丘に沿って曲るのだ。そうすると、土塀の高い隠れ屋敷がある」
「知り人でござるか」
「知り人だが、実は、あまりいい別れ方をしていないのでな、おれの名を先に出さんほうがよかろう」
「ははあ、兄き、そこの女に手をつけたな」
「馬鹿を申せ、向うから手を出してきたのだ」
「ほう、そりゃまた面白い」
「この際だ、やむを得ん。今川竜王丸、府中の屋形を出でられて、この村を西へ参る、暫時、休息を頼みまいらせたい、とこう口上せい」
「難しいな」
「おれがおぼえた」
　と、山中才四郎が、口をはさんだ。
「よし、では二人でいってくれい」
「承知した」
　新九郎たちは鞠子の村でその吉左右を聞くことにした。
　太郎と才四郎が道を急いでいったが、二人は口上する必要もなかったのである。その丘のところまでくると、突然矢が飛んで来て、先頭の太郎の足に突っ立った。
　その小丘は地表の瘤のように、突兀として、隆起していた。丘上も側壁も雑木に蔽われ、野生の桜の樹が緑の中で一きわ美しい花の雲を漂わしていた。
　矢は、その丘のどこからか飛んできたのである。太郎がどうと転倒したのに才四郎が駈けよって、
「伏勢か？」
「おれは大丈夫だ、用心しろ」
　矢は外皮を傷つけただけらしい。
　すぐさま引き抜いて、傍の馬頭観音のかげに隠れる。二人とも抜刀した。さらに何本かの矢が、馬頭観音に当り、二人を掠めた。
「何者だ、敵か、範満の手ノ者か」

才四郎は血走った眼で、樹々の間を睨んでいるが、相手は姿をあらわさない。
　矢の飛んできた方向と、その頻度から見て、射手は少なくとも三人はいるようであった。返事はなかった。返事のかわりにまた、ぴゅぴゅっと、空に矢羽を唸らせて、つづけざまの飛矢が襲ってくる。
　その矢と矢との僅かの空間に、才四郎は、射手の姿をちらりと見た。桜の樹の下であった。
　殆ど同時に、大道寺太郎が飛びだしている。これは、桜樹へ向ったのではなく、丘の麓の一むらの灌木へ真直ぐに突進したのである。
「ゆくぞ」
　声は才四郎へかけたのではない。当面の敵へ威嚇をこめて叫んだのだ。刀は灌木に音を立てた。
　弓に矢をつがえたとたんだから、びいんと、はじけた。弓弦を両断したのである。矢はあらぬ方へ飛んでいる。悲鳴が奔った。
　才四郎はその声を太郎が斬り伏せたそれかと思ったが、斬る寸前に刀は、ぴたりと件の男の肩の上で止っていた。
「斬る」と、太郎は吼えた。「問いに答えねばな。誰の命令で射た」
「……」
「ほかの奴らにも弓を捨てさせるのだ」
「……」
「言え、三つ数えるうちだ」
　冷たい刃がひたと首すじへ当てられると、三つ数えるまで我慢はできなかった。
　その男は、また女のような悲鳴を奔らせ、
「降参だがや」と、叫んだ。「おらの首が無くなるでのう、みんな弓を捨ててくれえ」
　残りの二人にも降参を奨めさせればよかったと思ったのは、たしかに弓矢を投げ捨てるのが見えたが、その二人とも、茂みを騒がせて逃げてしまったことである。
「足の速いやつらだ」太郎は才四郎を呼んで、「どうするかな、こいつ」
「斬るわけにもゆくまい。この辺りの者なら、その屋敷に関わりがあるだろう」
　太郎に比べて才四郎は端正な容姿だけに、降参人の恐怖はいくらかうすらいだようであった。
　林蔵と男は名乗った。
「府中の戦さの飛火を防げとの命令ゆえ、無礼の儀は許して下され」
「一庵の命令か」
　嘘ではあるまい。才四郎は林蔵の顔を凝っと見守って、
　明らかに林蔵は狼狽した。
「よう御存知で」

「いや、おれは知らぬよ」才四郎はにやりとした。「その一庵老人のところへ案内せい」
「ひえっ、それは……」
「大事あるまい。われらは戦さを仕掛けに来たのではない。案内せい、泉ヶ谷の隠れ家へ」
　いうまでもなく、新九郎からそれらのことは耳にしていたのである。
　だが、林蔵にしてみれば、予想外のことだったらしく、びくびくもので先に立った。
　深い立木の間の小路は、前にも述べたように、ゆくほどにのぼりになり、歓昌院坂と呼ばれて、北の坂を下ると藁科川へ出る。
　その丘が壺の口のようにせり出していて、僅かに細い小川を流しているだけの地形は、奥に幽邃（ゆうすい）の地を控えて、
〝今見るも谷の懐広く実に一仙窟と称するべきところなり〟
と嶽南史にあるように、事実この山峡の泉ヶ谷は、街道の方から見ても、一寸、わからない。隠宅には最適の地だ。
（なるほどな、ここなら隠棲にはよいな）
　才四郎は、新九郎に聞いた事情を思いあわせ、塀の高さや、濠の幅などを目で計りながら思った。
　ここに寿々女の家来ともいうべき小鹿範慶の残党が隠れ棲んでいたことは前に述べた通りである。
　範慶と範頼は、兄の範忠（義忠の父）が家督したことで、小鹿一類として連帯した仲だが、義忠の代になるとともに、分裂した。
　範頼の子範満が義忠の後継者を目ざして、擡頭して来たからである。
　範慶の娘寿々女は、こうした複雑な今川一門の中で、勢力争いに利用され人質にやらされていたわけである。
　したがって、範慶の重臣であった一庵老人が残党を率いているが、北川どの母子との間は実に微妙なことになる。
（竜王丸にとっては、必ずしも敵ではない）
と、新九郎が見たのは、範慶の遺孤が寿々女だけであり、竜王丸に代って擁立する存在がいないからであった。
　義忠の代までは、まだ範忠以来の宿怨が尾を曳いていたのはしかたがないが、対象がいない以上、話の持ってゆき方では、
（味方に引きこめる）
という希望がもてた。
　才四郎が林蔵を立てて門前に近づいたとき、しかし、突然、林蔵はうっと呻いて、よろめいた。
　なんと、その頸を真横に鏑矢が射抜いていたのである。
「しまった！」
　才四郎は仰天して、林蔵のからだを抱きとめたが、血どろの矢尻が左の頸から五寸も突き出ていた。
　おそるべき弓勢（ゆんぜい）であり、また的確にすぎる弓術の腕前で

ある。
「何ということを」
せっかくの案内人なのに。
いや咄嗟に、そのとき大道寺太郎が感じたことは、これですべてが狂った、ということだった。
あの危急の際にこの男に僅かの傷も負わせなかったのは、そのことを慮ったからにほかならない。無骨で無謀に見えても思慮がある。
戦さをしかけにゆくのではない。北川どの母子の休み場所を頼みにゆくのだ。傷を負わせてはならない。
その配慮も、この一矢で無駄になってしまった。
「誰が、こんな矢を」
太郎は林蔵を抱えたまま、呆然とした。
「おい、才四、どこへ」
才四郎が横っ飛びに走りだしていた。
ちらりと、竹藪のなかに人影が見えた。才四郎は走りながら抜刀している。
だが、相手の方が足は速かった。はじめての土地だ。才四郎は窪地で草に足をとられて突んのめった。すぐ身を起したが、相手はその間に姿をくらましてしまった。
屋敷の戸が開き、数人の男たちが出て来た。むろん、武装している。槍、薙刀を小わきに抱えて、太郎を取り囲んだ。
（運が悪かった……）
太郎は林蔵を放して、平然とかれらを見まわした。どうにでもしてくれという態度だった。
この場の様子を見れば、弁解しても無意味だった。弓矢は手にないが、はじめから、一言も交さずに矢を射かけてくるくらいだから、こちらの言葉に耳を傾けてはくれまい。
そこに才四郎が、戻ってきた。
「逃してしまった。卑劣な奴だ、どうした、助かるか」
「矢は頸を貫いておる」
と、一人が言った。老人だった。嗄れ声だが、二人を見上げた眼は鷲のように鋭い。
「助かるはずがないわい」
「わしらではないぞ、いま、卑劣なやつが……」
と、弁じようとする才四郎を、よせ、と太郎が止めた。
「何と申しても、聞き入れはすまいぞ」
「案じるな」意外な言葉だったのである。「見ていた者がある」
老人は顎をしゃくった。亭々たる巨杉の梢に、見張りらしい男の姿が見えた。
しわしわと老人は笑った。
「よかったな、証人がいて。あれが見なんだら、おぬしらは林蔵を殺したことになる。ところで、竜王丸は、どこまで逃げて来ているのじゃ、手越か、鞠子か」

二人は思わず顔を見合わした。
その老人が一庵だったのである。
「伊勢新九郎も来たか」と、問いかけたとき、その顔から笑いが消えていた。「彼奴には申し条がある」
「……」
「一人だけ、わしがかように申していたと告げに戻れ」
太郎がびっこを曳いているのを見て、老人は山中才四郎に顎をしゃくった。
「おぬし、行けい」
「う、うむ……口上は何と」
「姫をお連れせい、とな」
「姫を？」
「左様に申せばわかる」
「……」
「さなくば、竜王丸に合力することかなわぬ、とな」
「わかった」
あとに太郎を残してゆくことは人質にされるようなものだが、この場合、しかたはない。
北川どの母子という足弱をお守りしている以上、すでに、かれらとは対等ではない。名にし負う宇津谷峠をこのまま越すことは、まず難しい。夢子の疲労は、痛々しいばかりだった。
泉ヶ谷から馳せかえってきた才四郎の報告を聞くと、新九郎は歎息した。
「おぼえていたか、おれのことを。寿々女を連れてゆかねば、合力せぬと申したか」
あのとき、無断で寿々女を連れて出たことを一庵は怒っているのであろう。
だが、寿々女はあの混乱の中でどうなったかわからない。黒丸が走り寄るのを見たが、すばしっこいことでは猿にもおとらない黒丸だが、寿々女という足手まといを連れて、うまく逃げおおせたとは安易に信じられないのである。
「引換え条件を出したか、よし、おれが掛け合うてくれよう」
「駄目だ、兄き、あの老人は一徹者だぞ、とてもに」
「なに、当って砕けろだ。いよいよとなれば、おれの首と引換えてもよい」
「太郎が人質になっている。押してゆけば、まず太郎の首が飛ぶ」
「戦さはせぬよ。相手も人間だ、膝詰めでやるさ」
いよいよとなれば、腹を切る。その覚悟はある。夢子と竜王丸を守った一行は、泉ヶ谷へ入っていった。
新九郎は先頭にいた。その堂々とした姿が、寿々女を連れて来たと思わせたものか、意外に容易に門は開かれたのである。
むろん、夢子と竜王丸の身分は知っているから粗略には

扱わぬ。拝揖して客間に通す。それを見届けてから、新九郎は一庵に掛けあった。

「寿々女は必ず探してくる」

「たばかるのではあるまいな」

「三日、と限っておこう」

「よかろう。三日すぎても姫が戻らなんだら、竜王丸のことは請け合わぬぞよ」

一庵の眼がぎらりと光った。

一庵老人は一徹なだけに、太郎の足の傷は手当てをほどこしてくれていた。

三日という約束を破棄することはない。その間に、範満の軍勢が攻めてきたら、防戦に力を尽くしてくれるに違いない。

「三日経って、おれが戻らなかったら」

と、万一を想定して、新九郎は荒木兵庫に言った。

「北川どのと竜王丸を守護して脱出しろ」

「逃げるのでござるか」不服そうに、「いざとなったら、われらで、一庵を殺る。その方が早い」

「——相手が殺意を見せたならばだ。早まるまい。三日経てば、北川どのの疲れも治る。山西へ行くのだ」

「山西とは」

「宇津谷峠の西だ。峠を越えさえすれば、範満の軍勢もあきらめよう」

「わかった。あとのことは心配なく」

六人の荒武者たちがいれば、一庵や余の者も、めったに母子に手出しは出来ない。見るからに一騎当千の連中なので安心だった。

「こちらは五人いればいい、誰か一人連れていく方がいい」

範満の勢力圏内となった府中に戻ることの危険を心配する在竹兵衛に、かえって一人のほうが目立たなくていいのだと新九郎は言った。

むろん、ほかに雑兵たちや侍女小者など五十人あまりの人数だがいくら頭数があっても、そのうちいざとなって命を張る者が何人いるか。

その点は心もとないのだ。

兵衛たちは新九郎と血をすすりあって、尽未来、同心一体となることを契っている。人を信じることのできない乱世だけに、血の盟約だけは信じたかった。

新九郎が一人で泉ヶ谷を出てゆくのを、竹藪の中から見守っている眼があった。

〈府中の方へゆくぞ〉

〈跟けろ〉

〈沓谷の屋形に知らせるか?〉

〈様子を見た上で、だ。せっかく門前で一人を殺したのに、戦さにならなかった、あれは失敗だったな〉

林蔵を射たのはこの連中だったらしい。竹藪の中での、声をころした会話だった。熊笹が音をたてた。一人が歩きだした。残りの者は、暫く細心の注意で、あたりを見守っていたが、人気がないと見ると、山腹を這うようにして、竹藪を出た。その手に弓がある。矢筒をゆすって杉林の急斜面をななめに登ってゆく。泉ヶ谷を囲む西壁の山陵に出て向う側におりていった。そこは大鑪である。岩間に小さな滝が見え、そこに一人の男が立っていた。身分があるらしい直綴道服を着て、頭巾をかぶっている。

身なりがよいだけではない。すっくと立っている痩軀だが、それだけで雑兵にはない気品がある。頭巾から洩れる目が、ときどき滝の方を見る。

滝といっても、丈余の岩崖から迸り落ちる小さなものだが、そこは欝蒼たる深い木立とえぐったような滝場で風が冷やりとする。

弓を手にして、山越えしてきた男を見つけて、

「弓六が戻りました」

片膝ついて控えていた供侍の一人が言った。

頭巾が無言で振りむく。

この男が、小枯ノ森の地下穴で、新九郎に面罵された人物であることは、読者にはすでに解っていよう。義忠の舎弟弥三郎春忠にちがいない。

とすれば、弓六の行為も納得がいく。範忠の落胤である春忠は、今川の継嗣争いでも、埒外に立たされている。

落胤であることに間違いはないのだが、かれには公けの場に立てない肉体的な欠陥がある。

そのため小城を一つ与えられて、城主といえばていさいはいいが、そこに押し込められているようなものだった。益頭郡の石脇城がそれである。

竜王丸と範満の争いが国内を二分する内戦になったにもかかわらず、かれは石脇城から出ようとはせず、中立を持していた。

公けの場に立てないが、今川家を継いでもおかしくないだけの血統だけに、心中の憤りは理解に難くない。

その頭巾のうちで春忠が何を考えているか、無気味な存在だった。

(今川の社稷を憂えておられる)

重臣の片淵平内が言った言葉を新九郎は忘れていない。

もとよりその言葉は、今川家を継ぐ意志がある、という意味に受け取れる。

小枯ノ森に秘密のアジトを作り家臣を使嗾し、寿々女を拘禁しようとしたのも、その行動の一端である。

「竜王丸どの、北川どの、供の者五十余名、泉ヶ谷屋敷に入りましてござる」

弓六は片膝突いて報告した。

これに軽く顎をひいて頷いただけである。

「伊勢新九郎めは、単身、府中へ戻りました。多分……寿々女どのを探しに戻ったのかと」
「しかと？」
「寿々女どのを連れ戻らねば、竜王丸どの、三日の後に泉ヶ谷を出ねばなりませぬ」
「ふむ。一庵め、術を使うか」
弥三郎春忠は、おのれに何の切り札もないのが、いまいましいように、落ち着かない様子で、そこらを歩きまわっていたが、ふと立ち止ると、
「いっそ、その方がよいの」と、独りごちた。「おれの城へ招く。さすれば、首をひねろうが、北川どのを抱こうが、思いのままじゃの」
弥三郎はおのれの行動を野心とも野望とも思っていない。血統からしても当然の行為と肯定している。智謀では誰にも負けない。その自信が、かれを継承争いにかりたてていた。
宇津谷峠は、いうならば駿府の西の壁である。石脇城は、その壁の外にある。弥三郎春忠の希いは、この壁の外から内に入ることだった。そして、さらに安倍川を超えて今川館の主になることだった。かれに言わせれば、竜王丸は未だ幼少凡愚にすぎ、範満は嬌慢暴虐にすぎて主と仰ぐにはふさわしくない。両者の争いが熾烈になるほど、かれが乗じる好機が齎されるのだ。
その弥三郎にとって邪魔者は新九郎である。旅牢人と蔑みながら新九郎の器の大きさに内心計り知れないものを感じている。成算に一抹の不安を翳らせているものは新九郎の存在だった。しかし、この伊勢新九郎長氏という男が、生涯の宿敵になろうとは、まだ夢にも知らない弥三郎春忠であった。

北條早雲 二
昭和五十一年九月二十五日　第一刷
著者　早乙女貢
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社 文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三
本文印刷　理想社印刷
オフセット　共同印刷
製本　中島製本
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします
© Mitsugu Saotome 1976　Printed in Japan

白石一郎 幻島記

慶長三年、別府湾上の瓜生島は一夜の地震で沈没——その謎をめぐって展開する江戸から現代にわたる壮大な時代小説。直木賞候補作

980円

綱淵謙錠 幻（げん）

大火の年に生を享けた将軍侍医の娘が江戸城大奥の火災で落命する数奇な運命を描いた表題作の他に本格的な歴史小説の佳作五篇収録

980円

文藝春秋刊

藤沢周平 檻車墨河を渡る

薩摩討つべし。奥羽列藩を翻弄する幕末動乱の嵐のさなか、討薩ひとすじに奔走した志士雲井龍雄の悲憤の生涯を描く長篇歴史小説！

980円

笹沢左保 剣鬼啾々

天下無双をめざし、生死を賭けて勝負に挑む残酷なまでの華麗さ…剣一筋に己の道を往く流浪の武芸者の、非情な生きざまを描く傑作

950円

文藝春秋刊

文藝春秋刊

永井路子　朱なる十字架

逆賊明智光秀の娘と罵られ、悲しみの極限に心の拠所として縋った禁制キリストの教え。愛と苦悩の世界に生きた憂愁の人・ガラシヤ

600円

永井路子　乱紋　上・下

浅井長政の末娘・淀どのの妹という出自ゆえ秀吉の権勢のまま苛酷な運命に流されながらも、遂に二代将軍夫人となったおごうの生涯

各950円

平岩弓枝　かまくら三国志
鎌倉の章・宗像の章

北条氏の横暴は、将軍頼家の命を狙い源家の衰退を図る。美しき女人たちに愛される頼朝の落胤・智太郎は宗像水軍を従えて立ち向う

各600円

平岩弓枝　へんこつ　上・下

南総里見八犬伝の作者滝沢馬琴は偏屈で反骨―へんこつ老人と称ばれていた。へんこつ魂と作家の好奇心は遂に中野碩翁の金脈を暴く

各980円

文藝春秋刊

早乙女貢

北條早雲

第一巻

雄大な構想のもとに滔々と描く大河小説　全五巻

出自は謎につつまれ、一介の牢人から身をおこし、ついには乱世の英雄と謳われるまでの波瀾にみちたその生涯——先ずは鬱勃たる野心を秘めて伊勢新九郎（後の早雲）が今川家に乗り込むまでの活躍！

九五〇円

文藝春秋刊